(財)大阪府文化財センター調査報告書　第80集

茨木市所在

宿　久　庄　西　遺　跡

都市計画道路事業茨木箕面丘陵線に伴う
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査

２００２年９月

財団法人　大阪府文化財センター

巻頭図版1

調査地より、東の茨木市内中心部を望む（西から）

C地区建物18付近より、北の北摂山地を望む（南から）

巻頭図版2

B地区　焼土坑1（北から）

B地区　ピット101（南から）

C地区　落ち込み46（北から）

C地区　ピット201（北から）

E地区　井戸4（北から）

E地区　井戸6（北から）

E地区　土坑525（北東から）

F地区　西半部南壁断面（北東から）

D地区　井戸230出土鍛冶関連出土遺物

B地区　出土土馬

巻頭図版4

E地区　土坑1出土遺物

E地区　落ち込み46出土遺物

C地区　土坑41出土遺物

序　文

宿久庄西遺跡の発掘調査は、大阪府茨木土木事務所による都市計画道路茨木箕面丘陵線(『国際文化公園都市(彩都)』に通じるモノレールおよび道路)建設に伴い実施されたものです。当地は、茨木市の北摂丘陵沿い、勝尾寺川流域の段丘上に位置します。

当遺跡については、2000年6月から3次に亘り発掘調査が行われ、その後、遺物整理を行ってきました。

現地調査では、奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物や井戸・土坑などの遺構が見つかりました。遺物としては奈良時代の須恵器・土師器を始め、黒色土器・瓦器などが多く出土しました。他に、円面硯や製塩土器、土馬、鉄製の犂先、鉄滓や羽口なども少数ながら出土しています。これらの調査成果により、奈良時代から鎌倉時代頃にかけて当地に住んだ人々の生活の一端を明らかにすることができました。

なお、文献では、『神宮雑例集　巻一』に「聖武天皇天平十二年庚申四月五日。春日御社奉遷壽久山御社。是右大臣大中臣清麻呂卿致仕。籠居摂津國嶋下郡壽久郷之間。住家近所奉崇也。」という記述があります。これは、天平十二年(740)に、右大臣中臣清麻呂が壽久郷に籠居し、奈良の春日神社を壽久山に奉遷し、近くに居住し奉ったという内容です。壽久郷は、宿久庄周辺に比定されており、壽久山に奉遷された「春日神社」とは、当遺跡の南西に所在する春日神社と考えられます。

さらに、北側に隣接する庄田遺跡では、奈良時代の十数棟の掘立柱建物が検出され、出土遺物も類似していることから、宿久庄西遺跡と一連の集落と考えられます。一方、勝尾寺川を挟んで対岸の粟生間谷遺跡でも数棟の大型建物が検出されていることからも勝尾寺川の段丘上に集落が点在していた様子が窺えることとなりました。これらの集落は、鎌倉時代まで続いており、丘陵の先端部の傾斜変換点に立地するという点で共通しています。

以上の調査成果を収めた本報告書が、この地域における過去の人々の営みを詳らかにする助けとなれば幸いです。

最後に、発掘調査および本報告書作成事業にあたり、多大なご協力を頂いた大阪府教育委員会、大阪府土木部茨木土木事務所、茨木市教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターへの支援を賜るようお願いいたします。

2002年9月30日

(財)大阪府文化財センター
理事長　　水野　正好

例　言

1．本書は大阪府土木部茨木土木事務所による都市計画道路事業茨木箕面丘陵線に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の成果を記録した調査報告書である。
2．調査地は大阪府茨木市宿久庄５丁目地内に所在する。
3．調査は大阪府土木部茨木土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもとに、(財)大阪府文化財調査研究センターが実施した。
4．調査は平成12年６月１日から平成14年９月30日までの期間で３次に分けて行った。各調査は、当センター北部事務所所長小野久隆の指示のもと、第二係係長森屋美佐子・岡本圭司・中尾智行・瀬戸哲也(現沖縄県教育委員会)・小野亜由美が担当した。
5．本書作成は森屋・中尾・小野(亜)が行い、遺物の写真撮影は上野貞子が行った。調査により出土した木製品、鉄製品の保存修復作業および樹種鑑定は山口誠治が行った。
6．本文の執筆については主に中尾・小野(亜)が行い、森屋がこれを補佐した。執筆分担は目次に示した。なお、報告書執筆には北部事務所をはじめとする当センター職員の協力を得た。
7．本調査では、土層中の珪藻化石および花粉化石の分析を㈱パレオ・ラボに委託した。分析結果については付章に掲載した。
8．調査の実施にあたっては大阪府土木部茨木土木事務所、地元関係者各位、茨木市教育委員会の協力を得たほか、菱田哲郎(京都府立大学)、真鍋成史(交野市文化事業団)、宮脇薫(茨木市教育委員会)、田部剛士(山添村教育委員会)の諸氏には多くの御指導、御教示を賜った。また、調査・整理作業には、近藤千恵・酒井貢・辻本ゆりね・西村環・舟槻良子・前田千津子・森大輔の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
9．調査中には、吹田市立佐井寺中学校ならびに高野台中学校の総合的学習の一環として現場作業の体験学習に協力した。

凡　例

1．本書において、方位は国土座標第Ⅵ系を使用している。ちなみに磁北は西へ６°40′、真北は０°12′である。なお、本書で記述している座標の単位はすべてｍ表示である。
2．調査での標高は、東京湾平均海水面(Ｔ．Ｐ.)を基準とした。
3．土色は、小山正忠・竹原秀雄編2000年度版『新版　標準土色帖』農林水産技術会議事務局監修に準拠した。
4．本書で使用している地区割り方法およびその表示については、第３章「調査の方法」の中で記述している。
5．遺構図について、各調査地区の全体平面図の縮尺率は１/400である。また、個々の遺構図の縮尺率は１/10、１/20、１/100を基本とし、場合によっては任意とする。
6．遺物実測図について、土器が原則１／３、１／２(ただし、一部１／４のものについては、番号の横に縮尺を明示した)、石器・石製品が１／３、２／３、金属その他が１／３、１／２の縮尺である。
7．遺物写真の縮尺率は、任意である。
8．遺構番号は、各調査地区ごとに１番から通し番号を設定している。なお、掘立柱建物など複数の遺構により構成される遺構については、その中の最小の数字を建物の遺構番号としている。
9．検出された遺構規模の記述における「深さ」は検出面からの深さである。
10．土器の名称・器種分類、調整技法については以下の文献を参照した。

中村浩　1978『陶邑Ⅲ　大阪府文化財調査報告書』第30輯 大阪府教育委員会
奈良国立文化財研究所　1975『平城宮発掘調査報告Ⅵ　奈良国立文化財研究所学報』第23冊
奈良国立文化財研究所　1983『平城宮発掘調査報告ⅩⅠ　奈良国立文化財研究所学報』第40冊
古代の土器研究会編　1992　古代の土器１『都城の土器集成』古代の土器研究会
古代の土器研究会編　1993　古代の土器２『都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会
中世土器研究会編　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

目　次

巻頭図版

巻頭図版１　調査地より、東の茨木市内中心部を望む(西から)
　　Ｃ地区建物18付近より、北の北摂山地を望む(南から)

巻頭図版２　検出遺構近景

巻頭図版３　Ｄ地区井戸230出土鍛冶関連出土遺物・Ｂ地区出土土馬

巻頭図版４　Ｅ地区土坑１・Ｅ地区落ち込み46・Ｃ地区土坑41出土遺物

序文

例言

凡例

目次

第１章　位置と環境……(小野)…… 1

第２章　調査に至る経緯……(中尾)…… 3

第３章　調査の方法……(中尾)…… 4

第４章　調査の成果

第１節　基本層序……(中尾)…… 5

第２節　遺構と遺物……(遺構：中尾・遺物：小野)…… 7

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷とその位置付け……(中尾)……80

第２節　遺物総括……(小野)……86

付章　自然科学的分析

第１節　宿久庄西遺跡の珪藻化石群集……(藤根　株式会社パレオ・ラボ)……97

第２節　宿久庄西遺跡の花粉化石……(鈴木　株式会社パレオ・ラボ)…… 100

挿　図　目　次

図１　勝尾寺川流域地形分類図…… 1
図２　周辺遺跡分布図…… 2
図３　調査地区割図…… 4
図４　基本層序　柱状図…… 6
図５　Ａ地区　全体平面図…… 7
図６　Ａ地区　中央土層断面図…… 8
図７　Ａ地区　ピット16平・断面図・遺物実測図… 9
図８　Ａ地区　出土遺物……10
図９　Ｂ地区　全体平面図……11
図10　Ｂ地区　焼土坑１・112平・断面図……12
図11　Ｂ地区　ピット101平・断面図……13
図12　Ｂ地区　土器出土地点Ａ平・断面図……13
図13　Ｂ地区　包含層出土遺物……14
図14　Ｂ地区　包含層出土土馬……15
図15　Ｂ地区　ピット101出土遺物……15
図16　Ｃ地区　全体平面図……16
図17　Ｃ地区　落ち込み46平面図……17
図18　Ｃ地区　建物31平面図……18
図19　Ｃ地区　柱穴18・55平・断面図……19
図20　Ｃ地区　土坑41断面図……20
図21　Ｃ地区　建物18平面図……21
図22　Ｃ地区　柱穴201・226平・断面図……22
図23　Ｃ地区　盛土・包含層出土遺物(1)……24
図24　Ｃ地区　盛土・包含層出土遺物(2)……25
図25　Ｃ地区　落ち込み46出土遺物(1)……26
図26　Ｃ地区　落ち込み46出土遺物(2)……27
図27　Ｃ地区　遺構出土遺物(奈良時代)……29
図28　Ｃ地区　土坑41出土遺物……30
図29　Ｃ地区　建物18出土遺物……30
図30　Ｃ地区　遺構出土遺物(平安･鎌倉時代)…31
図31　Ｄ地区　全体平面図……32
図32　Ｄ地区　ピット152平・断面図……33
図33　Ｄ地区　建物130平面図……34
図34　Ｄ地区　集石遺構２平・断面図……35
図35　Ｄ地区　盛土・包含層出土遺物……36
図36　Ｄ地区　包含層出土遺物……37
図37　Ｄ地区　井戸230出土遺物(1)……38
図38　Ｄ地区　井戸230出土遺物(2)……39
図39　Ｄ地区　遺構出土遺物(奈良･平安時代)…40
図40　Ｅ地区　全体平面図……42
図41　Ｅ地区　南東側ピット群平面図……43
図42　Ｅ地区　ピット701出土柱根……44
図43　Ｅ地区　土坑１平・断面図……45
図44　Ｅ地区　焼土坑550断面図……46
図45　Ｅ地区　溝420断面図……47
図46　Ｅ地区　建物502平・断面図……48
図47　Ｅ地区　建物512･515平面図……48
図48　Ｅ地区　井戸４平・断面図……49
図49　Ｅ地区　井戸460断面図……50
図50　Ｅ地区　土坑525平・断面図……50
図51　Ｅ地区　建物529平面図……51
図52　Ｅ地区　ピット208平・断面図……52
図53　Ｅ地区　建物271平面図……53
図54　Ｅ地区　土坑191平・断面図……53
図55　Ｅ地区　土坑524平・断面図……54
図56　Ｅ地区　井戸６断面図……54
図57　Ｅ地区　盛土・包含層出土遺物(1)……57
図58　Ｅ地区　盛土・包含層出土遺物(2)……58
図59　Ｅ地区　包含層出土遺物……59
図60　Ｅ地区　土坑１出土遺物(1)……60
図61　Ｅ地区　土坑１出土遺物(2)……61
図62　Ｅ地区　井戸460出土遺物……62
図63　Ｅ地区　遺構出土遺物(奈良時代)……62
図64　Ｅ地区　遺構出土遺物(平安時代)……63
図65　Ｅ地区　遺構出土遺物(12･13世紀)……64
図66　Ｅ地区　遺構出土遺物(14･15世紀)……66
図67　Ｅ地区　落ち込み２出土遺物……67
図68　Ｆ地区　全体平面図……68
図69　Ｆ地区　南壁断面図……69
図70　Ｆ地区　建物90･100・117平面図……70
図71　Ｆ地区　ピット138平・断面図……71
図72　Ｆ地区　建物117変遷模式図……72
図73　Ｆ地区　盛土・包含層出土遺物……73
図74　Ｆ地区　包含層出土遺物……74
図75　Ｆ地区　遺構出土遺物……74
図76　Ａ～Ｆ地区出土石器……75
図77　Ａ～Ｆ地区出土石製品･砥石･その他……76
図78　Ａ～Ｆ地区鉄製品(1)……77
図79　Ａ～Ｆ地区出土鉄製品(2)・銭貨……78
図80　調査地周辺遺跡分布図……83
図81　宿久庄西遺跡出土須恵器の法量と個数… 89
図82　成合琴堂窯跡出土須恵器の法量と個数… 89
図83　Ａ地区　試料採取地点図・断面図……97
図84　Ｂ地点の花粉化石分布図……102

挿 入 写 真 目 次

写真１　遺構面直上耕作痕跡（南から）…… 8
写真２　溝11・ピット14（西から）…… 8
写真３　ピット16出土状況（東から）…… 9
写真４　焼土坑１検出状況（西から）……12
写真５　焼土坑１完掘状況（西から）……12
写真６　ピット101上層出土状況（南から）……13
写真７　ピット101下層出土状況（南から）……13
写真８　土器出土地点Ａ・Ｂ出土状況（北から）……13
写真９　ピット７出土状況（東から）……17
写真10　焼土坑208半掘状況（西から）……17
写真11　落ち込み46（西から）……18
写真12　落ち込み46出土状況（南東から）……18
写真13　建物31北東側（北から）……18
写真14　建物31南西側（南から）……19
写真15　建物54東側（南から）……19
写真16　柱穴18出土状況（北から）……19
写真17　ピット55出土状況（東から）……19
写真18　土坑41（西から）……20
写真19　土坑41断面状況（東から）……20
写真20　土坑41瓦器椀出土状況（北から）……20
写真21　土坑41土師器皿出土状況（東から）……20
写真22　柱穴201出土状況（東から）……21
写真23　柱穴201鋤先出土状況（南から）……21
写真24　柱穴223出土状況（南から）……21
写真25　柱穴226出土状況（南から）……21
写真26　集石遺構202（西から）……23
写真27　集石遺構202河原石除去後（西から）……23
写真28　ピット152出土状況（西から）……33
写真29　北西部遺構状況（東から）……33
写真30　土坑404～406検出状況（西から）……33
写真31　建物130（南から）……34
写真32　溝401（西から）……34
写真33　井戸230断面状況（南から）……34
写真34　集石遺構２（北から）……35
写真35　集石遺構２（西から）……35
写真36　ピット294柱根出土状況（東から）……41
写真37　ピット701柱根出土状況（北から）……41
写真38　ピット701出土柱根……44
写真39　土坑１検出状況（東から）……46
写真40　土坑501検出状況（南から）……46
写真41　焼土坑550断面状況（西から）……46
写真42　焼土坑527半掘状況（南東から）……46
写真43　建物502（北から）……47
写真44　柱穴502断面状況（東から）……47
写真45　建物512（南から）……48
写真46　建物515（南東から）……48
写真47　井戸４（北から）……49
写真48　井戸４断割り状況（北から）……49
写真49　井戸460断面状況（南から）……50
写真50　土坑525（西から）……51
写真51　土坑525（南から）……51
写真52　建物529（南から）……51
写真53　ピット208上層出土状況（南から）……52
写真54　ピット208下層出土状況（南から）……52
写真55　ピット191出土状況（南西から）……53
写真56　ピット191出土状況（東から）……53
写真57　土坑524出土状況（東から）……54
写真58　建物426（西から）……55
写真59　井戸６（北から）……55
写真60　石列５（南から）……55
写真61　流路249周辺遺構完掘状況（南東から）……55
写真62　建物90（東から）……69
写真63　建物100（東から）……69
写真64　ピット138出土状況（北から）……71
写真65　建物34（西から）……71
写真66　建物117（北から）……71
写真67　宿久庄西遺跡Ｂ１試料の花粉化石……104

表　目　次

表１　樹種鑑定結果一覧（ピット）……44
表２　奈良時代掘立柱建物規模一覧……81
表３　遺物観察表……91
表４　採取試料概要……97
表５　産出珪藻化石一覧表……98
表６　産出花粉化石一覧表……101

図　版　目　次

図版１　Ａ地区全景
図版２　Ｂ地区全景
図版３　Ｃ地区全景
図版４　Ｄ地区全景
図版５　Ｅ地区全景(1)
図版６　Ｅ地区全景(2)
図版７　Ｅ地区全景(3)
図版８　Ｆ地区全景
図版９　Ａ地区出土遺物・Ｂ地区出土土馬
図版10　Ｂ地区出土遺物
図版11　Ｃ地区盛土・包含層出土遺物
図版12　Ｃ地区盛土・包含層・遺構出土遺物
図版13　Ｃ地区落ち込み46出土遺物
図版14　Ｃ地区土坑41出土遺物
図版15　Ｃ地区遺構出土遺物
図版16　Ｄ地区盛土・包含層出土遺物
図版17　Ｄ地区井戸230出土遺物(1)
図版18　Ｄ地区井戸230出土遺物(2)
図版19　Ｅ地区盛土・包含層出土遺物(1)
図版20　Ｅ地区盛土・包含層出土遺物(2)
図版21　Ｅ地区土坑１出土遺物
図版22　Ｅ地区遺構出土遺物(1)
図版23　Ｅ地区遺構出土遺物(2)
図版24　Ｆ地区出土遺物
図版25　Ａ～Ｆ地区出土石器・砥石
図版26　Ａ～Ｆ地区出土石製品・その他の遺物
図版27　Ａ～Ｆ地区出土鉄製品

1章　位置と環境

地理的環境　宿久庄西遺跡は大阪府茨木市の西端、箕面市との市境近くに位置する。遺跡の南には、古代の山陽道をなぞった「西国街道」が通り、西国二十三番札所勝尾寺参詣など、古来より人の往来が盛んであったことがうかがえる。現在は西国街道に沿って国道171号線が東西に走り、京都・大阪から神戸方面へ抜ける主要幹線道路としての役割を担っており、周辺の開発が進んでいる。

遺跡は北摂山地から派生する丘陵の東側に面し、勝尾寺川によって形成された河岸段丘面上に立地する。調査地周辺は勝尾寺川に向って東へ緩やかに傾斜しており、現在は1985年竣工の圃場整備を受け、整然とした耕作地が広がっている。なお、現在の集落は遺跡の立地する段丘面より一段下がって、勝尾寺川沿いに営まれている。

北摂山地を源流とする勝尾寺川は、北摂山地を開析し、左右岸に河岸段丘を形成しながら南東方向へ流れる。千里丘陵にぶつかると、いったん東へ向きを変えて茨木川と合流して南下し、ここで三島平野を形成する。三島平野には、弥生時代の大集落である東奈良遺跡、継体天皇陵と伝えられ三島地域最大の規模を誇る太田茶臼山古墳や300基以上の古墳・古墳群、律令時代の嶋下郡の郡衙とされる郡遺跡といった多くの遺跡が集中している。一方、勝尾寺川流域では遺跡の数としてはまだまだ少なく、今後の調査に期待するところが大きい。ここでは近年の発掘調査成果をまとめつつ、勝尾寺川流域の歴史的環境を概観する。

歴史的環境　旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器を主体とする多量の石器群が出土した粟生間谷遺跡があげられる。当遺跡と隣接する庄田遺跡でも国府型石器の素材となる翼状剥片が出土している。

縄文時代に入ると粟生間谷遺跡、庄田遺跡、奥粟生で、有舌尖頭器や石鏃、剥片が出土している。遺構は粟生間谷遺跡で縄文時代後期(一乗寺K式)の土坑や、晩期の突帯文土器を含む落ち込みが検出され、徳大寺遺跡でも晩期後半の住居址が見つかっている。周辺では西福井遺跡や耳原遺跡があげられ、耳原遺跡では晩期の深鉢棺墓16基が発見されている。勝尾寺川の支流で山間部を流れる佐保川流域でも、泉原で旧石器や縄文土器が出土している。

弥生時代・古墳時代は、庄田遺跡や粟生間谷遺跡でもわずかながらも弥生土器の破片が出土しており、当遺跡のすぐ南にある旧清水村でも土器片が見つかっている。勝尾寺川左岸に位置する宿久庄遺跡は、

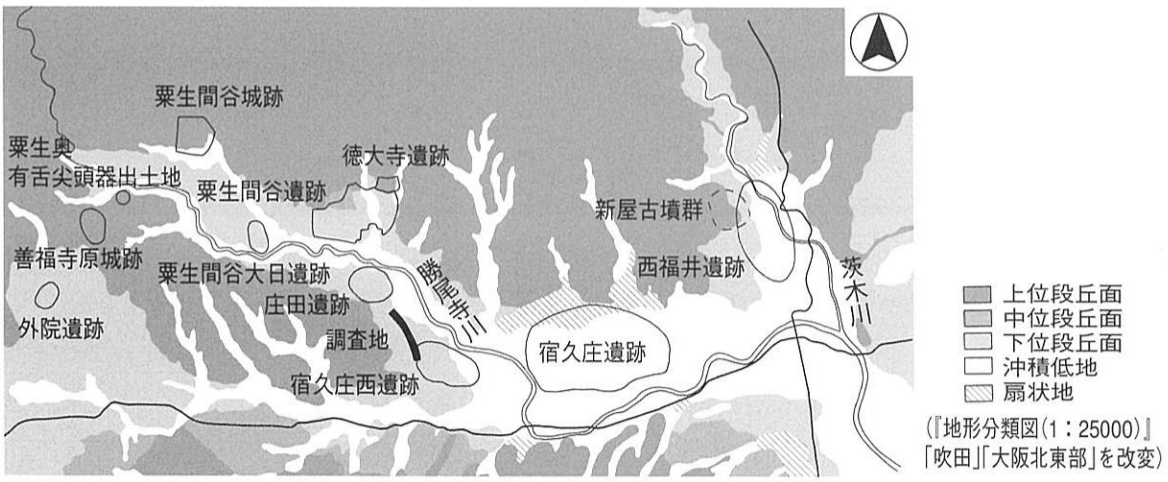
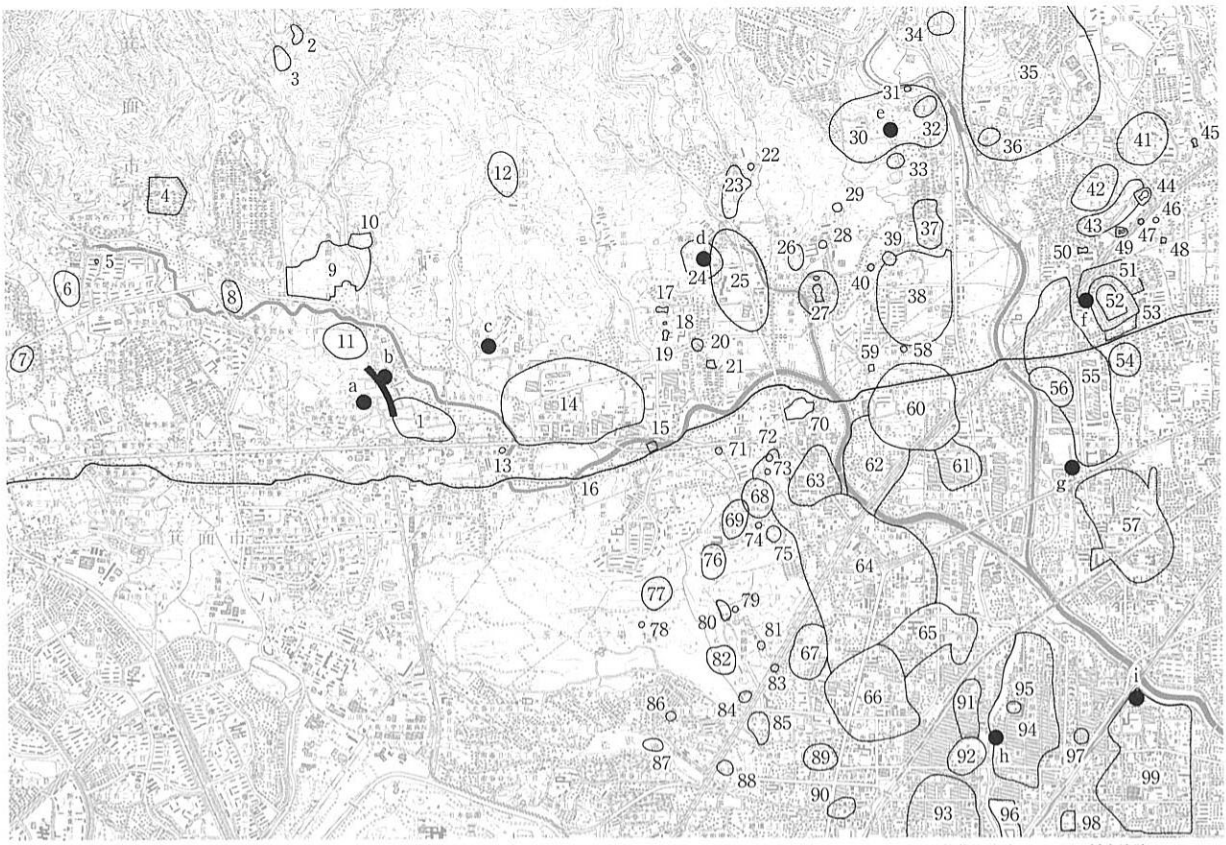


図1　勝尾寺川流域地形分類図



1 宿久庄西遺跡
2 粟生岩阪北遺跡
3 粟生岩阪遺跡
4 粟生間谷城跡
5 粟生奥有舌尖頭器出土地
6 善福寺原城跡
7 外院遺跡
8 粟生間谷大日遺跡
9 粟生間谷遺跡
10 徳大寺遺跡
11 庄田遺跡
12 宿久庄北遺跡
13 ぼろ塚
14 宿久庄遺跡
15 郡山宿本陣
16 西国街道
17 紫金山古墳
18 青松塚古墳
19 南塚古墳
20 海北塚北方遺跡
21 海北塚古墳
22 熊ヶ谷古墳
23 福井城後
24 新屋古墳群
25 西福井遺跡
26 新龍寺古墳群
27 将軍山古墳群
28 将軍山第１地点遺跡
29 将軍山第２地点遺跡
30 安威古墳群
31 長ヶ淵古墳群
32 安威砦跡
33 安威寺跡
34 桑原古墳群
35 塚原古墳群
36 塚原遺跡
37 安威城跡
38 安威遺跡
39 大日寺跡
40 安威西垣内遺跡
41 新池埴輪製作所
42 上土室遺跡
43 土室遺跡
44 番山古墳
45 石塚古墳
46 土保山古墳
47 高樋古墳
48 二小山古墳
49 石山古墳
50 太田茶臼山古墳塔塚
51 太田茶臼山古墳（継体天皇陵）
52 太田北遺跡
53 太田廃寺跡
54 闘鶏山古墳
55 太田遺跡
56 太田城跡
57 総持寺遺跡
58 耳原古墳
59 鼻摺古墳
60 耳原遺跡
61 五日市東遺跡
62 五日市遺跡
63 中河原遺跡
64 郡遺跡
65 倍賀遺跡
66 春日遺跡
67 穂積廃寺跡
68 郡山遺跡
69 郡山城跡
70 中河原北遺跡
71 郡山古墳
72 馬塚
73 茶臼塚古墳
74 郡神社古墳
75 郡児童公園遺跡
76 郡山古墳群
77 地蔵池南遺跡
78 茨木ゴルフ場内窯跡
79 上穂積山古墳
80 上穂積山遺跡
81 上穂積神社西古墳
82 弁天山遺跡
83 見付山古墳
84 見付山遺跡
85 穂積城跡
86 松沢池北遺跡
87 松沢池池底遺跡
88 上寺山古墳
89 中穂積遺跡
90 松ヶ本北遺跡
91 上中条遺跡
92 駅前遺跡
93 中条小学校遺跡
94 茨木遺跡
95 茨木城跡
96 新庄遺跡
97 永代遺跡
98 舟木遺跡
99 牟礼遺跡

式内社
a 元須久久神社
b 新屋坐天照御魂神社
c 須久久神社
d 福井神社
e 阿為神社
f 太田神社
g 新屋坐天照御魂神社
h 天石門別神社
i 牟礼神社

図２　周辺遺跡分布図（『地形図（1:25000）』「吹田」「大阪北東部」を改変）

1982年以降の調査の結果、弥生時代後期から中世まで続く複合遺跡と考えられており、2000年に行われた茨木市の発掘調査では遺跡範囲の東端で、古墳時代初頭の竪穴住居址を検出している。範囲内の中心部では古墳時代後期の掘立柱建物や土坑が検出された。

奈良時代に入ると、勝尾寺川流域も盛んに開発が進み、当宿久庄西遺跡、庄田遺跡、粟生間谷遺跡などで掘立柱建物が数棟検出されている。庄田遺跡では同時期の製塩土器が多量に出土しているほか、陶硯、瓦、土馬（脚）、土錘、鞴羽口なども出土している。粟生間谷遺跡では、約50個の鉛ガラス製の玉と有機物を収めた奈良三彩小壺を埋納した地鎮遺構を検出している。また宿久庄高松で奈良時代の蔵骨器が採集されている。

もともと、茨木市域は律令時代には摂津職嶋下郡に属しており、新屋、宿人（久）、安威、穂積の４郷があったとされている。このうち新屋郷は茨木川上流、現在の東福井・西福井あたり、安威郷は茨木川左岸の安威あたり、穂積郷も茨木川と千里山丘陵の間あたりと考えられている。したがって残りの宿久庄郷は、福井より西と箕面市東部を含む勝尾寺川流域のほとんどの範囲を占めていた可能性がある。

一方、宿久庄西遺跡では、今回の調査以前に、茨木市による発掘調査によって、調査区南端（Ｆ地区）

の東側で平安時代の掘立柱建物が検出されている。

中世では粟生間谷遺跡や庄田遺跡で平安時代末頃にも多くの遺構、遺物が見られるようになり、徳大寺遺跡では梵鐘鋳造関連の遺構が検出されている。

奈良時代から継続して集落が営まれた粟生間谷遺跡では、立地条件に差違はあるが100棟以上の掘立柱建物が検出され、中世前半期に隆盛を極める。また遺物類に関しても、石鍋や輸入陶磁器などが良好な状態で出土しており、数少ない北摂の中世集落の中でも特筆すべき遺跡である。宿久庄遺跡では、2000年度の茨木市による調査で石積み遺構・井戸・掘立柱建物が出土している他、2001年度調査では三方を溝で囲まれた掘立柱建物と、棺台と思われる石積の遺構、井戸が検出されている。山間部では栗栖山南墳墓群で13世紀から続く土葬墓・火葬墓が600基以上検出され、大規模な墳墓群を形成している。

引用参考文献

茨木市史編纂委員会　1968　『茨木市史』茨木市役所
宮脇薫　1976　『宿久庄遺跡発掘調査概要』茨木市教育委員会
宮脇薫・濱野俊一他　1992　『平成３年度発掘調査概報』茨木市教育委員会
茨木福井の歴史編纂委員会　1997　『茨木福井の歴史』茨木福井の歴史編纂委員会
田代克己・小林章　1998　『茨木市の史跡』茨木市教育委員会
西口陽一・伊藤武　1999　『庄田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
若林幸子・木村健明　1999　『徳大寺遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
宮脇薫・濱野俊一他　2000　『平成11年度発掘調査概報』茨木市教育委員会
森屋美佐子・市本芳三・森本徹・瀬戸哲也　2000　『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財調査研究センター
宮脇薫・濱野俊一他　2001　『平成12年度発掘調査概報』茨木市教育委員会
大阪府教育委員会　2001　『大阪府文化財分布図』大阪府教育委員会

第２章　調査に至る経緯

当遺跡は勝尾寺川右岸の茨木市宿久庄５丁目地内の水田地帯に位置する。大阪府は当地に国道171号線から「国際文化公園都市」へと続く都市計画道路茨木箕面丘陵線の建設を計画した。その建設予定地のうち、北側の箕面市側では1997年度に発掘調査が行われ、奈良時代を中心とした掘立柱建物などが多数検出された。この際、土地の字名から「庄田遺跡」と命名された。

今回の調査地付近は、1980年代に圃場整備が行われており、削平を受けていることが予想されたが、埋蔵文化財の有無を知るため、1998年度に当センターによって試掘調査が実施された。試掘調査は北端を主要地方道茨木箕面線、南端を国道171号線までと総延長1.1㎞の範囲を対象とし、その中に幅２ｍのトレンチを10ヶ所設定して行われた。

その結果、北端と南端のトレンチを除いたほぼ全面において、古代・中世を中心とした遺構・遺物が確認された。それを受けた大阪府教育委員会は、想定される遺跡の性格と立地から、南側に位置する「宿久庄西遺跡」の範囲がより北側まで広がっているものと推定し、北端部と南端部の一部を除いた道路予定地全面において、事前の発掘調査が必要であると判断した。そこで大阪府土木部茨木土木事務所からの依頼により、大阪府教育委員会の指導のもと、当センターが、2000年６月から2002年９月にかけて発掘調査および整理調査を実施することとなった。事業計画は、宿久庄西遺跡(その１)から(その３)までの３次に分かれ、順次実施した。総調査面積は約12,900㎡である。

第３章 調査の方法

調査範囲は南北に長い道路用地である。近年の圃場整備により、東西方向の里道および水路が設置され、調査範囲を寸断しているため、調査範囲内を６区の調査地区に分け、原則として着手順に１～６地区のように呼称した。さらに工事の都合上、各地区を「東半部」・「西半部」などのように最大４分割して調査を行ったが、進捗過程の中で調査地区の呼称が煩雑な状況となってきたため、本書では調査範囲の北から順にＡ～Ｆ地区として呼称を設定し直し、記述することとする(図３)。

調査は、まず重機による現代耕土および圃場整備盛土の除去を行い、その下層の包含層について人力による掘削を行った。また、圃場整備時に包含層並びに地山の一部を削平している場所が多くあり、遺物の混入が見られるため、圃場整備盛土の一部についても人力による掘削を行った。

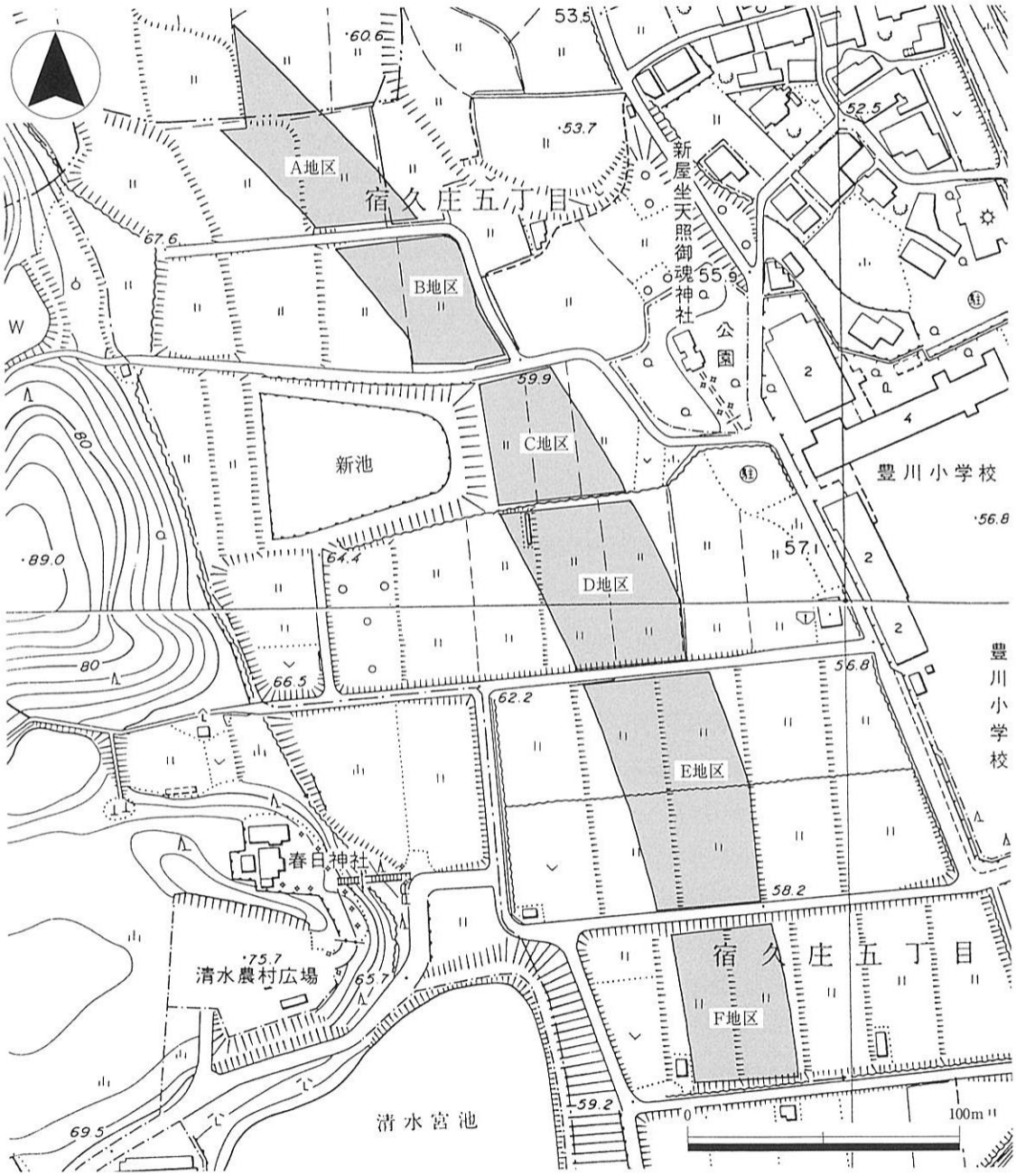


図３　調査地区割図

第４章　調査の成果

第１節　基本層序（図４）

調査範囲が南北に長いため、地区により若干の違いがあるが、基本的には上から現代耕土、圃場整備盛土、旧耕土、中世包含層、古代包含層、地山（遺構検出面）となっている。

しかし1980年代に行われた圃場整備事業により、旧耕作地の大規模な造成整備が行われているため、多くの場所で地山を削り込むような掘削・削平がなされており、前述の層序関係が見られるのはごく一部の場所に限られている。

包含層は地区によって堆積状況や残存状況が異なっているが、奈良時代および鎌倉時代以降のものを主体として確認される。残存状況の良好なところでは複数枚の包含層が残存しており、平安時代のものと考えられる包含層が確認される地区もあるが、平安時代の包含層は鎌倉時代以降の包含層と近似しているところが多く、出土遺物が少ない場合では両者の判別は困難である。そのため包含層の認識として、土質・土色の判別が容易な奈良時代と鎌倉時代以降に大別し、前者を「古代包含層」、後者を「中世包含層」と呼称した。平安包含層については特に判別できない場合、中世包含層として認識した。

土質・土色を見ると、平安時代以降の包含層は黄灰～黄褐色系で砂質が強いが、奈良時代の包含層は褐～灰褐色系で比較的粒度が細かく、粘質の強い土層となる傾向があり、土質が直下層（地山）と近似する（そのため、地山が礫層の場合は粒度の粗い土層となっていることがある）。こうした状況から、奈良時代には原地形を積極的に改変するような土地利用が行われなかった一方、平安時代以降には耕作が活発化し、田畑の造成に伴う大規模な土壌改変が行われた可能性が高いといえる。さらに、平安時代以降の包含層は、場所によっては著しく酸化し、黄色から橙色に変色していることがある。層中にはマンガン斑・酸化鉄も多く見られ、水田耕作が活発に行われたことを示唆している。

遺構検出面以下の土層については、上から黄橙色の粘土～細砂層、黒褐色の粘土～細砂層、黄褐色の粗砂～礫層となっている。これらの土層は圃場整備時や、過去の耕作・造成の際に削平されており、各地区によって露出状況が異なる。Ａ地区では、比較的傾斜のきつい斜面を大きく造成して平坦地を造り出している状況であったため、これらの土層が平面的にも観察できた。なお黒褐色層については、土壌化が著しく進んだ土層として認識され、Ａ地区調査終了後に確認掘削を行ったところ、奈良時代以前のものと考えられる遺物が数点出土した。

地形としては、大きく見て西から東に向かって下向する緩斜面地である。調査範囲は南北に細長く伸び、斜面に対して平行方向に設定されているため、遺構検出面の標高にはそれほど大きな差が見られず、ほとんどの地区でＴ．Ｐ.59～60m前後で確認される。しかし、西方向から伸びる尾根筋が部分的に調査範囲にかかっていると見られ、Ａ・Ｂ地区では比較的急な斜面地形が確認された。また、南端のＦ地区に関しては、遺構検出面が56～57mと著しく下がる。これは、Ｅ地区とＦ地区の間で傾斜方向が変化しているためと考えられ、Ｆ地区は北から南方向に下る傾斜地上に位置していると考えられる。Ｆ地区より南では急激に斜度がきつくなり、国道171号線に向かって標高が低くなっていく。1998年度に行われた試掘調査でもＦ地区より南では、明確な遺構・遺物は確認されず、段丘上の平坦面、もしくはなだらかな斜面に遺構が分布している状況がうかがわれる。

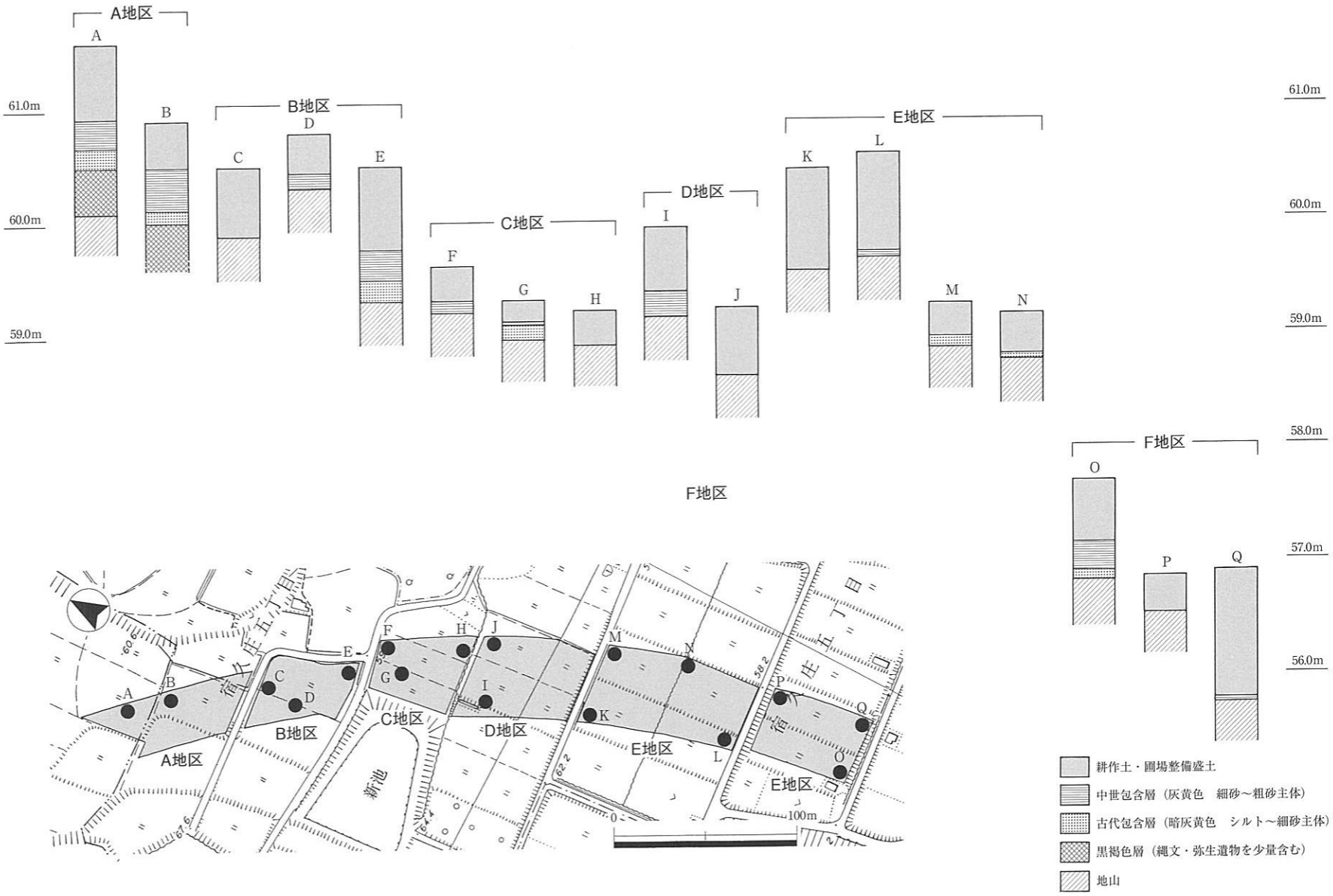

A地区
B地区
C地区
D地区
E地区
F地区
61.0m
60.0m
59.0m
58.0m
57.0m
56.0m
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
新池
100m
耕作土・圃場整備盛土
中世包含層（灰黄色　細砂～粗砂主体）
古代包含層（暗灰黄色　シルト～細砂主体）
黒褐色層（縄文・弥生遺物を少量含む）
地山

図4　基本層序　柱状図

第２節　遺構と遺物

1．Ａ地区

Ａ地区は、調査範囲の北端に位置しており、1997年度に調査が行われた「庄田遺跡」が北接する。圃場整備の削平が著しく、斜面上方では圃場整備盛土を除去するとただちに地山が露出した。地区東側のもっとも残りのいい場所では、現代耕土・圃場整備盛土を除去すると、古代・中世包含層、その下に黒褐色の粘土～細砂層、最下層に黄灰色の礫層が確認された。中世包含層からは、遺物があまり出土せず、

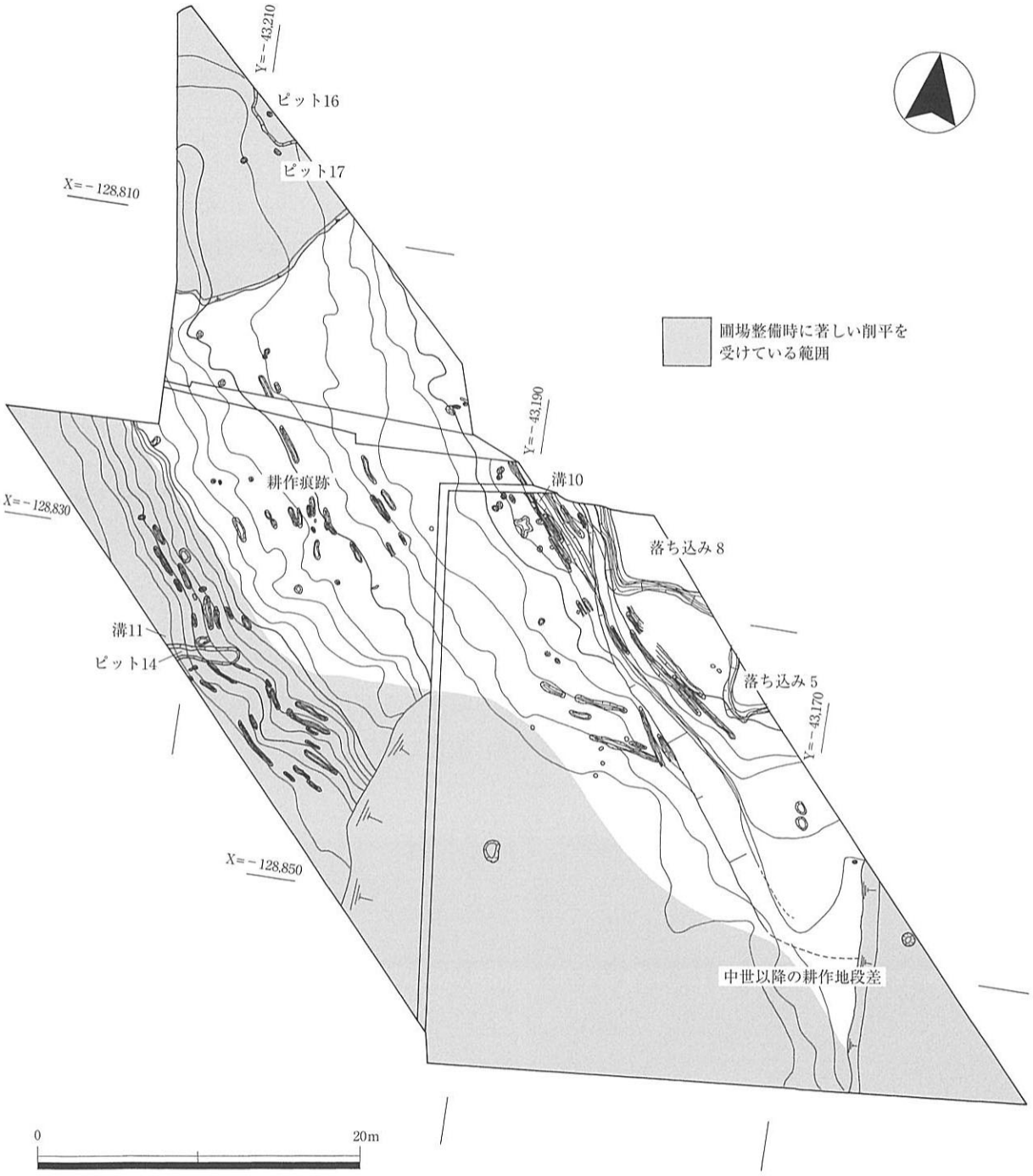
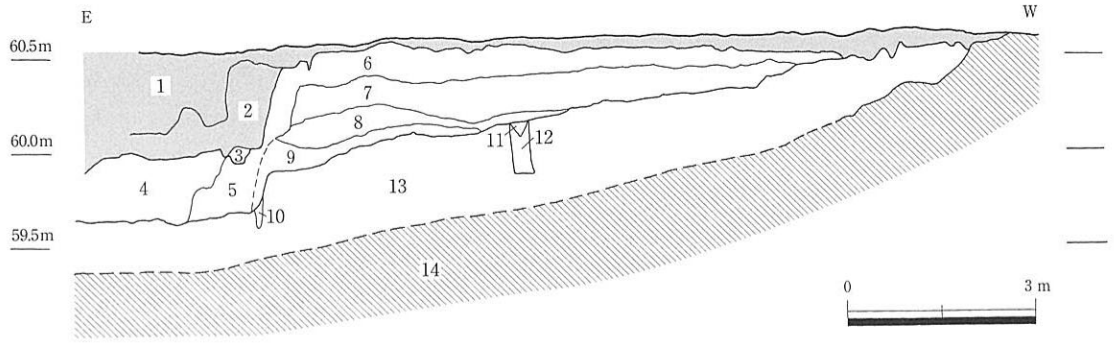


図５　Ａ地区　全体平面図



① 圃場整備盛土　5Y5/1灰色　細～粗砂（黄色粘土ブロック、レキ多く混じる）
② 圃場整備以前耕作土　5Y4/1～5/1灰色　シルト～細砂
③ 近代区画溝埋土　10GY6/1緑灰色　シルト～細砂
④ 中世包含層　5Y6/2灰オリーブ色　シルト～細砂（わずかにレキ含む）
⑤ 中世包含層　5Y6/3オリーブ黄色　シルト～細砂
⑥ 中世包含層　5Y5/2灰オリーブ色　シルト～細砂
⑦ 中世包含層　5Y4/2灰オリーブ色　シルト～細砂
⑧ 古代包含層　5Y4/1灰色　シルト～細砂（マンガン斑多い）
⑨ 古代包含層　5Y6/2灰オリーブ色　シルト～細砂
⑩ 古代包含層　7.5Y5/1灰色　粗砂混じり粘土（ブロック土多い）
⑪ 遺構埋土　2.5Y4/1黄灰色　粘土～シルト
⑫ 遺構埋土　2.5Y4/1黄灰色　粘土～シルト（黄白色粘土ブロック混じる）
⑬ 古代以前包含層？　10YR4/2灰黄褐色～2.5Y3/1黒褐色　粘土～細砂（レキ混じる）
⑭ 地山　7.5YR5/6明褐色　細砂ベースのレキ

図６　Ａ地区　中央土層断面図

全体に均質な土質であるため耕作土としての性格が強いと考えられる。

なお、中世包含層以下、黒褐色層までの土壌については、古環境復原のため珪藻と花粉の微化石分析を行った(付章　自然科学的分析)。結果として特筆すべき成果を得ることはできなかったが、黒褐色層については森林土壌的要素が強いものとして性格付けられた。この黒褐色層については、航空測量が終了した時点で、地区北側において確認掘削を行ったところ、縄文時代や弥生時代のものと考えられる土器片が数点出土した(図８-６～８)。いずれも磨耗が著しく、現位置を保って出土したものではないと考えられる。

遺構　当地区では、南西から北東方向に傾斜する旧地形が検出されたが、遺構の分布は希薄であった。古代以降の遺構は黒褐色層の上面で検出される。検出された遺構にはピットが数基、耕作痕跡と考えられる小溝が多数あった他、土坑や落ち込みなどもあった。これらは遺物の出土が少ないため明確でないが、奈良時代から鎌倉時代にかけてのものと考えられる。

耕作痕跡と考えられる小溝(写真１)は、数時期のものが混在していると考えられる。平安時代頃の遺物が出土するものがあることから、平安時代以降には小規模な造成を伴った開発行為が行われている可能性が高い。それ以前の状況については、小溝群の中に確実に奈良時代のものと考えられるものがないため、不明である。

写真１　遺構面直上耕作痕跡(南から)

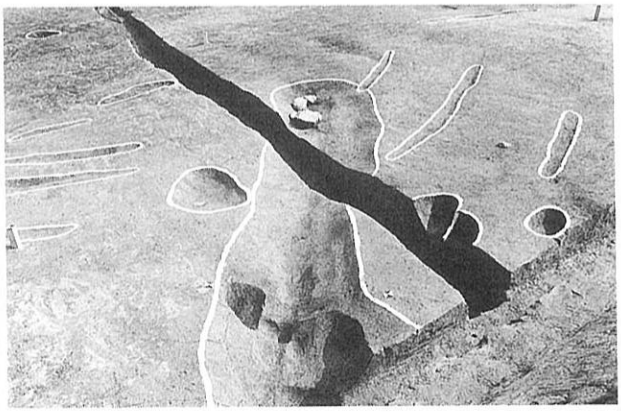


写真２　溝11・ピット14(西から)

落ち込みは地区東側の２ヶ所で検出されており、下層は自然堆積を示す粘土層になっているものの、上層は人為的に埋め戻された状況が見られる。これらの落ち込みは非常に深く、壁面崩落の危険が想定されたことから、調査中に完掘することができなかった。

落ち込み５は人為的な埋め戻し土から黒色土器片が出土しており、層序関係からも平安時代頃に埋め戻された可能性が高い。

落ち込み８からは染付の細片が出土している。層序関係からは、少なくとも圃場整備時点では埋め戻されていたことが確実である。自然堆積の粘土質の埋土が何層も重なる状況から考えると、農業用の溜池や、一時的な水溜めのようなものである可能性が考えられる。

これらの落ち込みは、帰属する時期こそ違え、地区東側の低地部でのみ検出されることから、周辺が湿潤な環境にあったことが想定される。

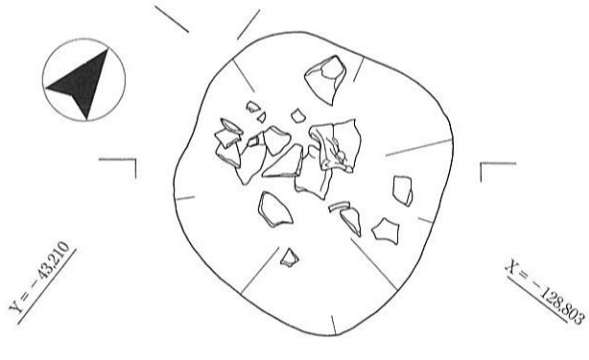
奈良時代の遺構

奈良時代と考えられる遺構は、地区北側および東側で検出されており、数基のピットや溝がある。

溝11（写真２）に隣接して位置するピット14からは、図化できなかったものの面取りした土師器高坏の脚部が出土しており、埋土が近似することから溝11を含めて奈良時代の遺構になる可能性が高い。

ピット16（図７）は、地区北側で検出された。深さ0.1mほどの浅い落ち込み内に位置しており、埋土が近似することから、同一の遺構である可能性がある。ピット上面より須恵器甕の口縁から体部にかけての破片が出土したが、十分に図化が可能な大きさには復元できなかった。

地区東端で検出された溝10は、幅0.2m、深さ0.2mで比較的しっかりした掘方を持ち、北西方向に伸びる。北接する庄田遺跡で検出された溝１と同一の遺構となる可能性が高いと考えられ、庄田遺跡の集落検出域までまっすぐに伸びる可能性がある。



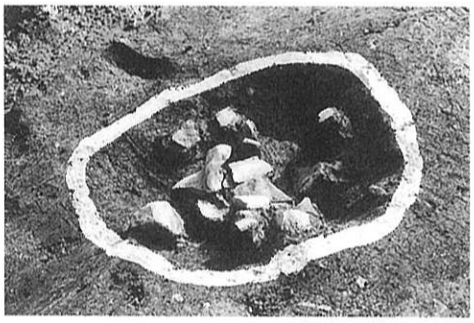
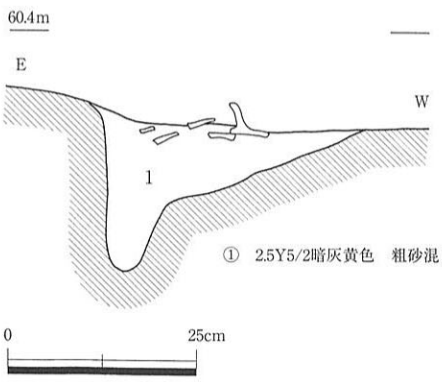


写真３　ピット16出土状況（東から）



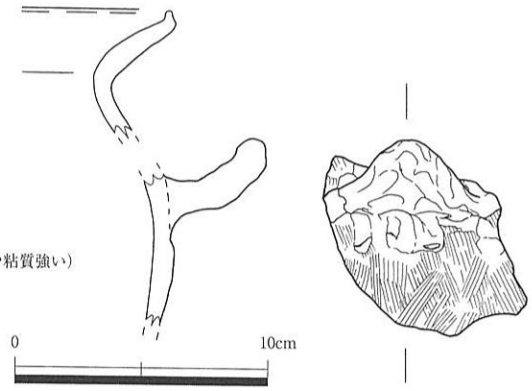


図７　Ａ地区　ピット16　平・断面図および遺物実測図

鎌倉時代の遺構

鎌倉時代と考えられる遺構には、耕作痕跡とピットがあり、古代包含層の上面で検出されるものも若干あった。しかし、大部分は黒褐色層上面で奈良時代の遺構と混在して検出される。耕作痕跡は南東ー北西方向に主軸をもつものが多い。深さは0.1m以下と浅く、埋土は中世包含層と同様な黄灰色で砂質の強いものとなっている。ピットは径0.2m、深さ0.15m程度の小規模なものが多く、遺物がほとんど出土しない。

地区南側などで見られる耕作地段差は、付近の包含層の状況から、鎌倉時代以降に造成されたものであると考えられる。このような耕作地段差は各地区で確認されており、その多くが鎌倉時代以降に造成されたものと考えられる。耕作地としての積極的な土地利用状況をうかがうことができる。

遺物　A地区は遺物の出土量がコンテナ１箱に満たない程度と少なく、実測できる遺物も数点のみであった。掲載していないが、排土から須恵器坏Bが出土している。

図７・８はA地区から出土した遺物で、出土地点別に遺構出土のもの(図７・図８-１)と中世包含層(2)、古代包含層(3～5)、黒褐色土層上層(6～8)となる。

土師器甕(図７)　口縁部と把手が残存している。口縁端部をつまみあげ、端面は外傾する。体部外面はハケ目を施し、把手はやや上向きにつけられる。

須恵器坏A(1)　口縁部は緩やかなカーブを描いて立ち上がる。口縁部と内面は回転ナデ、底部外面が回転ヘラケズリを施す。

土師器皿(2)　口縁部にやや強いヨコナデをする。

白磁碗(3)　底部のみ残存する。底部外面が露胎しており、内面見込み部には段をもつ。

須恵器壺L(4)　口縁部が大きく外反する。頸部には凹線が一回転半めぐる。

須恵器坏B(5)　口縁部は斜め外方に立ち上がり、口縁部に強い回転ナデを施す。口縁端部は欠損する。高台は断面四角形で、ハの字状につき接地面が外傾する。

弥生土器(6)　生駒西麓産の甕底部である。表面の磨耗が著しく、調整は不明である。

縄文土器(7･8)　いずれも磨耗が著しい。７は底部のみの残存で、縄文土器でない可能性もある。やや上げ底で、円盤状に底部を作り、底部に比べて薄い体部がつく。体部下方外面には横方向のナデを施す。胎土はにぶい黄橙色を呈し、砂粒を多く含んでいる。８は深鉢の体部と推察され、外面には巻貝による擬縄文を施す。

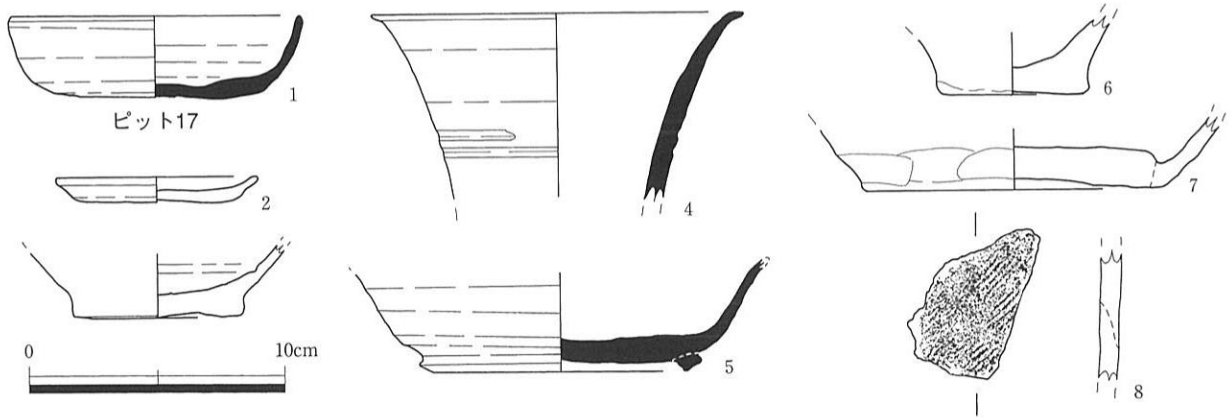


図８　A地区　出土遺物

2. Ｂ地区

Ｂ地区の現況は平坦な耕作地であるが、圃場整備以前は北西から南東方向に傾斜する斜面地であったと考えられ、調査区の大部分で著しい削平がなされており、遺構の残存状況が非常に悪かった。ほとんどの場所で圃場整備盛土を除去するとただちに地山が露出した。南東側では灰黄色で比較的細粒の古代包含層と、浅黄～灰黄色で比較的粗粒の中世包含層が残存しており、ここで遺構が検出された。

遺構　検出された遺構には、ピット群と焼土坑があった。ピット群から出土する遺物は、一部を除いて細片ばかりであるため時期を明確にできないが、平安時代後半のものが中心となっていると考えられる。焼土坑からもほとんど遺物が出土しないため時期を明確にできないが、層序関係・埋土の状況などから奈良時代のものである可能性が高い。

奈良時代の遺構

奈良時代と考えられる遺構としては、焼土坑のほかに明確なものが確認されなかった。焼土坑は全地区で合計７基が検出されているが、当地区ではそのうち４基が検出されている。いずれも埋土には炭化物が多く含まれており、壁面は被熱している。地区西側で検出された焼土坑１(図10)は、隅丸方形で一辺0.9m、深さ0.2mを測る。壁面は被熱しており、内側は酸化して赤色に、外側は還元化して黒褐色に変

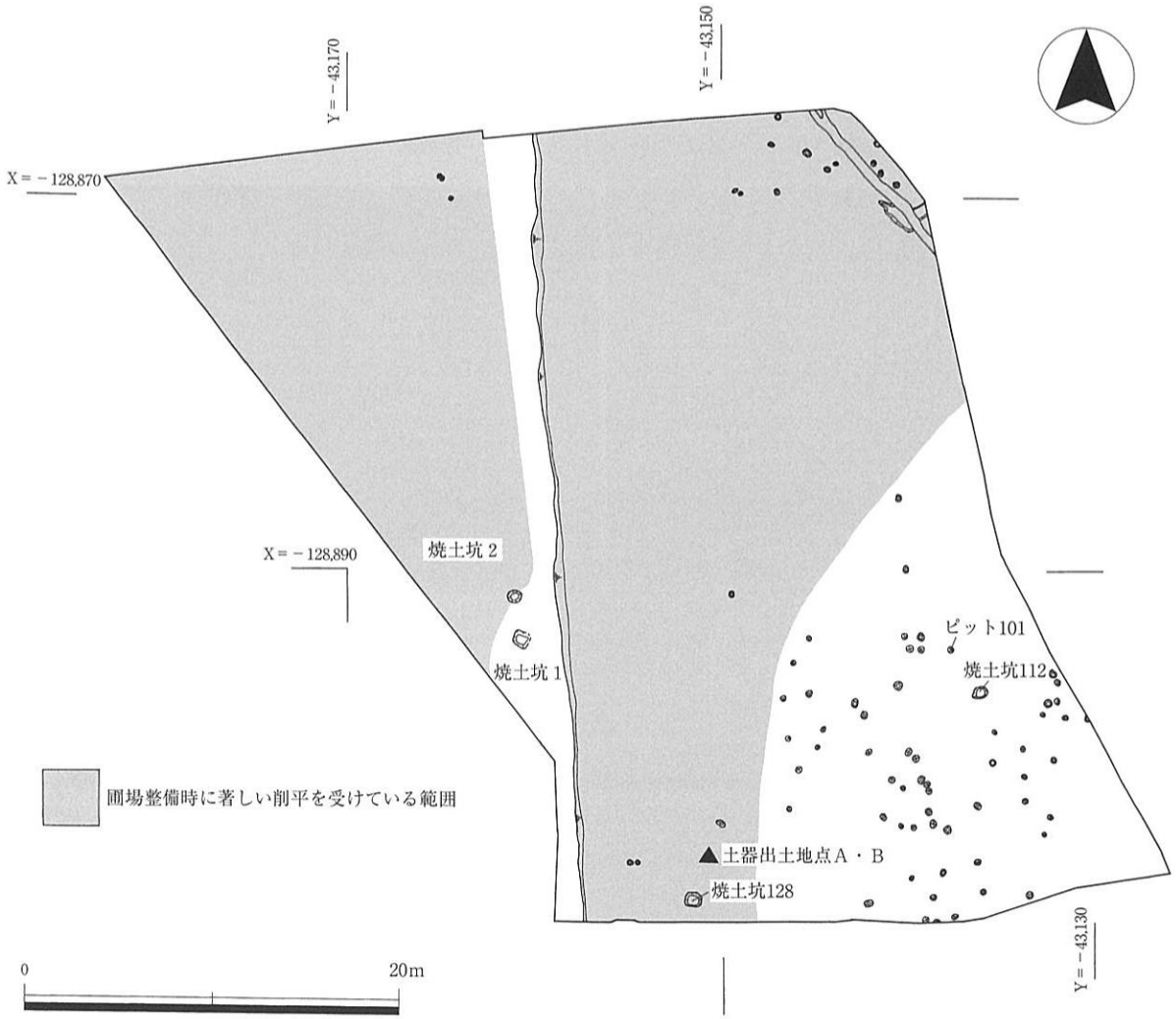


図９　Ｂ地区　全体平面図

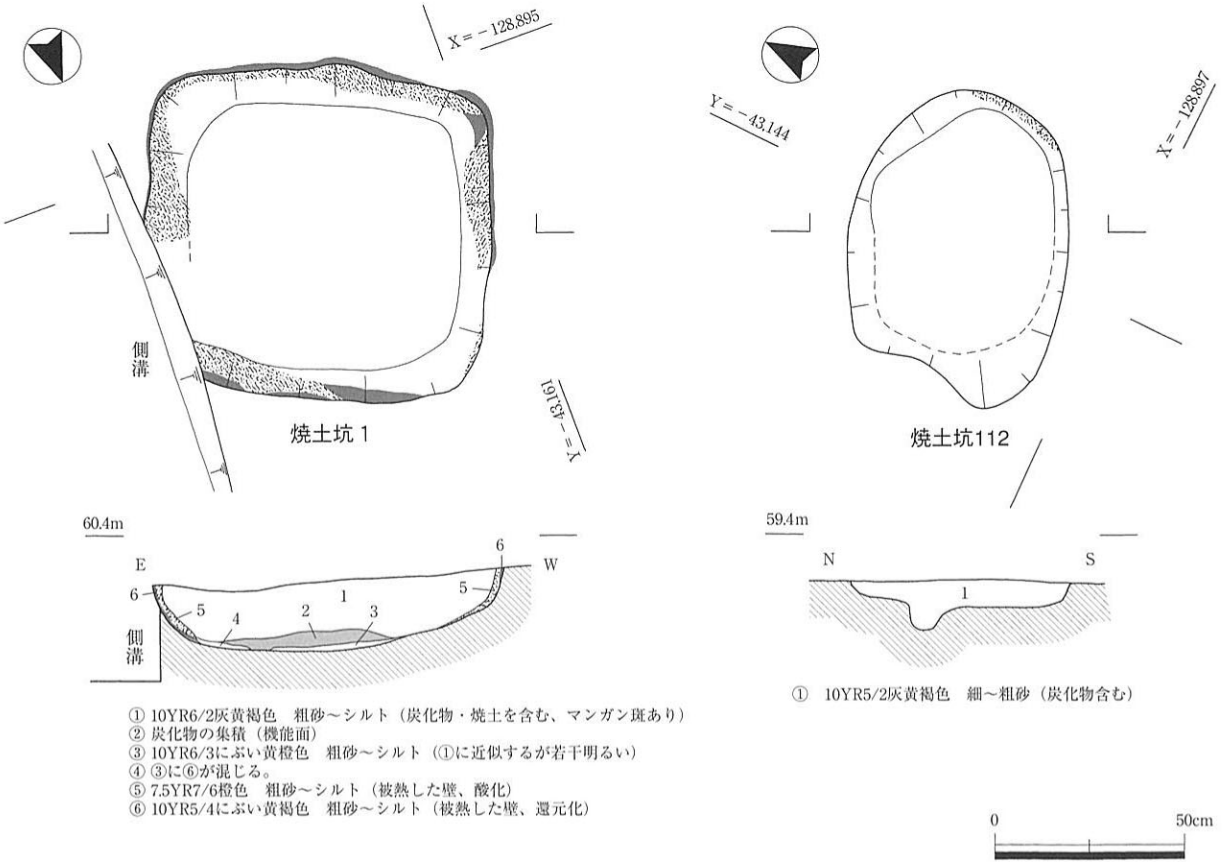


図10　B地区　焼土坑１・112　平・断面図

写真４　焼土坑１検出状況(西から)

写真５　焼土坑１完掘状況(西から)

化している。床面には壁面で見られるような被熱による変色は認められない。掘方下層には炭化物の集積が見られる。焼土坑２は若干規模が小さくなるものの同様の状況である。

焼土坑112(図10)は、楕円に近い不定形で長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.1mを測る。壁面は東側に一部赤変している部分が見られるが、ほとんど残っていない。埋土にも焼土坑１のような炭化物の下層集積は見られず、焼土・炭化物を含んだ単一層となっている。焼土坑128も同様の状況であるが、被熱した壁面は認められなかった。これらの焼土坑については、第５章で詳しく検討したい。

平安時代の遺構

平安時代と考えられる遺構には、ピット群がある。ほとんどのピットで遺物は細片しか出土しなかったが、ピット101(図11)からは、埋め戻しの際に人為的に入れられたと考えられる遺物が出土した。ピッ

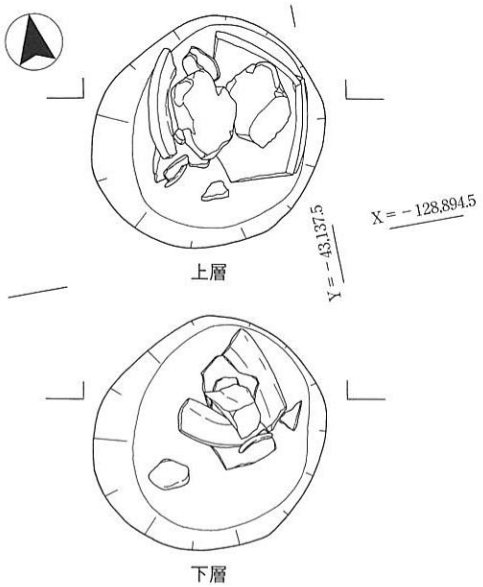


写真６　ピット101上層出土状況（南から）

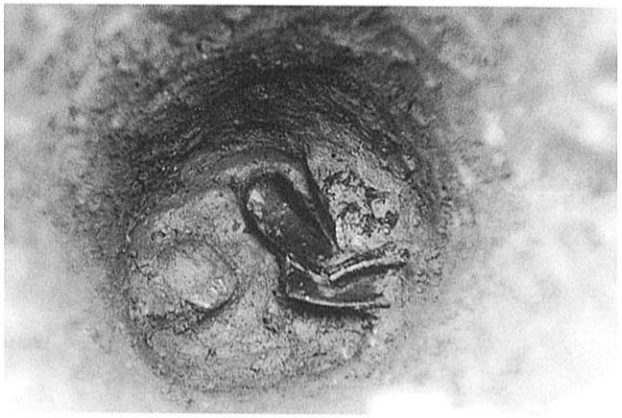
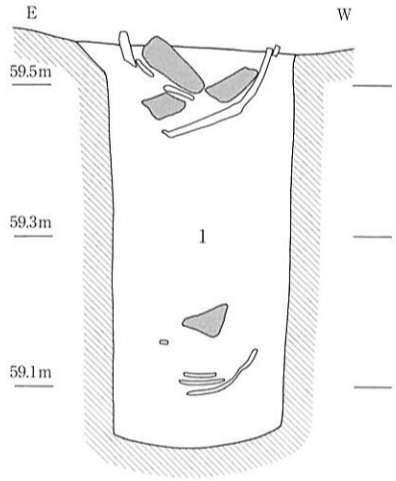


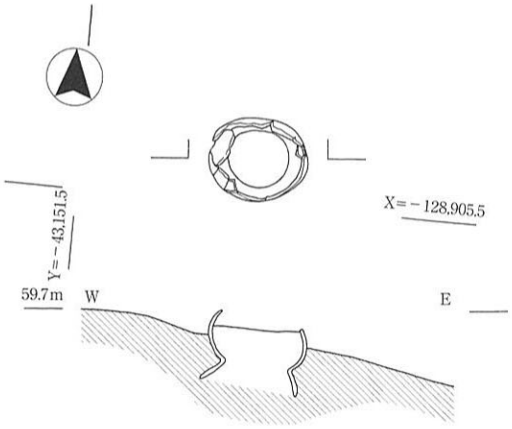
写真７　ピット101下層出土状況（南から）



① 10YR6/2灰黄褐色　粘土～粗砂（シルト主体）

0　25cm

図11　Ｂ地区　ピット101　平・断面図



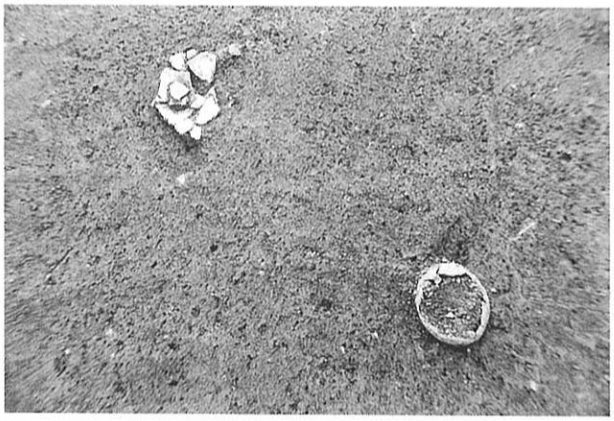


写真８　土器出土地点Ａ・Ｂ出土状況（北から）

0　25cm

図12　Ｂ地区　土器出土地点Ａ　平・断面図

ト101はピット群北側に位置し、径0.25m、深さ0.55mを測る。周辺のピットは、深さ0.2m程度のものがほとんどであるため、特に深い。数個体分の土器が出土した。土器は掘方の上層と下層に分かれて出土している。上層からは、須恵器鉢の底部(図15-４)と一緒に拳大の河原石がいくつか出土し、下層からは土師器甕(図15-２)が出土した。両者ともに完形ではないが、12世紀頃のものと考えられる。

また、地区南側において壺などの土器が据えられた状態で出土した。出土時に周辺の精査を行ったものの遺構掘方は確認できなかったため、土器出土地点Ａ・Ｂとして取り扱うこととする。土器出土地点Ａでは、土師器壺が口縁を下にして据えた状態で出土した(図12)。内部の土を洗浄してみたが、特に何も確認されなかった。土器出土地点Ｂでは、土師器の体部片が出土したが、図化はできなかった。出土地点が平安時代以降に形成されたと考えられる耕作地の段差部分にあたるため、造成の際に埋置された可能性もあるが不明である。

遺物　全体的に遺物の量が少なく、特に東半部からの出土はわずかであった。

包含層出土の遺物

図13は包含層から出土した遺物である。土師器皿・坏・甕、須恵器底部、円筒埴輪片、鉄滓、土馬が出土した。

土師器皿(1)　「ての字状口縁」をもつ皿である。口縁部外面にヨコナデを施し、端部をつまみ上げるようにしておさめているが、やや「ての字」が崩れている。底部外面に指圧痕が残る。

瓦器椀(2)　口縁部のみの残存である。口径13.7㎝を測り、比較的器壁が厚い。端部内面に沈線をめぐらす楠葉型瓦器椀で口縁部外面にヨコナデを施す。内外面とも横方向のヘラミガキが密に施される。

土師器甕(3)　口縁部を下にし、伏せた状態で出土したため、底部はおそらく上面の掘削時に削り取られたものと推察される。体部はやや扁平な球形で、中央よりやや上に最大径を測り、口縁部が短く外傾する。調整は不明瞭で体部内面のみ横方向のヘラケズリを残す。形態から見て布留式の甕と考えられるが、この時期の遺物は他に１点も見られないため、容易に比定できない。砂粒を多く含む胎土である。

須恵器底部(4)　底部のみ出土した。底部端に短い高台がつき、内面全体に自然釉が付着している。

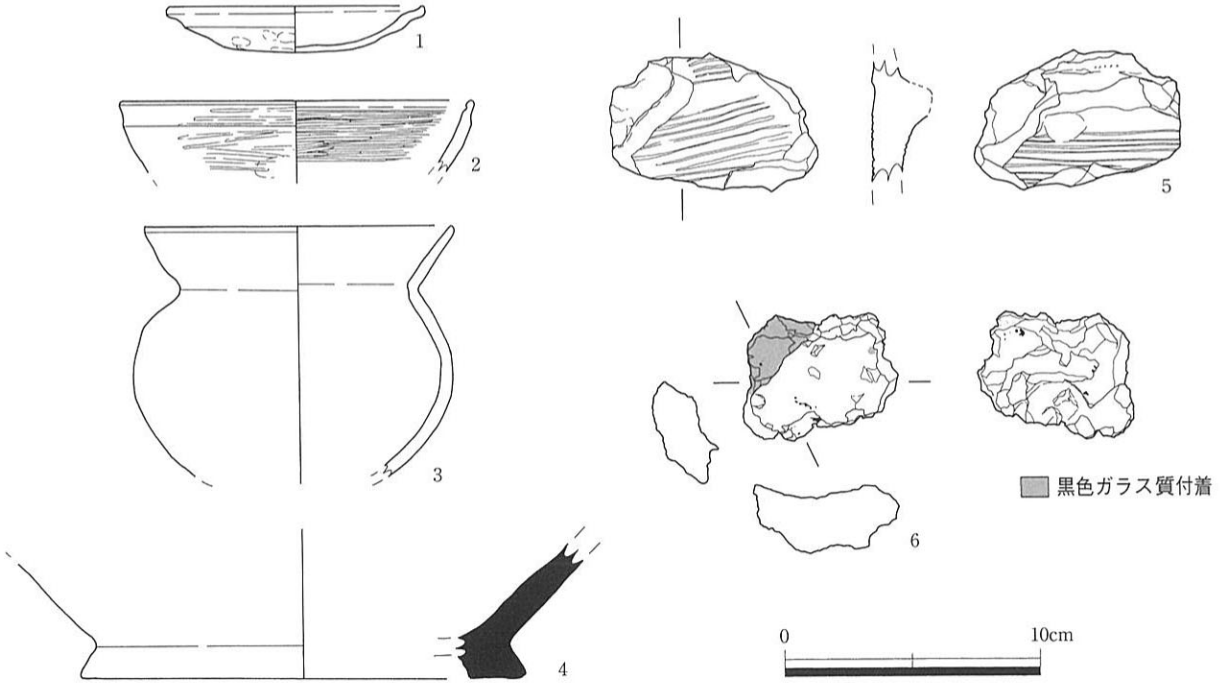


図13　Ｂ地区　包含層出土遺物　黒色ガラス質付着

円筒埴輪片(5)　タガは先端が欠損する。内外面に横方向のハケ目を施しており、外面にはタガのすぐ下までハケ目がみられる。浅黄橙色を呈し、直径1㎜以下の細砂を含むやや粗い胎土である。

鉄滓(6)　椀形滓である。上面にやや盛り上がっている部分があるが、羽口の先が溶解したものが付着したと思われる。この部分に続くカーブの面は、羽口との接地面として生きている可能性がある。黒色ガラス質が一部に付着し、直径1㎜前後の気泡がある。直径約5㎜の白色砂粒を多く含んでいる。

土馬(図14)　地区南東隅の平安時代と考えられる包含層中から出土した。全体的に磨耗しているが特に正面から見て左側の面が著しい。頭部のみ出土し、馬具をつけた痕跡はない。浅黄橙色の精良な胎土で直径1㎜以下の細砂・くさり礫を多く含む。目の部分は盛り上がっており、まぶたのラインを線刻する。耳部も盛り上がっていて、周囲より白っぽくなっている箇所があり、貼り付けていた部分が欠損し、磨耗したものと考えられる。後ろに、赤色顔料の塗布の痕跡がある。鼻部は鼻先を左右に肥厚させ、鼻腔は串状の工具で刺突し、鬣部は粘土をつまみあげて表現している。頬の張りや鼻梁のつくりが立体的で、非常に写実的なつくりをしており、あまり類例がみられない。

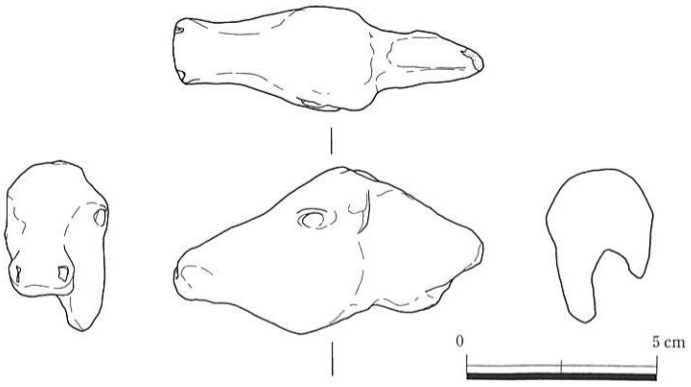


図14　B地区　土馬

遺構出土の遺物

図15はピット101から出土した遺物である。須恵器鉢と瓦器椀はピットの上層から出土した。

土師器甕(1・2)　ピットの底で破片を重ねるようにして埋められていた。1は口縁部のみ残存する。口縁部は斜め上方に開き、外面にハケ目を施すが、ヨコナデにより消されている。外端面はヨコナデしており、断面が方形を呈する。2は2分の1残存する。体部の最大径より口径がわずかに大きく、丸底である。内面はヘラケズリを施すが、体部外面全体に煤が付着しているため、調整は不明である。1・2とも暗褐色を呈し、直径1㎜以下の細砂を含む胎土で、形態も良く似ている。

瓦器椀(3)　底部が欠損している。口縁端部内面に沈線をめぐらす楠葉型瓦器椀で、口径は15.4㎝を測る。表面の調整は磨耗のため不明瞭であるが、外面に指圧痕がみられる。

須恵器鉢(4)　東播系須恵器のこね鉢底部である。体部は緩やかに立ち上がる。

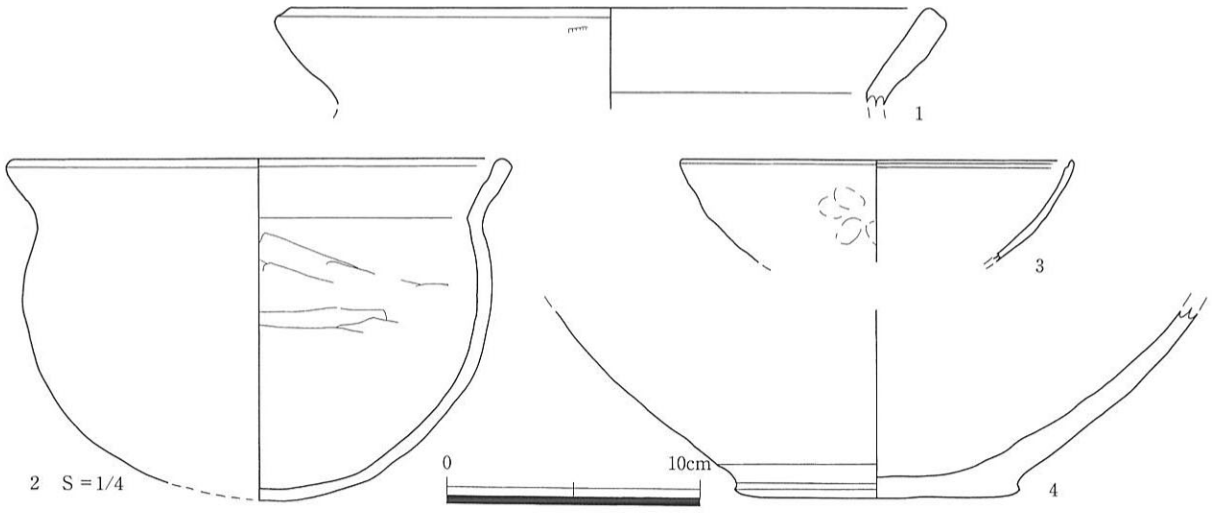


図15　B地区　ピット101出土遺物

3. C地区

C地区は調査地の中央付近、「新池」の東堤に接する。当地区はそれほど著しい削平は受けていないものの、西側の一部と東側では包含層が残存していなかった。包含層が良好に残存する場所では、現代耕作土、圃場整備盛土の下層に、古代から中世のものと考えられる包含層が複数確認された。中世包含層は、全体に均質な黄灰色の細～粗砂で遺物の出土が少ない。これは検出された耕作痕跡の埋土と近似しており、耕作土としての性格を考えることができる。平安時代と考えられる包含層は、中世包含層に近似するものの砂質がやや強く、奈良時代の包含層は、暗色で粘質が強い。

遺構　当地区では、奈良・平安時代を中心として、鎌倉時代までの遺構が検出された。各時期ごとの遺構分布は明確に異なる。

奈良時代の遺構

奈良時代と考えられる遺構は、地区西側に集中する。ここではピット群、焼土坑、溝、落ち込みのほか、掘立柱建物が2棟検出された。

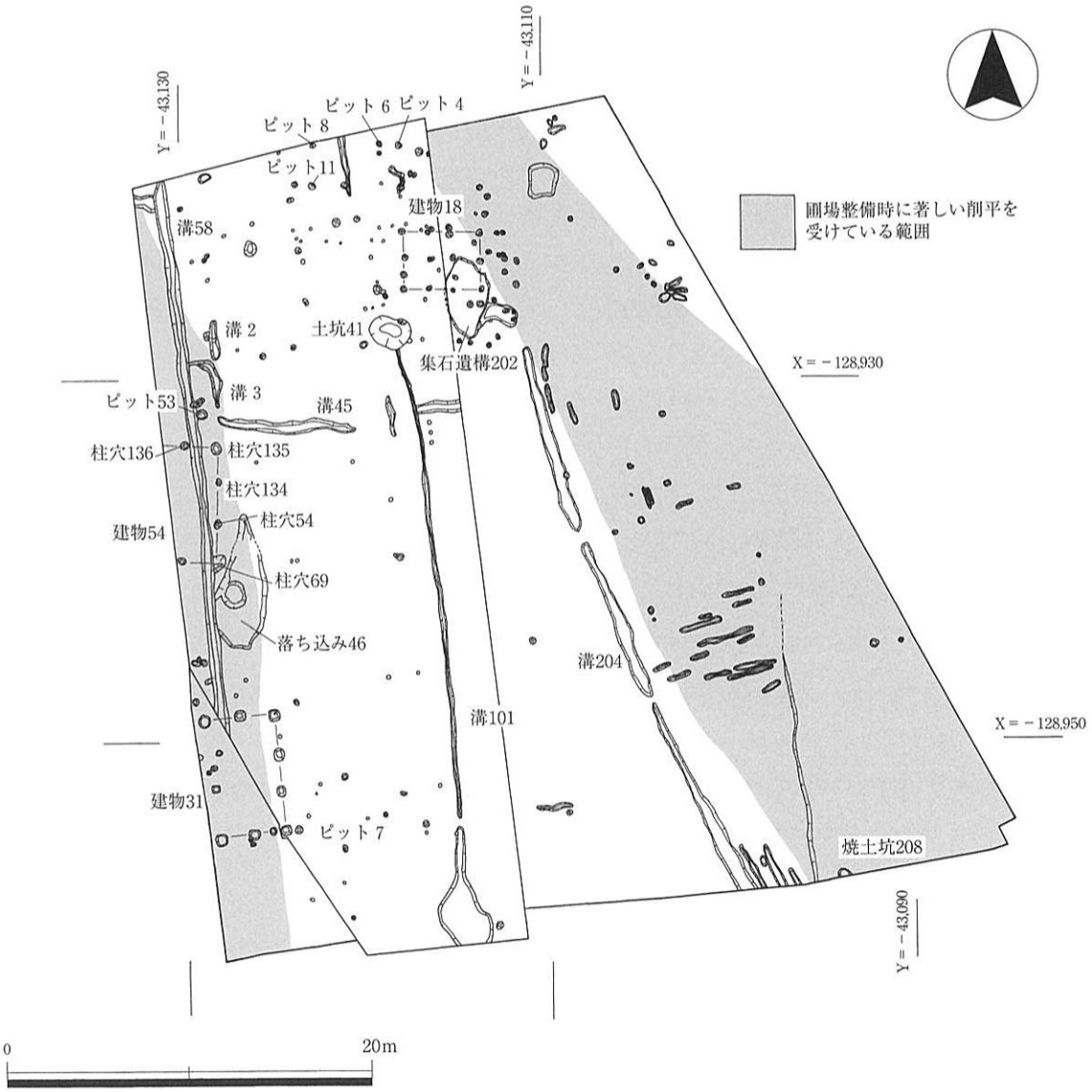


図16　C地区　全体平面図

写真９　ピット７出土状況（東から）

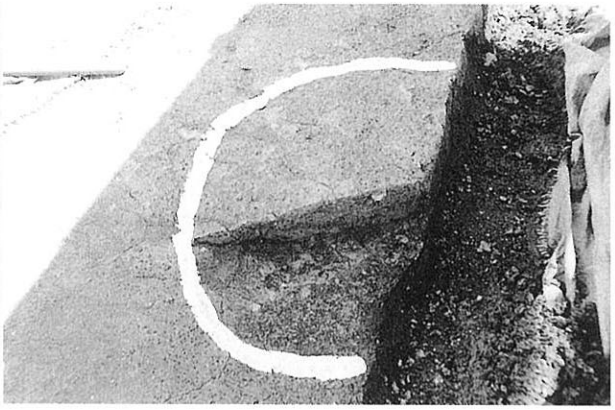


写真10　焼土坑208半掘状況（西から）

ピット７（写真９）は、地区南西、建物31の南東隅柱穴に接して検出された。須恵器坏蓋や土師器甕（図27-５・11）が出土したが、いずれも完形にはならなかった。建物31に関連する遺構である可能性が高いが、性格は不明である。

焼土坑208（写真10）は、地区南端で検出された。南側を側溝で切ってしまっており、遺構の南半が失われている。Ｂ地区で検出されたものと同様に、埋土には炭物が多く含まれているが、被熱した壁面はほとんど残っていなかった。

地区西側では、ほぼ方位に沿った溝が数条見られる。溝２・３・45・101は規模、埋土に共通性が認められ、同様の性格を持つと考えられることから、何らかの区画的な性格を持つ可能性がある。特に溝101は25m以上にわたって直線的に伸びる。溝の東側で遺構が検出されず、西側で同時期の建物31・54が検出されていることから、これらに関連する可能性が考えられる。

落ち込み46（図17）は、地区西側中央付近で検出された。平面形は不定形を呈し、長軸7.5m、深さ約0.15mを測る。上面の削平が著しく周辺の圃場整備盛土からは多くの遺物が出土した（図23・24）。残存した掘方内からも多くの遺物が出土したが、完形に復元できるものはない。埋土は人為的なもので、埋

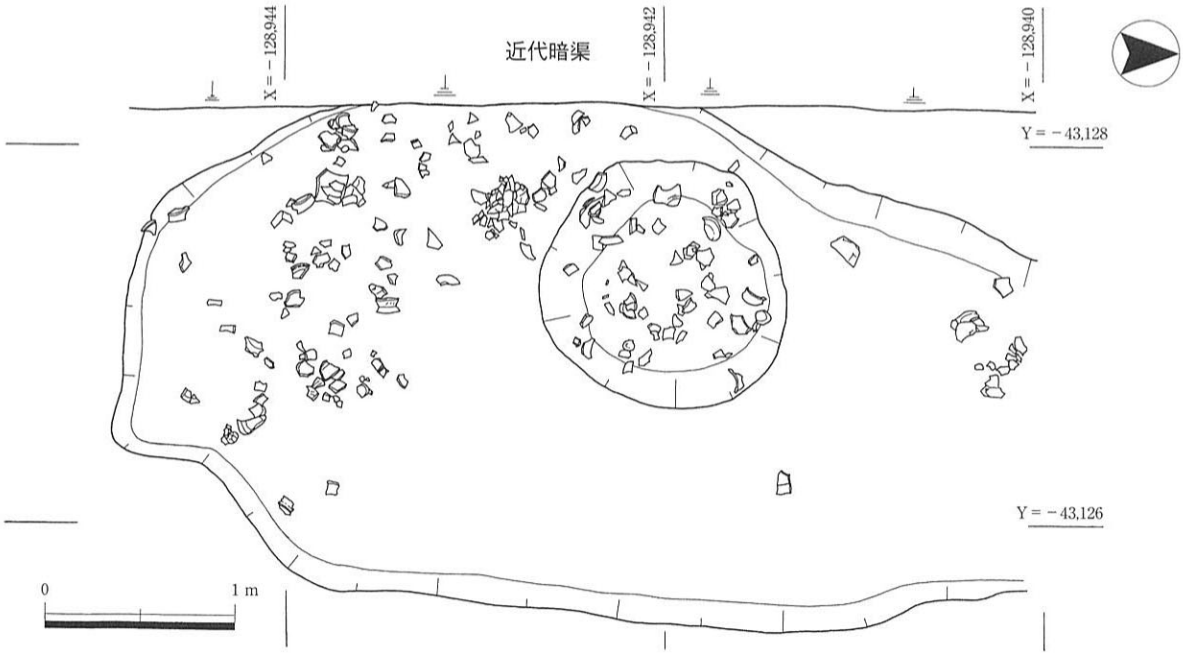


図17　Ｃ地区　落ち込み46　平面図

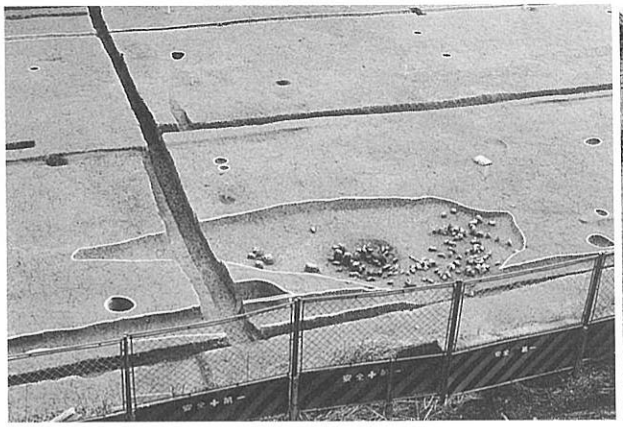


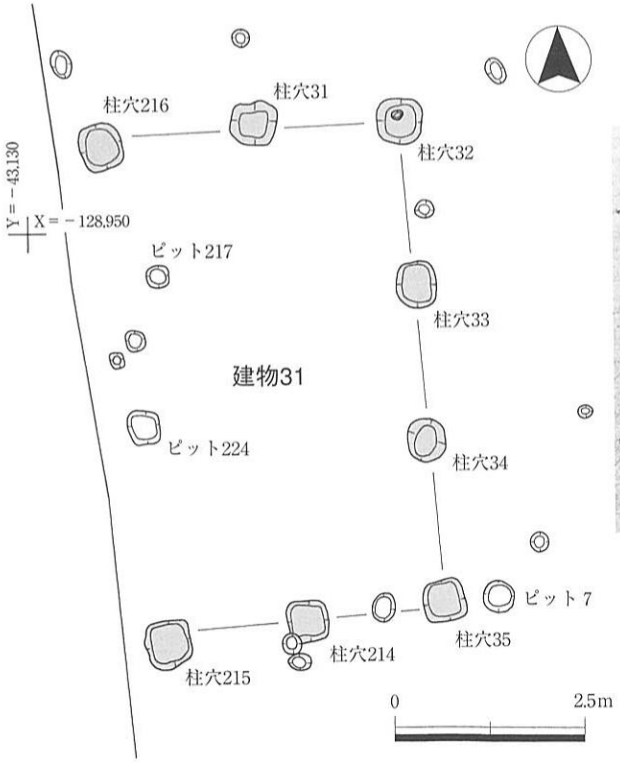
写真11　落ち込み46(西から)

写真12　落ち込み46出土状況(南東から)

め戻しの際に遺物が入れられたものと考えられる。同時期の建物と考えられる建物31と54の間に位置していることから、何らかの関連があると考えられるが不明である。

建物31(図18)は、落ち込み46の南側で検出された。西側が調査範囲外に広がっているため、総規模は明確でないが、3間×2間もしくは、3間×3間以上の掘立柱建物と考えられる。柱間は1.8～2.1m、掘方は方形で深さは0.3～0.5mを測る。南北に軸を持ち、溝101と平行する。

建物54(写真15)は、落ち込み46の北側で検出された。航空測量時には柱穴54・69しか確認しておらず、建物として認識していなかった。しかし、測量終了後の確認掘削により、建物北側プランを構成する柱穴134～136が検出され、建物54として認識するに至った。建物31と同様に、西側は調査範囲外に広がっており確認できないが、3間×2間以上の建物であると考えられる。柱間は1.8～2.1m、掘方は円形で、深さは比較的残存状況のいい柱穴69で0.6mを測る。南北に軸をもつが、建物31が軸をやや西に振るのに対して、やや東に振る軸をもつ。



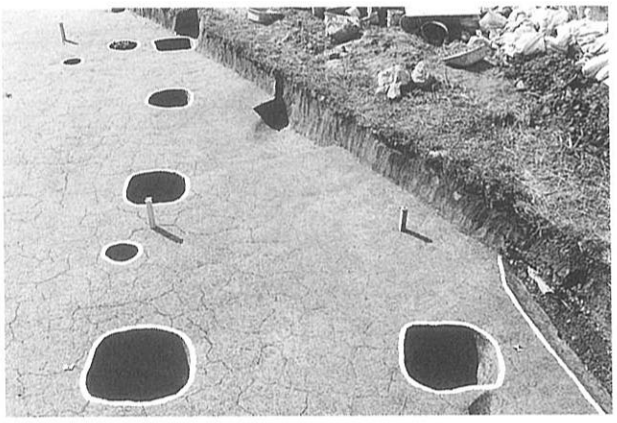


写真13　建物31北東側(北から)

図18　C地区　建物31　平面図

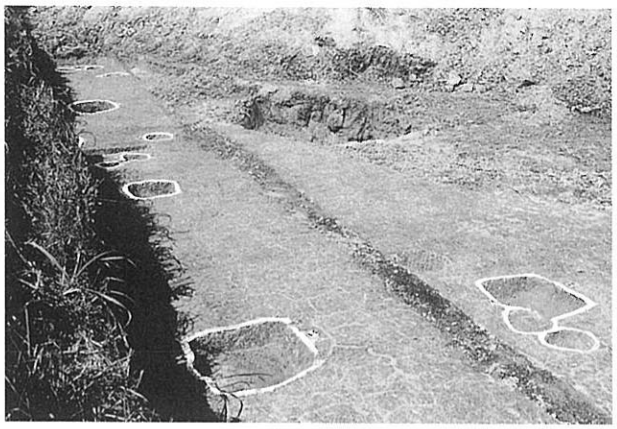


写真14　建物31南西側(南から)

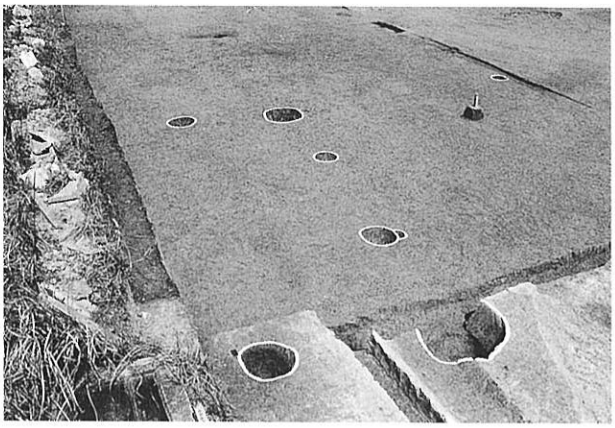


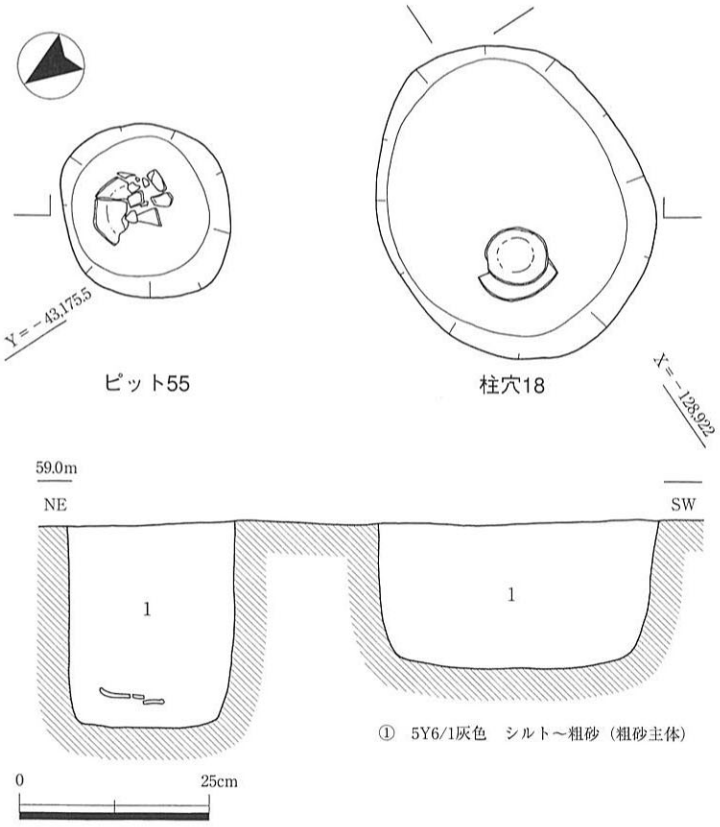
写真15　建物54東側(南から)

平安時代の遺構

平安時代と考えられる遺構は、地区北側に集中している。北側のＢ地区南側において、該期のものと考えられるピット群が検出されていることから、一連の分布範囲として捉えることができる可能性が高い。当地区ではピット群、土坑のほか、掘立柱建物が１棟検出された。

ピット55(図19)は地区北西側、建物18の柱穴18に近接して検出された。円形で径0.2m、深さ0.55mを測る。埋土の状況が、建物18の柱穴埋土と近似しており、出土遺物も同時期のものと考えられることから、建物18に関連のある遺構である可能性がある。

土坑41(図20)は、地区北側、建物18の南西側で検出された。平面形はやや不整な円形で径1.7m、深さ0.55mを測る。下層には止水性の自然堆積土が見られる(⑤・⑥層)が、上層は人為的な埋め戻し土と見



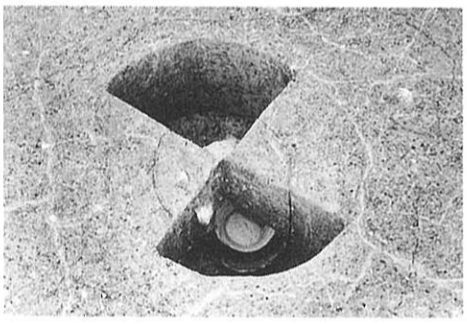


写真16　柱穴18出土状況(北から)

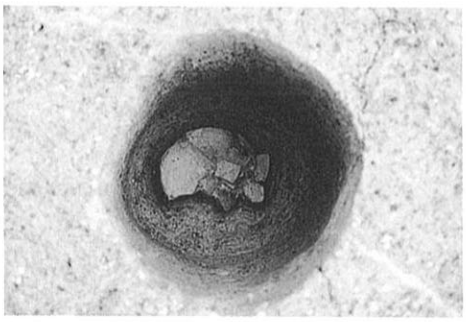


写真17　ピット55出土状況(東から)

図19　Ｃ地区　柱穴18・55　平・断面図

られ、層中から遺物が出土した。掘方の平面規模などは他地区で検出される井戸と近似するが、深さが比較的浅く、湧水層まで掘削が及んでいないことから、水溜め状の遺構であった可能性がある。遺物の出土は土坑の底面ではなく底付近の斜面で見られ、12世紀代前半頃のものと考えられる遺物が10数点出土した。東側斜面から出土した瓦器椀は見込みを上に向けてほぼ完形で入れられていたが、西側斜面から出土した数点の土師器皿は、いずれもほぼ中央で半分に割れていた。意図的に半割された後に土坑内に入れられた可能性が高い。

建物18(図21)は、地区北側で検出された。航空測量時には建物として認識していなかったが、測量終了後、集石遺構202の石を除去した際に柱穴226・300が検出され、建物18として認識した。2間×3間の掘立柱建物と考えられ、柱間は1.4～1.6m、掘方が円形で深さ約0.5mを測る。柱穴18・201・223・226からは、それぞれ遺物が出土した。柱を抜き取ったあとに埋納されたものと考えられる。柱穴201には、

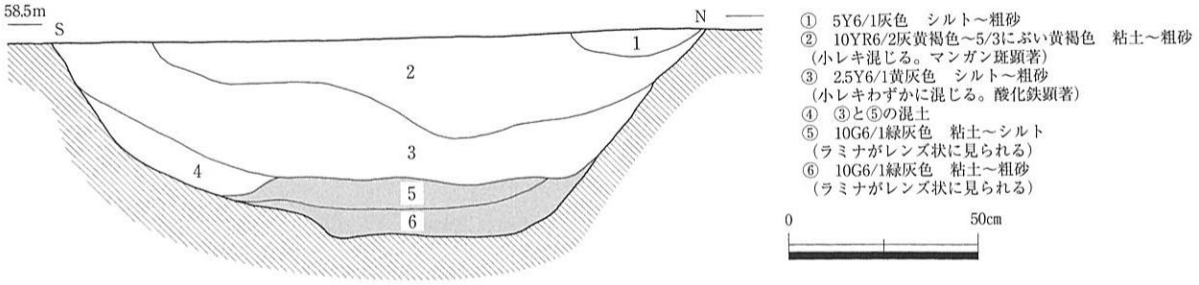


図20 C地区 土坑41 断面図

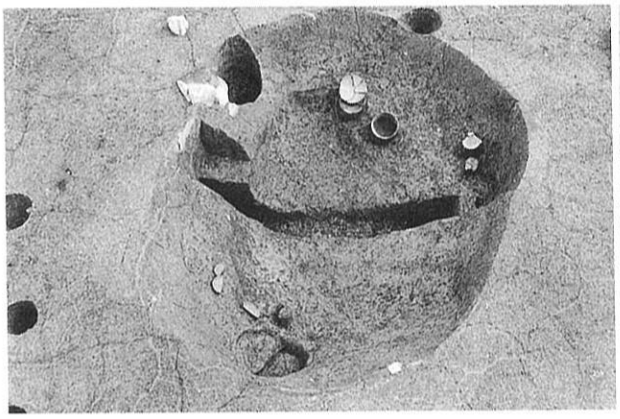


写真18 土坑41(西から)

写真19 土坑41断面状況(東から)

写真20 土坑41瓦器椀出土状況(北から)

写真21 土坑41土師器皿出土状況(東から)

図21　C地区　建物18　平面図

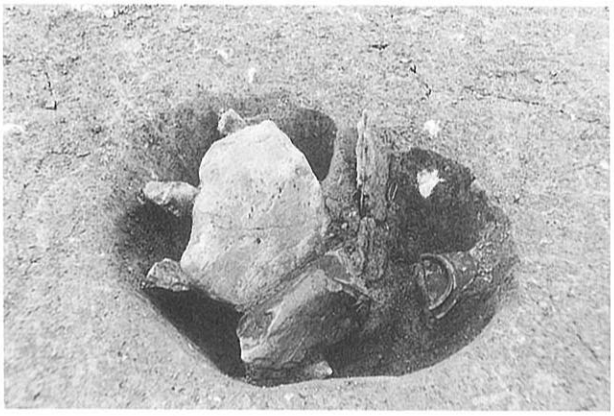


写真22　柱穴201出土状況（東から）

写真23　柱穴201犂先出土状況（南から）

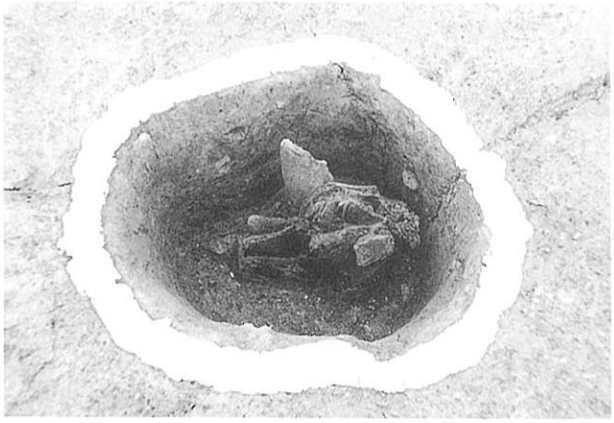


写真24　柱穴223出土状況（南から）

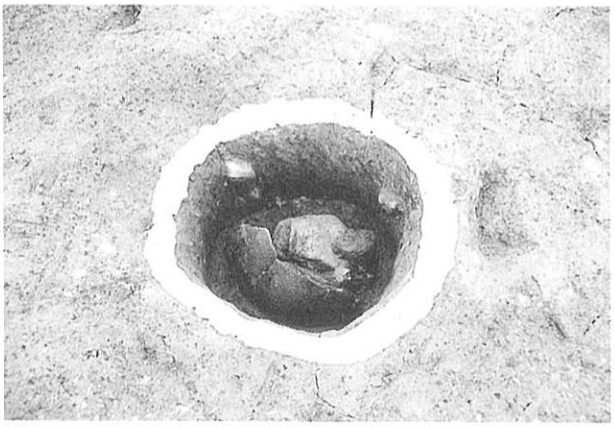


写真25　柱穴226出土状況（南から）

鉄製犂先(図80- 1)が先端を下にして埋納されていた。共伴した瓦器椀の底部(図29- 2)などから、12世紀代のものと考えられる。

鎌倉時代の遺構

鎌倉時代と考えられる遺構には、溝や集石遺構、地区東側で検出された耕作痕跡がある。

溝204は、幅約0.8m、深さ0.1mを測る。旧地形に合わせて掘削されていると考えられ、真北より約25°西に振りながら伸びる。上面は削平されており、集石遺構202付近で検出できなくなる。

集石遺構202(写真26)は、地区北側で検出された。不整な楕円形を呈する長軸4m、短軸約2m、深さ約0.2mの浅い土坑内に拳～人頭大の河原石を入れたもので、石の間には瓦器椀などの中世遺物の細片などが見られた。埋土は砂質が強く、農業用水など水利に関係する遺構であると思われる。溝204と同時期のものと考えられ、何らかの関連がある可能性が高い。先述したように内部の石を除去すると、下面において平安時代の建物18東側の柱穴列(写真27)が検出された。

耕作痕跡は、複数の時期のものが混在して検出されていると考えられるが、方位を指向することなく、溝204に合わせて、平行・直交方向に掘削されていることから鎌倉時代以降のものであると考えられる。溝204西側にはほとんど検出されず、利用状況の違いがあった可能性があるが、詳細は不明である。

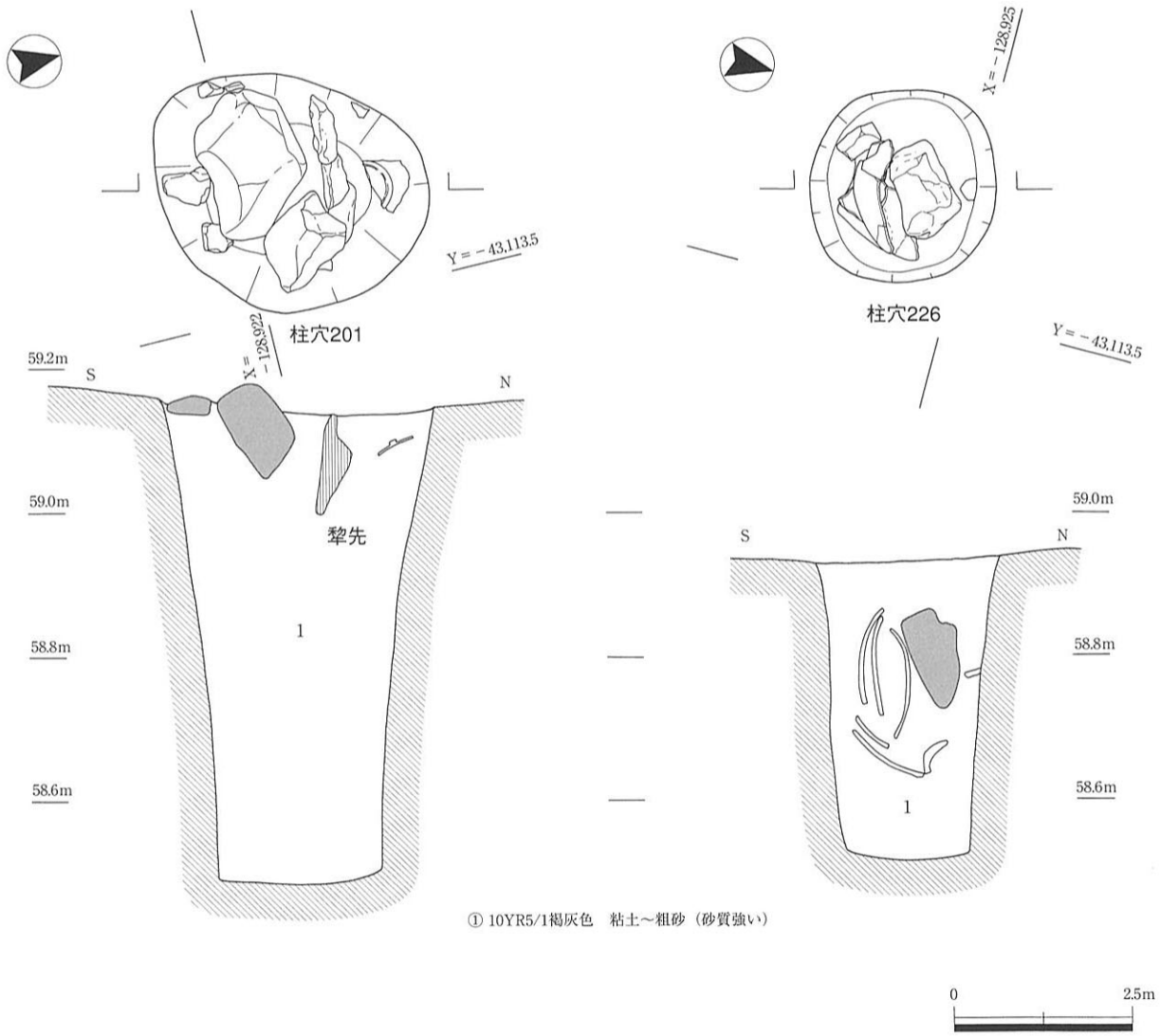


図22　C地区　柱穴201・226　平・断面図

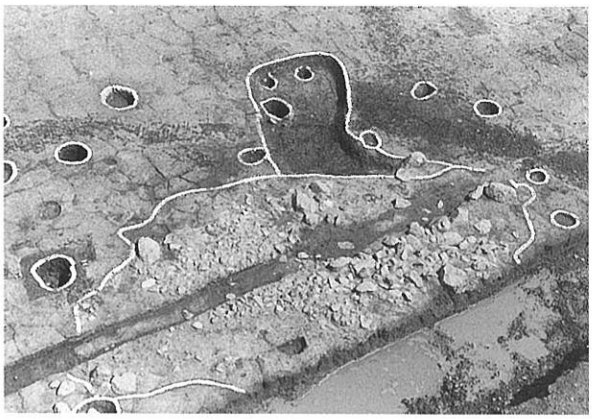


写真26　集石遺構202(西から)

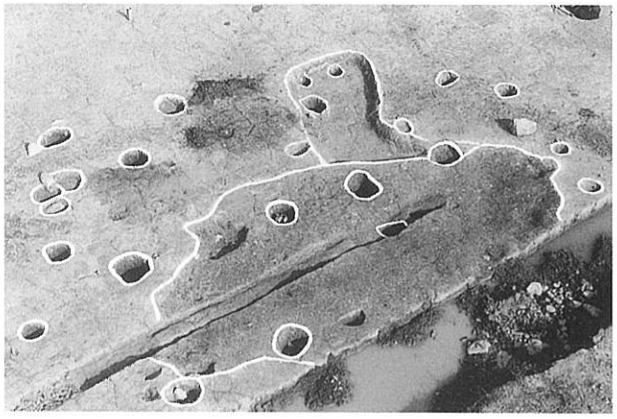


写真27　集石遺構202河原石除去後(西から)

遺物　C地区からは奈良時代の遺物が多く、特に建物31周辺の盛土・包含層から完形に近い須恵器坏が多く出土した。一方、当地区の北半部からは遺構に伴って、平安時代後期～鎌倉時代(11世紀後半～13世紀)の遺物が出土している。盛土・包含層中の遺物についても、北半寄りに平安時代以降のものが出土する傾向がみられた。

盛土・包含層出土の遺物

図23は盛土・包含層から出土した遺物である。須恵器は坏B蓋・坏B・坏A・壺E蓋・壺A・甕がある。土師器は坏A・皿・甕Aが出土した。

須恵器坏B蓋(1～4)　1は頂部が丸みを帯びており、口縁端部は内側に折り断面三角形を呈する。頂部外面は2分の1を回転ヘラケズリした後ナデ仕上げする。2は平坦な頂部で、口縁端部を垂下させる。端部は丸くおさめており、外端面に回転ナデを施す。3は口縁部のみ残存し、端部を内側につまみ出す程度に垂下させる。4は頂部が平坦で、端部を垂下させ、外端面には回転ナデを施す。頂部外面は2分の1を回転ヘラケズリ後、ナデ仕上げする。

須恵器坏B(5･6)　5は、口縁部が斜め上方に立ち上がり、底部端にふんばった高台がつく。6は口縁部が緩やかに立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部端にふんばった高台がつき、接地面は外傾する。調整は全体に回転ナデを施しており、底部外面もヘラケズリ後、ナデ仕上げする。

須恵器坏A(7～19)　いずれも口径約12㎝、器高3.5～4.0㎝に収まり、一定の法量である。7は底部をヘラ切り後、粗い調整を行う。8は口縁部が外方に開く。10は口縁部外面にやや強い回転ナデを施し、底部から口縁部の境まで回転ヘラケズリをする。13～18は口縁部が斜め外方に立ち上がり、底部の全体にナデを施し、底部中心付近がやや尖る。19は底部をヘラ切り後、ナデ仕上げする。

須恵器壺(20・21)　20は肩部に稜をもち、太い高台が底部端にハの字状に開いてつく。21は底部のみの残存であるが、やや高い高台がつき、接地面は外傾する。

須恵器高坏(22)　脚台部のみの残存で、器高が低く外反する。脚端部に拡張などは見られない。

須恵器壺E蓋(23)　つまみは欠損しているが、頂部が平坦で、口縁端部は垂直に折れる。頂部外面には回転ヘラケズリをし、口縁端部に回転ナデを施す。

須恵器甕(24)　口縁部が大きく外反し、体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁端部は、回転ナデを施して面をなし、口縁部内面にも軽く回転ナデを施している。

須恵器甑(25)　体部上半から口縁部にかけての残存である。外面と口縁部内面は回転ナデ、体部内面に斜め方向のナデを施す。

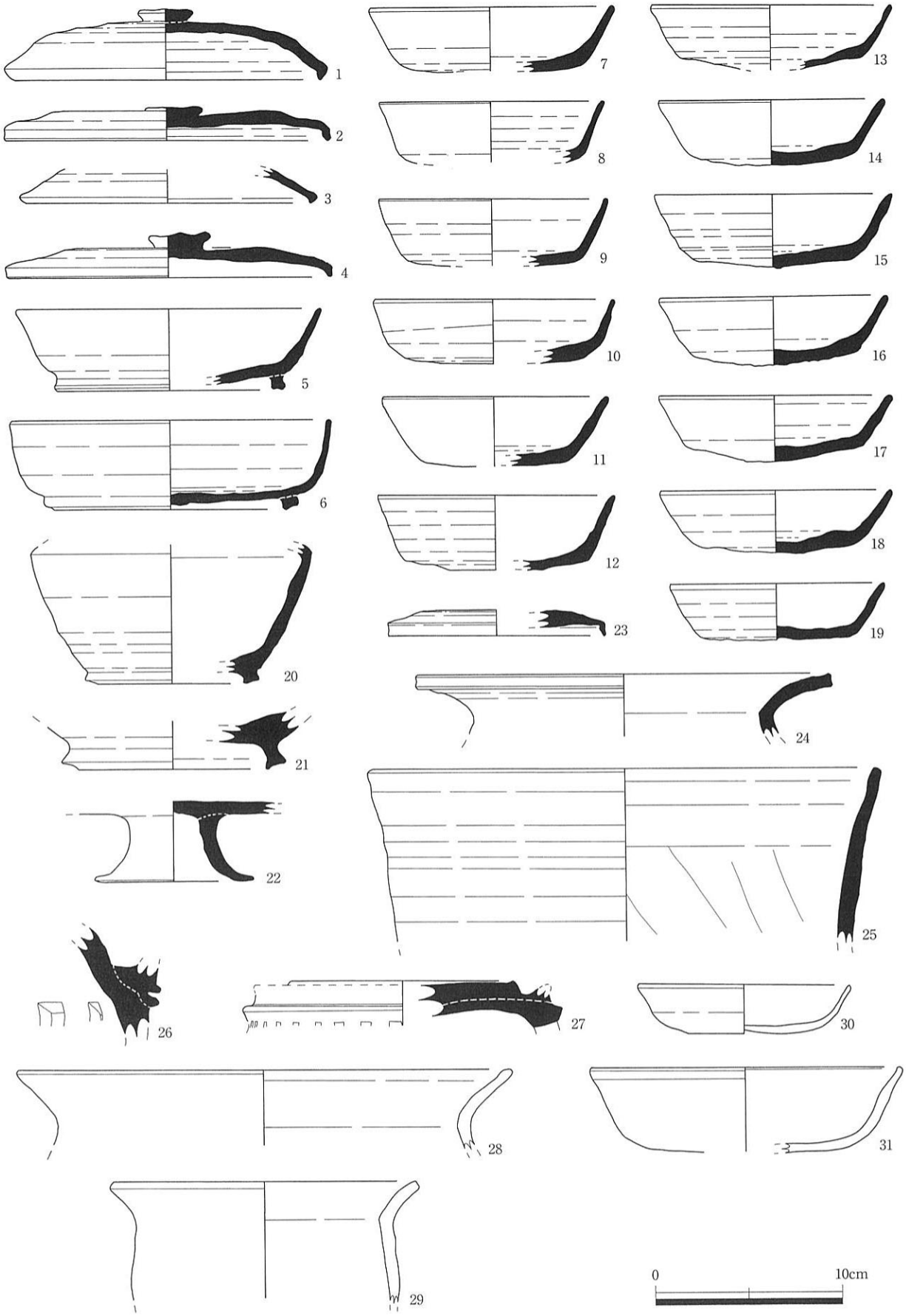


図23　C地区　盛土・包含層出土遺物（1）

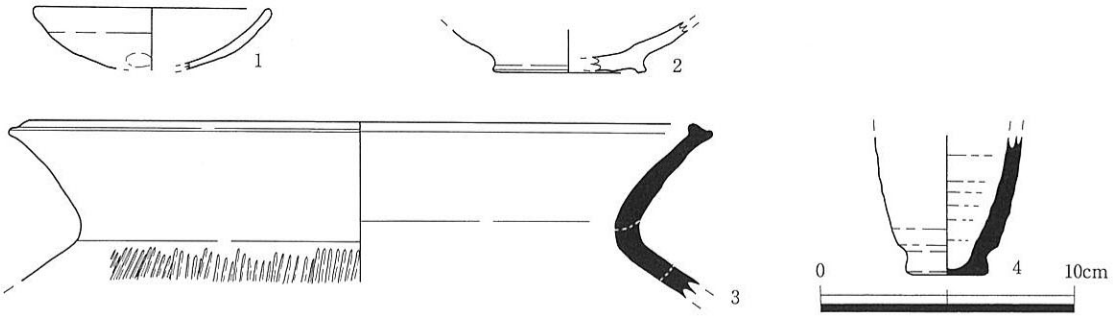


図24　C地区　盛土・包含層出土遺物(2)

円面硯(26・27)　26は圏台上部のみ残存し、方形の透かしをあける。残存状況がよくないため、口径が復元できなかった。27は硯面と圏台上部が残存し、圏台には透かしがあけられている。

土師器甕(28・29)　口縁部が大きいもの(28)と小さいもの(29)がある。28は頸部が緩やかに屈曲して開き、口縁端部をつまみあげるようにして面取りをする。磨耗のため調整は不明である。29も頸部が緩やかに屈曲する。全体にヨコナデを施す。

土師器坏A(30・31)　30は口縁部外面にやや強いヨコナデを施す。口縁部は器壁の磨耗が著しく、調整が不明であるが、胎土や器形がE地区の土坑1出土の坏A(図61-2)とよく似ており、同時期のものと考えられる。31は平らな底部で、口縁部が緩やかに立ち上がり、端部を丸くおさめる。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、口縁部内面にヨコナデを施す。

図24も盛土・包含層から出土した遺物である。須恵器甕A・壺M、黒色土器椀、瓦器椀がある。

瓦器椀(1)　口縁部外面にヨコナデを施し、底部に指圧痕が残る。高台はみとめられなかった。

黒色土器椀(2)　底部のみ残存した。内面のみ黒色化させるA類で、高台は低い。

須恵器甕A(3)　口縁部が外方にのび、口縁端部内外面はわずかにつまみ出す。体部外面には平行のタタキを施している。焼成が不十分なため、灰白色を呈している。

須恵器壺M(4)　体部は細長く、それより小さい平底の底部がつき、底部と体部の境はくびれがある。体部内外面は回転ナデを施し、底部外面に糸切り痕が見られる。

奈良時代の遺物

図25は落ち込み46から出土した須恵器坏である。

須恵器坏蓋(1～9)　内面にかえりがつくものと、口縁端部を垂下させたものがある。口径が13～14㎝前後のものと16㎝前後のものに分けられるが、器高は4㎝前後で一定である。1は平坦な頂部に宝珠つまみ、口縁部内面には断面三角形の短いかえりがつく。頂部外面は2分の1を回転ヘラケズリする。2は頂部が丸みを帯びており、外面の3分の2を回転ヘラケズリした後ナデ仕上げする。3は頂部が平坦で、端部を垂下させた後に回転ナデするため先が尖る。頂部外面4分の3に回転ヘラケズリし、内面は口縁部を除き一方向に回転ナデを施す。4～9は焼きひずみしたものも見られるが、いずれも頂部が平坦で、口縁端部を垂下させる。頂部外面は2分の1を回転ヘラケズリ後、ナデ仕上げする。8はピット425出土の破片と接合できた。

須恵器坏B(10～19)　器高は一定であるが、口径が13㎝、15㎝、16～18㎝の3種類に分けることが出来ると推察される。10・13・15・16は口縁部が外方に開き、高台は接地面を水平にしてつくものが多い。12～14・18は底部端につく。15は口縁のみの残存である。18は口縁部にやや強い回転ナデを施す。19は焼成が不十分なため、軟質で灰白色を呈する。

図25　C地区　落ち込み46出土遺物（1）

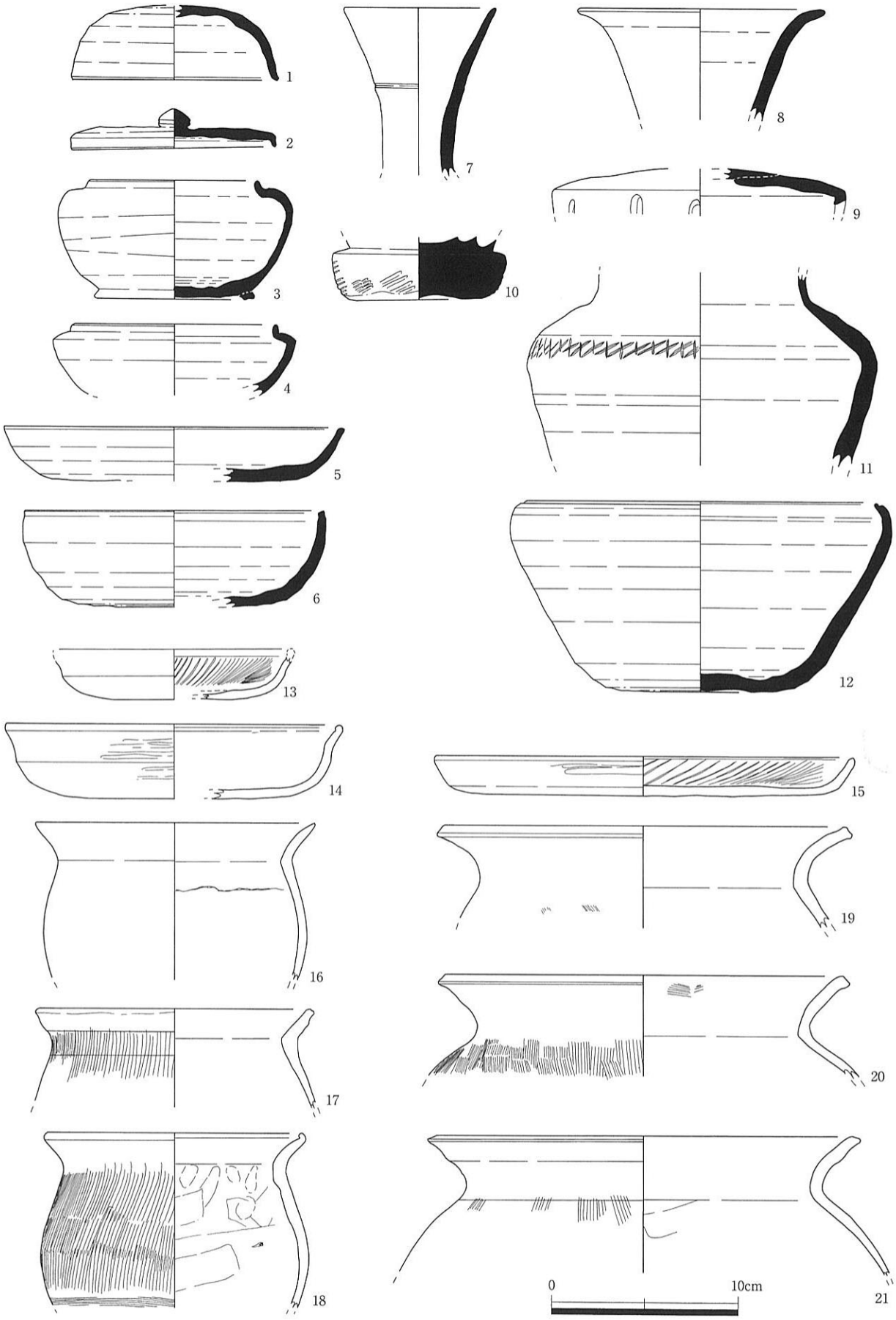


図26　C地区　落ち込み46出土遺物（2）

須恵器坏A(20～28)　いずれも口径が12～13㎝に収まる。20～26は底部が平底で、口縁部が外方に開く。全体に回転ナデを施し、底部に回転ヘラケズリの後、ナデ仕上げする。27～29は底部の中心付近がやや尖り、口縁部と体部の境が不明瞭である。口縁部に回転ナデを施し、底部はヘラ切り後の調整が粗いため粘土紐の接続痕が残るが、内面の回転ナデを丁寧に施してある。28は焼成が不十分なため、内外面とも明灰白色、断面が赤橙色を呈する。同地区溝58出土の破片と接合できた。

図26も落ち込み46から出土した遺物である。須恵器坏A・皿・壺E蓋・壺E・壺L・蓋・鉢B・こね鉢など多様な器種がそろう。土師器は坏A・皿・甕Aが出土した。

須恵器壺E蓋(1･2)　2種類ある。1は坏Gを上下逆にしたものである。頂部外面に回転ヘラケズリ、内面に回転ナデを施し、口縁部にやや強い回転ナデを施す。2は頂部が扁平で端部を垂下させる。

須恵器壺E(3･4)　3は肩部の張りが丸くわずかに盛り上がり、口縁部が短く、内傾している。底部は平らで、太い高台が、底部端にハの字状につくが、接地面が水平である。4は短い口縁部がつき、肩部に稜をもつ。最大径に比べて器高が低く、扁平なものと考えられる。

須恵器皿C(5)　広い底部から口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁部にやや強い回転ナデを施す。

須恵器椀(6)　底部は平底に近く、体部が内弯する。口縁端部はわずかに内傾し面をなす。底部外面に丁寧な回転ヘラケズリを施す。底部内面は回転ナデの後、ハケ目を施す。

須恵器壺L(7･8)　細長い頸部から、口縁部にかけての残存である。7は外面に一条の凹線をめぐらす。8は口縁部が大きく開く。

須恵器蓋(9)　体部外面に楕円形の透かしがある。天井部は粘土を継ぎ足して盛り上げており、つまみ状のものがつくと思われる。

須恵器こね鉢(10)　底部のみ出土した。底側部外面にタタキの痕跡がみられる。

須恵器壺(11)　肩部が緩やかに屈曲し、肩部には斜格子状のヘラ描き文がめぐらされる。口縁部は欠損しているが、断面が平滑であるため、欠損後に研磨した可能性がある。

須恵器鉢B(12)　平底で体部は緩やかに立ちあがり、口縁部が内弯し、端部外面に段をもつ。底部から体部との境近くまで回転ヘラケズリを施す。

土師器坏A(13･14)　13は口縁端部が欠損しているが、口縁部外面にヨコナデし、端部を丸くおさめたと思われる。内面には斜放射暗文を施す。14は口縁端部が内側に丸くおさめられ、器面が剥離のため調整が不明瞭であるが、口縁部外面に横方向のヘラミガキ、底部外面にヘラケズリが認められた。

土師器皿(15)　口縁部を丸くおさめないタイプである。器面は剥離のため調整が不明瞭であるが、口縁部外面に横方向のヘラミガキ、内面に斜放射暗文を施す。

土師器甕A(16～21)　法量によって2タイプに分類できる。16～18は口径が14～15㎝を測り、小型のタイプである。頸部が緩やかに屈曲し、丸い体部がつくと思われる。16は口縁端部を尖らせる。二次焼成を受け、磨耗が著しい。17は口縁端部を方形におさめ、口縁部外面にヨコナデを施す。体部外面に縦方向のハケ目を施す。外面全体には煤が付着している。内面は磨耗のため不明瞭ではあるが、横方向にケズリをしている。18は口縁端部を内側に折り曲げる。体部外面のハケ目は、上半部が縦方向に、下半部が横方向あるいは不定方向に施す。内面は、頸部に指圧痕がみられるが、体部にヘラケズリを施し、えぐられたような工具痕が残る。19～21は口径21～22㎝を測り、大型のタイプである。19・20は口縁部外端面にヨコナデをし、端部を方形におさめる。体部外面にハケ目を施す。21は口縁部内面にわずかにハケ目が残る。頸部から体部外面にかけて縦方向のハケ目を施した後、頸部外面に強くヨコナデを施す。

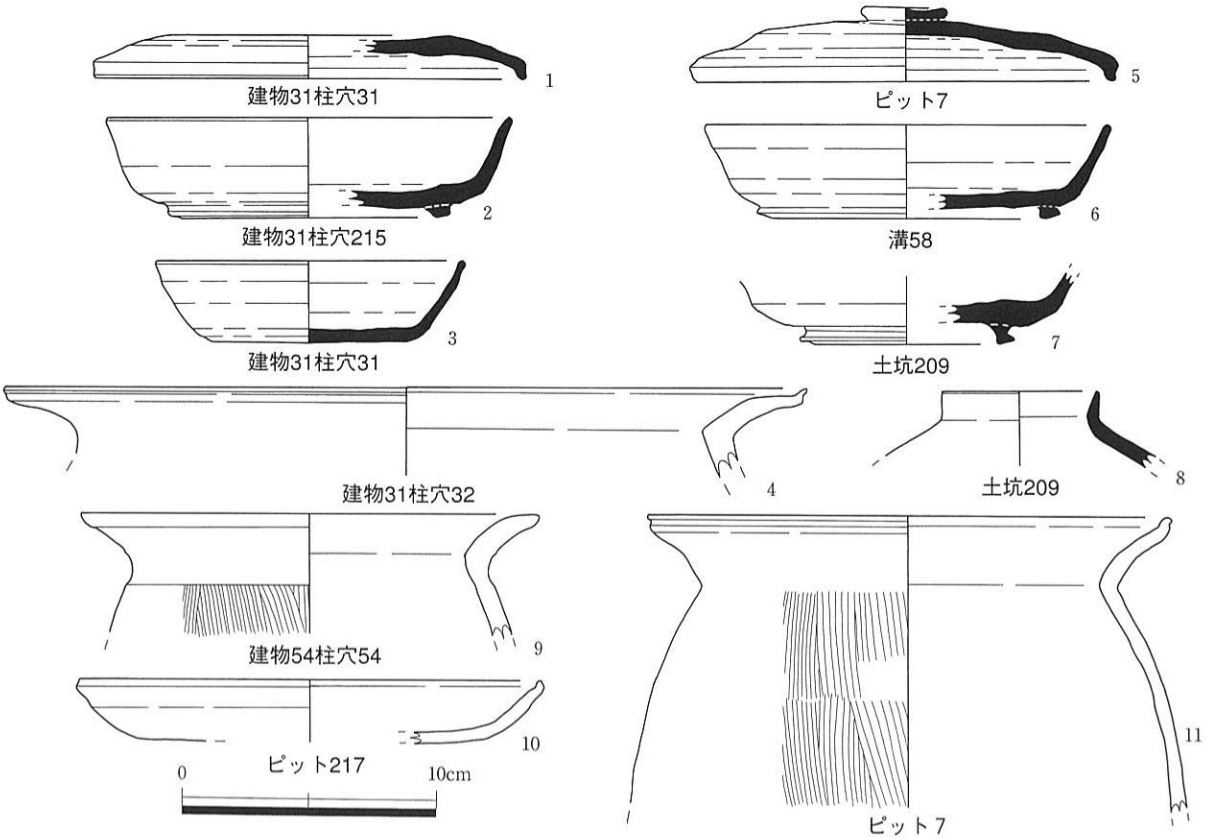


図27　C地区　遺構出土遺物(奈良時代)

体部内面はヘラケズリを施す。

図27はC地区の遺構から出土した遺物である。須恵器坏B蓋・坏B・坏A・壺E、土師器甕・杯Aがある。

須恵器坏B蓋(1･5)　いずれも頂部は平坦で、口縁端部を垂下させ、外端面に回転ナデを施す。頂部外面は4分の3を回転ヘラケズリする。

須恵器坏B(2･6･7)　いずれも口縁部は外方に立ち上がり、ふんばった高台がハの字状につく。6は底部外面の調整が粗い。7は底部のみの残存であるが、高台の側面に強い回転ナデを施しており、先端部が尖る点が他の坏Bの高台と異なり、また底部に比べ体部の器壁が薄いことから、壺の底部の可能性もある。

須恵器坏A(3)　平らな底部から口縁部が外方に立ち上がる。底部外面はヘラ切り後ナデ仕上げする。

土師器甕A(4･9･11)　4は口縁部が大きく外反する。口縁端部は上方につまみあげ、細く尖る。内外面とも磨耗が著しく、調整は不明瞭である。9は口縁部を「くの字」に屈曲させ、体部外面に縦方向のハケ目を施した後、頸部に強いヨコナデを施す。11は口縁部がやや斜め上方に開き、端部の外端面にヨコナデを施し方形におさめる。体部外面は縦方向のハケ目を施す。

須恵器壺E(8)　口頸部のみの出土である。口縁部は短く立ち上がり、端部を尖らせている。

土師器坏A(10)　平底で短い口縁部が緩やかに立ち上がる。口縁外面にヨコナデをし、端部を上方につまみ上げ、内面に沈線をめぐらす。

平安～鎌倉時代の遺物

図28は土坑41から出土した遺物である。大小の土師器皿、瓦器椀が出土した。

土師器皿(1～9)　土師皿は口径が小さいもの(口径8.5～9.5㎝)と、大きいもの(口径15～16㎝)がそれぞ

れ完形に近い状況で出土した。1～4は口縁部にヨコナデを施す。5は大きく開く口縁をもつ。回転台を利用して成形した皿で、底部に糸切り痕が残る。6・7は「ての字状口縁」の皿である。口縁部外面にヨコナデを施し、口縁端部をつまみ上げるようにおさめる。定型化したものよりも器壁が比較的厚い。8・9は口径が大きいタイプである。口縁部外面に一段ヨコナデを施し、さらに下部にも横方向に指オサエを行うため、2段の浅い凹みを呈する。

瓦器椀(10・11)　10は口縁部内面に沈線がめぐらされる楠葉型瓦器椀である。口径14.5㎝、器高5.8㎝を測り、断面逆台形の高台がつく。体部外面のヘラミガキはやや分割性を残しており、内面にも密なヘラミガキが施されている。11は和泉型瓦器椀である。口径15.4㎝、器高5.7㎝を測り、先端が外側に反っ

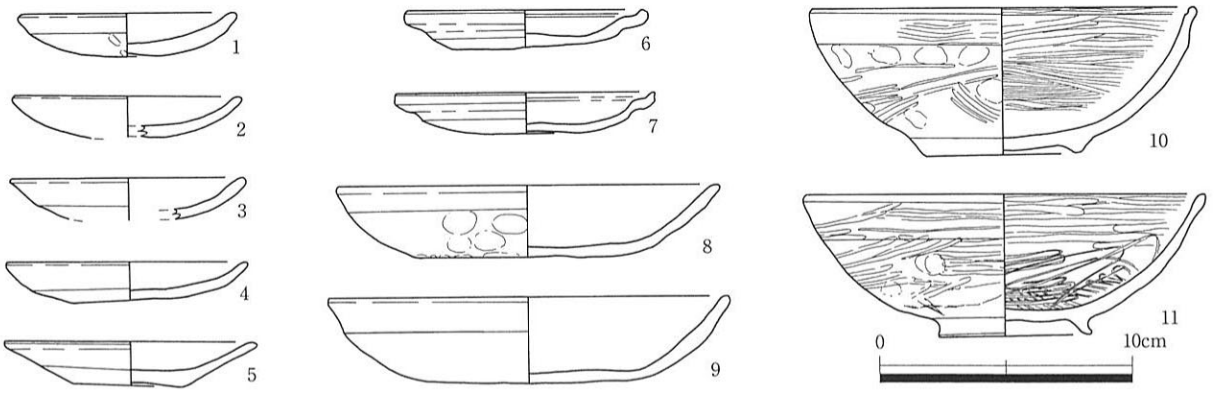


図28　C地区　土坑41出土遺物

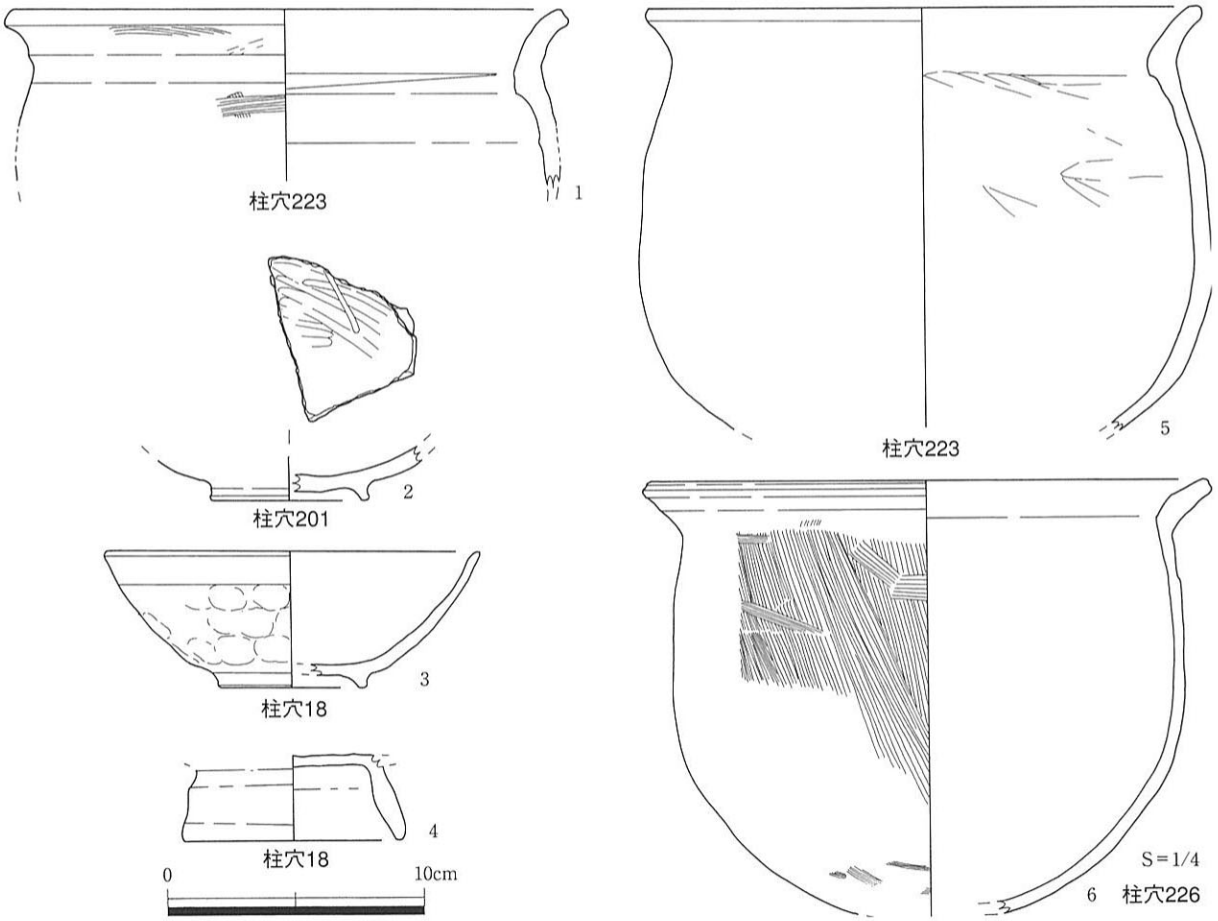


図29　C地区　建物18出土遺物

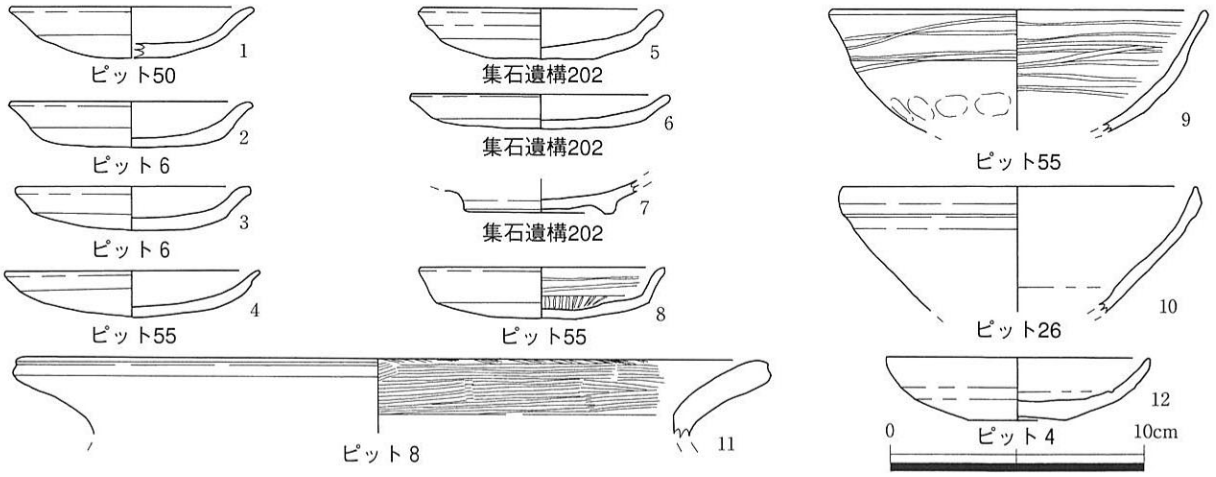


図30　C地区　遺構出土遺物(平安・鎌倉時代)

た高台がつく。体部外面のヘラミガキは分割性がみられ、内面にも密なヘラミガキを施し、見込み部はジグザグ状のヘラミガキのあと不規則な楕円形状のヘラミガキを施している。

図29は建物18の柱穴から出土した遺物である。土師器甕、瓦器椀、土師器台付き皿の台部が出土した。2の瓦器椀はピット上層から出土し、鉄製犂先(図78-1)と共伴する。また、1と5はピットの下層から破片を数枚重ねるようにして出土した。

土師器甕(1･5･6)いずれもやや外方に開く短い口縁をもち、体部の最大径は、口径とほぼ一致する。1は口縁部外端面にヨコナデを施して方形におさめる。口縁部と体部の外面にハケ目が認められることから、ハケ目の後ヨコナデを施している。体部内面はやや強いヨコナデを施す。5は口縁端部にヨコナデを施さない。体部内面は、強いヘラケズリによる、えぐられたような工具痕が残る。6は口縁端部を方形におさめ、口縁部内面にヨコナデをおこなう。体部外面はハケ目を施す。

瓦器椀(2･3)　2は底部のみの残存で、高台はハの字状に開く。見込み部に施されるヘラミガキも密である。3は和泉型瓦器椀である。口径14.5㎝、器高5.3㎝を測り、高台は断面逆台形で、しっかりしている。磨耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面に成型時の指圧痕が認められる。

土師器皿(4)　台付皿で、台部のみの出土である。黄橙色を呈し、胎土は直径1㎜以下の細砂を多く含んでおり粗い。

図30は土坑41、建物18以外の遺構から出土した遺物である。土師器皿・甕、瓦器椀・皿、白磁碗・皿が出土した。

土師器皿(1～6)　1～6は口径9.5～10.0㎝を測る。口縁部にヨコナデを施し、外方に開く。

瓦器椀(7･9)　7は底部のみの残存である。断面逆台形の高台がつく。9は底部が欠損しているが、口径は15.2㎝を測る。口縁部外面上半に粗いヘラミガキを施し、体部下半には成型時の指圧痕が残る。体部内面には粗いヘラミガキを施すが、見込み部の調整については不明である。

瓦器皿(8)　口縁部外面にヨコナデを施し、外方に開く。口縁部内面には粗いヘラミガキをめぐらし、見込み部に平行線状のヘラミガキを施す。

白磁碗(10)　玉縁状口縁がつく。

土師器甕(11)　口縁部のみ残存する。口縁部は大きく外傾し、外端面にヨコナデをして断面を方形におさめる。口縁部内面には横方向のハケ目を施す。

白磁皿(12)　口縁端部が尖り、内面見込み部に段をもつ。

4. D地区

当地区は調査範囲の中央部に位置する。地区南西側と東半部が著しい削平を受けており、この場所では遺構がほとんど検出されなかった。包含層の残存する北側では、溝223を挟んで北側に明黄褐色で細～粗砂の中世包含層が、南側に黄褐色でシルト～粗砂の古代包含層が確認された。

遺構　当地区では特に西半部で、ピットを主体とした多くの遺構が検出された。これらの遺構は、奈良時代から鎌倉時代にかけてのものと考えられるが、奈良時代のものが中心となっている。

奈良時代の遺構

奈良時代と考えられる遺構は、地区中央から南西に多いが、南西隅は削平されて検出されない。ピット、土坑、溝、掘立柱建物、井戸などが検出された。

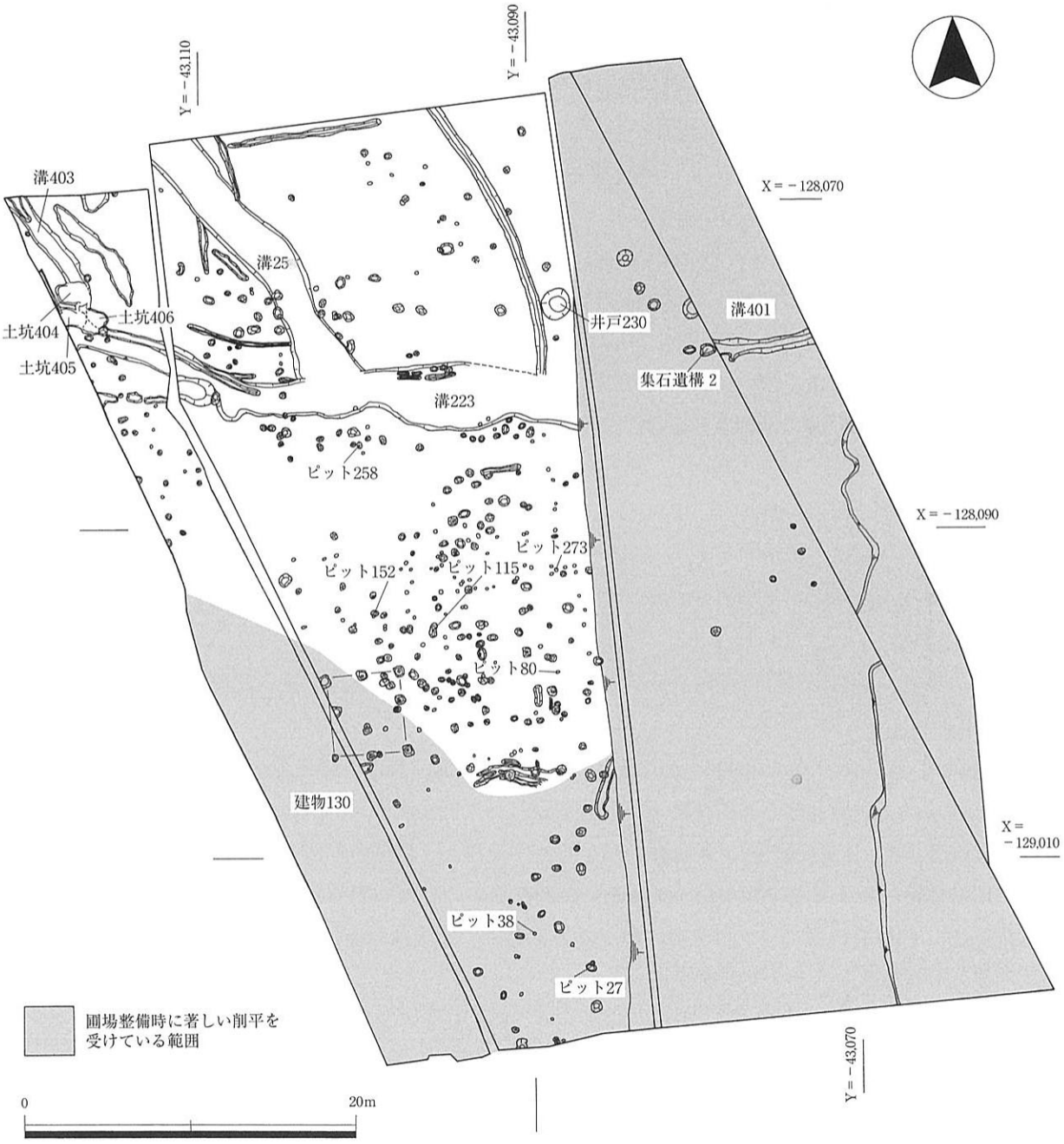
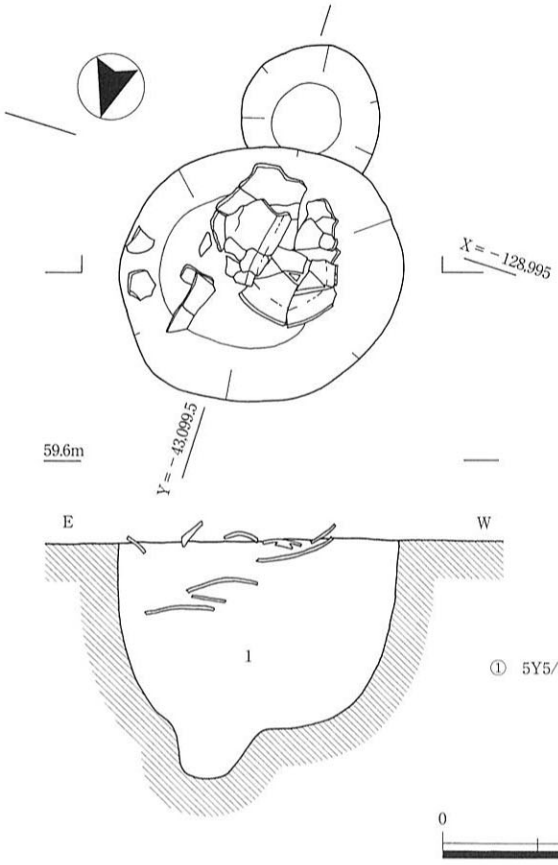


図31　D地区　全体平面図

ピットには柱穴と考えられるものも多くあるが、建物プランを復原できるものは少ない。遺物の出土するものは比較的少なく、あっても細片であることが多いが、地区西側で検出されたピット152(図32)からは掘方上層より須恵器坏蓋(図39- 1)などが出土した。

土坑404～406(写真30)は、地区北東で検出された。3基の土坑は形態が近似しているうえ、近接して検出されている。土坑405は隅丸長方形で、長軸2.0m、短軸1.3mを測るが、上面が中世以降の耕作により削平されたと考えられ、深さが0.3mほどである。埋土からはほとんど遺物の出土がなく、須恵器の細片がわずかに出土したのみであった。3基とも上面から溝403に切られており、埋土の状況も奈良時代のものと近似していることから、該期の遺構として判断した。

溝401(写真32)は、地区東側で検出された。幅0.9m、深さ0.2mを測る。西側で小溝が南側に分岐する。



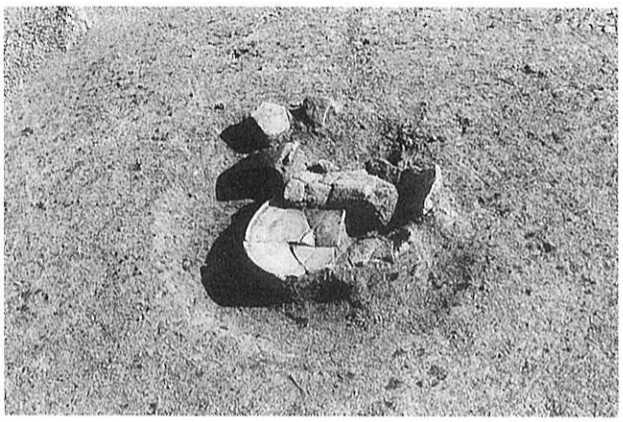


写真28 ピット152出土状況(西から)

図32 D地区 ピット152 平・断面図

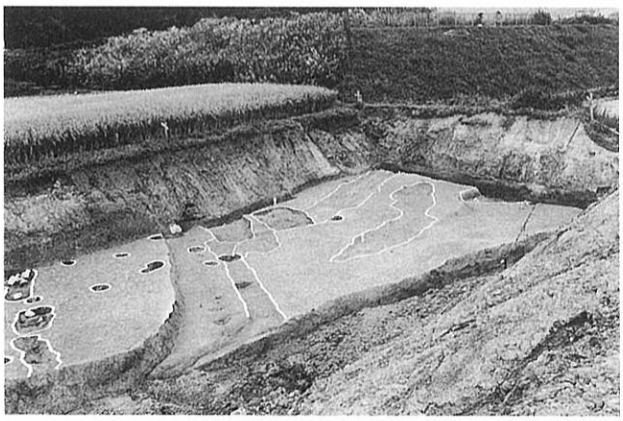


写真29 北西部遺構状況(東から)

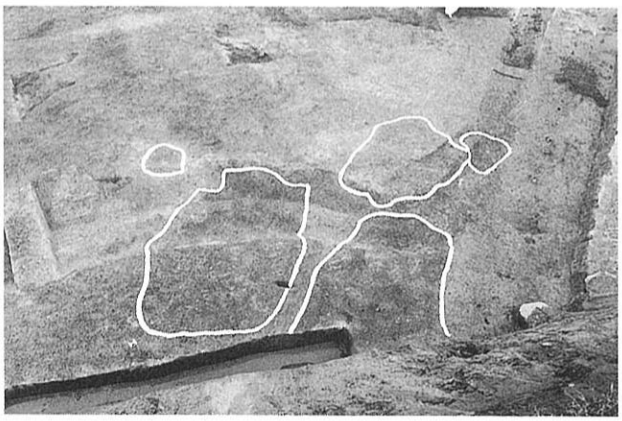


写真30 土坑404～406検出状況(西から)

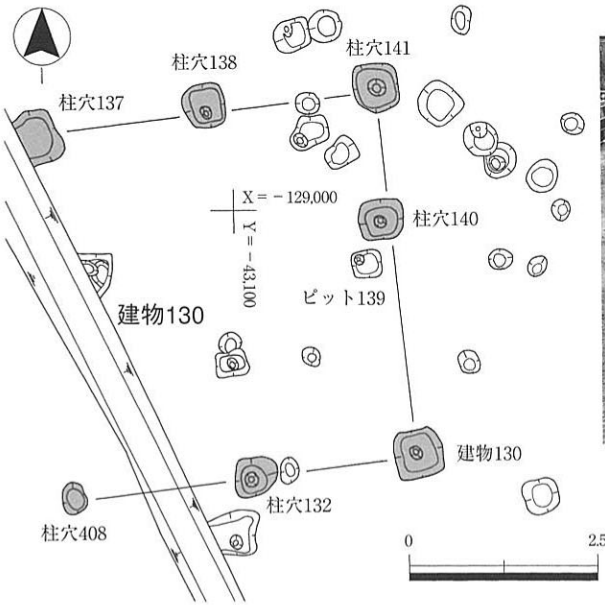


図33　D地区　建物130　平面図

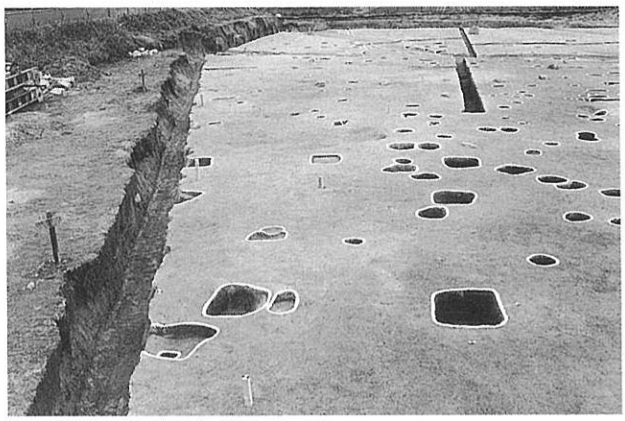


写真31　建物130(南から)

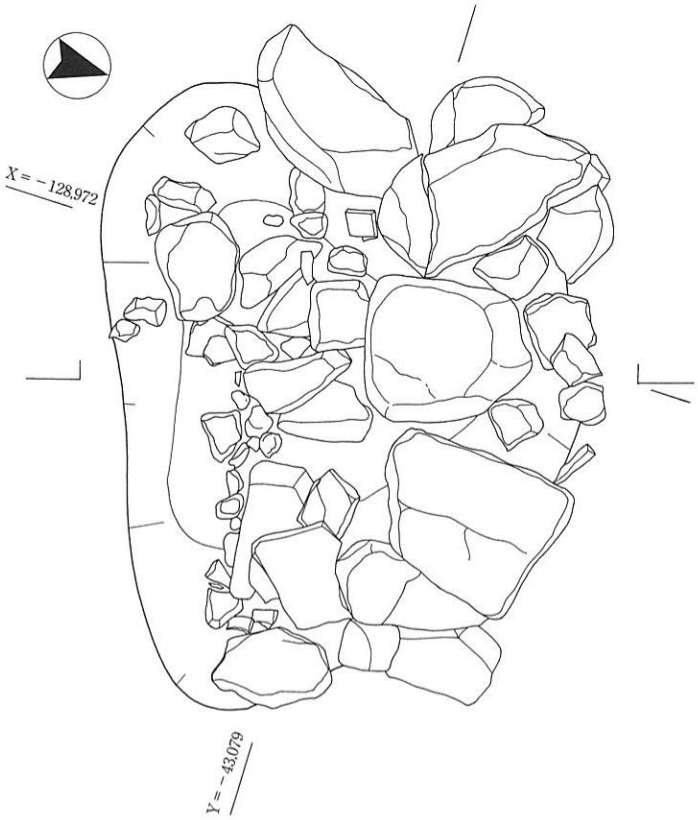
写真32　溝401(西から)

写真33　井戸230断面状況(南から)

埋土は人為的な埋め戻し土であったが、下層には自然堆積と考えられる粗い砂層が部分的に見られ、機能時に堆積したものと考えられる。砂層中からは須恵器片が多く出土したが図化できなかった。

建物130(図33)は、地区東側で検出された。建物西側ほど強く削平されており、西側の柱穴は明確に確認できなかった。そのため、西側に建物規模が拡大する可能性を残しているが、確認された規模は2間×2間であり、柱間が2.2m、掘方は隅丸方形で深さ約0.3mを測る。柱痕跡は灰黄褐色埋土として確認され、径15～20cm程度である。なお、建物東辺を構成する柱穴列については、中央の柱穴140が約0.3m北にずれている。それに対し、柱穴140に近接して検出されたピット139はやや建物プランの内側に寄っているものの、柱穴130・141の中間点に位置している。他に検出された該期の建物は、比較的正確な柱間を持っており、これほどずれるものはない。埋土も近似しているため、どちらが建物130東辺を構成する柱穴であるかは明確にできなかったが、埋土の状況・規模から見て柱穴140を可能性が高いものとして判断した。掘方埋土からはわずかに遺物が出土した。

井戸230(写真33)は、掘削時に掘方埋土の上層から鎌倉時代頃の遺物(図36)が多く出土し、該期の井戸であると考えられたが、出土したのは最上層のみで、その後の掘削時には下層から奈良時代の遺物(図37)のみがまとまって出土したため、奈良時代の井戸であると判断した。掘方中央部の埋土のみ拳大の



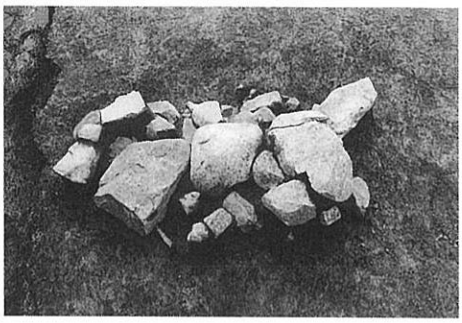


写真34　集石遺構２（北から）

写真35　集石遺構２（西から）

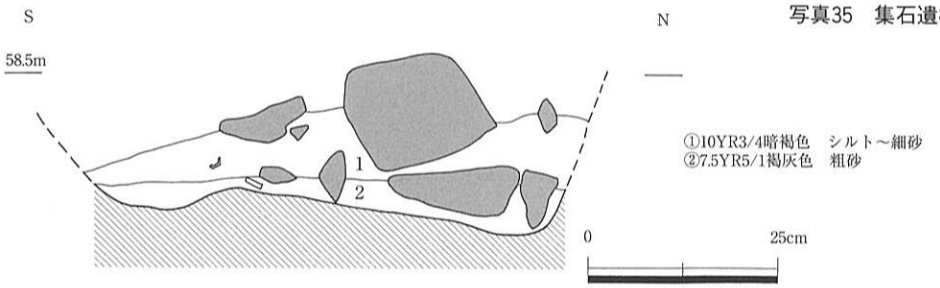


図34　Ｄ地区　集石遺構２　平・断面図

石が多量に入っており、廃棄時に井戸枠を抜き取り、石を入れて埋め戻したものと考えられる。奈良時代の遺物は、それらの石の間で多く出土したことから、廃棄時に埋められたものであろう。これらの遺物の中には鞴羽口や鉄滓（図38）が含まれており、付近で鍛冶を行っていた可能性がある。

平安時代の遺構

平安時代と考えられる遺構としては、確実なものがほとんどなく、地区東側で検出された集石遺構２（図34）があげられる。土坑を掘削して拳大から人頭大の河原石を入れたもので、上方ほど大きな石が入っている傾向がある。若干被熱痕跡らしきものが認められる石もあるが、面をそろえて置いているわけではない。石の間からは黒色土器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。なお、この遺構は奈良時代の溝401と重なる位置で検出されている。溝401が検出された東端部を除いたＤ地区東側の調査の際には、遺構面が著しく土壌化し変色していたため、大きく遺構面を掘り下げた状態で検出作業を行った。そのため、掘方の浅い溝401は検出できず、掘方の深い遺構だけが残存して検出された状態になってしまい、両者の切り合いなど上下関係を検証することはできなかった。出土した遺物から時期差があると判断したに過ぎない。遺構の性格については不明である。

鎌倉時代の遺構

鎌倉時代と考えられる遺構は、溝223付近で比較的多くの遺構が検出されているものの、明確にこの時期のものとわかる遺構がほとんどない。

奈良時代の井戸230直上からは、鎌倉時代と考えられる遺物が多く出土したことを先述したが、出土土層は砂質が強く、溝223から流出した砂とともに、奈良時代に廃棄された井戸の窪みに土器が流入したものである可能性も考えられる。

遺物　Ｄ地区は遺物の大半を奈良時代の須恵器・土師器が占めている。遺物の残存状況からみると、北西端の土壌化した包含層から完形に近い須恵器が出土している。このあたりはＣ地区建物31に近接しているため、同時期の遺物が良好に残っていたと思われる。平安時代以降の遺物は奈良時代に比べると多くはないが、井戸230直上包含層などで出土している。

盛土・包含層出土の遺物

図35は盛土・包含層から出土した遺物である。須恵器坏Ｂ蓋・坏Ａ・坏Ｂ・壺蓋・壺・甕・円面硯・土師器坏・高坏・壺が出土した。

須恵器坏Ｂ蓋(1～3)　１は丸みを帯びた頂部に、擬宝珠つまみがつく。口縁部内面に短いかえりがつく。かえりは口縁端部より高い位置にある。頂部外面は２分の１を回転ヘラケズリする。２は頂部が平坦で擬宝珠つまみがつく。口縁端部は垂下し外端面に回転ナデを施す。頂部外面２分の１に回転ヘラケ

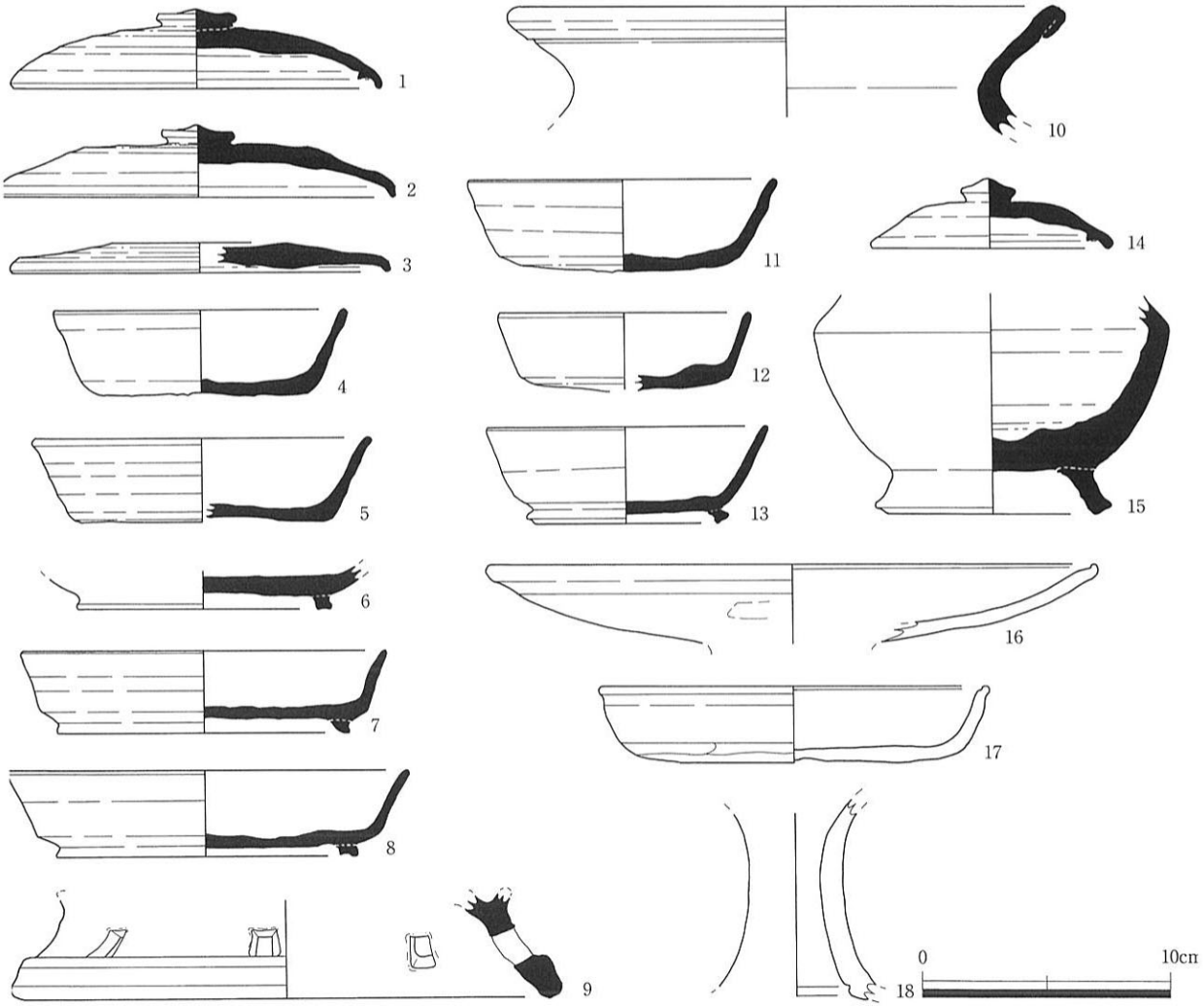


図35　Ｄ地区　盛土・包含層出土遺物

ズリを施す。3は平坦な頂部で、口縁端部がやや外方に垂下する。

須恵器坏A(4･5･11･12)　4・5・12は口縁部が比較的まっすぐに立ち上がり、口縁部が外方に開く。11は口縁部が外方に立ち上がる。口縁部外面にやや強い回転ナデを施し、外方に開く。底部はヘラ切り後ナデ仕上げする。12は口縁端部を丸くおさめ、底部外面にヘラ切り後ナデ仕上げする。

須恵器坏B(6～8･13)　6～8は口径が大きく、扁平である。口縁部が外方に立ち上がり、ふんばった高台が底部端につく。8は高台が底部の内側寄りにつく。底部外面は回転ヘラケズリの後、丁寧にナデ仕上げする。13は口縁が外方に立ち上がり、高台がハの字状につき、接地面が外傾する。

須恵器甕(10)　口縁部のみ残存している。口縁部は折り返す。

須恵器壺蓋(14)　丸みを帯びた頂部に、宝珠つまみがつく。口縁部内面に短いかえりがつく。

須恵器壺(15)　肩部に稜をもつ。底部は平底で高い高台がつき、接地面が外傾する。

円面硯(9)　圏台のみ残存している。透かしの間隔から、8方向に透かしがあったと推察される。

土師器高坏(16)　坏部のみ残存する。口縁部内面に沈線をめぐらすが、調整は磨耗のため不明瞭である。

土師器坏A(17)　平底で、口縁端部内側に沈線をめぐらす。底部外面は横方向にナデを施す。

土師器壺(18)　頸部のみの残存で、ロクロ水挽き成形を行っている。頸部内面に段をつけて体部と接合していたことがわかる。淡黄色、軟質の胎土で、頸部内面にわずかな緑色の釉が付着しており、緑釉陶器の可能性も考えられた。

包含層出土の遺物

図36は井戸230直上の包含層中から出土した遺物である。須恵器坏B、土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜があり、鎌倉時代(13世紀)の遺物がまとまって出土した。いずれも磨耗が著しい。

瓦器椀(1～7)　和泉型瓦器椀である。1～6は、口径約14cm、器高約3.5cm を測る。口縁部に強いヨコナデを施し、断面三角形の高台がつく。体部外面のヘラミガキは見られず、成型時の指圧痕が残る。内面はヘラミガキを密に施すもの(1･3･6)と、やや粗いもの(2･4･5)がある。見込み部には平行線状のヘラミガキを施す。7は法量が非常に小さく、口縁部のヨコナデが強く、断面三角形の高台がつく。内面に

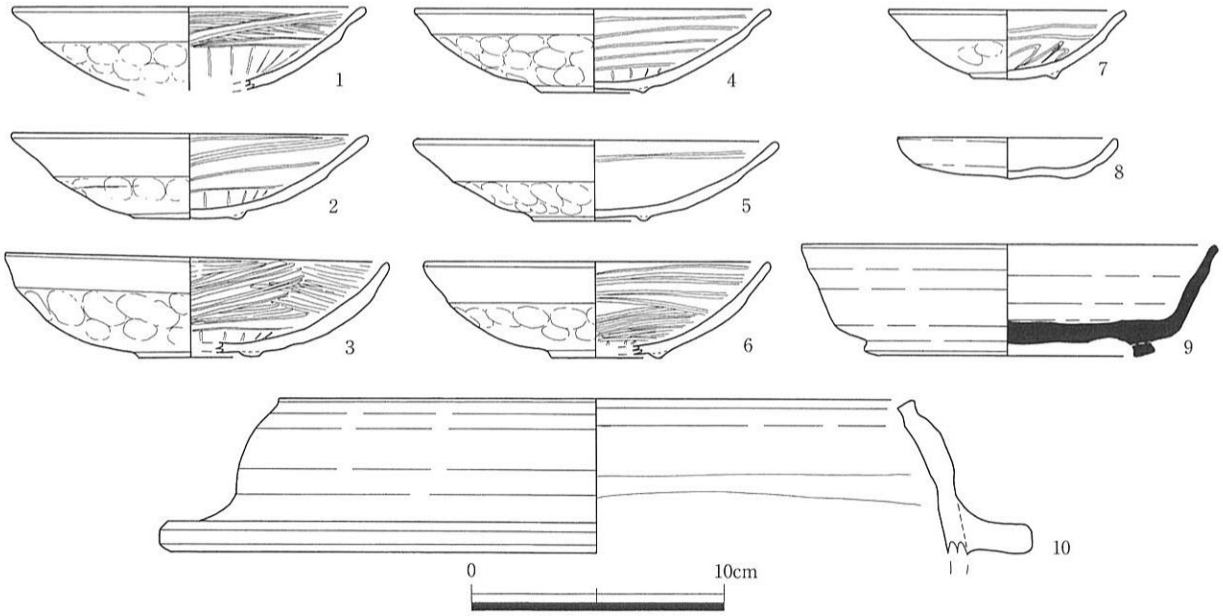


図36　D地区　包含層出土遺物

粗いヘラミガキを施し、外面に指圧痕が残る。これらの瓦器椀は法量・調整ともによく似ており、時期もほぼ一致して13世紀初め頃に比定できると推察される。

土師器皿(8) 口縁部外面にやや強いヨコナデを施し、端部はややつまみ上げるようにして面取りを行い、断面が三角形になる。底部外面には指圧痕が残る。

須恵器坏B(9) 口縁部が外方にまっすぐ立ち上がり、口縁端部にやや強い回転ナデを施す。底部端にふんばった高台がつく。底部外面の調整は粗く、高台をつけた時の段がそのまま残る。

瓦質羽釜(10) 瓦質の羽釜である。口縁部が内弯し、端部は断面を方形におさめ、端面は内傾する。鍔は断面方形で、水平につく。

奈良時代の遺物

図37は井戸230から出土した遺物である。須恵器坏B・椀・壺L・こね鉢、土師器皿・甕Aが出土した。また、羽口や鉄滓など、鍛冶関連遺物も出土している。

須恵器壺L(1～3) 1は口縁部が斜め外方に開く。2は頸部のみ残存している。外面に2条の沈線をめぐらし、外面に自然釉が付着している。3は口縁と頸部の境が顕著で、肩部に稜をもつ。口縁部内面と、体部外面全体に自然釉が付着している。

須恵器坏(4･5) 4は底部が欠損しているが、このように坏部が深い坏は当遺跡ではほとんど出土していない。5は坏Bで、口縁部が外方に立ち上がり、高台が底部端につき接地面は内傾する。

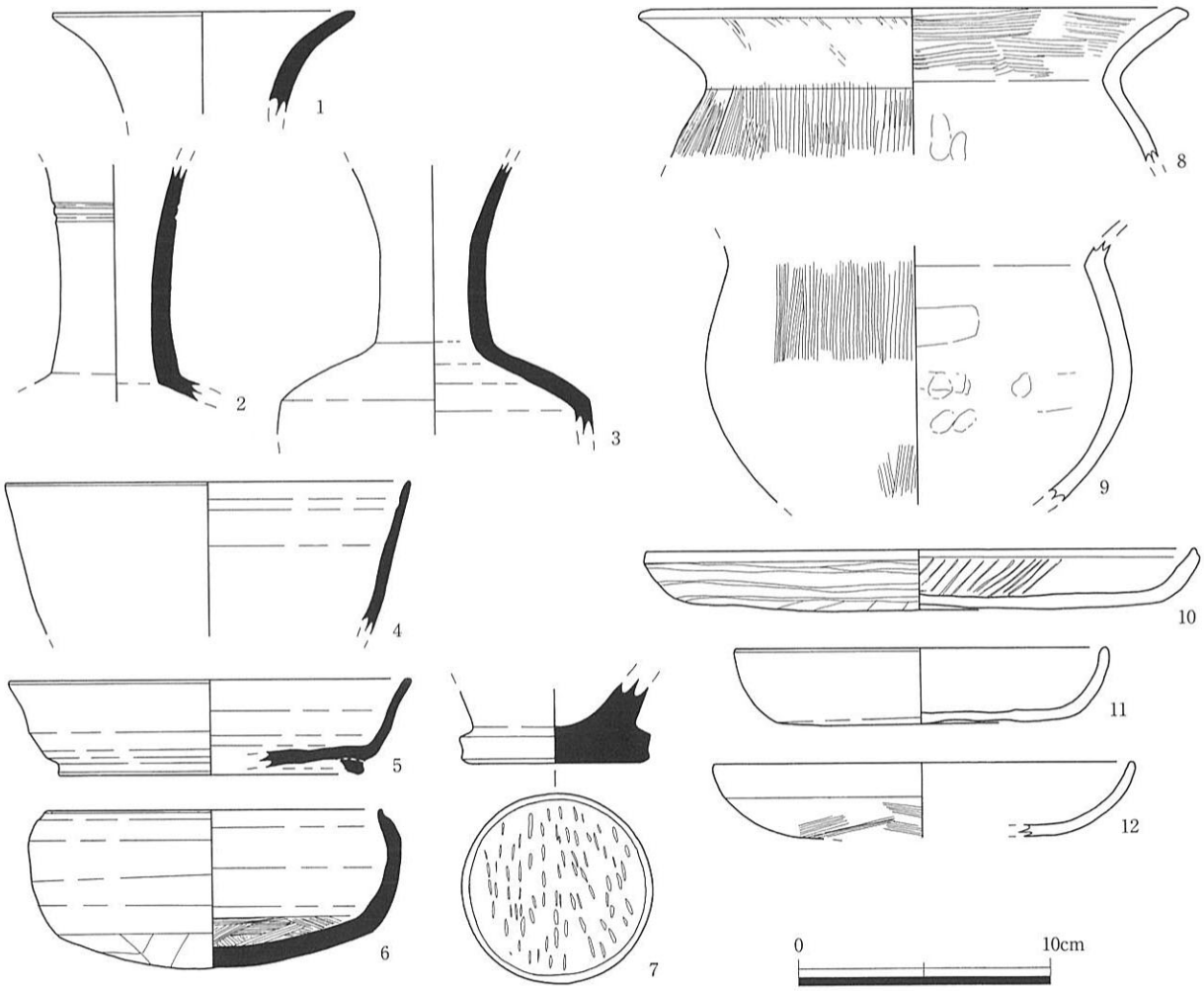


図37 D地区 井戸230出土遺物(1)

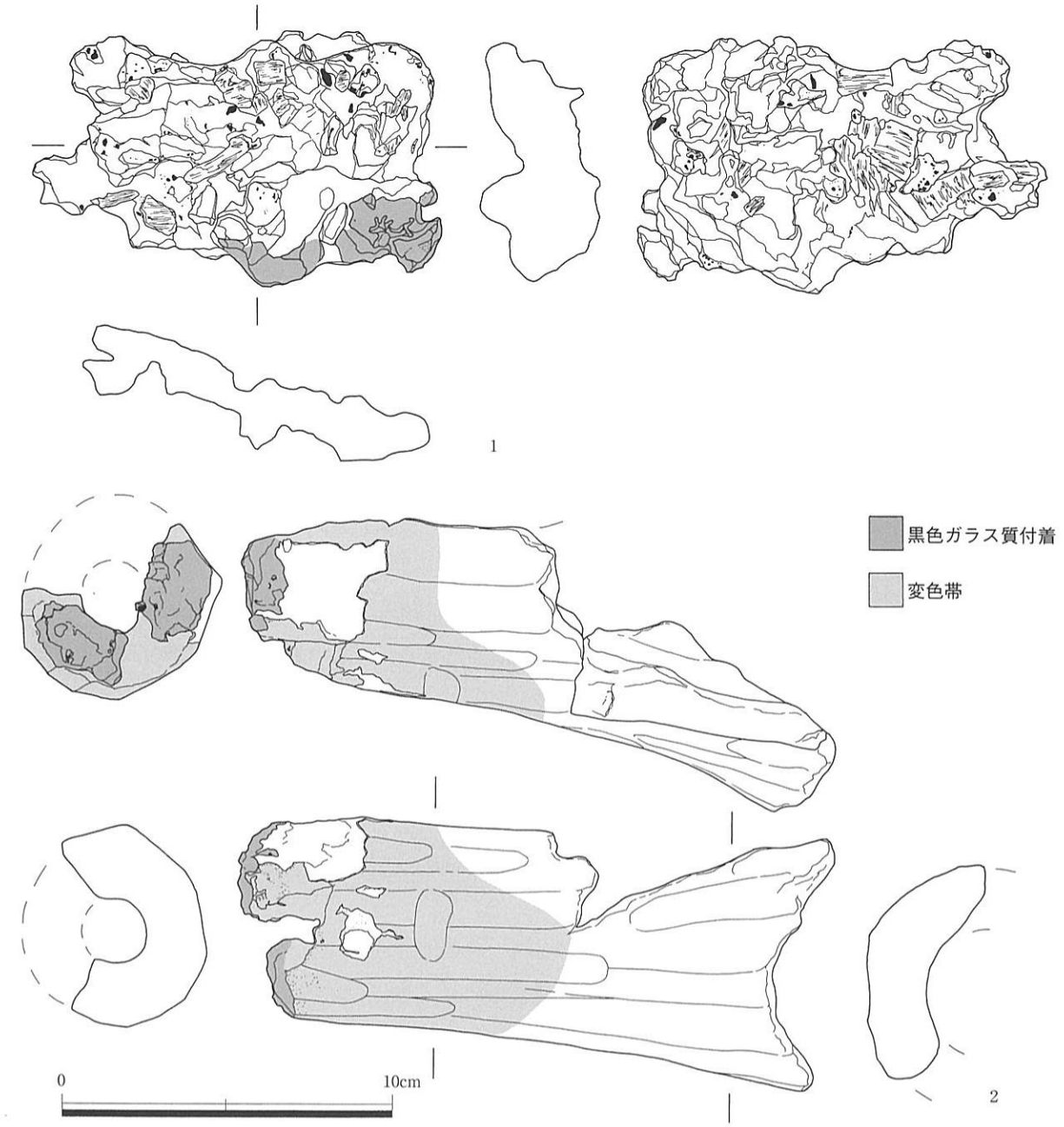


図38　D地区　井戸230出土遺物（2）

須恵器椀(6)　鉄鉢を模倣した椀である。丸底で、体部が内弯し、口縁端部を上方につまみあげる。体部内外面は回転ナデを施し、底部外面に不整方向のヘラケズリ、底部内面にはハケ目状ナデを施す。やや焼成不良で灰白色を呈する。

須恵器こね鉢(7)　底部外面にヘラ状工具による刺突文を施す。底側面は強い回転ナデを施す。

土師器甕A(8･9)　口縁部がくの字に屈曲し、丸い体部がつく。8は外面に縦方向のハケ目を施し、口縁部にヨコナデを施す。口縁部内面は横方向のハケ目、体部内面に指オサエを施す。9は口縁部が欠損している。体部外面に縦方向のハケ目、内面にヘラケズリと指オサエを施す。

土師器皿(10～12)　10は広い底部に短い口縁がつく。口縁端部は上方へつまみ上げている。口縁部外面はヨコナデ後、横方向の粗いヘラミガキを行い、底部外面にはヘラケズリを施す。口縁部内面には斜放射暗文、底部内面には螺旋暗文を施す。11は口縁部が緩やかに立ち上がる。内面とも摩耗が著しく、

調整は不明である。12も表面の摩耗が著しいが、体部外面下半に横方向のハケ目がみとめられた。

鍛冶関連遺物

図38は井戸230から出土した鍛冶関連の遺物で、これらは奈良時代の所産と推察される。

1は椀形滓である。長径約12.5㎝、短径約7.5㎝を測り、重さ322ｇである。鉄滓については、埋蔵文化財用特殊金属探知器（ＳＲ-100）で鉄滓に含まれる金属鉄の量「メタル度」と、リング状永久磁石を利用した磁着度を計測した。その結果、メタル度はほとんどなく、磁着度が3であった。表面右下がやや盛り上がり、黒色ガラス質が付着している部分は、羽口の接地面である。表面には1～4㎜の気泡が多く見られる。また、裏面には木炭片が付着しており、炉の床面に木炭層があり、その上部に鉄滓がたまった様子がうかがえる。

2は鞴の羽口である。長さ約18㎝、径は先端部で約6㎝、後端部で約8㎝、風孔径約2㎝を測り、先端部でハの字状に開く形態である。器壁外面は丁寧に面取りし、断面は多角形を呈する。後端部2～3㎝はガラス質滓が付着し、焼成のため還元化していることから、この部分まで炉に挿入していたことがわかる。また、酸化土砂の付着も見られる。赤色化の状況から設置角度は約25度である。また先端部の端面の一部に滓が流れた痕跡があり、この方向から、羽口の上下が復元できた。下側は上側よりも約9㎜短く、このことから焼成中に付着した滓を取り払って再度利用したことがうかがえる。

図39は上記以外の遺構から出土した遺物である。須恵器坏Ｂ蓋・坏Ｂ・坏Ｇ、土師器羽釜、皿、黒色土器椀が出土している。

須恵器坏Ｂ蓋(1)　平坦な頂部に平たい擬宝珠つまみがつき、口縁端部を垂下させる。頂部外面は回転ヘラケズリ後、ナデ仕上げを行う。

須恵器坏Ｂ(2･3)　2は口径が大きいタイプで体部下半にやや強いヨコナデを施し、底部と口縁部の境が明瞭である。底部端に低い高台がつく。3は口縁部を欠いているが広い底部をもつ。高台は底部端につき、口縁部との境が不明瞭である。

須恵器坏Ｇ(4)　口縁部はまっすぐ外方に立ち上がる。全体にナデ仕上げである。

土師器羽釜(5)　円筒型の体部に短い断面四角形の鍔がつく。胎土は直径1～4㎜の砂粒を多く含み、やや粗い。

土師器皿(6)　口縁端部は外反した後、上方につまみ上げる。器壁は比較的薄い。

黒色土器椀(7)　内面と口縁部外面を黒色化したＡ類椀である。半球形の体部を呈し断面三角形の高台がつく。外面はヘラミガキが見られるが、内面の調整が摩耗のため不明である。

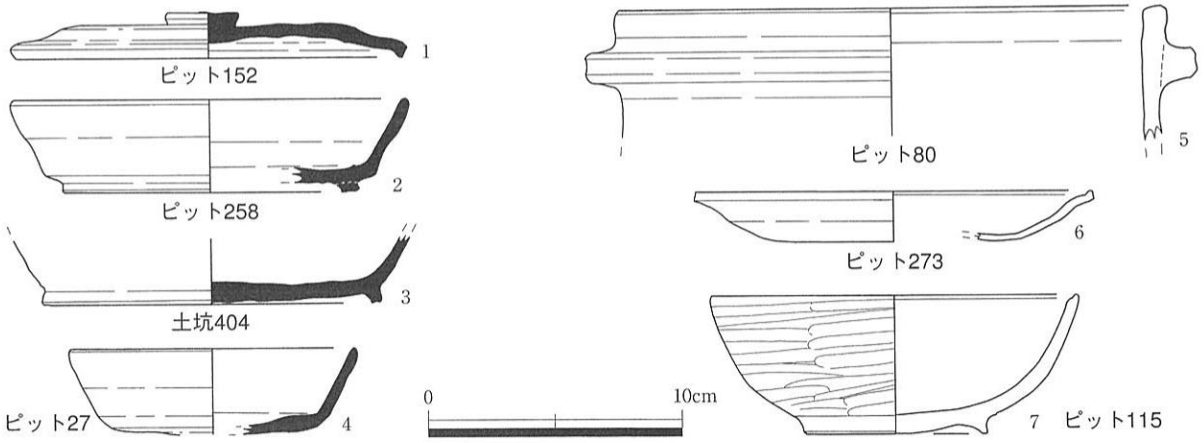


図39　Ｄ地区　遺構出土遺物（奈良・平安時代）

5. E地区

E地区は、地区中央付近を現代用水路で東西に分断されており、南北に分かれる。原地形は西から東に傾斜する緩斜面地として復原されるが、他地区と同様に圃場整備の削平が及んでおり、地形は大きく改変されている。特に地区中央を南北方向に伸びる削平は地山を大きく削っており、掘方の深い遺構を除いては検出されない。しかし、検出された遺構の分布状況や、周辺の圃場整備盛土に奈良・鎌倉時代を主体とした多くの遺物が混入していることから、削平された場所にも遺構が分布していた可能性は高いといえる。

削平の及ばなかった場所では、土坑や建物柱穴と考えられるピット群などが多数検出され、遺構の密度は全地区の中で最も高い。ピットを主体とした遺構構成から、当地区が居住地として活発に利用されたことがうかがわれる。出土遺物から見て、奈良時代から鎌倉時代まで継続的な利用が行われたようである。この背景には、流路249の存在があった可能性がある。この流路がいつから存在していたのかは不明であるが、西方向の丘陵からの谷筋にあたるため、奈良時代頃から存在していた可能性はある。D地区の溝223付近で見られたように、谷筋にあたるような溝や流路付近には多くの遺構が検出されることから、用水の便のいいところを居住地として選地している状況が考えられる。

遺構　遺構が最も集中して検出されたのは、地区南東側のピット群付近である。これらの遺構の中で、遺物の出土するものがそう多くはないが、埋土の状況から奈良時代と鎌倉時代以降のものを区別でき、奈良時代のものはピット群の北側に多く分布することがうかがわれる(図41内にメッシュで示した)。逆に鎌倉時代以降のものは、ピット群南側に分布する。この分布状況は包含層の残存状況と対応しており、ピット群北側付近には褐色で粘質の強い古代包含層が確認される。南側では、灰色で粘質の弱い中世包含層が確認されるが、古代包含層は確認されない。付近は流路249に向けて南方向に下る地形となっており、中世段階の耕作地段差が確認されることから、この時期に小規模な造成が行われた可能性が高い。古代包含層は、その際に失われたと考えることができる。

また、いくつかのピットにおいて柱根が出土した。土壌の滞水性が高いなどの条件がいい場所において残存したものと考えられる。他に遺物が出土していないため時期決定ができないものの、7基のピットの柱根について樹種鑑定を行った。その結果、コナラ亜属、ケヤキ、アカガシ亜属、スギが木材として使用されていることが分かった(表1)。アカガシ亜属とスギは各1点しか確認されなかったが、全体の鑑定点数が少ないうえ、数時期のものが混在している可能性が高い状況では、特に傾向のようなもの

写真36　ピット294柱根出土状況(東から)

写真37　ピット701柱根出土状況(北から)

図40　E地区　全体平面図

図41　E地区　南東側ピット群　平面図

表１　樹種鑑定結果一覧表（ピット）

遺構名称	ピット46	ピット300	ピット314	ピット331	ピット396	ピット417	ピット701
樹種名称	アカガシ亜属	ケヤキ	ケヤキ	スギ	コナラ亜属	コナラ亜属	コナラ亜属

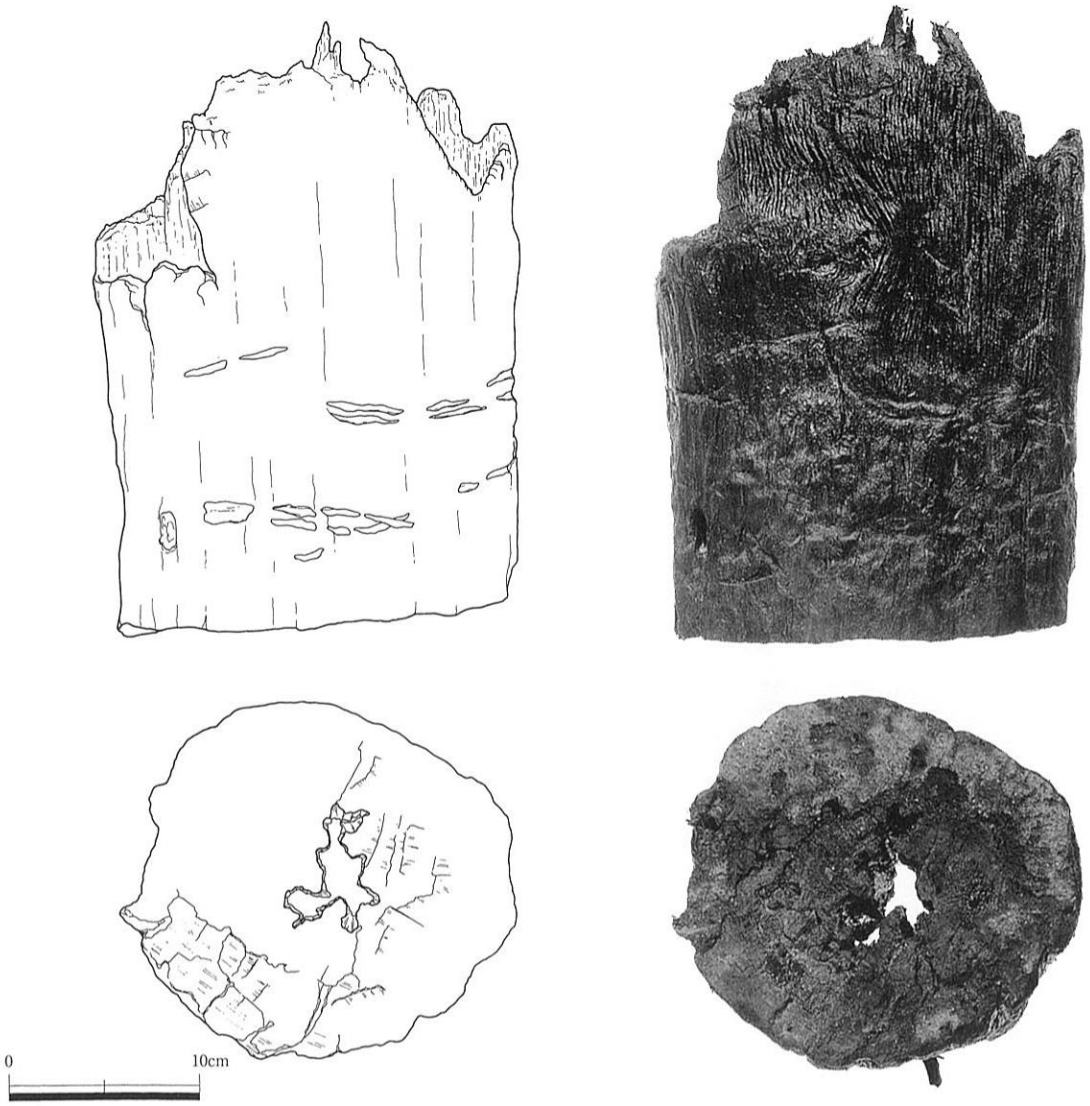


図42・写真38　Ｅ地区　ピット701出土柱根

は確認できなかった。こうしたピットのうち、地区北西で検出されたピット701には、径約20㎝ の柱根（図42）が残存していた。柱根の側面には、幅１㎝ ほどのくぼみが横方向に数条認められる。これは、柱を据える際に巻いた縄の圧痕と考えられる。樹種鑑定の結果、コナラ亜属と判断された。

奈良時代の遺構

奈良時代と考えられる遺構は、地区全域で検出されたが、南西側には少ない。ピット、土坑、溝、掘立柱建物、井戸などがある。

土坑１（図43）は、地区南東側のピット群北側で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸2.5m、短軸1.4mを測る。中央部がわずかではあるが擂鉢状にくぼみ、深さは0.4mを測る。埋土には焼土塊・炭化物を多く含むが、土坑自体には被熱痕跡が認められなかった。内部からは土器が多く出土し、完形のものも数点ある。これらの土器は主に①～③層から出土しており、当該層に含まれる焼土塊・炭化物の割合が下層の④～⑥層より多いことから考えても、土坑の埋め戻し過程の中で何らかの単位が存在する可

能性がある。おそらく下層を埋め戻した後、焼土塊を含んだ土と一緒に土器を廃棄・埋納したのであろう。なお土坑の性格として、土壙墓など埋葬施設であることを想定し、一部の埋土について洗浄精査を行ったが、骨片などは確認できなかった。

土坑501(写真40)は、地区北側で検出された。楕円形で長軸２ｍ、短軸１ｍ、深さ0.4ｍを測る。周辺は著しく削平されており、本来の遺構面がかなり上方になると考えられる。内部からは土師器の細片が出土したのみで、帰属時期は明確にできないが、埋土の状況が周辺の奈良時代と考えられる遺構に近似するため、該期の遺構として判断した。

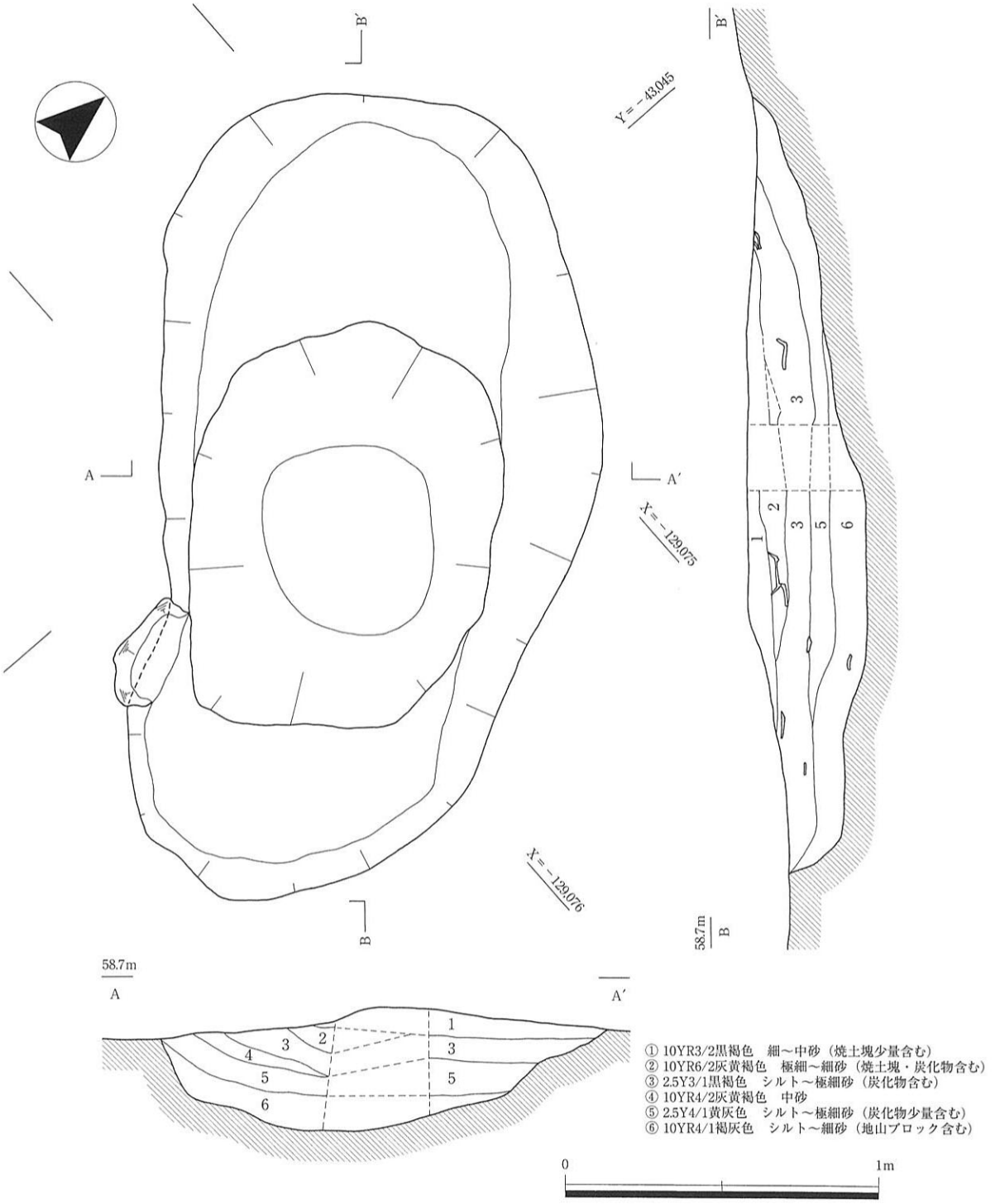


図43　Ｅ地区　土坑１　平・断面図

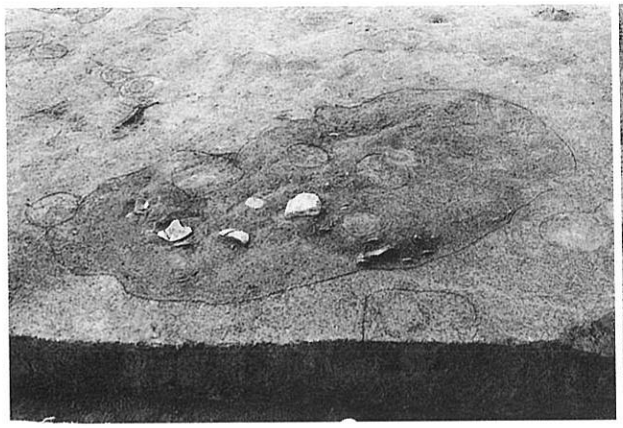


写真39　土坑１検出状況（東から）

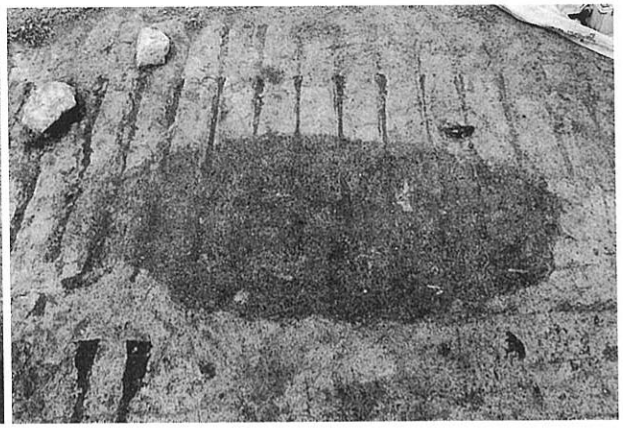


写真40　土坑501検出状況（南から）

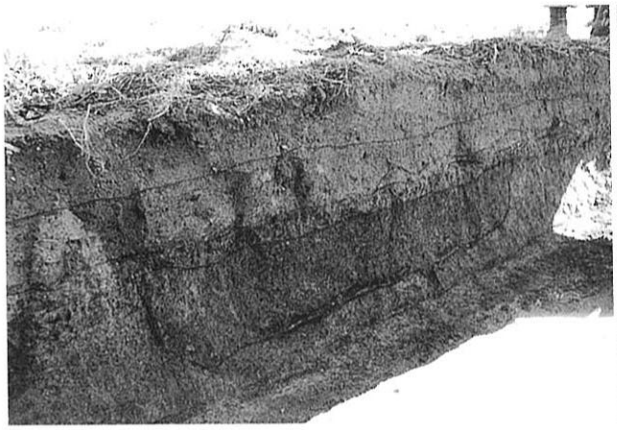


写真41　焼土坑550断面状況（西から）

写真42　焼土坑527半掘状況（南東から）

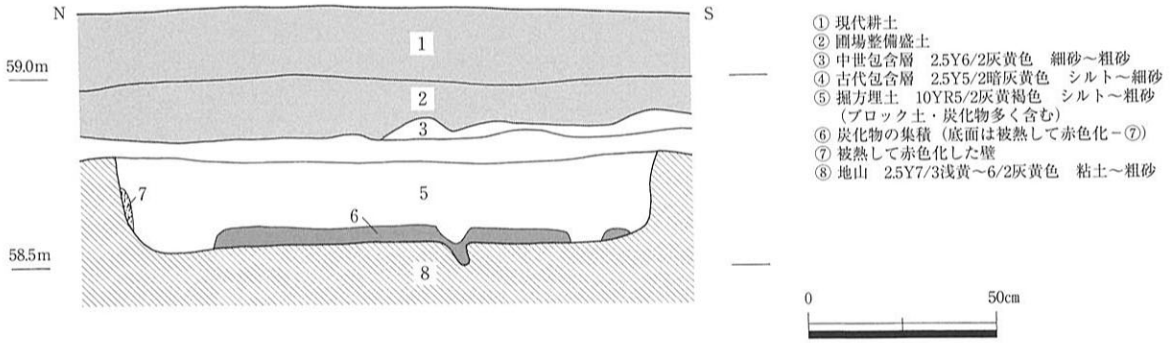


図44　Ｅ地区　焼土坑550　断面図

焼土坑550は、地区北東側で検出されたが、平面で確認できたのはごくわずかで、東側の大部分が調査区外に拡がるため、断面観察での調査を行った（図44）。掘方は④層の古代包含層下面からほぼ直に切り込んでいる。壁は被熱して赤色化し、底部には炭化物の集積が認められる。以上の点において、他地区で検出された焼土坑と同様の特徴を持っているといえるが、規模がやや大きい（確認できる長さ1.4m）、底面にも被熱痕跡が認められる、などの相違点もある。しかしながら、規模については平面形が不明であるため比較対象にならず、土坑内部で焼成行為を行っていることに違いがないことから、他地区の焼土坑と同様の性格を持つものとして捉えることができよう。時期についても、検出層位から奈良時代のものと考えられ、同時期のものである可能性が高い。

また、他にも地区北東において焼土坑527が検出された。こちらは壁面の被熱痕跡は残っていなかっ

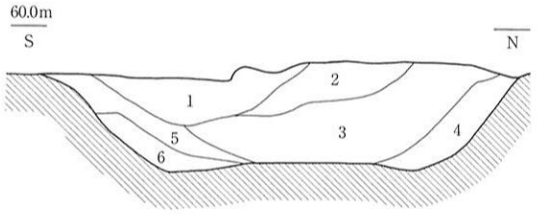
たが、掘方埋土には炭化物が多く認められた。

溝420は、地区北西側で検出された。幅1.3m、深さ0.3mの溝で、ほぼ方位を合わせて掘削されており、90°に屈曲する。流れの方向は定かではないが、屈曲点付近が最も深く、溝の西端と南端は徐々に浅くなる。さらに溝が伸びる可能性は高いが、削平により失われていると考えられる。図45のうち、①～⑤の各層にはラミナが認められ、自然堆積により埋没していったものと考えられる。溝の規模・平面形からは、区画溝としての性格を考えることができるが、周辺は削平が著しく関連性のありそうな遺構を確認できなかった。埋土からはあまり多くの遺物が出土しなかったが、土師器甕(図63- 8)を図化できた。

建物は3棟が確認され、いずれも方形掘方をもつ掘立柱建物である。

建物502(図46)は、地区北側で検出された。現況の畦の下になり、圃場整備の削平を受けなかった場所で建物西辺のみが残存していたもので、建物西側を除いて三方が削平されているため、建物の総規模は確認できない。あくまで柱穴列として捉え、柵や塀跡であると考えることもできるが、柱穴の掘方が一辺0.8mと調査区全てにおいて最も大きいため、建物として判断した。柱穴は南北に4間分並ぶが、北端の柱穴505は、削平によって大部分が失われていたため、南側の肩の一部しか検出できなかった。さらに、南端の柱穴506については、後世の木根痕跡と重なっており、あまり明瞭に検出されなかった。遺構規模や埋土の状況などもふまえて同一の柱穴列を構成するものと考えたが、これらは建物柱穴でない遺構である可能性もある。同一の柱穴列であると考えた場合には、南方向は削平され、北方向は地区外になるため、さらに柱穴列が伸びて4間以上の規模になる可能性もある。柱間は広く、約2.5mを測るが、南側の柱穴502と506の間のみ約3mとさらに広い。柱穴502・503の断面では柱痕跡が確認され、建物の廃棄に伴って、柱の抜き取りが行われた可能性を考えることができる。

建物512(図47)は、地区北東側で検出された。周辺は遺構面の土壌化が著しく、掘方埋土と近似していたため、検出が難しかった。確認された規模は2間分で、掘方が一辺約0.5mで深さ約0.2mを測る。建物東側が地区外に広がっており、総規模の確認はできなかったが、柱間寸法や柱穴掘方の規模が後述す



① 10YR5/2灰黄褐色　粗砂～シルト（ラミナがレンズ状に認められる）
② 10YR6/2灰黄褐色　粗砂混じりシルト～粘土（ラミナが認められる）
③ 10YR6/1褐灰色　シルト～粘土（ラミナがレンズ状に認められる）
④ 2.5Y7/3浅黄色　粗砂～シルト（ラミナが認められる）
⑤ 10YR6/1褐灰色　粗砂～シルト（ラミナが認められる）
⑥ ⑤と地山との混じり土

0　50cm

図45　E地区　溝420　断面図

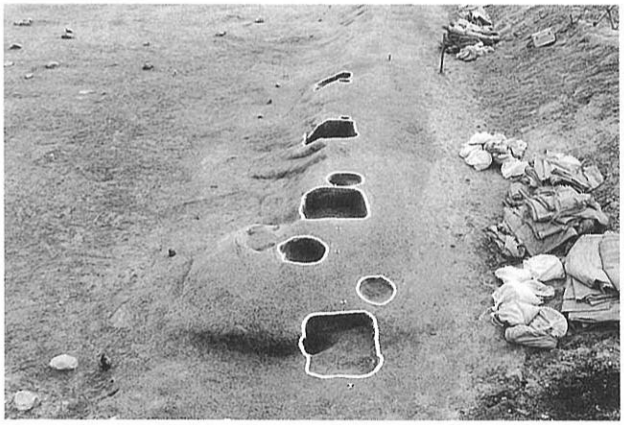


写真43　建物502(北から)

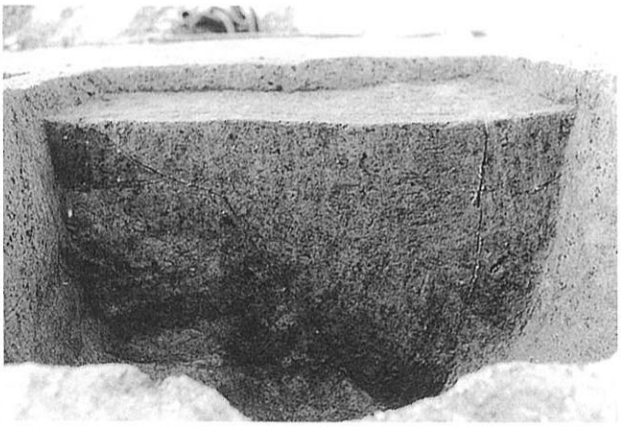


写真44　柱穴502断面状況(東から)

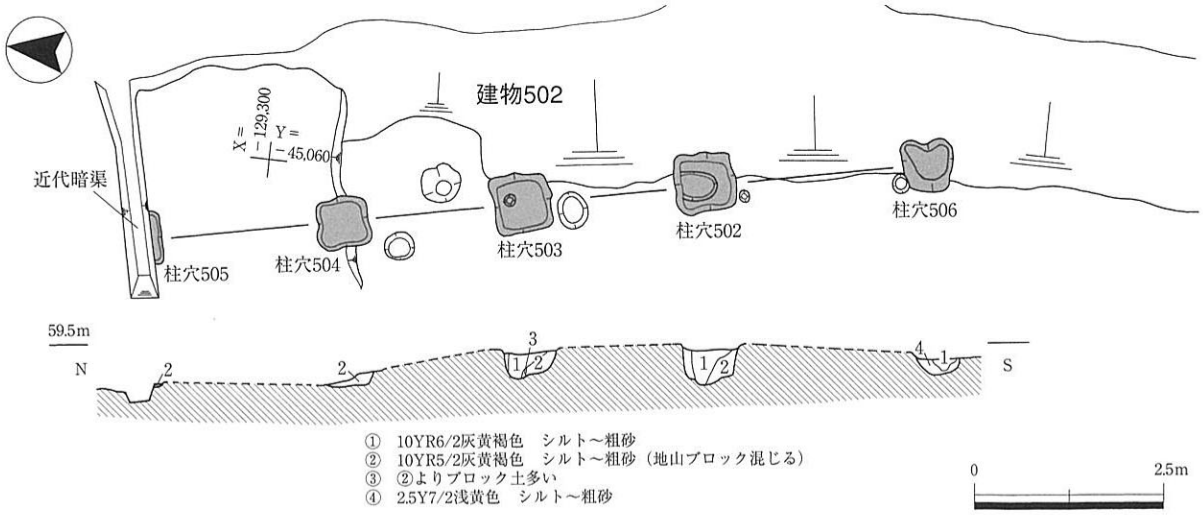


図46　E地区　建物502　平・断面図

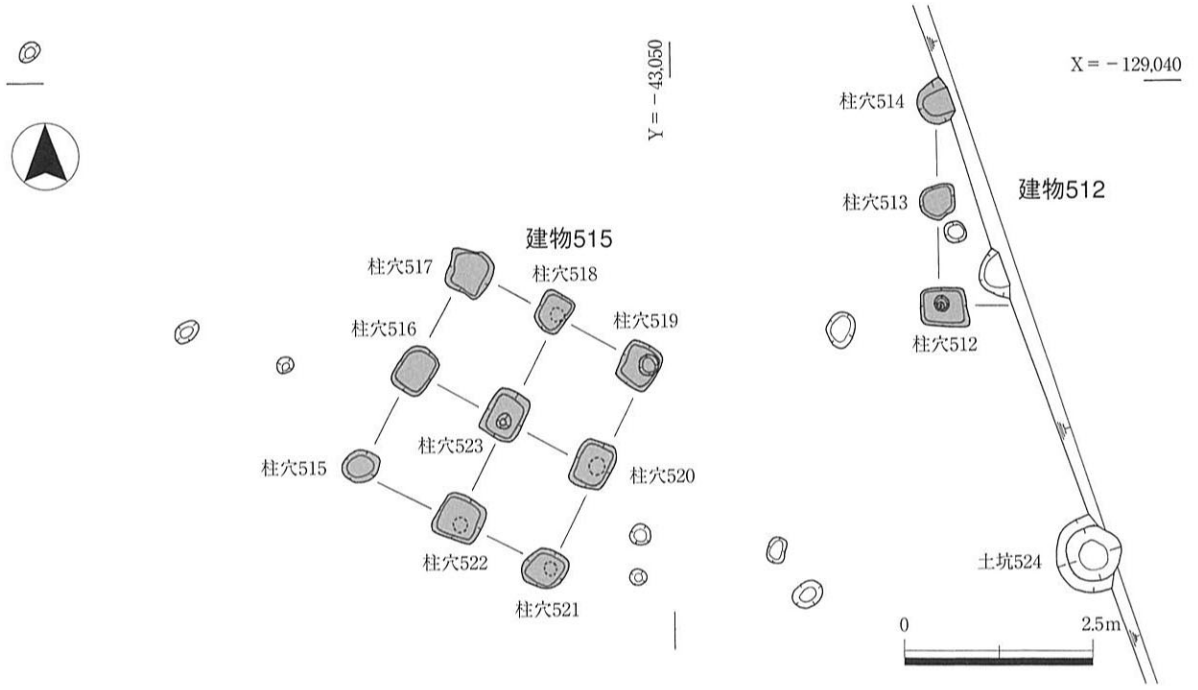


図47　E地区　建物512・515　平面図

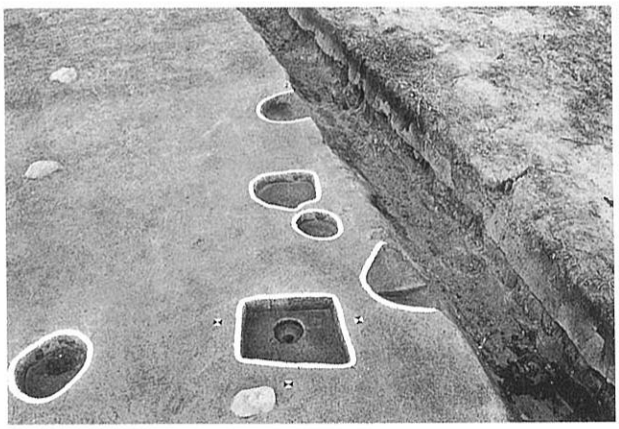


写真45　建物512(南から)

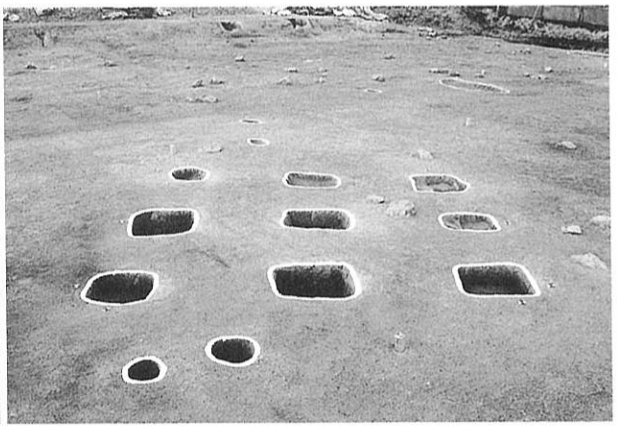


写真46　建物515(南東から)

る建物515に近似するため、同様の建物になる可能性がある。柱穴平面の検出の際に、0.2mの環状に鉄分が酸化して赤変している状況が確認され、柱痕跡であると考えられる。

建物515(図47)は、建物512の西側で検出された。2間×2間の掘立柱建物で、柱間は1.4～1.5mである。他の建物が、振れ巾15°以内でほぼ方位に沿った軸をもっているのに対し、建物502は東に約30°ふれる。これには周辺の構造物や地形的な制約が関係している可能性があるが、付近は削平が著しく、遺構が残っていない可能性があるうえ、原地形の復原もできない。

井戸4(図48)は、ピット群南側で検出された。方形木枠をもつ木組井戸である。木枠は一辺0.9mで上部は失われている。四隅にほぞ穴を開けた柱を据え、横木を渡して組んだ木枠の外側に側板を廻らしているもので、底には径3㎝程度の円礫を敷いている。樹種鑑定の結果、隅柱はコナラ亜属、横木・側板はツガ属と判断された。出土遺物は細片のみであるため、確実な時期決定はできなかったが、周辺遺構との関係などから奈良時代のものである可能性が高い。

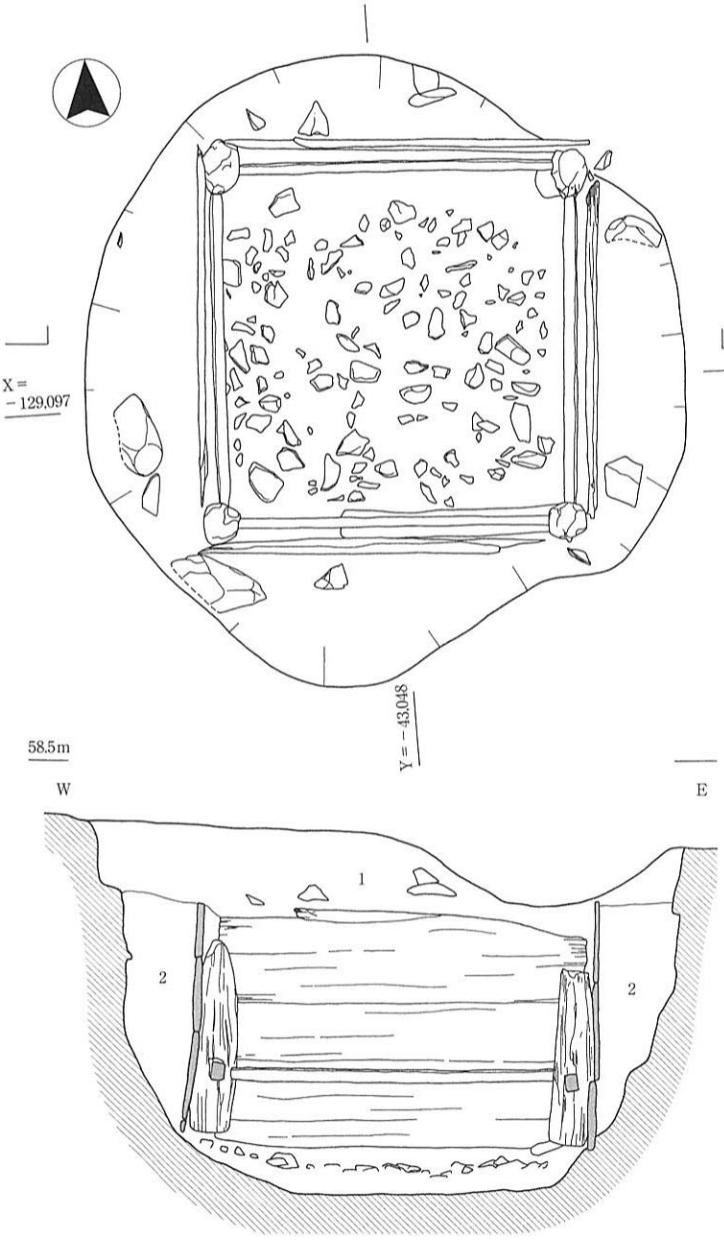


写真47　井戸4(北から)

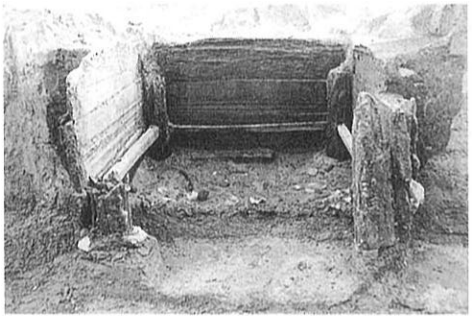


写真48　井戸4断割り状況(北から)

図48　E地区　井戸4　平・断面図

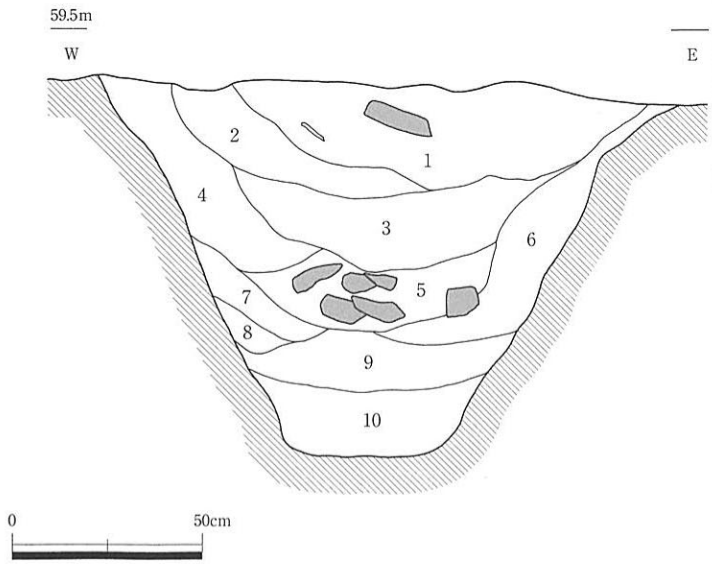


写真49　井戸460断面状況（南から）

① 2.5Y5/2暗灰黄色　粗砂～シルト（炭化物若干含む）
② 5Y7/1灰白色　粗砂～シルト
③ 5Y6/1灰色　シルト～粘土
④ 7.5Y6/1灰色　粗砂～シルト
⑤ 7.5Y6/1灰色　シルト～粘土（レキ多く含む）
⑥ 7.5Y7/2灰白色　シルト混じり粗砂
⑦ 7.5Y6/1灰色　細砂～粘土
⑧ ⑦に近似するが、やや粘土質多い。
⑨ 10Y6/1褐灰色　シルト～粘土（ラミナ顕著）
⑩ 10Y7/2灰白色　シルト～粘土

図49　E地区　井戸460　断面図

井戸460（図49）は、地区北端で検出された。井戸北側は地区外に広がっており、南側のみの調査となった。掘方内部に井戸枠などは確認されず、廃棄時に抜き取られた可能性が高いが、最下部が明確な取水層に達していなかったため、水溜め状の遺構であった可能性もある。⑨・⑩層が自然堆積土、それ以上は人為的な埋め戻し土と考えられる。特に⑤層から拳大の河原石とともに奈良時代のものと考えられる遺物が多く出土した。

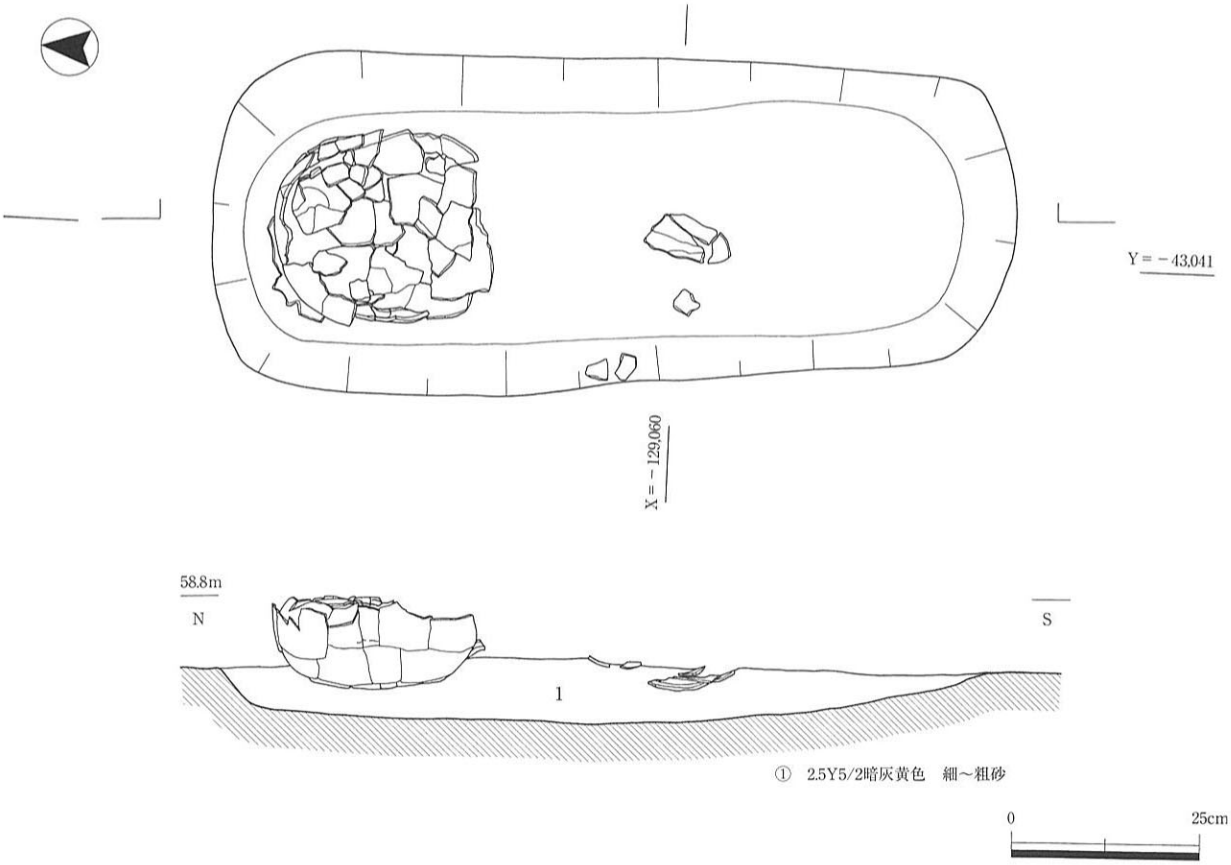


図50　E地区　土坑525　平・断面図

平安時代の遺構

平安時代と考えられる遺構は、比較的少なく分布も集中的である。ピット、土坑、掘立柱建物などがあり、平安時代前半と後半の二時期のものに分かれる。特に平安時代前半の遺構の分布は、地区東側で検出された建物529付近に限られており、地区外に遺構分布が広がる可能性が高い。

土坑525(図50)は、地区東側中央付近で検出された。隅丸長方形の土坑で長軸1.05m、短軸0.45m、深さ0.1mを測る。土坑北側では、土師器の甕が口縁部を南に向けて出土した。甕の体部上面は後世の耕作によって失われていたが、口縁部については意図的に打ち欠かれたものと考えられ、この土坑からは出土しなかった。土壙墓としての性格を想定し、甕内部の埋土の洗浄精査を行ったが、骨片などは出土しなかった。建物529に接していることから、何らかの関連があると考えられるが不明である。

建物529(図51)は、土坑525の東側で検出された。柱穴535は側溝掘削の際に上面を削平してしまい、明確に検出できなかった。柱穴からはほとんど遺物が出土しなかったが、柱穴534に接するピット528から平安時代前半頃の土師器坏(図64- 1)が出土し、埋土が近似することから、該期の建物であると考えた。

平安時代後半頃の遺構は、地区南東部のピット群の中にいくつか確認され、ピット208からは該期の遺物が出土した。ピット208は、ピット群南西側で検出され、円形で径0.3m、深さ0.45mを測る。中ほどまで掘削すると、平面形は方形となった。その平面形の変化点付近から2点の瓦器椀(図65-3・4)が出土した。上方のものは見込みを下に向け、下方のものは見込みを上に向けた状態で出土しており、合わせ口

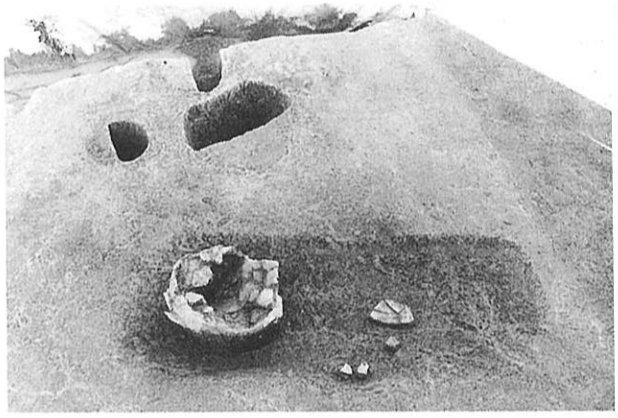


写真50　土坑525(西から)

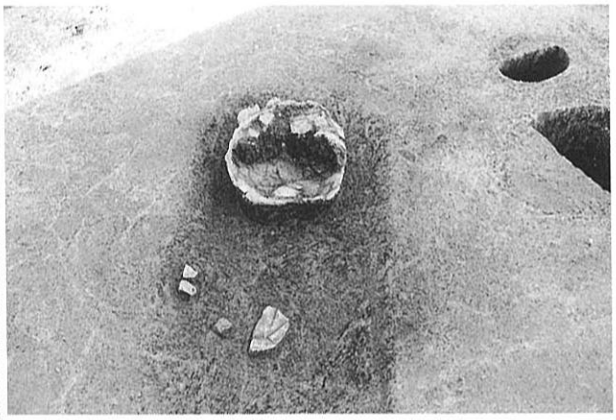
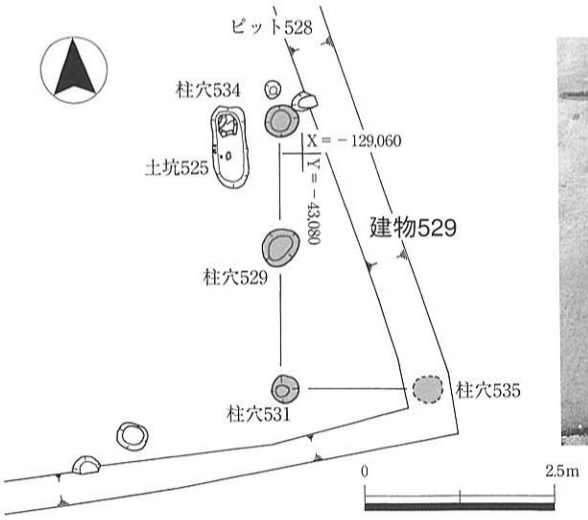


写真51　土坑525(南から)



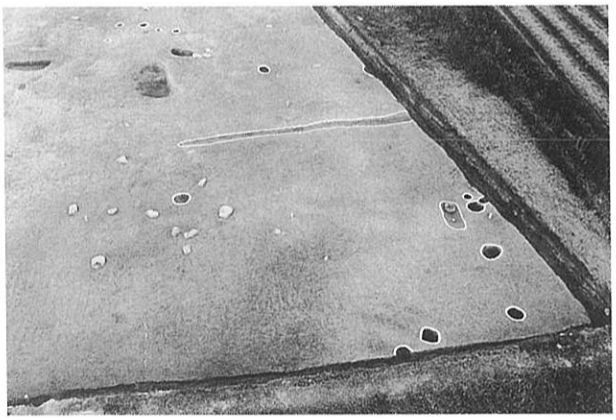
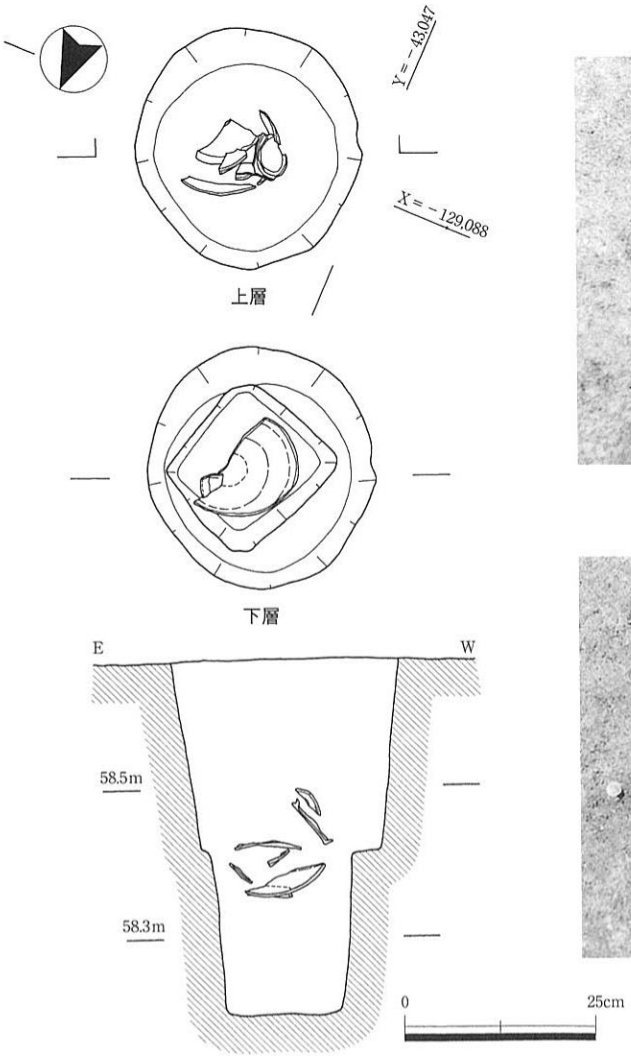


写真52　建物529(南から)

図51　E地区　建物529　平面図



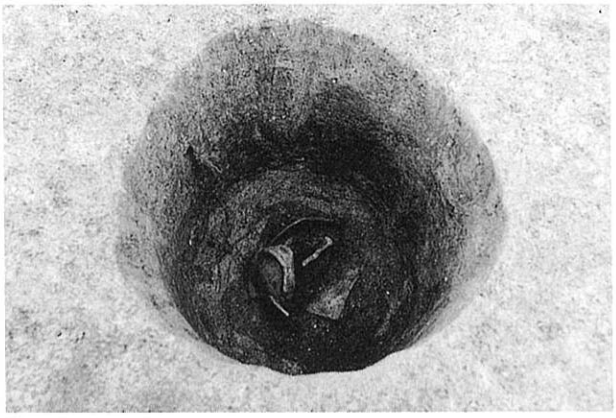


写真53　ピット208上層出土状況(南から)

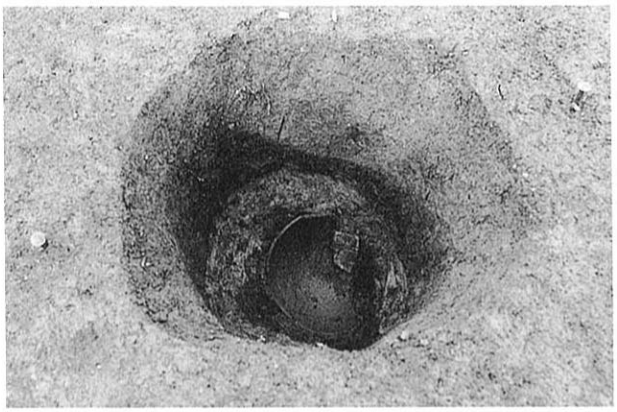


写真54　ピット208下層出土状況(南から)

図52　E地区　ピット208　平・断面図

になっていた可能性を考えることができる。

建物271(図53)は、地区南西側で検出された。2間×3間の掘立柱建物と考えられるが、ピット282を柱穴として、2間×2間の建物になる可能性もある。柱間は2.0～2.2mを測る。柱穴からの出土遺物は多くないが、平安時代後半頃の遺物が出土している。

鎌倉時代の遺構

鎌倉時代と考えられる遺構は、流路249付近に集中して検出される。これらの遺構は検出面が高く浅いものが多いため、削平されて失われている遺構も多いと考えられる。ピット、土坑、掘立柱建物、井戸などがある。

土坑191(図54)は、ピット群南側で検出された。楕円形で、長軸0.7m、短軸0.55m、深さ0.15mを測る。土坑の東側法面に土師器皿が見込みを上に向けて入れられていた。

土坑524(図55)は、地区北東側で検出された。東側は地区外に広がっており、西側のみの調査となった。掘方は円形で径1.0m、深さ約0.7mを測り、上層には拳大の河原石が多く入っている。下層は自然堆積により埋没したと考えられることから、廃棄後、一定期間放置されたあとに人為的に埋め戻されたものと考えられる。石の間からは須恵器鉢(図65-17)が出土している。このような埋土の状況は、C地区の土坑41などにも見られ、湧水層まで掘削されていないことから、水溜めなどの性格が考えられる。底面

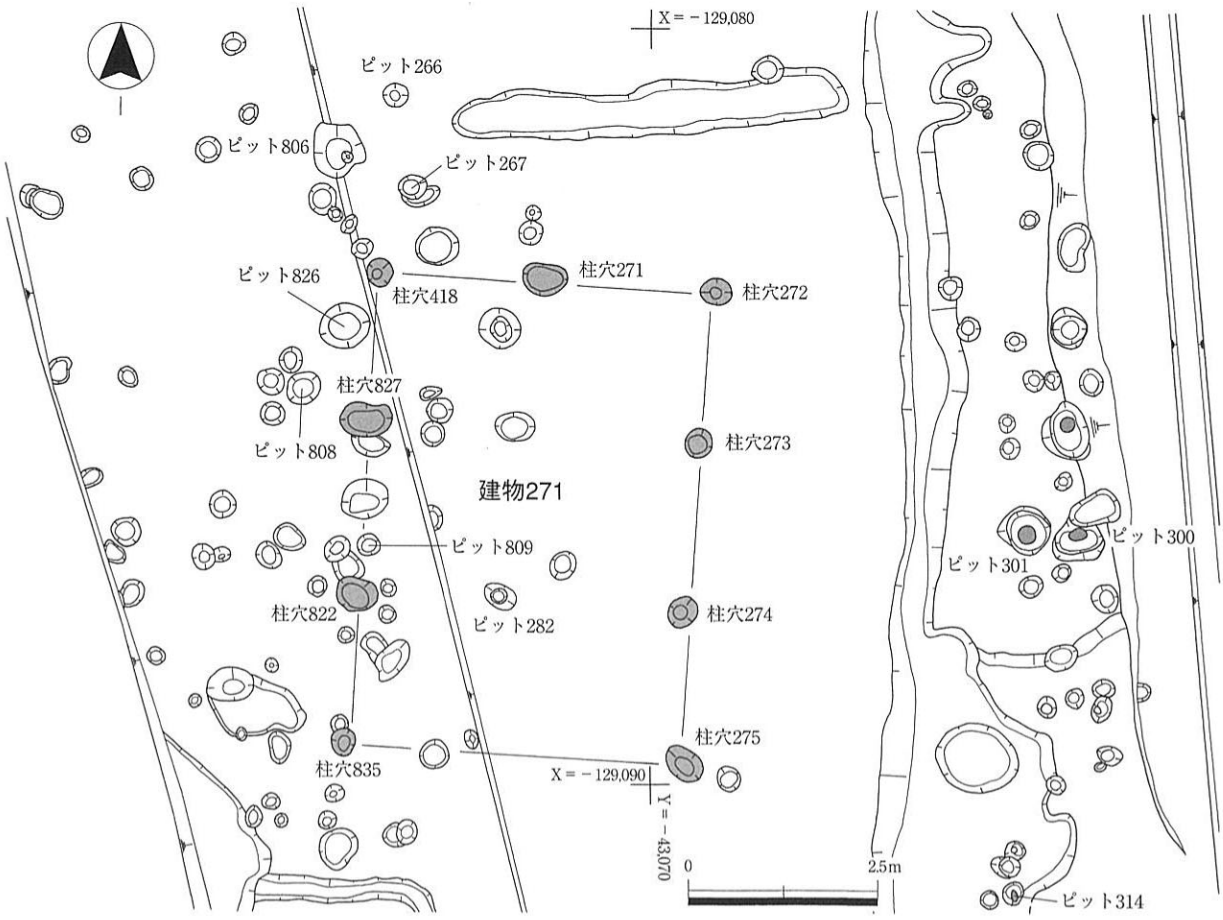
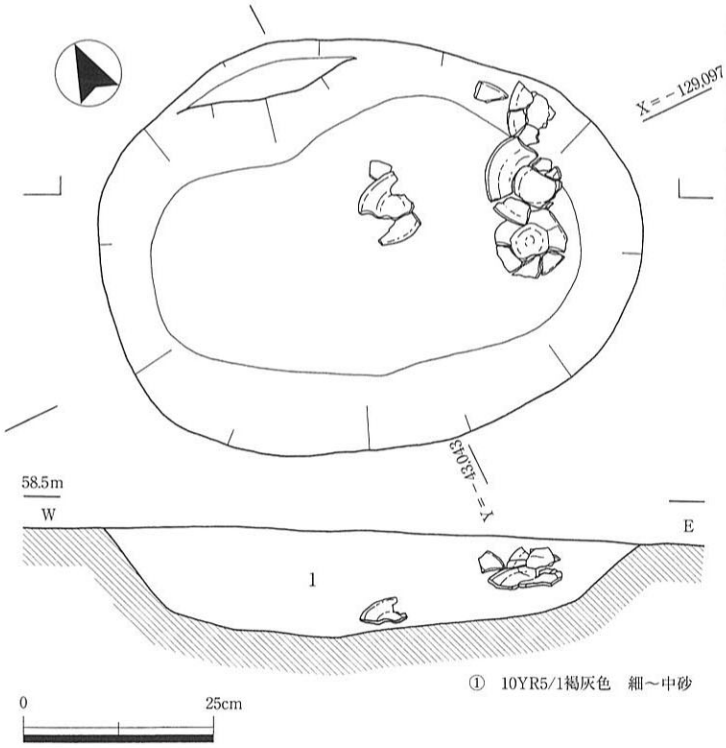


図53　E地区　建物271　平面図



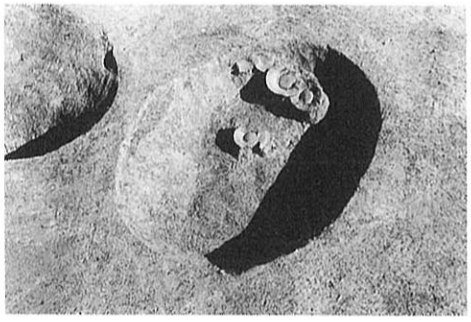


写真55　ピット191出土状況（南西から）

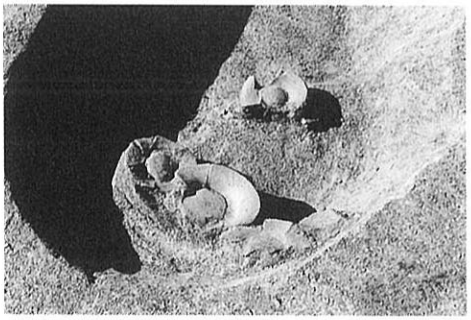


写真56　ピット191出土状況（東から）

図54　E地区　土坑191　平・断面図

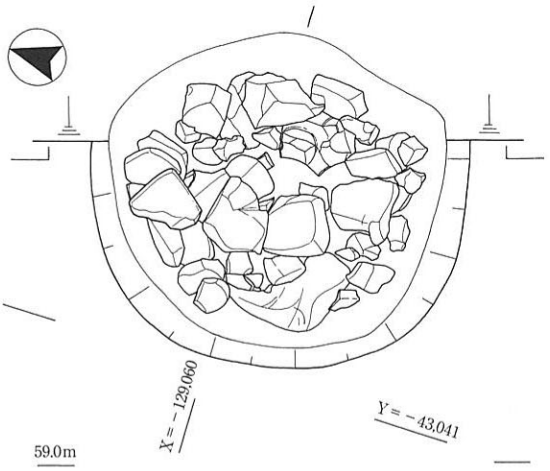
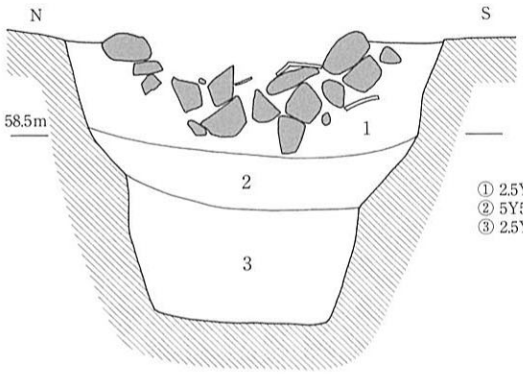


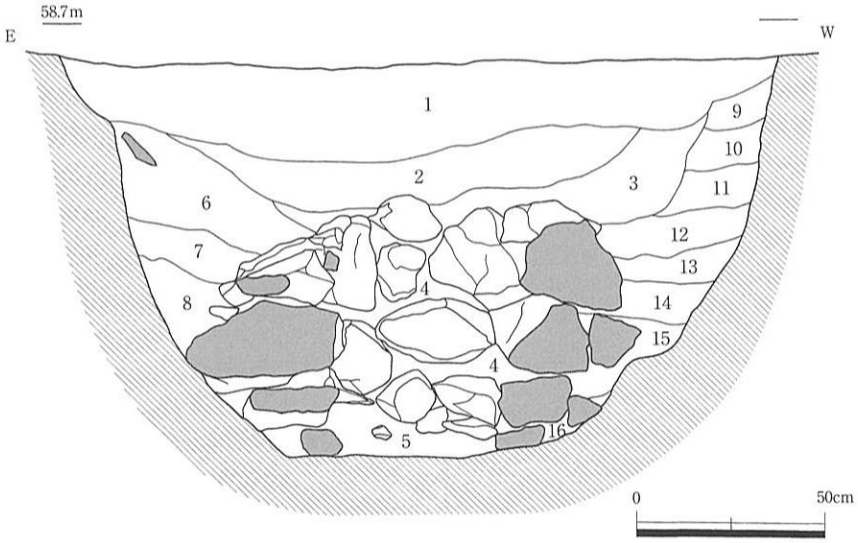
写真57　土坑524出土状況（東から）



① 2.5Y4/6オリーブ褐色　粗砂混じり粘土（ラミナがレンズ状に見られる）
② 5Y5/3灰オリーブ色　砂混じり粘土（ラミナがレンズ状に見られる）
③ 2.5Y5/1黄灰色　粘土

0　50cm

図55　E地区　土坑524　平・断面図



① 10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂（ブロック土多く含む）
② 10YR6/2灰黄褐色　極細砂（レキ混じる）
③ 10YR4/2灰黄褐色　シルト～極細砂（レキ混じる）
④ 5Y3/1オリーブ黒色　シルト
⑤ 5Y4/1灰色　シルト
⑥ 10YR4/1褐灰色　シルト～細砂
⑦ 10YR5/1褐灰色　シルト
⑧ 5Y4/1灰色　細～中砂
⑨ 10YR6/3にぶい黄橙色　シルト～細砂
⑩ 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂（炭化物を少量含む）
⑪ 10YR5/1褐灰色　シルト～極細砂
⑫ 2.5Y5/1黄灰色　シルト
⑬ 2.5Y6/2灰黄色　極細～細砂
⑭ 2.5Y5/1黄灰色　シルト
⑮ 2.5Y4/1黄灰色　細～中砂
⑯ 10YR4/1褐灰色　細砂

図56　E地区　井戸6　断面図

が平らであることから、機能時には甕や曲物などを据えていた可能性が高い。そうした構造物は廃棄の際に抜き取られたのであろう。

建物426(写真58)は、地区北側で検出された。建物北側は近代水路により削平されており、北西隅の柱穴が失われている。2間×2間の掘立柱建物で、柱間は梁間が1.8m、桁行が2.3mである。柱穴から出土する遺物はほとんどなかったが、北東隅の柱穴427からは瓦器椀の細片が出土した。南東側には耕作地を区画すると考えられる段差が確認でき、瓦器椀を含む包含層が確認された。

井戸6(図56)は、地区南側で検出され、内径0.5mの石組井戸である。掘方の径は1.9m、深さは1.1mを測る。石組には径0.5m程度の河原石も使用されており、高台の退化した瓦器椀などの遺物が間に入り込んでいる。これらの遺物の出土は細片ながらも①～③層の上層部に集中しており、井戸廃棄後の埋め戻しの際に混入したものがほとんどであると考えられる。この井戸は落込み2・流路249に隣接しており、出土する遺物からも同時期に存在していると考えられる。東西には溝に伴う石列も検出されており、流路を含めた水利の一端を担っていたことが推測される。

流路249は、地区南側を東流する規模の大きなもので、そのプランが圃場整備直前まで踏襲されていると考えられる。上層の砂層からは、鎌倉時代の遺物が多く出土したが、下層からは遺物自体あまり出土しない。そのため、この流路がいつから存在したものか、また、元来自然流路として存在したものをそのまま利用したのか、新たに掘削したものか、などは不明である。南方のF地区の遺構面が一段低くなることからも段丘平坦面の端部に位置していると考えられ、耕作地を大きな単位で区画する幹線水路として位置付けることができよう。

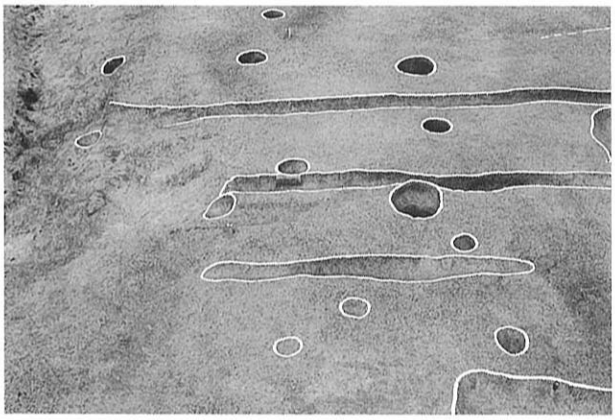


写真58　建物426(西から)

写真59　井戸6(北から)

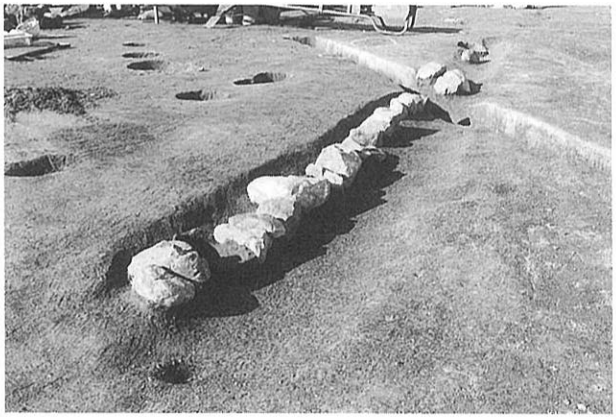


写真60　石列5(南から)

写真61　流路249周辺遺構完掘状況(南東から)

遺物　Ｅ地区からは最も多くの遺物が出土した。Ｅ地区における出土状況の特色は、奈良時代の遺物も多い一方で、鎌倉時代以降の遺物の割合が増えていることである。奈良時代の遺物は遺構が存在する北西部分と、落ち込み２の周辺から多く出土する。また、西端の建物529周辺では少数ではあるが平安時代前半の土器がある。一方、中世の遺物は、ピットなどが集中する南東部、流路249周辺で多く、南端の中世包含層中から良好な状態で出土した。

盛土・包含層出土の遺物

盛土・包含層からは奈良時代と中世の遺物が多く出土した。図57は主に奈良時代の遺物である。須恵器坏Ｂ蓋・坏Ａ・坏Ｂ・壺Ａ蓋・壺底部・平瓶・甕・円面硯、土師器皿・甕が出土している。

須恵器坏Ｂ蓋(1～4)　１～３は口縁部内面にかえりをもつ蓋である。１は頂部がやや丸みを帯び、頂部２分の１に回転ヘラケズリ、口縁部にやや強い回転ナデを施す。２は平坦な頂部で、頂部外面２分の１を回転ヘラケズリする。４は口縁端部を垂下させるタイプである。頂部が平坦で、２分の１を回転ヘラケズリ後、ナデ仕上げしており、口縁端面は回転ナデを施す。

須恵器坏Ａ(5～11・24)　５は口縁部が緩やかに立ち上がる。底部外面はヘラ切り後ナデ仕上げする。６は口縁部に回転ナデを施す。７は口縁部が外方に立ち上がる。底部外面にヘラ切り後ナデ仕上げする。８はカーブを描くように立ち上がり、底部外面はヘラケズリ後ナデ仕上げする。９は口縁部が外方に立ち上がり、口縁端部がやや尖る。底部外面はヘラ切り後粗いナデ仕上げする。10は口縁部が外方に立ち上がり、全体にナデ仕上げである。11は体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部が水平に面をなす。底部外面は回転ヘラケズリを施す。24は底部が欠損しており、高台の有無が不明である。当遺跡ではほとんど出土していない坏部の深いタイプで、口縁部外面に沈線が一条めぐる。

須恵器坏Ｂ(12～16)　12～14は口縁部が外反する。底部端にふんばった高台がつく。15は高台が比較的底部の内側につき、先端が尖る。体部下半まで回転ヘラケズリを施す。

須恵器壺Ａ蓋(17～19)　平坦な頂部に垂直で深い口縁部をつけ、つまみはいずれも欠損している。頂部外面は回転ヘラケズリ、口縁部と内面は回転ナデを施す。17は内面全体に自然釉が付着している。18は口縁部外面に１条の沈線をめぐらし、端部が内傾する面をもつ。19は大型で口縁部に２条の沈線をめぐらせ、端部に内傾する面をもつ。頂部外面端に溶着痕があり、重ね焼きによるものと考えられる。

須恵器壺(20)　平底で、底部内よりに断面二等辺三角形状に開く高い高台がつく。

平瓶(23)　口縁部のみ残存する。体部との接合痕がわずかに認められたため、小型の平瓶とした。内外面に自然釉がかかる。

円面硯(21・22)　21は上面４分の１の残存である。幅1.3㎝以上の透かしがあけられる。灰白色で胎土がやや粗い。22は圏台のみの出土である。21に比べ精良な胎土である。

須恵器甕(25)　口縁部は短く、大きく開く。内面に当て具痕、外面にタタキの痕跡が残る。焼成不十分のため、内外面とも鈍い橙色で断面は黒色である。

須恵器鉢(26)　口縁部は垂直に立ち上がり、端面が水平方向に凹面をなす。体部は口縁部直下で最大径を測り、そのまますぼまっていく。

土師器皿(28)　広い底部に短い口縁部がつき、口縁端部内面に沈線がめぐる。内外面とも摩耗が著しい。

土師器甕(27)　口縁部のみの残存である。口縁部は短く上方に開き、端部内面にヨコナデを施す。体部外面には縦方向のハケ目を施す。

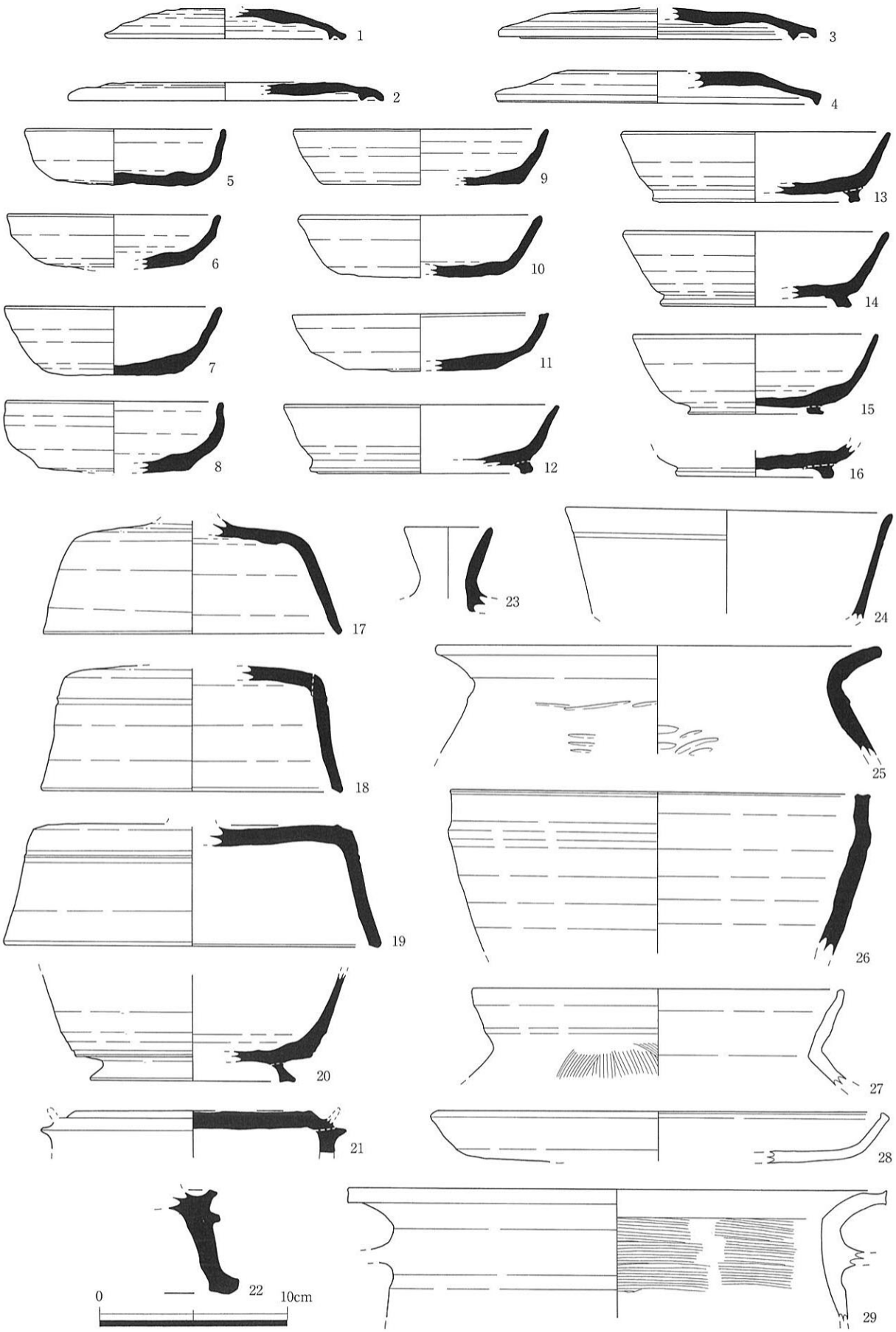


図57　E地区　盛土・包含層出土遺物（1）

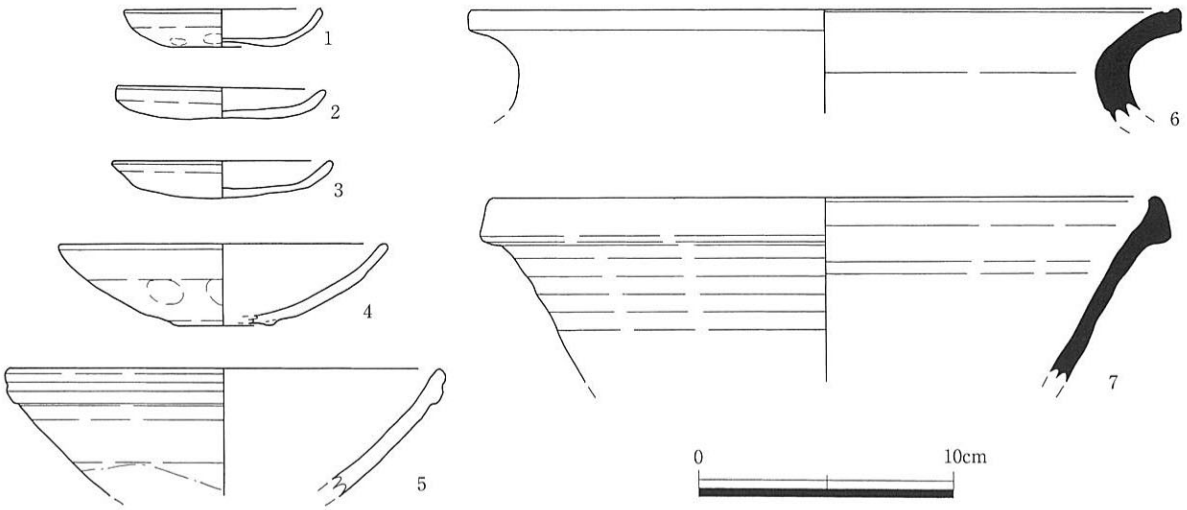


図58　E地区　盛土・包含層出土遺物(2)

土師器羽釜(29)　口縁部は外反し、端部をややつまみあげる。欠損しているが口縁部下には鍔がつくと推察される。内面に横方向のハケ目を施す。

図58は中世の遺物である。須恵器鉢・甕、土師器皿、瓦器椀、白磁碗が出土した。

土師器皿(1～3)　口径8.0～9.0㎝、器高約1.5㎝を測る。いずれも口縁部にヨコナデした後、端部はやや内向きに仕上げ、底部外面に指圧痕がみられる。

瓦器椀(4)　口径13.0㎝、器高3.2㎝を測り、退化した高台がつく。摩耗のため調整は不明瞭である。

白磁碗(5)　分厚い玉縁状口縁をもつ。体部下半3分の1は露胎する。

須恵器甕(6)　口縁部のみ残存する。口縁部は大きく外反し、内面に沈線状の凹みがめぐる。

須恵器鉢(7)　東播系須恵器の鉢である。体部は直線的に開き、口縁部を上方に拡張する。

中世包含層出土の遺物

図59は包含層中から出土した遺物である。これらのうち2・4・5・10～13は、E地区南東端からまとまって出土した。瓦器椀・皿、黒色土器、青磁碗、土師器皿・瓦質三足釜が出土した。

瓦器椀(1･2)　1は口径12.5㎝、器高3.3㎝で退化した高台がつく。口縁部外面にやや強いヨコナデ、体部内面に平行線状のヘラミガキを施す。2は口径15.4㎝で器高も低い。体部外面にわずかなヘラミガキと指圧痕がみられる。体部内面に圏線状のヘラミガキ、見込み部に平行線状のヘラミガキを施す。

黒色土器椀(3)　内外面とも黒色化したB類椀で、しっかりした高台がつく。内外面とも摩耗しており調整は不明瞭であるが、口縁部にやや強いヨコナデを施す。

青磁碗(4)　底部のみ残存する。平底で、高台がつく。

土師器皿(5～9)　5～7は口縁部下半にやや強いヨコナデをした後、端部にもう一度つまみ上げるようにヨコナデあるいは面取りし、断面が三形を呈する。8・9は「へそ皿」で、底部中央がわずかに盛り上がる。口縁部下でヨコナデを施しており、底部と口縁部の境の器壁は非常に薄い。

瓦器皿(10)　口縁部にヨコナデを施す。内面に螺旋状のヘラミガキを施し、底部外面に指圧痕が残る。

瓦質三足釜(11～13)　1は口縁部が内傾し、鍔部との境に強いヨコナデを施す。下方ほど二次焼成を受けて赤く変色する。12・13は脚部のみ出土した。

奈良時代の遺物

図60は土坑1から出土した須恵器で坏B蓋・坏A・坏B・壺A・鉢B・甕が出土した。

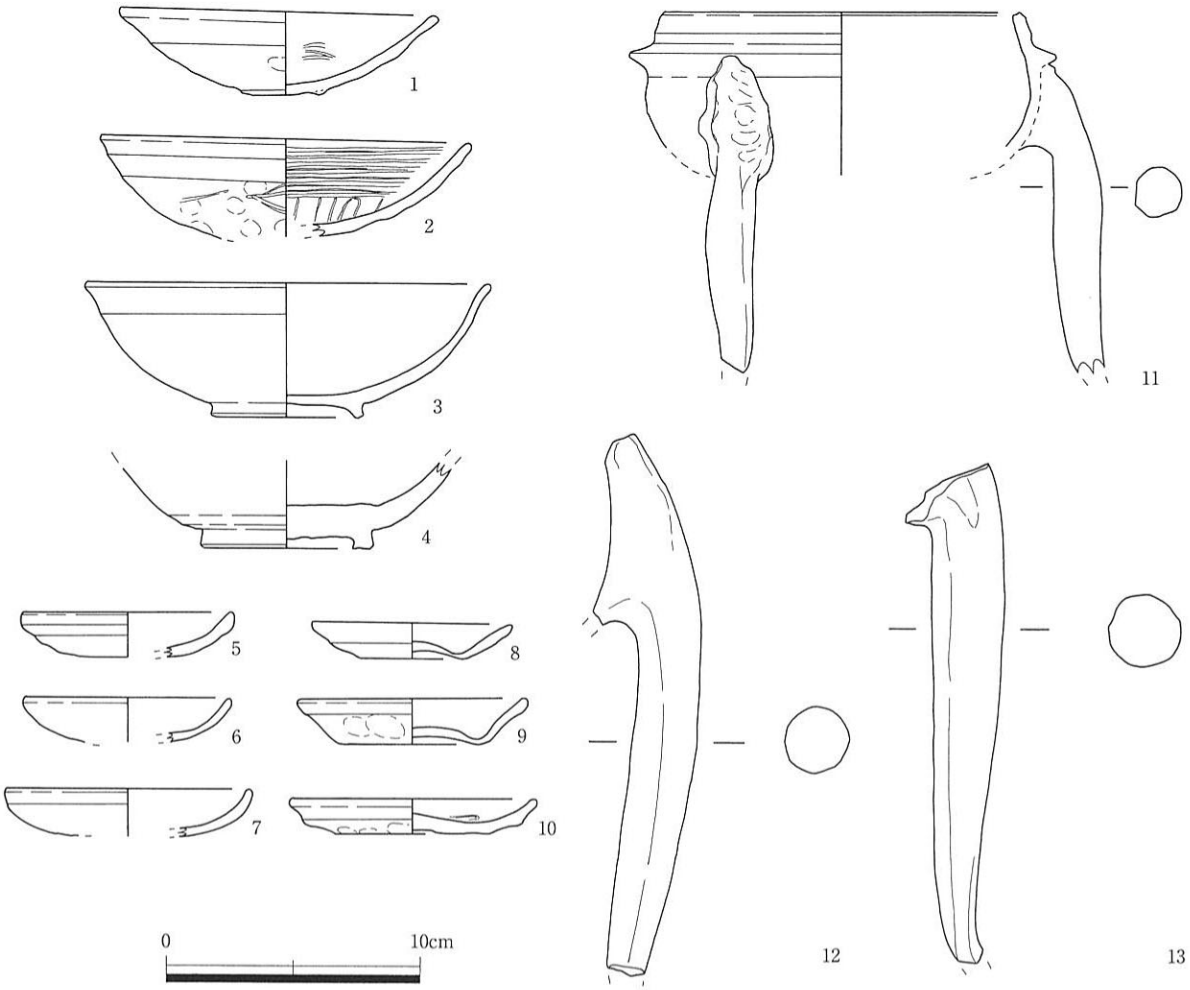


図59　E地区　包含層出土遺物

須恵器坏B蓋(1～6)　1は焼けひずみしているが、丸い頂部に中央部が凹む擬宝珠つまみがつく。口縁端部は垂下させ、平面をもつ。頂部外面は3分の1を回転ヘラケズリを行う。2～5は平坦な頂部で、口縁部の垂下はつまみ出す程度である。頂部外面は2分の1を回転ヘラケズリした後ナデ仕上げする。6は平坦な頂部で口縁端部は外方へ折っており、頂部外面の4分の3を回転ヘラケズリを行う。器壁が厚く、黄灰色で砂粒を多く含む胎土である。

須恵器坏A(7･8)　7は口縁部が斜め上方に開き、底部が平底である。底部外面は回転ヘラケズリの後ナデ仕上げする。8は口縁部外面に回転ナデを施しており、底部がやや尖る。

須恵器坏B(9～15)　口径が13cm 前後のものと16cm 前後のものに分けられると考えられる。9は口縁部のみの残存である。灰白色を呈する。10は口縁部が上方に立ち上がり、口縁部にやや強いヨコナデを施す。底部端に断面四角形の高台がハの字状に開いてつく。青灰色で精緻な胎土である。11は底部が高台より下方に飛び出している。高台は先端がやや尖る。12は上方に立ち上がる口縁部で、口縁端部を丸く収める。短い高台が底部端につく。13は口縁部が上方に立ち上がり、太く短い高台が底部端につく。14は底部のみの残存である。内傾する高台がつくが、接合時についた爪の痕が底部外面に残る。15は口縁部がまっすぐに立ち上がり、高台がハの字状につく。

須恵器壺(16)　外反する短い口縁部がつき、肩部は緩やかに張る。肩部外面には自然釉が付着する。

須恵器鉢(17)　2分の1残存する。平底で上方に体部が立ち上がる。口縁部は回転ナデを施し、端部

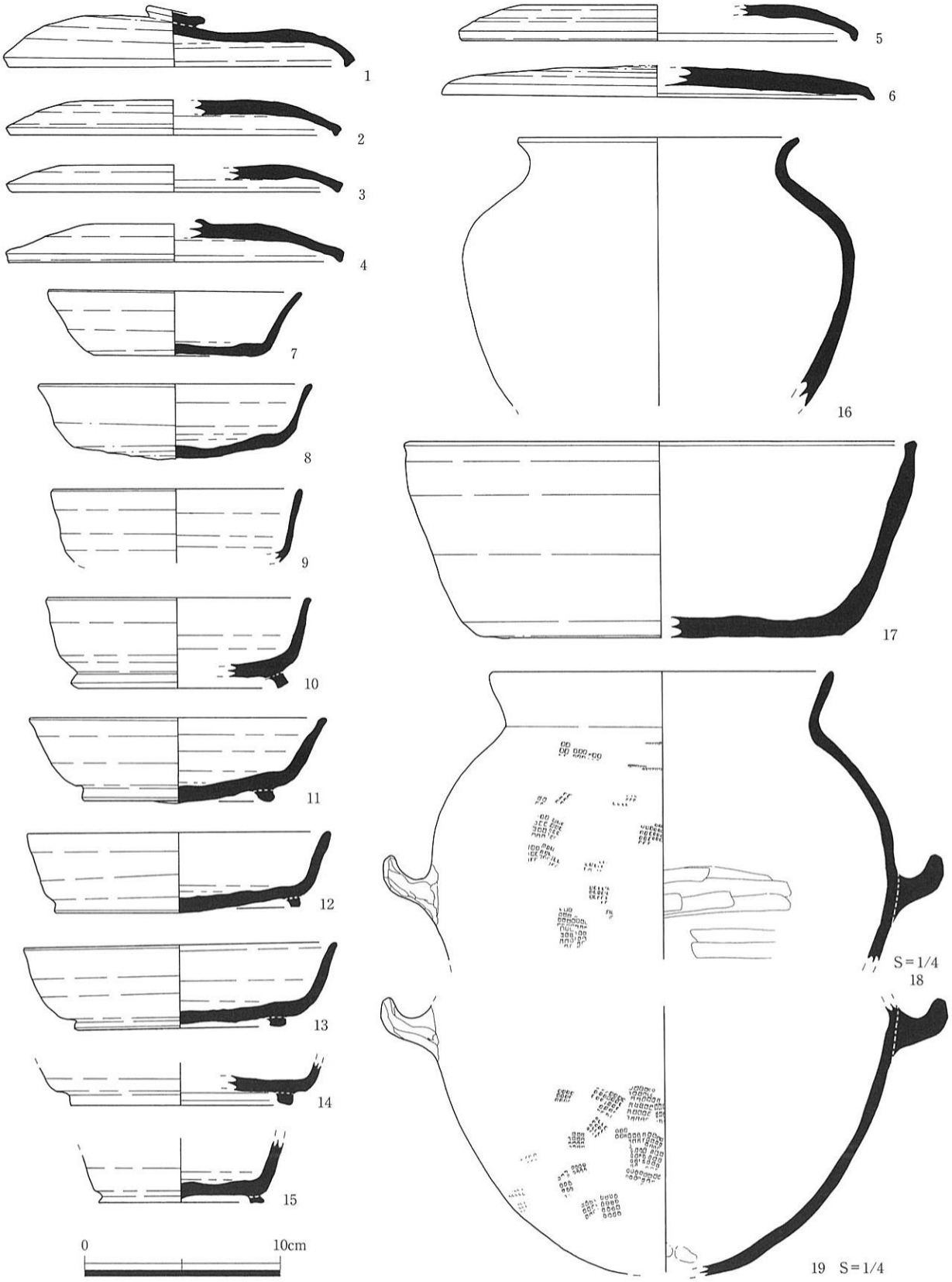


図60　E地区　土坑1出土遺物(1)

は平坦な面に収め、内傾する。体部と底部外面は回転ナデで、体部との境に回転ヘラケズリを施す。

須恵器甕(18・19) 短い口縁部にやや肩の張った体部、底部は丸底である。把手が体部中央につく。両者とも、体部外面は格子状のタタキを施し、体部下半内面にはヘラケズリを行う。同遺構からは、これ

図61　E地区　土坑1出土遺物(2)

以外にも別個体と思われる把手が出土している。

図61は土坑1から出土した土師器である。蓋・坏A・椀・甕・鉢・甑が出土した。

土師器蓋(1)　頂部はやや平坦で、縁部で弯曲し、頂部にはつまみがつく。外面に分割したヘラミガキ、内面には螺旋暗文を施す。

土師器坏A(2～5)　2・3は体部が緩やかに立ち上がり、口縁部は外方に開き、端部を内側に丸くおさめて、沈線をめぐらす。2は底部から体部にかけての外面に横方向のヘラケズリ、口縁部内面に斜放射暗文、底部内面に楕円状暗文を施す。3は、口縁部外面に横方向に密なヘラミガキ、内面に斜放射暗文を施す。4は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外方に開くが、端部内面に沈線は見られない。口縁部外面と内面はナデ、底部外面に横方向のヘラケズリの後ヘラミガキを施す。5は丸底に近い底部を持ち、口縁部が外方に開く。口縁端部は丸くおさめ内面に沈線をめぐらす。口縁部外面はヨコナデ、

内面が二段斜放射暗文、見込み部に螺旋暗文を施す。

土師器椀(6)　扁平な体部を呈する。内面と外面口縁部はナデ、体部外面が指オサエを施す。

土師器甕(7～9)　7は長胴形の体部がつくと推察される。調整は摩耗しており不明である。8は口縁部内面に強いヨコナデを施し、外端面に沈線をめぐらす。体部外面は縦方向のハケ目を施す。9は口縁部のみの残存であるが、端部を上方につまみあげる。

土師器鉢(10)　口縁部が内弯する片口の鉢である。注口部は指オサエで作り出す。体部外面に横方向あるいは斜め方向のハケ目、口縁部には摩耗しているがヨコナデと縦方向のハケ目を施す。内面はナデを施している。浅黄橙色で胎土は直径1～2㎜の砂粒を多く含みやや粗い。

土師器甑(11・12)　円筒形の体部で外面はハケ目を施す。11は口縁部に外端面をもち、口縁部にやや強いヨコナデを施す。体部内面は横方向のケズリである。12は口縁端部を水平に仕上げる。

図62は井戸460から出土した遺物である。須恵器坏A、壺、鉢、土師器坏Aが出土した。

土師器坏A(1～3)　1は口縁部が外反し内側に丸くおさめ、沈線をめぐらす。調整は磨耗のため不明瞭である。2は平底で口縁部が緩やかに立ち上がる。口縁部外面にやや強いヨコナデを施す。3は口縁部のみの残存で、端面が内傾する。

須恵器坏A(4)　口縁部は緩やかに立ち上がり、底部外面にヘラ切り後、ナデ仕上げする。

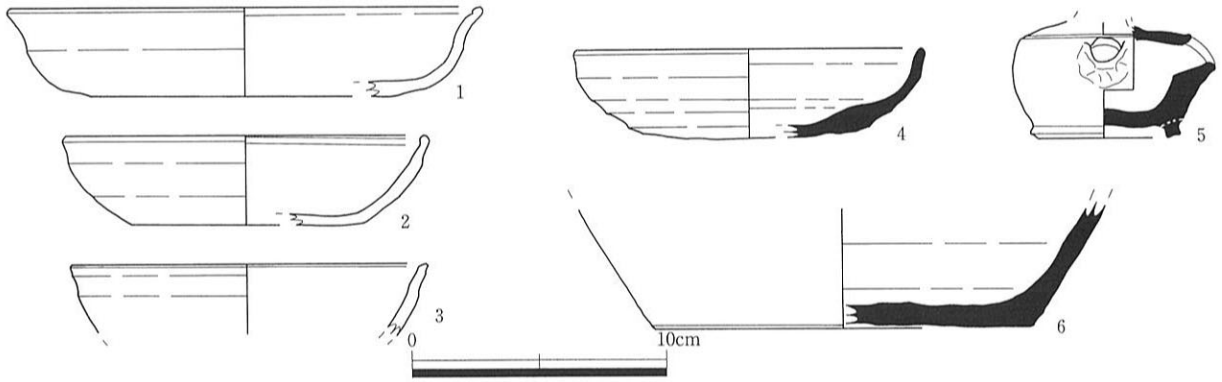


図62　E地区　井戸460出土遺物

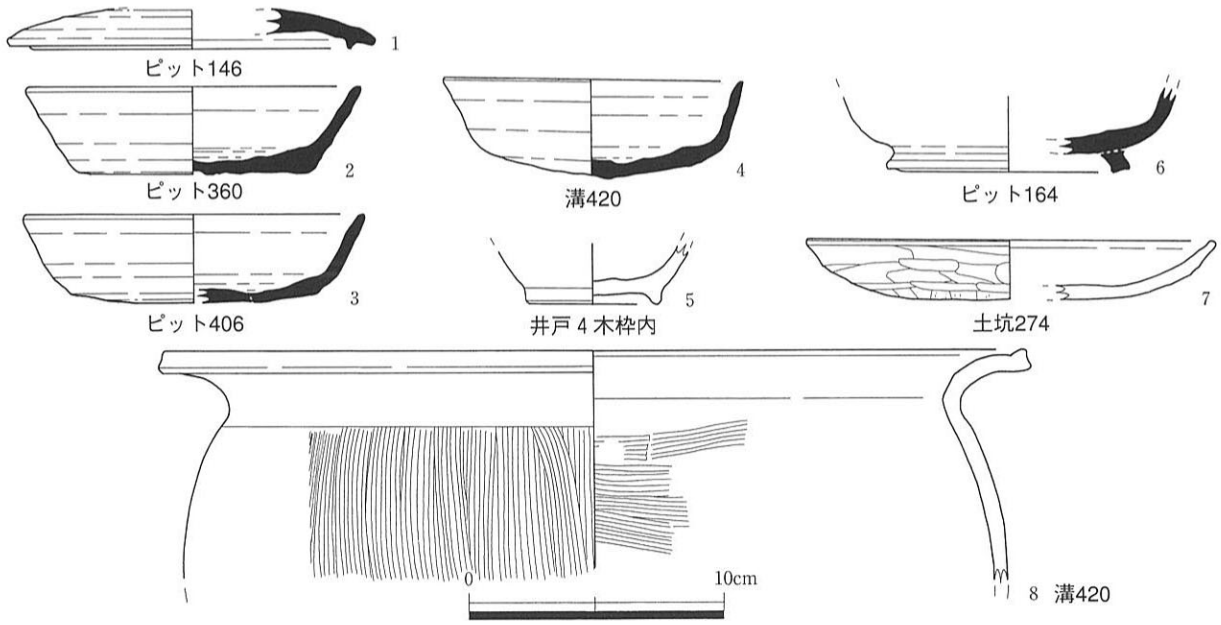


図63　E地区　遺構出土遺物(奈良時代)

須恵器壺(5) 小型の壺で、体部と底部のみ残存する。肩部には沈線がめぐり、体部との境に穿孔しており、粘土紐を貼り付けて突起状にする。底部は平底で、低い高台が底部端につく。

須恵器底部(6) 底部のみ残存する。体部は斜め上方にまっすぐ立ち上がる。体部外面に回転ヘラケズリ、体部内面に回転ナデを施す。

図63は上記以外の遺構から出土した遺物である。須恵器坏蓋・坏A・壺、土師器皿・甕が出土した。

須恵器坏B蓋(1) 丸みを帯びた頂部で、2分の1を回転ヘラケズリする。内面の口縁端部より低い位置に短いかえりをもつ。

須恵器坏A(2～4) 平底で口縁部が上方にまっすぐ立ち上がる。全体に回転ナデを施す。3・4は底の中心が尖り、口縁部は上方に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリを施す。

須恵器壺(6) 底部のみの出土である。底部端にハの字状に高台がつく。

土師器椀？(5) 土師質で、底部のみ残存する。底部端に高台がつき、外面は丁寧にナデを施す。陶磁器の碗のようでもあるが、井戸4は古代と考えられる構造をしており、出土遺物もすべて古代の遺物であることから、この時期のものと思われる。図化はしていないが、布目の平瓦が出土している。この瓦は凸面に粗いタタキ目とナデの痕跡が見られ、特徴的な調整を施したものである。

土師器皿(7) 3分の1の残存である。口縁部外面には短い単位で横方向に、底部には不整方向のケズリを施す。

土師器甕(8) 口縁部は大きく開く。口縁端部は上方につまみ面をもつ。

平安時代の遺物

図64は建物529付近の遺構から出土した遺物である。土師器坏、甕が出土した。

土師器坏(1) 赤褐色で焼きがしっかりしている。高台がつくと思われる。外面全体にヘラケズリ、口縁部内面にヨコナデを施す口縁部は外傾する。外端面には沈線がめぐる。

土師器甕(2) 横倒しの状態で出土した。残存部分において、頸部以上が欠損しており、意図的に打ち欠いたものと考えられる。長胴型の体部で、外面は縦方向のハケ目を施す。内面は摩耗していて不明であるが、体部下半あたりに布目らしき圧痕が見られた。

中世の遺物

図65は中世の遺構から出土した遺物で、12～13世紀の所産である。瓦器椀、石鍋、土師器羽釜、東播系須恵器鉢、青磁碗、土師器皿が出土した。

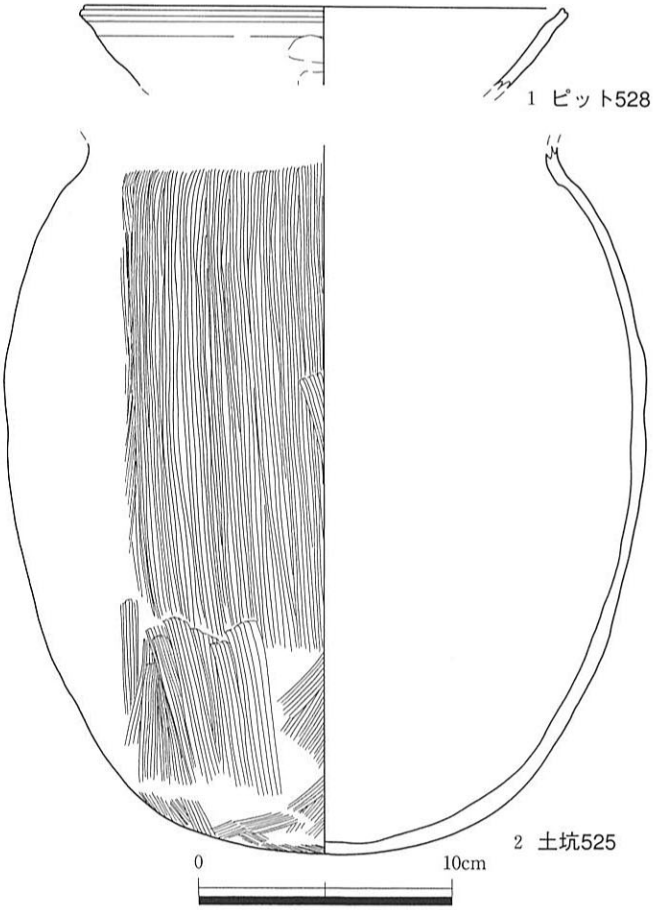


図64 E地区 遺構出土遺物(平安時代)

瓦器椀(1～12) いずれも和泉型瓦器椀である。法量・器面の調整・高台の形態から、①3・4・7、②2・6・8、③1・5・9・10に分けて説明するが、③はさらに細分が可能であると思われる。

① 法量は3(口径15.3㎝、器高5.5㎝)、4(口径15.8㎝、器高5.6㎝)、7(口径15.2㎝、器高5.8㎝)であ

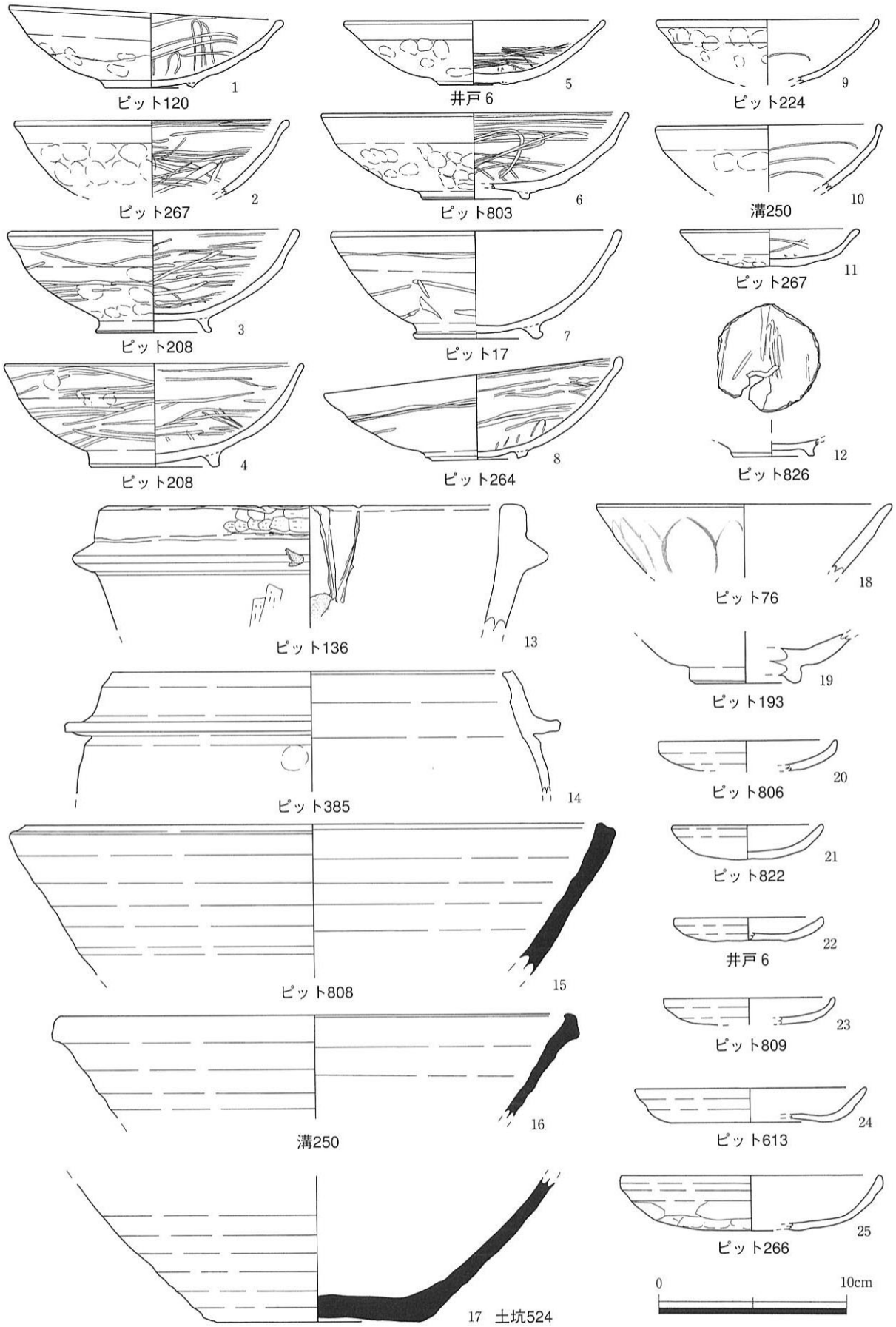


図65　E地区　遺構出土遺物(12・13世紀)

る。このタイプは口径が15～16㎝と大きく、器高も5.6～5.8㎝と高い。高台は断面が逆台形などしっかりしたものがつく。体部内面のヘラミガキは比較的粗く、見込み部には不規則なヘラミガキを施す。外面のヘラミガキも分割性が崩れたもので、成型時の指圧痕が残る。7は磨耗が著しく調整が不明であるが器形や高台が類似しているため、この分類に入れた。

② 法量は2(口径14.6㎝)、6(口径16.2㎝、器高4.7㎝)、8(口径15.8㎝、器高4.6㎝)である。器高が5㎝以下と低くなり、高台は断面三角形の退化したものが、底部中心からややずれた場所につく。内面のヘラミガキも粗雑で、見込み部には不規則なジグザグ状ヘラミガキが施される。体部外面のヘラミガキは、施されないか体部上半に限られている。

③ 法量は1(口径14.6㎝、器高4.1㎝)、5(口径13.8㎝、器高3.6㎝)、9(口径11.7㎝)、10(口径11.8㎝)である。口縁部外面にヨコナデを施す。体部外面は成型時の指圧痕、内面にはうずまき状ヘラミガキを施す。器高が4㎝以下となり、高台は非常に退化しており、消失する直前の段階と思われる。1→5→9に変化すると考えられる。

12は高台が比較的しっかりしており、底部内面にヘラミガキがみられるため①に属すると考えられる。

瓦器皿(11)　口径9.6㎝、器高2.0㎝を測る。口縁部外面にヨコナデを施し、底部外面に指圧痕が残る。内面は不規則なヘラミガキと、平行線状のヘラミガキが施されている。

石鍋(13)　滑石製で、断面三角形の鍔がつき、外面は丁寧にケズリを施している。内面に2本の切り込みを行った痕跡があり、石鍋をさらに割って再加工を施す途中段階であったことが考えられる。なお、当遺跡からは用途不明であるが石鍋の二次加工品(図77-8)が出土している。

瓦質羽釜(14) 口縁部が内傾し、短い顎がつく。口縁部端部は水平方向にヨコナデし、凹面をなす。体部外面にわずかに指圧痕が残る。

須恵器鉢(15～17)　東播系須恵器の鉢である。15は口縁部のみの出土である。口縁端部をほとんど肥厚させておらず、出現期の形態であると思われる。16は体部が直線的で、口縁部が外方に肥厚する。盛土・包含層出土の図58-7に類似する。17は底部のみ出土した。平底で、体部は直線的にのびる。

青磁碗(18・19)　18は口縁部のみの残存である。外面に蓮弁文が描かれる。19は底部のみ出土した。

土師器皿(20～25)　いずれも口縁部下半にヨコナデを施し、さらに口縁端部をつまみあげるようにヨコナデするため、20・22のように断面が三角形となるものがある。20は淡黄色を呈し、砂粒をほとんど含まない精良な胎土である。24は体部に強いヨコナデの痕跡が残る。25は、口縁部を一段ナデた後、口縁端部を面取りするため、断面が三角形をなす。底部から体部にかけて指圧痕がみられる。

図66は中世の遺構から出土した遺物で、14～15世紀の所産である。瓦質羽釜、土師器皿がある。

瓦質羽釜(1・2・12・13)　1は2に比べ口縁部の長さが長く、鍔はやや上弯する。2は口縁部が短く直立し、外端面に強いヨコナデを施す。水平で短い鍔がつき、平底を呈すると思われる。体部内面全体にハケ目を施し、外面には指圧痕が見られる。12は口縁部は直立し、外面に緩い凹線がめぐる。水平方向に鍔がつく。13は口縁部が直立し、外面の沈線は非常に緩い。鍔は水平である。口縁部は短く直立して、端部が外傾し凹線状の面をもつ。

土師器皿(3～11)　底部がわずかに上げ底状を呈する「へそ皿」である。3は全体に器壁が薄く、底部から口縁部にかけての立ち上がりが緩やかである。口縁部は大きく開き、底部と口縁部の境が非常に薄く、相対的に口縁部が厚い。底部はわずかに持ち上がる程度であるが、4・5・11は平底である。口径が8㎝前後のものと10㎝前後のものの2タイプある。

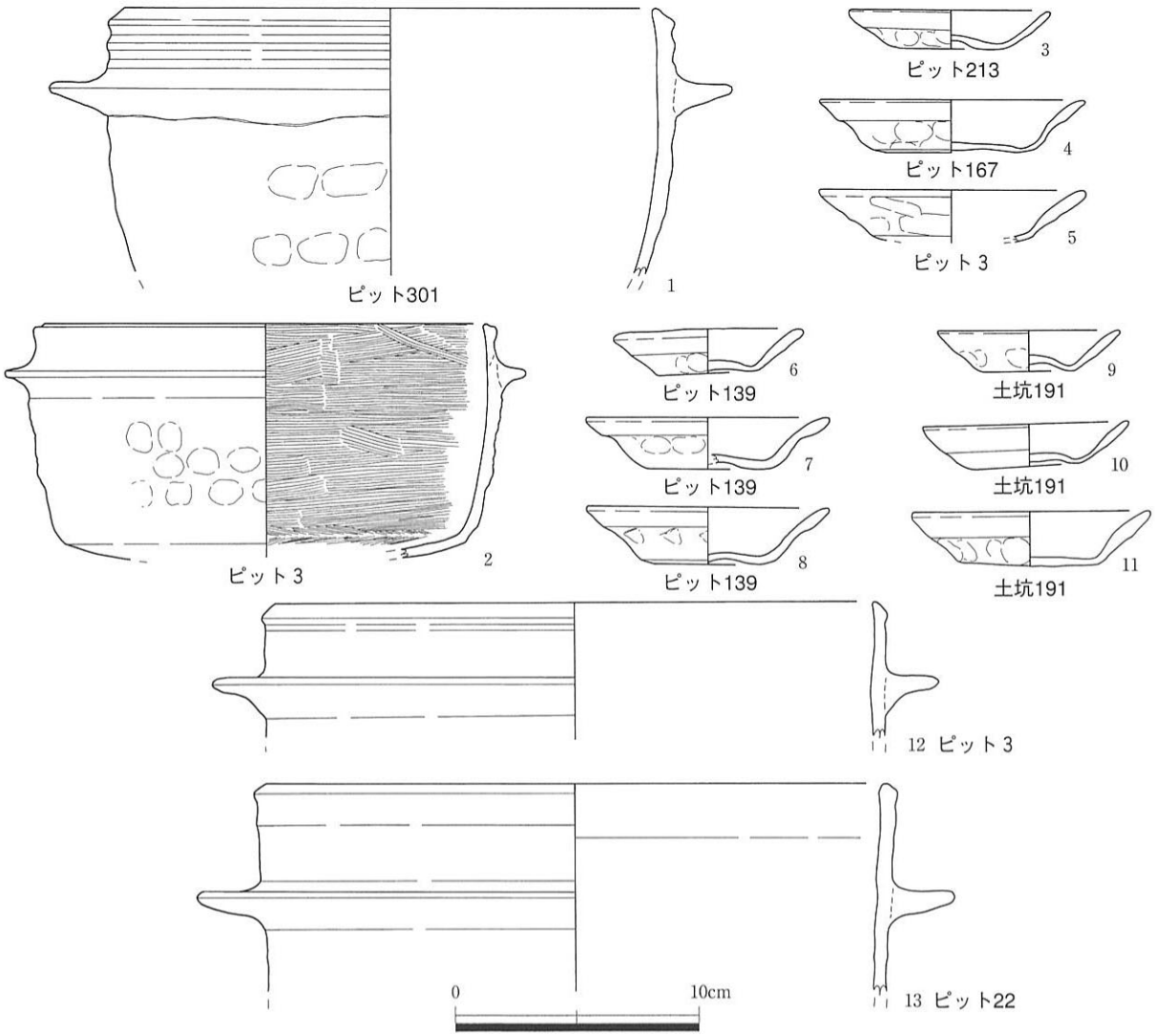


図66　E地区　遺構出土遺物(14・15世紀)

図67は落ち込み2から出土した。奈良時代の須恵器、白磁、中世の瓦器椀、瓦質羽釜、土師質羽釜、東播系須恵器、土師器鍋など、時期幅がある。

瓦器椀(1)　和泉型で、口径は11.6cm を測る。内面に螺旋状のヘラミガキを施す。

白磁碗(2)　底部のみ出土した。

横瓶(4)　口頸部のみ残存する。口縁端部を折り返す。

須恵器坏B(5)　口縁部が外方に立ち上がり、外反する。高台は太く短いものがハの字状につく。

瓦質羽釜(3～6)　3は三足釜である。口縁部が内傾し、内面にヨコナデを施す。端部は断面方形で、端面は水平に面をなす。内面にハケ目を施す。6は口縁部が直立し、上弯気味に鍔がつく。口縁端部は外傾して、強いヨコナデを施す。口縁部外面は3条の凹線がめぐる。7は6と同様に口縁部が直立し、外面に凹線をめぐらす。

土師器堝(8・9)　口縁部は短く大きく開き、端部を断面方形におさめ、端面にヨコナデを施す。内面にはハケ目を施す。外面は縦方向のハケ目の後、指オサエを施しており、体部下半はタタキを施す。外面全体に煤が付着している。9は口縁部内面に横方向のハケ目が残る。

須恵器鉢(10・11)　東播系須恵器の鉢である。底部は欠損している。両者とも体部は直線的にのび、口縁部は上下方に肥厚する。

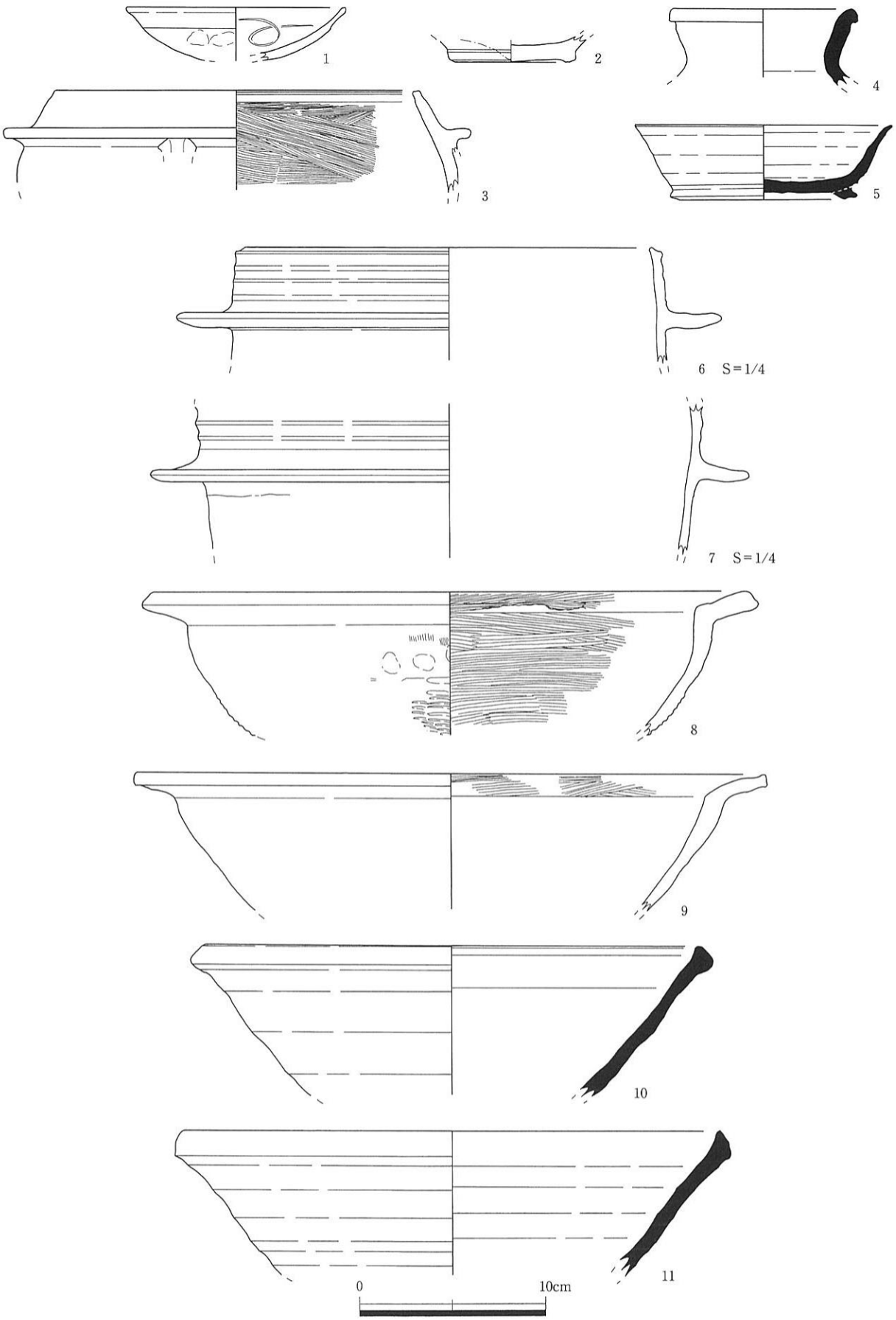


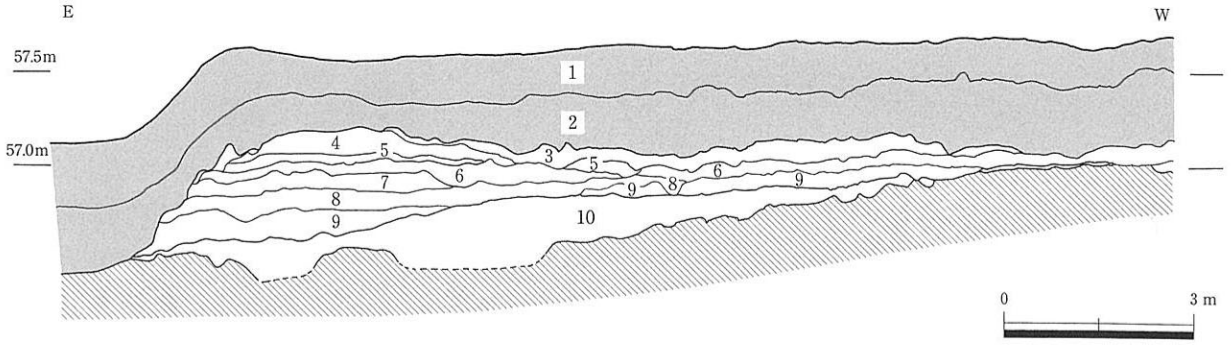
図67　E地区　落ち込み２出土遺物

6. F地区

F地区は、調査範囲の南端に位置する。圃場整備の際に造成された耕作地の段差が調査区中央を南北に通り、その造成によって、遺構面が部分的に大きく損なわれているため、遺構の検出状況に偏りがある。特に段差の下段で削平が著しく、南側の一部を除いてほとんど遺構が検出されない。原地形は北西→南東方向に傾斜していたものと考えられ、南側では部分的に包含層・遺構が確認される(図69)が、北側ではほとんどの場所で盛土直下が地山となっている。

遺構　検出された遺構はそれほど多くはないが、掘立柱建物が5棟検出された。出土する遺物から、奈良時代と平安時代の二時期があると考えられる。

図68　F地区　全体平面図



① 現代耕土・圃場整備盛土
② 圃場整備盛土（地山・包含層をブロック状に多く含む）
③ 中世～近世包含層　N7/1灰白色　細～粗砂
④ 中世包含層　10YR7/1灰白色　細～粗砂
⑤ 中世包含層　10YR7/2灰白色　細～粗砂
⑥ 中世包含層　2.5Y7/4浅黄色　細～粗砂
⑦ 中世包含層　2.5Y7/2灰黄色　細～粗砂（層上面が酸化し黄色化）
⑧ 中世包含層　5Y7/1灰白色　細～粗砂（マンガン多く含む）
⑨ 古代～中世包含層　10YR7/3にぶい黄橙色　細～粗砂
⑩ 古代包含層　10YR5/2灰黄褐～5/4にぶい黄褐色　粘土～粗砂
⑪ 地山　5Y8/2灰白～8/4淡黄　粘土～細砂

図69　F地区　南壁断面図

奈良時代の遺構

奈良時代と考えられる遺構には、溝や掘立柱建物がある。溝10は地区南西隅で検出された。中世以前の段階において、東側に下る斜面地に向けて掘削されているものである。比較的しっかりした掘方で、付近の包含層から遺物が多く出土することから、単なる耕作痕跡ではなく区画や排水など、何らかの目的をもって掘削された溝である可能性が高い。埋土から奈良時代と考えられる土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

建物90と建物100(図70)は、いずれもほぼ南北に軸をもつ２間×２間の掘立柱建物であるが、東側が圃場整備の際に著しく削られており、さらに東側に規模が広がる可能性を残す。柱穴掘方は隅丸方形で、深さは検出面から0.4m程度を測る。軸をあわせて２棟が並んでおり、柱穴から出土する土器も同時期のものと見られることから、２棟の関連性が深いことがうかがえる。小規模な建物でありながら、柱穴掘方の規模が大きいため、倉庫などの性格が考えられる。柱穴には切り合いが見られるものも多く、建て替えや修復を行いながら、一定の期間で継続的な利用が行われたことがうかがえる。

建物90は、柱間1.5～1.8mを測り、北側に位置する建物100に比べると若干規模が小さい。柱穴から出土した遺物は、すべて細片で図化できるものはなかったが、奈良時代のものと考えられる。

建物100は、東側の柱穴が圃場整備時に著しく削られており、底部しか残存していなかった。柱間は

写真62　建物90(東から)

写真63　建物100(東から)

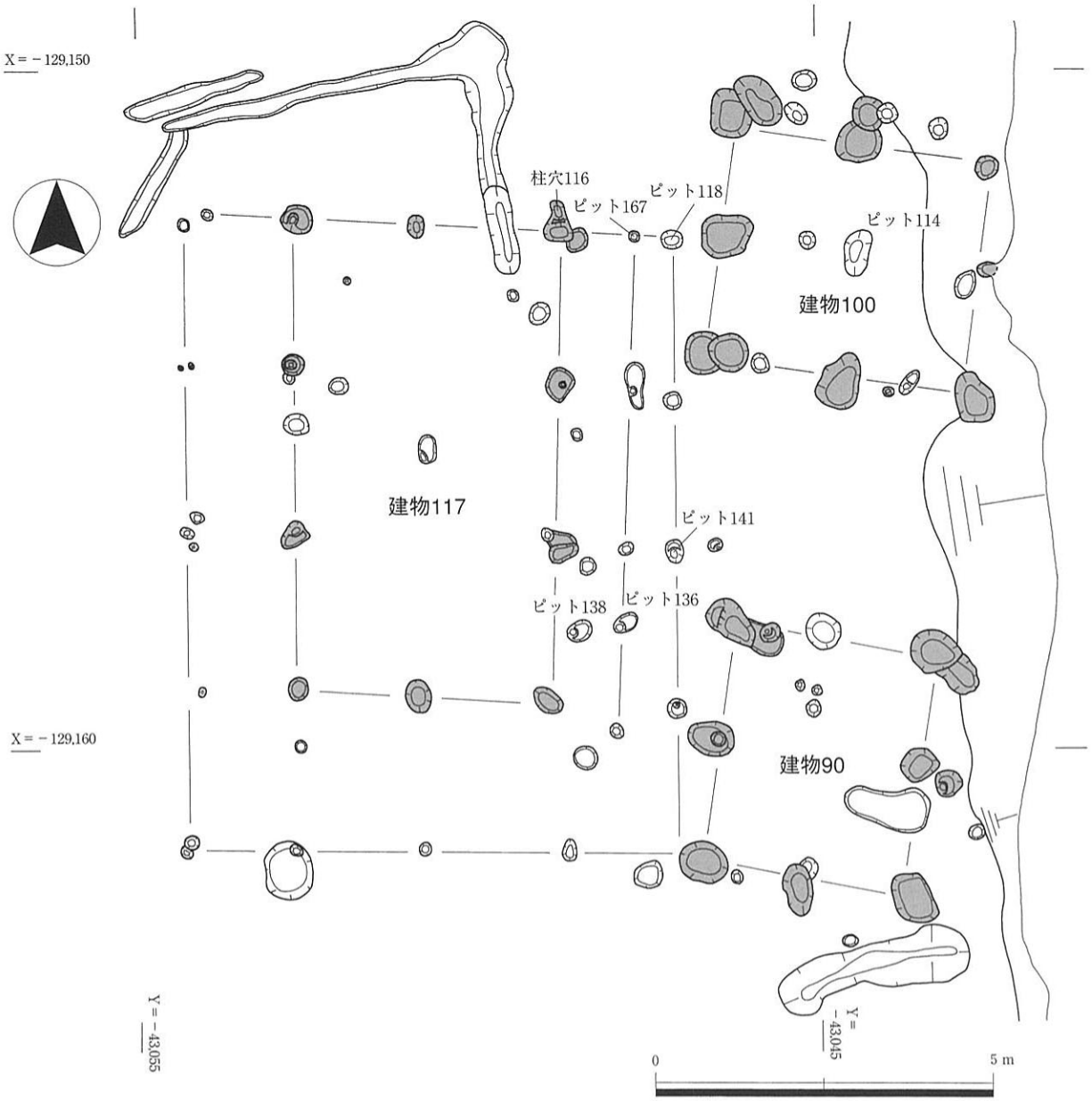


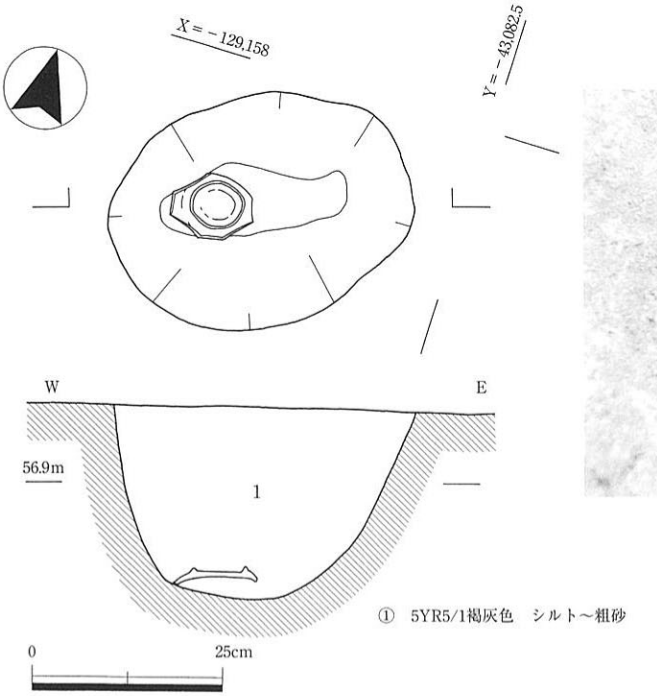
図70　F地区　建物90・100・117　平面図

1.8～2.0mを測る。建物プランの中央にピット114が位置しており、総柱の建物になる可能性があるが明確でない。柱穴から出土した遺物は、細片ばかりで図化できるものはなかった。

建物195は地区北側で検出された。周辺は削平が著しく、底部しか残存していないものの、径0.2m程度のピットがほぼ等間隔に並ぶことから、2間×2間以上の総柱の掘立柱建物と考えられる。柱間は1.7mを測る。掘方埋土からは遺物の出土がなく、時期は不明であるが、埋土の状況から奈良時代のものである可能性が考えられる。

平安時代の遺構

平安時代と考えられる遺構には、掘立柱建物やそれに関係すると見られるピットがある。ピットからは比較的多くの遺物が出土しているが、ほとんどが細片で図化できるものは少ない。遺物の出土は建物117付近で顕著に見られ、特に南東側に多い。ピット138からは黒色土器椀の底部が見込みを下に向けて出土した(図71)。この黒色土器椀は完形にはならなかったものの、隣接するピット136から出土した黒



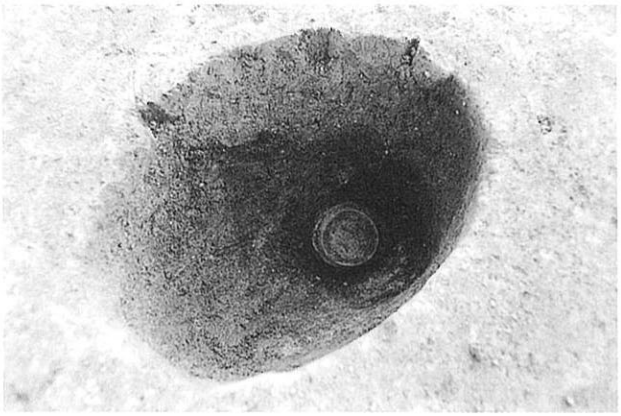


写真64 ピット138出土状況(北から)

図71 F地区 ピット138 平・断面図

色土器片と接合した(図75- 1)。これらのピットの埋土は、建物117を構成する柱穴埋土と近似しており、何らかの関連があると考えられる。

地区西側のピット120からは、北宋銭である元豊通寶(図79- 9)が出土した。

建物34(写真65)は、地区南東隅で検出され、建物南側が調査区外に広がっているため確実ではないが、2間×3間の掘立柱建物と考えられる。柱間は梁間2.1～2.2m、桁行1.4～1.9mを測る。ピット34からは図化できなかったものの、黒色土器の細片が出土している。周辺遺構からも黒色土器が出土しており、10～11世紀頃の建物と考えられる。

建物117(図70)は、地区中央付近で検出された。柱間は梁間1.7～2.1m、桁行2.0～2.2mを測る。付近では遺構が集中しており、建物の軸に合わせたピット列がいくつか認められ、建物117に伴うと考えられる。これらの中で、建物西側と南側のピット列を構成するピットは小規模で、数回にわたって柱を据え直した痕跡が見られ、簡素な造りの廂もしくは、軒先を支える柱であると考えられる。それに対し、建物東側には2本のピット列が認められる。ピット167から南のラインとピット118から南のラインである。

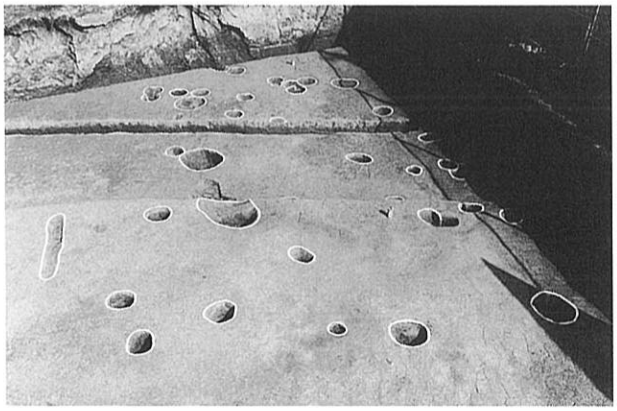


写真65 建物34(西から)

写真66 建物117(北から)

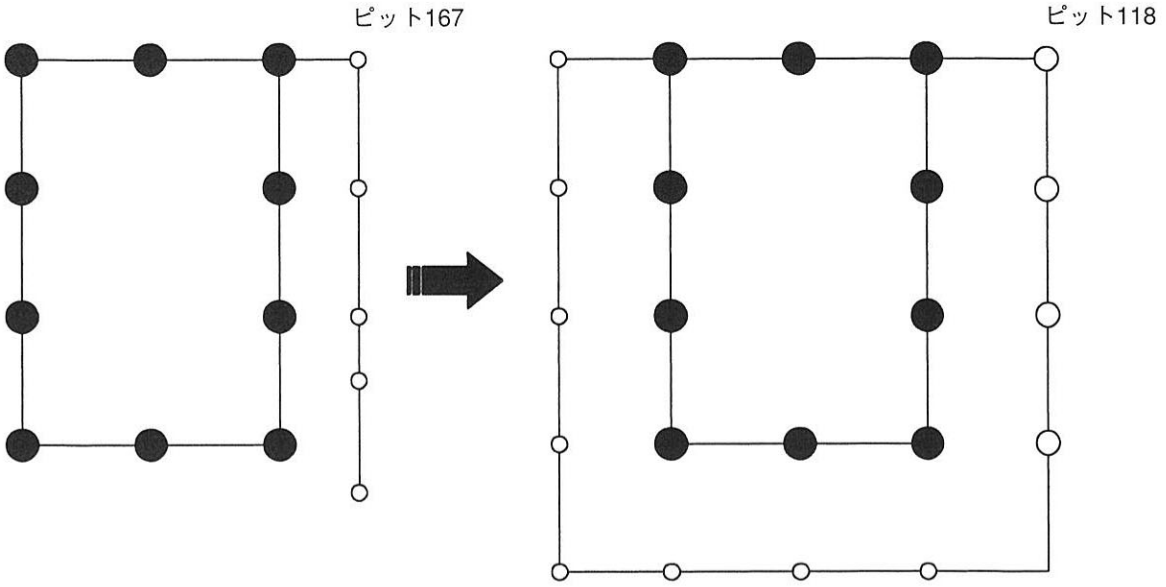


図72　F地区　建物117　変遷模式図

ピット167のラインは、建物西側・南側のラインが構成するプランの軸とは若干のずれが見られる。ピット118のラインにあるピットは径20㎝ 程度と他のピット列のものと比べて大きいが、建物西側・南側のラインが構成するプランと合致する。このことから、建物117は小規模な改築を行っていることが推測され、東側の一面に廂をもつ建物であった時期と、西・南・東側の３面に廂をもつ三面廂の建物であった時期があると考えられる(図72)。三面廂であった時期の建物としては、東側のピット列のみピットの規模が大きいことから、南側と西側の２面とは上部構造が異なっていた可能性が高い。

この建物の柱穴からは、細片ながらも遺物が出るものが多く、特に東側に集中していることから意図的な土器片の埋納が行われた可能性を考えることができる。遺物には土師器のほか、黒色土器があり、平安時代後半頃の建物と考えられる。

遺物　遺物は包含層が良好に残存していた南側で多く出土した。近世の陶磁器、瓦質土管、黒色土器、須恵器、土師器など、多様な遺物が出土している。

盛土・包含層出土の遺物

図73は盛土・包含層から出土した遺物である。

染付け碗(1～3)　いずれも肥前波佐見焼の染付けで、いわゆるくらわんか碗と呼ばれるものである。１は外面雲輪草花文をめぐらし、高台内面には「大明年製」の略字銘が見られる。時期は18世紀前半である。２は18世紀後半のものである。

陶器碗・擂鉢(3･4)　３は肥前嬉野焼内山窯産陶器碗である。内面と外面高台よりやや上まで施釉しており、内面見込み部分に蛇ノ目釉剥ぎを行っている。高台内の深さが高台脇より深いことから18世紀中頃のものと考えられる。４は丹波焼の擂鉢である。６条１単位の擂目をもつ。

土管(5)　瓦質の土管の先端部である。

黒色土器碗(6)　内面のみ黒色化させるＡ類碗で、ハの字状に比較的しっかりした高台がつく。磨耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面にやや強いヨコナデを施す。

須恵器壺(7)　底部のみ出土した。太い高台がつく。全体にナデ仕上げする。

須恵器坏蓋(8)　平坦な頂部で擬宝珠つまみがつき、口縁端部内面に断面三角形のかえりをもつ。頂部

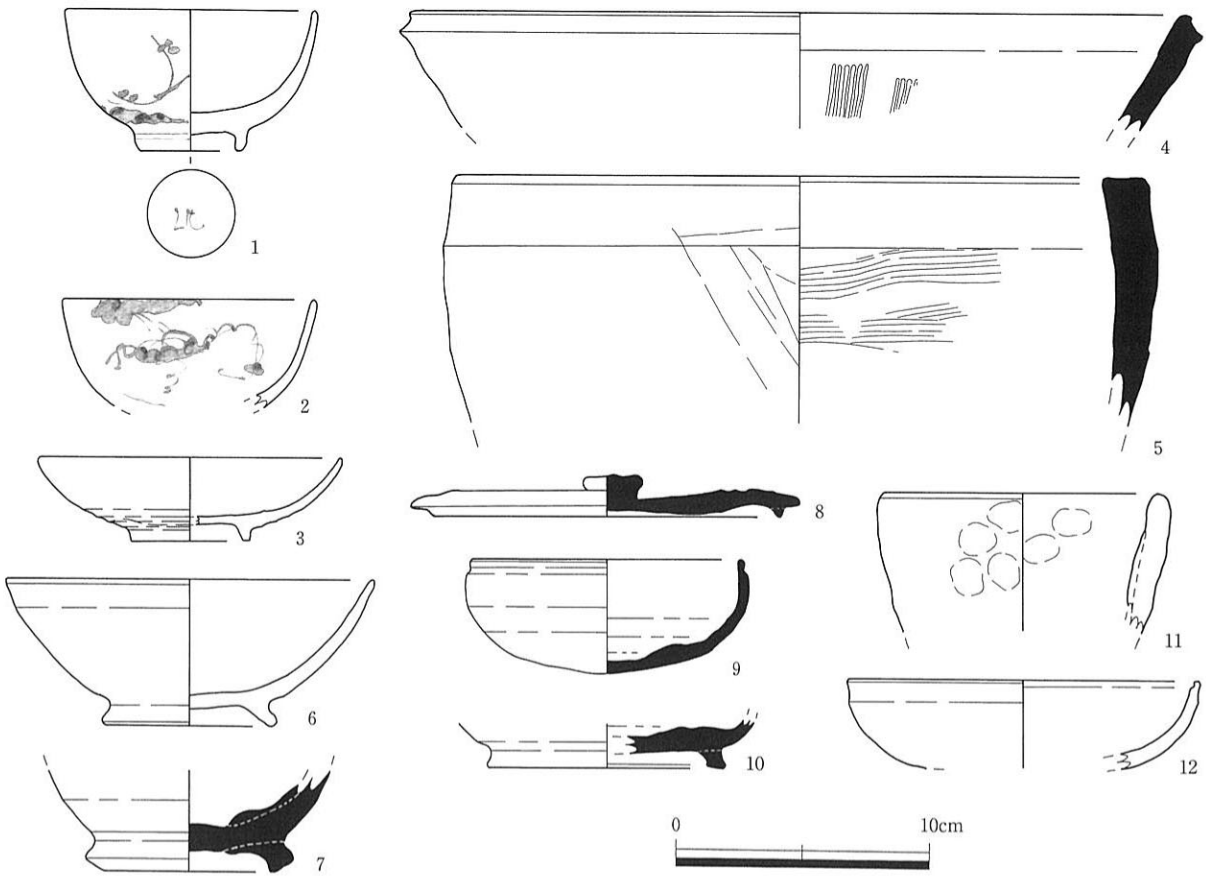


図73　F地区　盛土・包含層出土遺物

外面は回転ヘラケズリ後ナデ仕上げする。

須恵器椀(9)　半球型の体部をもつ。口縁部外面に強く回転ナデを施し、端部は丸くおさめる。

須恵器坏(10)　底部のみの残存である。底部端に太い高台がつく。

製塩土器(11)　奈良時代の製塩土器である。断面が厚く、砂粒を多く含む内外面とも指オサエを行う。

土師器坏A(12)　口縁部外面に強いヨコナデを施し、端部は丸くおさめ内面に沈線がめぐる。調整は磨耗のため不明である。

包含層出土の遺物

図74は包含層から出土した遺物である。包含層は調査範囲の西側で良好に残っており、1～9は上層包含層から、10～13は下層包含層から出土した。白磁椀、緑釉陶器椀、土師器、須恵器が出土した。

白磁椀(1)　底部のみの出土である。内面見込み部に段をもつ。

緑釉陶器椀(2)　底部から体部下半にかけて残存している。表面は磨耗しているが、底部内外面に緑釉の付着が認められた。

土師器坏A(3)　体部は内弯して立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部内面に沈線をめぐらせ端部は丸くおさめる。

須恵器坏B(4～6)　いずれも体部が外方に立ち上がり、口縁部は大きく外方に開く。底部端に太い高台がハの字状につき、底部と体部の境が不明瞭である。6は底部外面にヘラケズリを施す。

須恵器壺蓋？(7)　頂部は欠損しているが、縁部が垂下する。縁部外面に凹線が2条めぐる。口縁端部は内傾する面をもつ。

土師器羽釜(8･9)　8は口縁部が直立し、端部に強い横ナデを施す。9は口縁端部がやや内傾する。鍔

は口縁部直下に付き、ナデにより境目が目立たなくなっている。摂津地域でよく見られるタイプである。

須恵器鉢(10)　東播系須恵器の鉢である。口縁部のみの残存である。口縁部が上下に大きく肥厚する。

須恵器壺(11)　壺の口縁部である。口縁端部に回転ナデし、やや尖らす。外面に２条の凹線をめぐらす。

円面硯(12)　上面のみ残存している。使用痕が認められる。

遺構出土の遺物

図75は遺構から出土した遺物である。黒色土器椀、須恵器甕、土師器皿が出土した。１はピット136・138、柱穴116・118から出土した接合資料である。

黒色土器椀(1・2)いずれも内面のみを黒色化させたＡ類椀である。摩滅が著しく、調整は不明瞭であるが、口縁部外面にヨコナデを施す。

須恵器坏Ａ(3)　口縁部は内弯して立ち上がる。全体に回転ナデを施す。

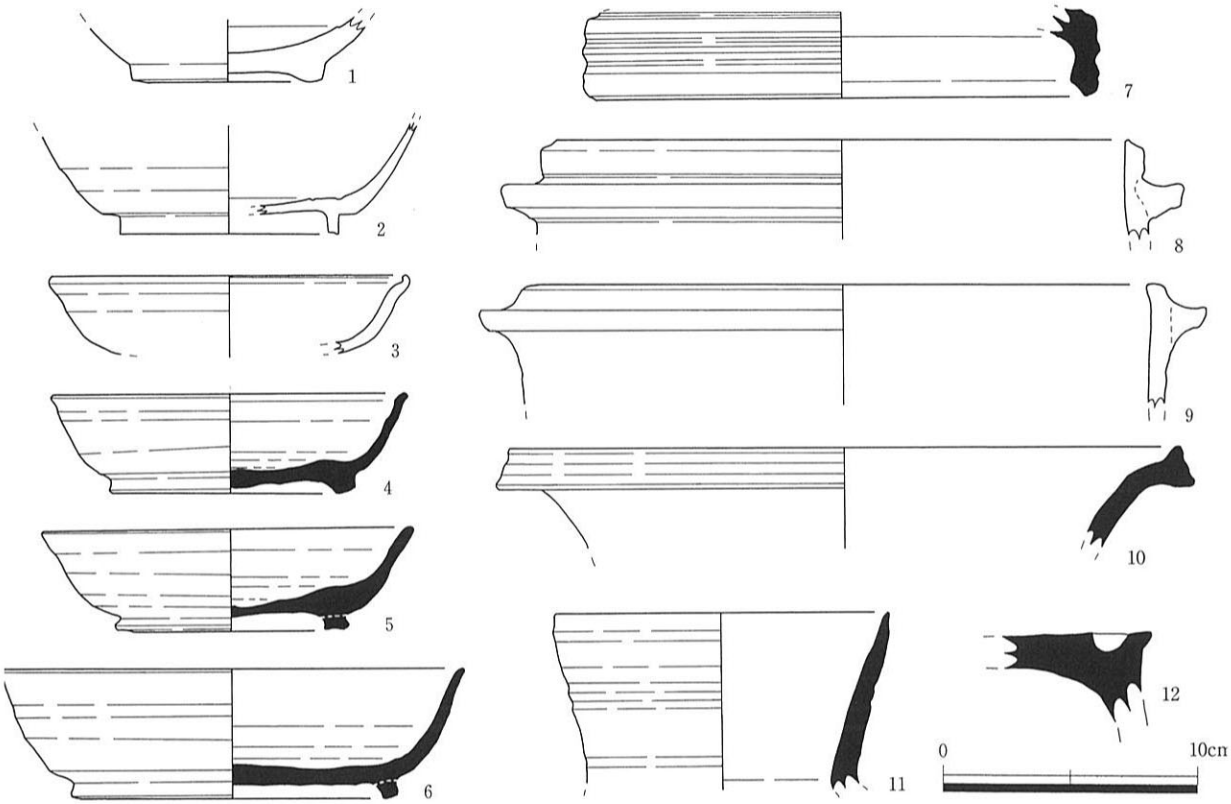


図74　Ｆ地区　包含層出土遺物

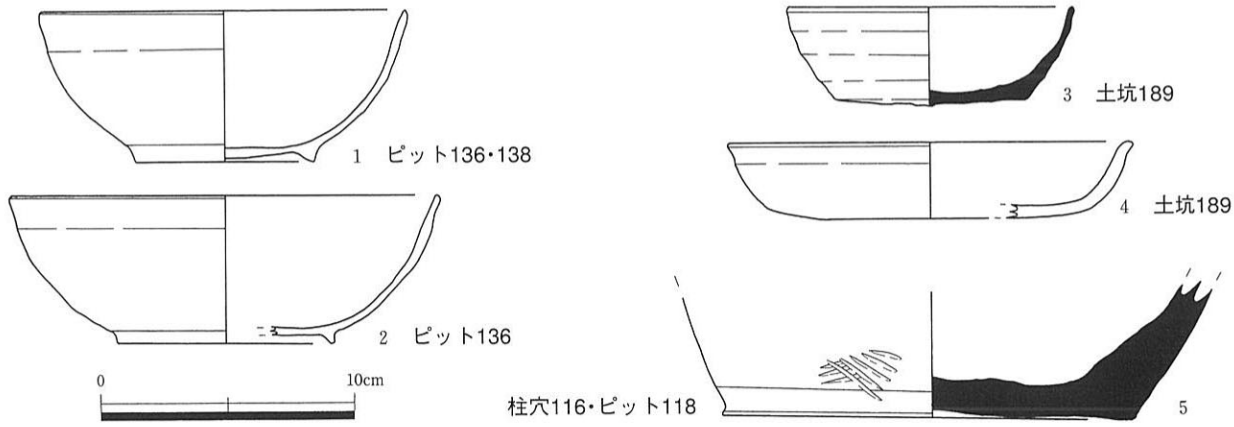


図75　Ｆ地区　遺構出土遺物

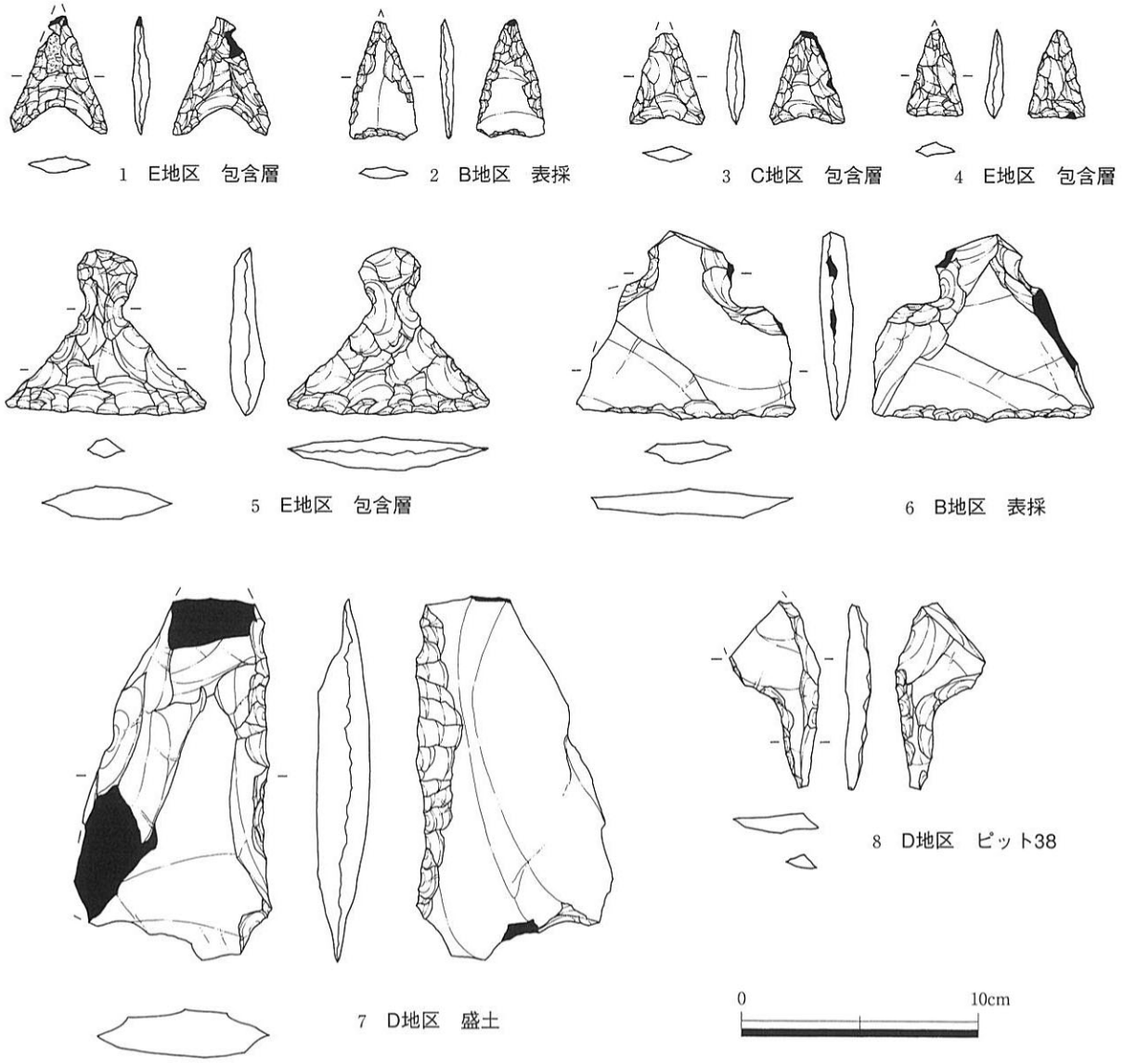


図76 A～F地区 出土石器

土師器皿(4) ヨコナデにより口縁部を外反させる。表面は摩耗が著しく、調整が不明である。

須恵器甕(5) 底部近くまでタタキを施した後、粗いナデを施す。

A～F地区で出土したその他の遺物

石器

図76はA～F地区から出土した石器である。原位置を遊離した状態で出土している。石鏃、石匙、スクレイパー、石錐がある。また、図化できなかったがサヌカイトの石核が3点出土した。なお、石材の産地は肉眼観察によるものである。

石鏃(1～4) 1は凹型無茎式で、一部欠損が見られる。表面の中央部に自然面が残り、裏面は中央部にわずがであるがこぶ状の高まりがある。2～4は平基無茎式である。2は両面とも素材面を大きく残している。4は先端部に衝撃剥離痕が認められた。1・2は二上山産サヌカイト製である。

石匙(5･6) 5は刃部が横長の二等辺三角形を呈する。6はおそらく金山産サヌカイト製で、薄い素材

図77　A～F地区　出土石製品・砥石・その他

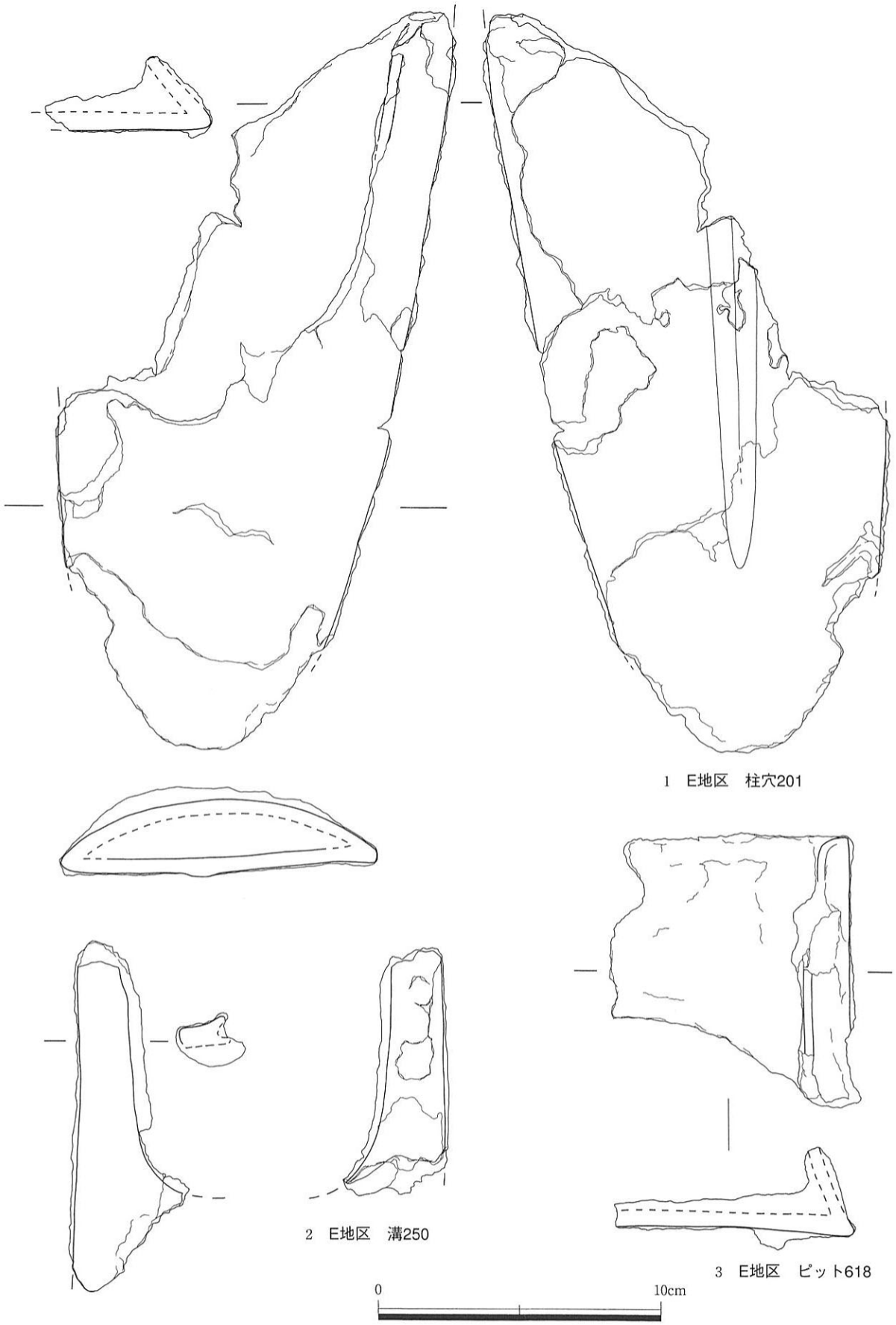


図78　A～F地区　鉄製品（1）

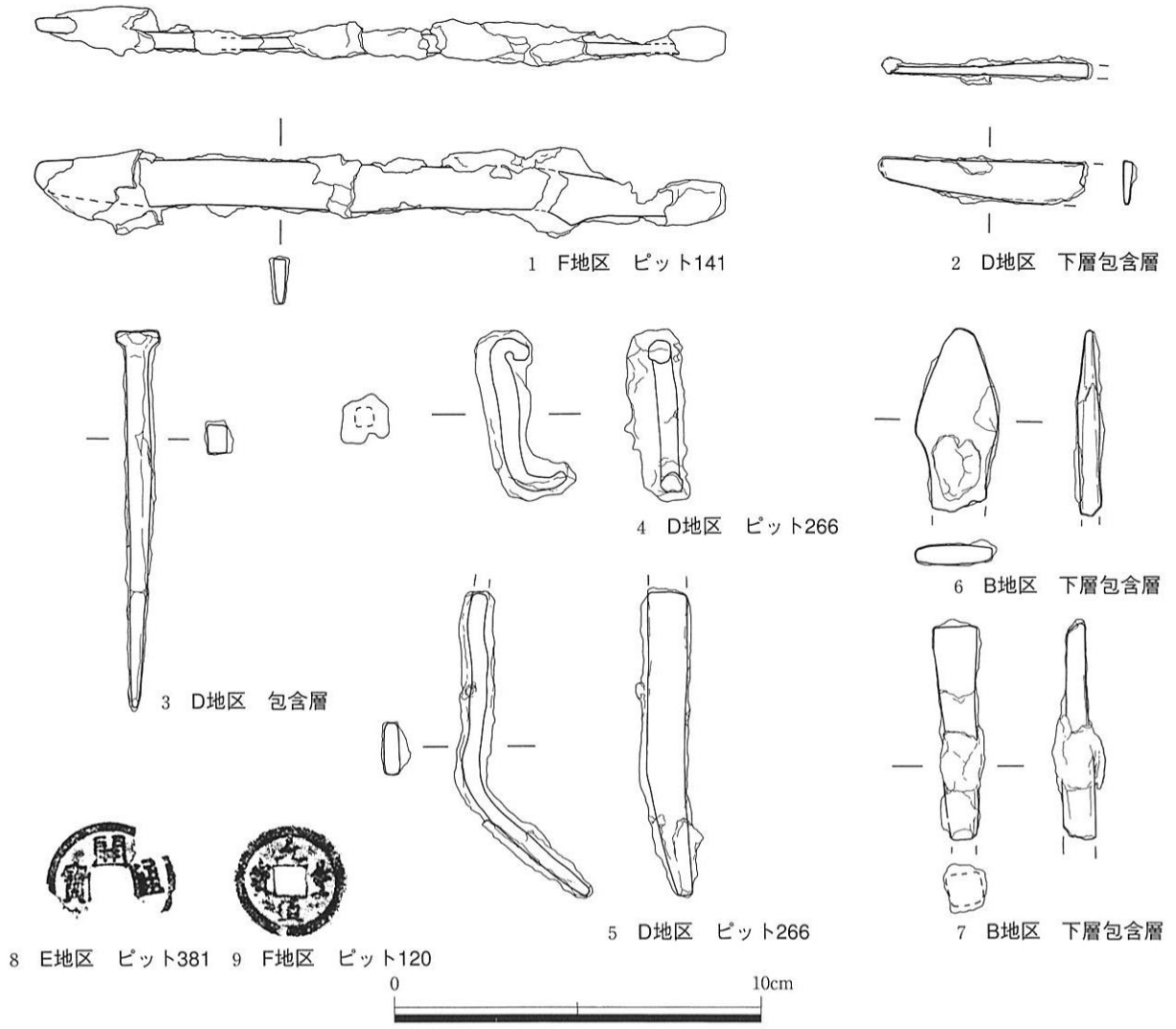


図79 A～F地区 鉄製品(2)・銭貨

に簡単な二次加工を施した粗製品である。つまみの部分も太く、刃部は肩の張った台形を呈する。

スクレイパー(7) 裏面に主要剥離面が残る。二上山産サヌカイト製である。

石錐(8) 上下先端部が欠損する。明瞭な二次加工が施されているが、刃部に使用痕が見られない。

石製品、その他の加工品

図77はA～F地区から出土した、石製品・その他の加工品である。

砥石(1～5) いずれも熱性の変質を受けた変質石英安山岩製の砥石である。同じ石材の砥石は粟生間谷遺跡でも出土している。1は仕上げ砥である。一面に断面V字状の溝があるが、これは使用時の傷と思われる。また短側面の角には細かい溝が幾筋もみられ、刃先など鋭利なものを研いだと考えられる。この石材は他のものと色調が異なり、全体に灰色を呈し、割れ目は明橙色である。2～4は中砥あるいは仕上げ砥である。2・3は4面に使用痕が見られる。4・5は小型で、携帯用であったと考えられるが紐を通す穴などは見られない。石製品はほかにチャート製の火打石が3点出土している。

敲石(6) ヒン岩系花崗岩の河原石を利用したものである。短側面に敲打痕が認められた。

石製品(7) 火山岩で被熱による赤色化がみられ、一面には黒色ガラス質が付着している。ガラス質付着部分には、直径約1.6cmのクレーター状の凹みがあり、熱で発泡したものと思われる。出土地点付近には奈良時代の羽口や鉄滓が出土した井戸230もあるため、鍛冶に関連する遺物の可能性が考えられる。

火山岩は被熱に強く、火を受けても割れにくいことから、意識的にこの石を選んで炉壁のような鍛冶関連の施設に利用したのかもしれない。

石鍋二次加工品(8) 滑石製の石鍋を二次加工したものと考えられる。側面には擦痕が認められることから、正方形に切断した後、丁寧に研磨したものと思われる。表面に方形のくぼみがあり、ここにも擦痕が残る。

瓦二次加工品(8) 近世の道具瓦を加工したものである。縁部を丸く研磨して仕上げている。裏面には剥離痕があり、2条の刻み目がついていた。めんこやおはじきのような玩具として使われたと思われる。

硯(5) 上面の角部分のみの残存である。

鉄製品(1)

図78はいずれも鉄製鋤である。次図もふくめ、鉄製品は錆化が著しいため、X線写真を参考に復元をおこなったが、欠損部分などについては不明瞭な点も多い。

1は平安時代の掘立柱建物18の柱穴上層から出土した。錆化が激しいため詳細は不明であるが、両端を折り曲げ、先端部が袋状になっている。残存長24.8㎝、最大幅(復元) 17.0㎝、袋状になった部分の最大の厚さは3.2㎝ である。裏面中央には幅約2㎝ の凌ぎが通る。形態から犂先と考えられ、12世紀前半の瓦器椀(図29- 2)と共伴する。2はU字形の鋤と思われ、左右を折り曲げる。幅は推定したものである。先端部の一部と考えられる厚さ約4㎜の破片も出土しているが、全体の大きさは不明である。13世紀頃の瓦器椀・東播系須恵器鉢(図65-10・16)と共伴する。3は1と同様に鉄板の左右を折り曲げたものと思われる。ピットの側面に引っかかるようにして出土した。時期のわかる共伴遺物はなかった。

鉄製品(2)・銭貨

図79は鉄製品と銭貨である。鉄製品は刀子・釘・鎹・鏃がある。

鉄製刀子(1・2) 1は刃部長11.4㎝、幅1.0㎝、厚さ0.2㎝ を測る。茎部は欠損しているかどうか不明である。X線写真の観察によると、関部の少し上で折れており、刃部と茎部の位置がややずれていることが分かった。また、折れた部分の錆膨れが激しいため関部の形態は不明であるが、X線写真より片関とした。刀身の反りは顕著でなく、造り込みは平造りと思われる。ピット141からは「ての字状口縁」の土師器皿と、黒色土器A類椀がそれぞれ破片で出土しており、時期は10世紀後半と思われる。2は切先のみ出土しており、残存長は4.3㎝、幅0.8㎝、厚さ0.1㎝ を測る。1に比べると、錆びの付着が少なかった。

鉄製釘(3・4) 3は残存長7.9㎝ で、基部の断面は方形、頭部が一方向に突き出ている。4は頭部を一度折り曲げたあとさらに内側に折り込む。基部の断面は方形と思われる。先端部は頭部と同じ方向にL字状に屈曲している。

鉄製鎹(5) くの字に屈曲し、先端部が尖る。幅0.8㎝、厚さ0.3㎝ の扁平な断面を呈し、片端は欠損している。5・4が出土したピット266からはわずかであるが黒色土器A類椀の破片が出土している。

鉄製鏃(6・7) 6は残存長3.7㎝ 最大幅1.7㎝ を測り、断面は扁平である。7は方頭の鏃である。中心あたりの錆が厚いため基部については不明である。

銭貨(8・9) 8は唐銭の開元通寶で、初鋳年は621年である。裏面に文字の鋳出しはみられなかった。9は北宋銭の元豊通寶で、初鋳年は1078年である。

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷とその位置付け

利用状況の変遷　当遺跡は近年の圃場整備により著しい削平を受け、残存状況が悪かったものの、奈良時代から現代に至るまでの間に居住地および耕作地として利用されていたことが確認された。検出された遺構・遺物から推定される利用状況の差違により、a）**奈良時代**、b）**平安～鎌倉時代**、c）**室町時代以降**の３時期に分けることができる。

奈良時代では、調査地の全域にわたって遺構・遺物が検出された。北接する庄田遺跡と合わせてみると、勝尾寺川と西側の丘陵部との間の段丘上に、広い範囲で掘立柱建物が分布する集落的な様相が推測された。

その後、平安時代になると、遺構・遺物の数量および分布範囲は急速に狭まり、局所的な分布を見せるようになる。耕作痕跡や包含層の状況から、この時期以降に小規模な造成を伴った耕作を行っていることは確実と考えられ、集落的様相を呈していた奈良時代とは大きく様相を変え、建物が散在しながらも、大部分が耕作地として利用されるような状況が想定される。

室町時代頃まではこのような状況が続いたと考えられ、遺構・遺物も局所的な分布でありながらも確認されるが、この時期以降になると、遺構・遺物ともにほとんど検出されなくなる。これからは当地が居住地としての性格を失い、専ら耕作地としての利用が行われはじめた状況を想定することができる。現況では調査地より段丘を下った勝尾寺川沿いに旧集落が位置しており、この時期以降に集村化した可能性が考えられる。

前章までは各調査地区ごとの報告であったため、ここでは各時代別に調査範囲全体を概観するとともに、特筆すべき遺構について所見を述べる。

a）奈良時代

奈良時代の遺構・遺物は全地区で検出されており、広い範囲で居住地として利用されている状況が考えられるが、北側のＡ・Ｂ地区においては、遺構・遺物が希薄である。両地区は原地形が西から東へ張り出す尾根上の傾斜地として復原され、居住地には適さなかったと考えられる。

検出される遺構・遺物は、北接する庄田遺跡と共通する部分が多く、当遺跡と一体の遺跡であると捉えることができる。ここでは、当遺跡の調査成果に加え庄田遺跡の成果を概観し、両遺跡の様相について検討を行いたい。

掘立柱建物　当該時期のものと考えられる掘立柱建物は９棟ある。そのうち半数にあたる建物90・100・130・515の４棟は、検出された限りでは２間×２間の小規模なもので、倉庫や納屋のような建物であった可能性が考えられる。庄田遺跡でも当遺跡と同様に、倉庫と考えられる掘立柱建物が数棟検出されているが、これらの建物の周囲10m以内には住居と考えられる建物が伴って検出されている。当遺跡では、倉庫状の建物が単独で位置するような検出状況となっているが、周辺の削平が著しいために掘方の深い倉庫などの建物柱穴以外の遺構が残存していないとも考えられ、庄田遺跡で見られるように近接して住居が伴っていた可能性がある。

倉庫と考えられる建物以外のものについては、住居としての利用が考えられる　Ｃ地区では建物31・

54が南北に並列して検出されており、周辺では区画性をもつと考えられる溝なども検出されていることから、さらに西側を居住空間として、遺構群が広がる可能性は高い。

E地区北側で検出された建物502は、今次調査の中では最も大きな建物である。この建物は現況棚田の縁辺部で検出されており、建物の西辺だけが畦の盛土下で削平されずに残存した状況である。確認された規模は4間分であるが、北側が地区外に伸び、南側が削平されている状況から、さらに規模を拡大する可能性を残す。

建物の規格性　建物の軸は方位に合わせており、桁行を南北にもつ(ただし、庄田遺跡では東西棟が4棟検出されている)。その中で、当遺跡ではE地区で検出された建物515のみ軸がやや東に振れる。庄田遺跡でも検出された13棟の掘立柱建物のうち、「建物跡1」とされた2間×2間の総柱建物のみ軸が西に振れている(表2)。

柱間寸法については、柱根や柱痕跡が確認できる柱穴が少なく、削平を受け全体が残存していなかったり、調査区外に伸びる建物があるため確実な数値ではないが、当遺跡の成果を見るかぎり建物31・54のように近接した住居と考えられる建物では同様の数値が見られることから、ある程度の規格性があった可能性がある。倉庫と考えられる建物では数値のばらつきが大きく、先述した建物軸が大きく振れるものがあるという内容も含めて、倉庫状の小規模建物の建造には、明確な規格性はなかったと考えられる。軸のずれるものは、主屋との配置関係や地形に規制されている可能性が考えられ、周辺調査の進展が待たれる。

瓦・製塩土器の出土　当遺跡では、該期の瓦の出土はE地区井戸4から出土した平瓦の細片が1片のみである。庄田遺跡でも少量であるものの、建物跡4とされた掘立柱建物の柱穴および、周辺の包含層から出土が見られ、担当者は建物跡4が部分的に瓦葺きであった可能性を指摘している。建物跡4は庄田

表2　奈良時代掘立柱建物規模一覧表

	地区名	遺構名称	規模	柱間(梁間)	柱間(桁行)	建物軸	備考
宿久庄西遺跡	C地区	建物31	2間？×3間	1.8m	2.1m	N-4°-W	
	C地区	建物54	2間？×3間	1.8m	2.1m	ほぼ真北	
	D地区	建物130	2間×2間	2.2m	2.2m	N-6°-W	倉庫
	E地区	建物502	？×4間？	—	2.5m	N-13°-W	
	E地区	建物512	2間？×？	1.4m	—	N-1°-E	
	E地区	建物515	2間×2間	1.4m	1.5m	N-29°-E	総柱建物、倉庫
	F地区	建物90	2間×2間	1.5m	1.8m	N-9°-E	倉庫
	F地区	建物100	2間×2間	1.8m	2.0m	N-8°-E	総柱建物？、倉庫
	F地区	建物195	2間×2間？	1.7m	1.7m	ほぼ真北	総柱建物、倉庫
庄田遺跡	A区	建物跡1	2間×2間	1.5m	1.7m	N-35°-W	倉庫
	C区	建物跡2	2間×2間	1.9m	1.9m	N-5°-W	倉庫
	C区	建物跡3	2間×3間	2.0m	2.1m	N-18°-W	
	B区	建物跡4	2間×3間	2.5m	3.0m	ほぼ真北	
	B区	建物跡5	2間×3間	1.9m	2.0m	ほぼ真北	
	B区	建物跡6	2間×3間	2.0m	1.9m	N-90°-E	東西棟
	B区	建物跡7	2間×3間？	1.3m	1.7m	N-90°-E	東西棟
	B・D区	建物跡8	2間×3間	2.1m	1.9m	N-92°-E	東西棟
	B・D区	建物跡9	2間×3間	1.7m	1.5m	N-86°-E	東西棟
	B区	建物跡10	2間×2間？	2.0m	1.6m	N-4°-E	南北に並ぶ一連の建物群
	B区	建物跡11	2間×2間？	1.9m	2.4m	N-4°-E	
	B・D区	建物跡12	2間×3間？	2.1m	1.7m	N-4°-E	
	D区	建物跡13	2間×3間	2.0m	1.5m	N-4°-E	

遺跡で検出された掘立柱建物の中で最も規模が大きく、２間×３間で柱間は梁間2.5m、桁行3.0mを測る。宿久庄西遺跡でも、Ｅ地区で検出された建物502が同様か、それ以上の規模になると考えられるが、周辺は著しく削平され瓦の出土も見られない。

製塩土器は、当遺跡ではＦ地区より細片が１点出土しただけだが、庄田遺跡ではＢ地区と呼ばれる北東側の調査区を中心として数十点の製塩土器が出土している。庄田遺跡Ｂ地区は先述の建物４をはじめとして、最も多くの建物が検出された調査区であり、南北に軸を合わせて並び一連の建物として理解される建物跡10～13が検出された地区でもある。これらの建物の中に何らかの形で塩を消費するものがあった可能性は高く、集中して出土する状況がそれを示唆する。

このような状況から、庄田遺跡と宿久庄西遺跡は、一体の遺跡として捉えることができることはほぼ間違いないものの、出土遺物とその分布状況において若干の相違点が見られることから、検出された建物の中には単なる住居や倉庫とは異なる性格を持つものがある可能性が指摘される。

遺跡の位置付け　当遺跡と庄田遺跡で得られた成果から、勝尾寺川と西側丘陵部に挟まれたごく狭い平坦地上に、建物群が建ち並ぶ状況を想定することができる。庄田遺跡の担当者は、都城で見られるような規模の大きな建物や、南北に整然と並ぶ建物群があること、出土遺物に硯や墨書土器があることなどから、これらの遺構は単なる農村集落ではなく、公的な施設であった可能性を指摘している。

当遺跡の調査においても緑釉陶器や円面硯が出土し、規模の大きな建物（建物502）があることから、同様の可能性を考えたが、公的な施設と考えるには少し不自然な点がある。

遺跡の南方を東西に走っていたと考えられる古代山陽道は、律令制で唯一の大路であったため、駅家においても瓦葺きであったことが文献面から知られており、近年の発掘成果によっても明らかになってきている。ところが、当遺跡と庄田遺跡で検出された建物群は、重い瓦葺屋根を支えるような礎石建物はなく、全て掘立柱建物であり、瓦の出土もほとんど見られないことから、瓦葺きの建物はなかったか非常に少なかったと考えられる。

また掘立柱建物の柱間には、共通した尺などは見られず、建物規模がばらばらである上、２間×３間の建物がほとんどで、４間以上の建物は、建物502に可能性があるくらいである。

出土遺物でも、帯金具もしくは石帯などの物証となる遺物の出土は見られず、墨書土器の出土量も少ない。そうなると、これらの建物群は駅家などの公的施設として評価するには積極的な物証に乏しく、集落として捉えるべきものと考えられ、ある程度有力な氏族の居住地として利用されていた可能性を考えることができる。

鎌倉時代初期に編纂された『神宮雑例集　巻一』には「聖武天皇天平十二年庚辰四月五日。春日御社奉遷壽久山御社。是右大臣大中臣清万呂卿致仕。籠居攝津國嶋下郡壽久郷之間。住家近所奉崇也。」との記述がある。これは天平十二年（740）に右大臣中臣清麻呂が壽久郷に籠居し、奈良の春日神社を壽久山に奉遷し、近くに住んでこれを奉った、という内容である。壽久郷は宿久庄周辺に比定されており、寿久山に奉遷された「春日神社」とは調査地の南西側にある春日神社と考えられる。そうなると、春日神社に近く、山陽道を見下ろす立地にある建物群は、中臣清麻呂（『読史総覧』「中臣氏略系」では、藤原鎌足の従兄弟の孫にあたるとされている。万葉集にも大伴家持らとともに歌を残す）一族の居住地であった可能性が考えられるのである。しかし、清麻呂が摂津に籠居したと伝える資料はこれのみであり、同年10月には、式部大丞を兼務しながら神祇大祐に任じられているため（『群書類従』「中臣氏系図」）、謹慎を意味する「籠居」という文言はやや不自然である。また、春日社が中臣氏の氏神として奈良春日

山に鎮祭されるのは、天平年間以後であるため、この所伝には疑問が残る。

粟生間谷遺跡からは、地鎮に用いられたと考えられる三彩小壺が出土している。この小壺による地鎮の対象物(地)については、近接する位置で確実に同時期のものと考えられる遺構が確認されていないため明確でないが、広域的な視野で見れば、小壺が埋められた位置から庄田・宿久庄西遺跡を視認することができ、周辺一帯を対象とした地鎮祭祀であった可能性も考えることができる。いずれにしても、当時貴重品であった奈良三彩を持つような集団がこの地に関係していたことは確実と考えられる。日本書紀には、大化改新前に中臣鎌足が三島の地に住んだことが記されており、茨木市中心部に位置する阿為神社は中臣藍連、太田神社は中臣太田連というように中臣氏の氏神を祭った神社もあることから、摂津地域は中臣氏の勢力の強い地であるといえる。『神宮雑例集』に見る所伝が誤りであったとしても、中臣氏を初めとする有力な氏族が居住地としていた可能性は十分にある。

古代山陽道と開発　早くから開けていた茨木市中心部に比べ、当遺跡周辺の茨木市西部および箕面市東部では、奈良時代以前の遺跡の分布は希薄で、それほど活発な利用が行われていなかったと考えられる。しかし、奈良時代に入ると、勝尾寺山から南東方向に尾根状に伸びる丘陵と北摂山地の間の開析谷内には、勝尾寺川沿いに遺跡が点在するようになる(図80)。特に粟生間谷大日遺跡・粟生間谷遺跡・庄田遺跡・宿久庄西遺跡では、それぞれ奈良時代の遺構・遺物が確認されており、その関係性は興味深い。

このように奈良時代になって、調査地周辺の開発がはじまる背景には、古代山陽道の整備が契機になっていると考えられるが、現在のところ、当遺跡南方の古代山陽道の通っていたルート沿いには周知の遺跡が全くない。しかしながら今後周辺の開発に伴う調査により、畿内と山陽道諸国、大宰府までを結ぶ交通の要衝として重要な遺跡が確認される可能性は高く、成果が期待される。

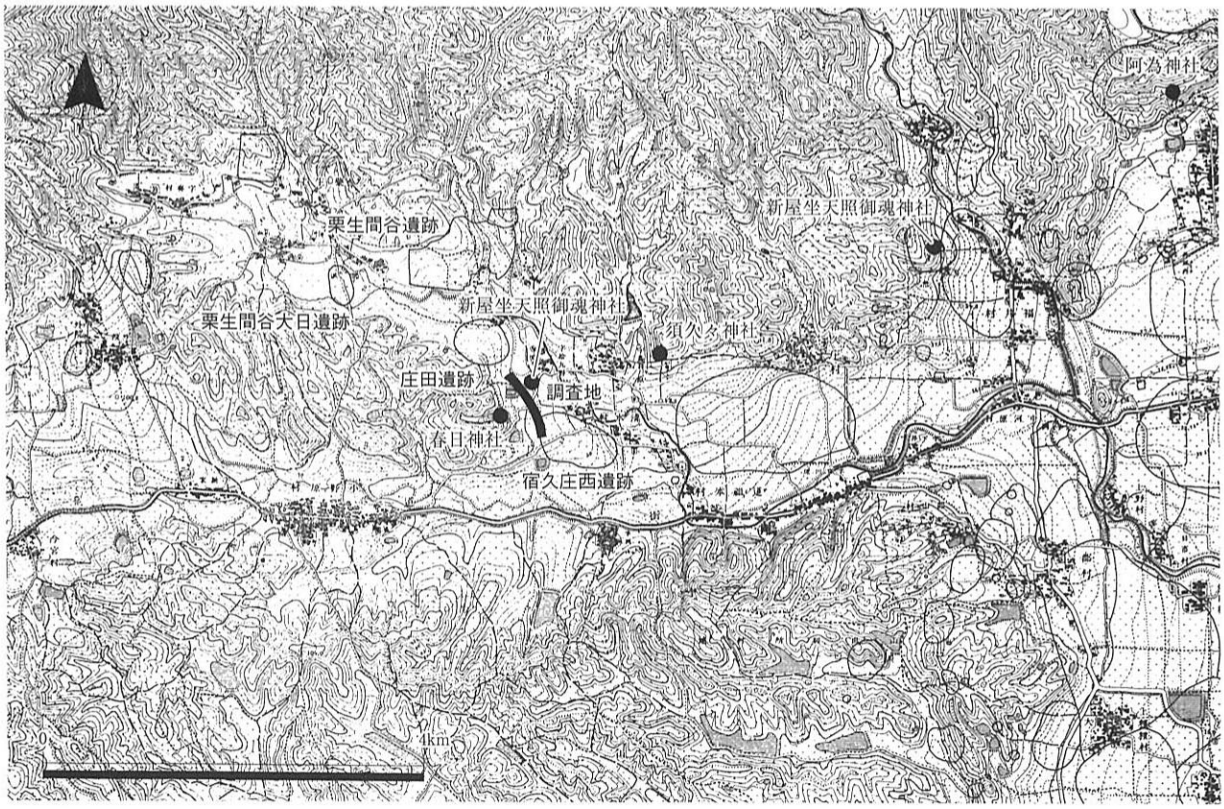


図80　周辺遺跡分布図(明治十八年測量　大日本帝国陸地測量部を一部改変)

焼土坑　その他、この時期の特筆すべき遺構として、焼土坑と呼称した土坑が６基ある。これらの土坑は、規模・形態ともに近似し、範囲の差こそあれ壁面が被熱し、埋土に炭化物を多く含むという共通点から、同様の用途に用いられたものと考えられる。ここではＢ地区で検出された焼土坑１と112の比較を通じ、その性格について検討してみたい。

既に述べた通り焼土坑１では、被熱した壁面がほぼ全面に残存していたのに対し、焼土坑112では一部を除いて、ほとんどの壁面が失われている。埋土の状況を見ると、焼土坑１では下層に炭化物の集積が見られるが、焼土坑112では焼土と炭化物を含む単一層となっている。ここで両土坑が同種の遺構であるという前提に立った場合、本来は焼土坑112にも被熱した壁が全面に認められ、炭化物の集積が確認されるはずである。これらは経年により自然に失われる性質のものではないため、人為的に失われたものと考えられる。しかし、焼土坑１のように壁面が全面に残るものがあることから、壁面を削ることが主たる目的ではないことは明らかで、あくまで副次的な現象に過ぎないといえる。

では、主たる目的とはなんであったのか。土坑内で燃焼行為を行っていることは疑いなく、壁面を削り取るような行為の実態は、何らかの焼成物を取り出すことだと考えられる。焼土坑112の場合は、土坑内部の焼成物を取り出す際に、炭化物・被熱した壁面を同時に掻き出してしまったものとして理解される。焼土坑１の場合は、内部の焼成物のみ取り出したため、壁面は失われず、下層の炭化物層も残ったものであろう。西側の隅のみ壁面が失われているが、ここから焼成物を取り出したのかもしれない。

以上のように考えて、焼土坑の性格としては何らかの焼成遺構である可能性が高いといえる。遺構規模が小さいものの、一定数の土器片や骨片などの出土がないことから、土器窯や火葬墓などではなく、木炭などを焼成する窯であると考えたい。また、焼成物を取り出す際に、意図せず壁面を壊していることは、上部構造の存在を示唆するものといえる。

また、本遺構の帰属時期について、層序関係などの検討を経て、奈良時代を比定したが、出土遺物が少なく細片のみであるため、より新しい時期に比定される可能性を残すことは付け加えておく。

ｂ－１）平安時代

平安時代全般を通じて遺構・遺物が検出されているものの、量的には少ない。Ｃ・Ｅ・Ｆ地区で４棟の掘立柱建物などが検出されたが、各時期によって検出される場所が異なり、切り合いもないことから、居住地を移しながら土地利用を続ける状況が考えられる。勝尾寺川対岸の粟生間谷遺跡の調査では、耕作地範囲の拡大に伴って、居住地が移動していく状況が見受けられ、当遺跡においても耕作地の状況や範囲などが深く関連していると考えられるが、後世の削平により旧耕作地の状況復原は難しく、居住地移動との相関関係を見出すことはできなかった。

利用の断絶　奈良時代以降、最も古いと考えられる遺構に、Ｅ地区で検出された建物529がある。この建物は９～10世紀のものと考えられるが、その周辺以外にこの時期の遺構・遺物はほとんど確認できない。こうした状況は奈良時代で確認された広範囲に建物が建ち並ぶ集落的様相とは大きく異なり、居住地としての規模が極端に縮小していることを意味する。このことから、集落の性格が有力者集団の居住地からいわゆる小規模な農村へと変化した可能性を考えることができる。８世紀後半頃から９世紀後半頃まで遺構・遺物ともに確認されない期間があり、集落の廃絶から農村としての再開発が始まるまでの間は、積極的な土地利用が行われなかった可能性がある。Ｅ地区の溝420や井戸460など奈良時代の遺構において、廃棄後に自然堆積によって埋没していった状況が見られるのは、その傍証ともいえる。

平安時代に再度開発が行われ始めてから以降、室町時代までは、局所的ではあるものの継続的に居住

地として利用されたことをうかがわせる遺構・遺物が見られる。

居住域の設定　Ｆ地区で検出された建物34・117は、柱穴からそれぞれ黒色土器が出土しており、11世紀頃のものと考えられる。他地区で該期の遺構がほとんど検出されないにもかかわらず、当地区では盛土・包含層から比較的多く遺物が出土することから、この時期には当地区周辺を居住域としていた可能性が高い。

Ｃ地区で検出された建物18は、柱穴から瓦器椀が出土していることから、建物34・117よりやや新しく12世紀前半のものと考えられる。北東隅の柱穴201では、鉄製の犂先を埋納した状況が確認された。これについては、あまり類例もなく性格は不明であるが、地鎮祭祀などに用いられたのであろうか。

周辺では土坑41など、同時期のものと考えられる遺構が検出されている。北側のＢ地区でも包含層やピット101などから同時期と考えられる遺物の出土が見られることから、この時期にはＢ・Ｃ地区周辺を居住地として利用していた状況が想定される。

ｂ－２）鎌倉時代

鎌倉時代では各地区で耕作痕跡が確認され、平安時代の状況と同じく斜面地を造成して造り出した平坦な耕作地の中に住居が散在する状況が想定される。この時期の遺物は、ほとんどがＥ地区の溝249周辺からの出土であり、また包含層からの出土が比較的少ない。これは耕地としての利用がより進んできたためと考えられ、耕作土と考えられる包含層に奈良・平安時代の遺物が多く混入している状況も、耕作による下層の攪拌に起因すると考えられる。

この時期の遺構としては溝が比較的多く検出され、耕作用の水路であると考えられるが、中でもＤ地区の溝223とＥ地区の流路249は、西側の丘陵から勝尾寺川に向けて流れる幹線水路として利用されていたと考えられる。周辺ではピットを中心とした遺構が多く検出され、用水の便のいい場所を生活の場として利用している状況が看取される。

これらの溝には、区画溝としての性格を持っているものもあると考えられるが、調査では、規則的な区画単位などは確認できなかった。圃場整備以前の航空写真などを見ても、整然とした区画単位は見られず、地形に合わせて棚田状の耕地経営を行っていたようである。

また、耕作地段差の際には浅い溝が掘削されていることが多い。これは導排水と水量調整のためのものと考えられるが、段差造成の際に混入した下層の遺構・包含層などの遺物などが、一括して溝内に廃棄されている状況があると考えられ、古い時期の遺物が多く出土する溝もある。

ｃ）室町時代以降

室町時代以降は遺構・遺物がほとんど検出されない。これは調査地周辺の耕地利用がさらに進み、散村的ともいえる状況から、現在の集落域へ集村化していった状況を示唆するものと考えられるが、これについては今後の周辺調査に期待したい。なお、隣接する庄田遺跡においても同様の傾向が見られ、鎌倉時代以降の遺構・遺物はほとんど検出されていない。しかし、粟生間谷遺跡においては、鎌倉時代中頃以降でこうした変化が見られるようである。居住地の大規模な移動というものが、どのような契機によって行われるのか不明であるが、おそらく村単位でその時期も異なるのであろう。

第２節　遺物総括

1．各時期の様相

宿久庄西遺跡からは、コンテナ数で70箱前後の遺物が出土した。後世の削平のため、盛土・包含層から出土した遺物が多い。遺物は大きく奈良時代と、平安～鎌倉時代のものに分けられ、室町時代以降のものは少ない。実測できなかった遺物も含めての全体的な遺物の出土傾向としては、奈良時代の遺物は調査範囲全域から出土するが、平安時代以降の遺物の出土の量は地区ごとに異なり、散在的な状況である。古代の遺物は、特筆すべきものも多く、当時の集落の様子がうかがえるものが多い。以下、時期別に気が付いたことなどをまとめ、出土遺物から見た宿久庄西遺跡を概観する。

ａ）奈良時代

須恵器・土師器の日常生活容器のほかに、円面硯が破片であるが６点、水滴として使われていたと思われる小型の壺（図62- ５）・平瓶（図57-23）が出土している。これらの遺物から、当遺跡に官人層や有力な氏族の居住地、あるいは役所的な性格があった可能性がうかがえる。

遺物は調査区全域の盛土・包含層中からも多く出土しており、検出できた遺構だけでなく、削平 を受けたところでも当時の遺構が残っていた可能性がある。特に掘立柱建物が検出されたＣ地区西側やＤ地区西側から出土した遺物は残存状況もよく、量も多い。

出土した遺物の中で、時期を比定できそうなものとして、Ｅ地区土坑１やＣ地区落ち込み46出土遺物があげられる。古いものでは、かえりのつく須恵器坏蓋が、縁部を垂下させるものと共伴しており、土坑１出土の土師器鉢（図61-10）が、黄灰色を呈し口縁部が内弯する器形と体部外面にハケ目を施している点が平城宮ＳＤ1900Ａ出土の鉢Ａに近似している。しかし、他に平城宮Ⅰ期以前と比定できるものはなく、時期の中心はもう少し下ると推察される。

そして、Ｅ地区盛土・包含層出土の深い縁部を持った壺Ａ蓋（図57-17～19）は平城宮Ⅱ期で類例が見られる。２段の斜放射暗文を施した坏Ａ（図61- ５）は下限が平城宮Ⅲ期とされており、遺構出土の遺物は、平城宮Ⅱ・Ⅲ期が中心と推察される。須恵器杯Ａ・Ｂについても形態差がほとんどなく、法量による規格性の存在が考えられ、また、かえりをもつ杯蓋が多少なり出土している。その他の奈良時代の遺物についても、型式的な変化があまり認められないことから、奈良時代の前半から中頃に収まるものと推定できるだろう。

一方、Ｄ地区井戸230からはこの時期の鍛冶関連遺物が出土している。鉄滓は鉄滓中に含まれる鉄分が少ないことから、鍛冶作業の最終段階もしくは鉄製品の修理程度の作業過程で発生したものと思われる。鞴の羽口は残存状況も良好で、器面には丁寧にヘラケズリを施しており、断面が多角形状を呈し、長さが約18㎝ を測ることから、大型のタイプであるといえる。数次に亘り使用されたことが看取でき、居住域内に鍛冶作業を行う場があったことが想定できよう。

先述したように、この地域では740年に中臣清麻呂という官人が、移り住んだという話が伝わっている。実際に居住していたかどうかは定かではないが、740年という年代と、遺物から考えられる時期が非常に近いことは興味深いことである。

ｂ）平安～鎌倉時代

平安時代以降の遺構が残っていたＣ地区北半、Ｅ地区、Ｆ地区で遺物が多く出土した。またＢ地区ではこの時期の遺物を多く含む包含層が残っており、遺構があった可能性がある。また、この包含層中か

らは土馬が出土しており、祭祀的な意味を持つ遺構の存在もうかがえる。遺物は先述したように散在的に出土する傾向があることから、奈良時代とは集落様相が異なっており、居住地が小規模になって時期によって移動していたと思われる。遺物は中世まで断続的に続いているため、便宜上、平安時代と鎌倉時代の２つに時期に区分した。前者はさらに細分が可能と考えられる。

ｂ－１）平安時代

奈良時代からこの時期までは、半世紀から１世紀分の空白がある。Ｅ地区で外面にヘラケズリを施す土師器坏が数片出土している。Ｅ地区東半では、調査範囲より東へ伸びる建物が検出されており、この時期の居住地が範囲外に広がると考えられる。

そして、Ｆ地区の建物柱穴とＤ地区の包含層から、内面のみ黒色化する黒色土器Ａ類が出土する。Ｄ地区出土の黒色土器は実測不可能な破片ばかりであるが、他の地区よりも比較的多く出土しており、遺構があった可能性がある。

その後居住地は移動し、Ｃ地区北半とＥ地区で、12世紀初め頃（森島編年のⅠ－３～Ⅱ－１期、尾上編年のⅡ－１期に相当）の瓦器椀が出土する。Ｃ地区土坑41では和泉型・楠葉型の瓦器椀が、土師器皿と共伴し、これらの土師皿は、口縁形態が「ての字」状のものと、外方に開くものがある。「ての字状口縁」の皿は、器壁が約３㎜と比較的厚く、ての字の表現がややくずれる。一方、口縁部が外方に開く土師器皿は、この「ての字口縁」の皿とは時期差はほとんどないようであるが、やや後出であるとされる。瓦器椀の時期から、これらの土師器皿も12世紀前半までに比定できると考えられる。

ｂ－２）鎌倉時代

鎌倉時代以降の遺物と断定することは難しいが、Ｃ地区集石遺構202は建物18廃絶後のものと考えられる。しかし、この時期以降の居住地はＥ地区付近に移動するようである。前の時期より、新しい段階の瓦器椀が出土するほか、瓦質三足釜、石鍋、土師器皿が出土している。瓦器椀は器面の調整の省略化が進み、高台は退化した様子から尾上編年のⅢ－３～Ⅳ期に相当すると考えられる。また、口径・器高が小さくなる例もあるため、さらに時期が下る可能性がある。一方、土師器皿は口縁部外端面を面取りして、断面が三角形状となるといった特徴があることから、13世紀後半のものと思われる。ただし、これらは単体で出土しており、瓦器や土師皿の時期を直接結びつけることはできない。

ｃ）室町時代以降

Ｅ地区では引き続き、室町時代以降の遺物が出土する。底部を上げ底状に持ち上げる「へそ皿」や、瓦質羽釜がある。瓦質羽釜は口縁部を内弯するものと、直立するものがあり、直立するものは口縁外面の凹線が省略されるという型式変化が見られる。中世の遺物はこのようにＥ地区で残るものの、全体に減少していき、近世の陶磁器がＡ地区などの盛土・包含層でわずかに出土する程度である。先述したとおり、集落が他へ移り、遺跡周辺が耕作地として利用されるようになったことがうかがえる。

2. 須恵器坏の規格性について

今回出土した奈良時代の須恵器は、奈良時代前半にその中心があると考えられる。遺構から出土した坏は、数が少ないものの法量がまとまっている様子が見られ、規格性があったことが感じられた。ここでは出土した坏Ａ・Ｂの法量から、当遺跡における須恵器坏の規格性について検討する

Ｅ地区土坑１、落ち込み46で出土した須恵器は、坏Ａが口径12.5～13.0㎝、器高3.0～3.5㎝、坏Ｂは14㎝、15㎝、16㎝ 前後に分かれているが、いずれも器高は４㎝ 前後、と一定の法量内に収まることが分かった。ほかの遺構から出土した奈良時代の遺物を合わせても、坏Ａが１種類、坏Ｂが２～３種類の規

格に分かれていたと思われる。そこで、実測・掲載した分をふくめ、口径・器高が復元できた坏について、すべての数値をグラフ(図81-１)にした。その結果、坏Ａについてはばらつきが少なく、坏Ｂの口径にはばらつきがあるものの、器高がほぼ一定であることが分かった。また、坏Ａの法量と坏Ｂとは、分布の範囲が分かれていることも見て取れ、それは個体数を示したグラフ(図81-２)からも分かる。したがって、やはり一定の規格をもつ坏を使用していたと考えられ、これが当時生産されていた須恵器の時期的な特徴か、あるいは需要先と関係があるのではないかと思い、同様のデータを出している成合琴堂窯跡の分析結果と比較してみた。

ここで、成合琴堂窯跡について簡単に説明しておく。この窯跡は高槻市大字菖蒲谷・琴堂に所在する。調査の結果、二つの灰原が確認され、断続的であるが７世紀後半から８世紀にかけて操業していたことがわかった。このうち灰原２から出土した坏Ａ・Ｂの法量と口径ごとの個体数をグラフ(図82)に示した。灰原２から出土した遺物は型式差が見られ、Ⅰ～Ⅲ期に分類されている。ここではこの３期にわたる坏の法量をグラフに示している。中村剛彰氏はこの窯跡について、「７世紀後半以降の三島における官衙施設および新規集落の成立によって不足する日常的な器を補充する窯として築かれ、断続的に操業」していたと考えている。

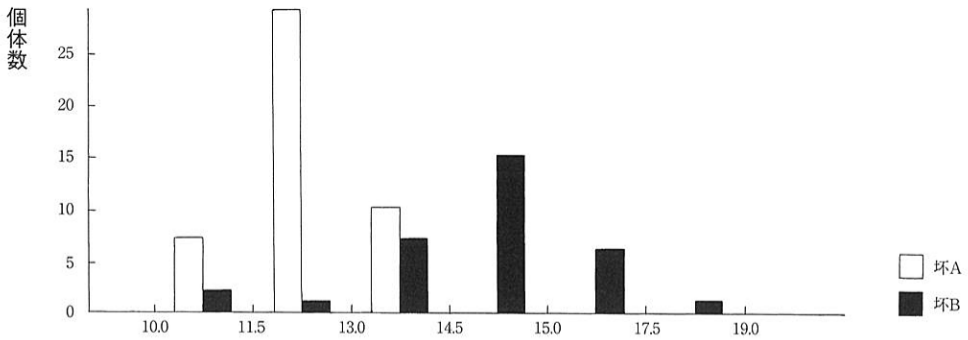
図82-２から坏Ａ・Ｂとも分布の範囲が異なっており、この点では宿久庄西遺跡と同じであることが分かるが、その一方で、さまざまな法量の坏が見られる点で宿久庄西遺跡との違いがうかがえる。生産された坏Ａは個体数では口径14～15㎝のものにピークがあり、坏Ｂは約16㎝のものが多い。しかし、この大きさでの坏Ｂの器高は、宿久庄西遺跡の坏Ｂよりも低いものが多いことが分かる。

成合琴堂窯跡で生産された須恵器は３期に分かれているため、どの法量の坏がどの時期に多く生産されたか、あるいはすべての法量のものを３期ともに生産していたのかといった問題は残る。また本来なら胎土分析のような化学分析も含めた比較が必要である。しかし、このような単純なグラフの比較からでも、成合琴堂窯跡では、宿久庄西遺跡で使われたものと同じ規格の坏は生産されていないことが見られ、宿久庄西遺跡の須恵器の供給元が別の窯であったことが言えよう。また茨木市の西端に位置する宿久庄西遺跡とは距離もあり、より近くの窯から供給していたとするほうが考えやすい。

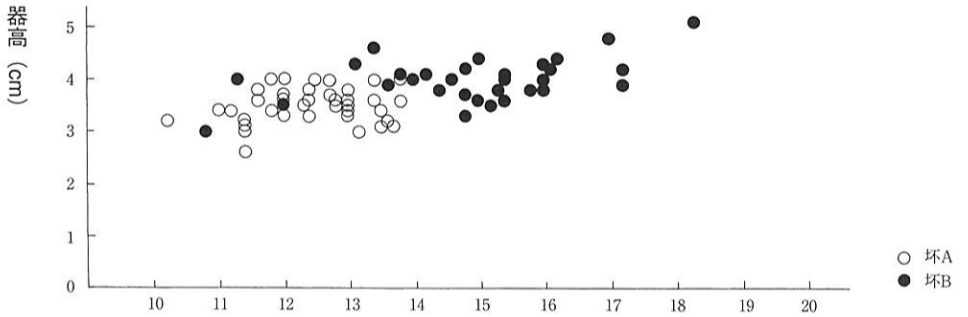
奈良時代は器種ごとにいくつかの規格が設けられていたことが分かっており、宿久庄西遺跡でも、その規格をとりいれていた可能性がある。また、器種ごとに多様な法量があったにもかかわらず、ある程度限定した大きさの坏を使っていたようである。出土した坏は、肉眼観察で、胎土や色調の違いから４～５種類に分けられると思われ、供給元が異なっていても、同じ法量のものを取り入れていた可能性さえ考えられる。

北摂地域周辺では６世紀以降北摂山地や千里丘陵の入り組んだ地形を利用した須恵器生産が活発になる。しかし、奈良時代にはいると衰退し、宿久庄西遺跡と距離的に近い須恵器窯で、奈良時代に操業していたと考えられるものは、吹田市吹田９号窯、豊中市緑丘窯などがあげられる。今回は同様のデータがすでに出されている成合琴堂窯跡出土遺物と比較を行ったが、近隣の窯跡で同様の比較をすれば、産地を比定できるのではないだろうか。

ただし、宿久庄西遺跡自体が官人層や有力氏族の居住地であると考えられ、一般的な集落や農村形態の集落とは、集落内で使用する日常生活容器等が異なる可能性がある。したがって、集落内で使われる須恵器がすべて規格性を持っていたのかどうかについては、さらなる検討が必要であろう。

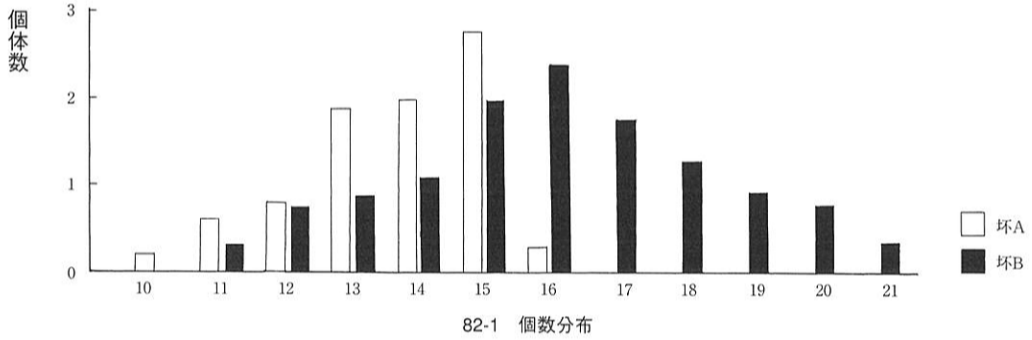


81-1　個数分布

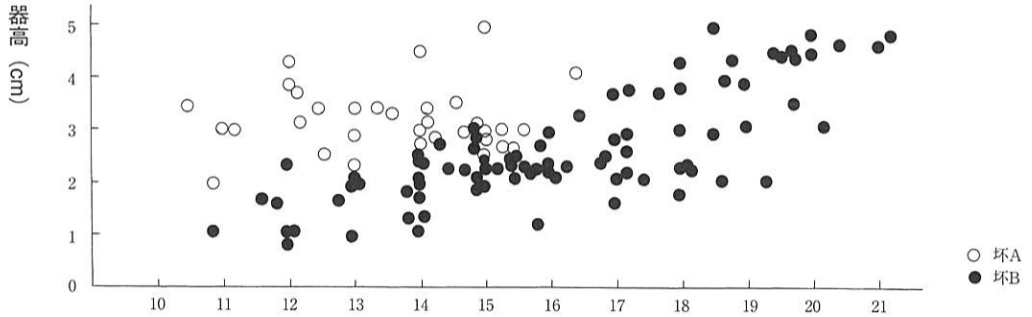


81-2　法量分布

図81　宿久庄西遺跡出土須恵器の法量と個数



82-1　個数分布



82-2　法量分布

図82　成合琴堂窯跡灰原２出土須恵器の法量と個数（中村1995より一部改変）

参考文献(第4～5章分)

橋本久和	1974	『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
宮脇薫	1976	『宿久庄遺跡』茨木市教育委員会
小笠原好彦・西弘海他	1976	『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所
橋本久和他	1987	『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要11』高槻市教育委員会
森内秀造他	1987	『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会
山下史朗他	1989	『小犬丸遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会
岸本道昭他	1992	『布施駅家－小犬丸遺跡1990・1991年度発掘調査概報－』龍野市教育委員会
岸本道昭他	1994	『布施駅家Ⅱ－小犬丸遺跡1992・1993年度発掘調査概報－』龍野市教育委員会
中村剛彰	1995	「奈良時代末期における一地方窯の様相～成合琴堂窯跡群発掘調査報告にかえて～」『高槻市文化財年報平成5年度』高槻市教育委員会
西口陽一・伊藤武	1999	『庄田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
佐竹昭広他	1963	『万葉集　本文編』塙書房
箕面市史編纂委員会	1964	『箕面市史』箕面市役所
茨木市史編纂委員会	1968	『茨木市史』茨木市役所
田中文英	1995	「摂津国」『近畿地方の荘園Ⅱ』吉川弘文館
笹川隆平	1985	『旧清水村独立三百三十周年記念誌』茨木市清水村史編纂委員会
藤岡謙二郎	1985	『講座考古地理学第4巻　村落と開発』学生社
山中敏史・佐藤興治	1985	『古代日本を発掘する5　古代の役所』岩波書店
鬼頭清明	1985	『古代日本を発掘する6　古代の村』岩波書店
高橋美久二	1991	「畿内の交通」『新版古代の日本⑥　近畿Ⅱ』角川書店
小森俊寛・上村憲章	1996	「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号　(財)京都市埋蔵文化財研究所
中村浩・藤原学編	1996	『須恵器集成図録　第2巻　近畿編Ⅱ』雄山閣出版
高橋美久二	1997	「律令制支配と交通体系の整備」『考古学による日本歴史9』雄山閣出版
下中彌三郎	1937	『神道大辞典』臨川書店
吉田晶他	1986	『大阪府の地名』平凡社
坂本太郎他	1991	『日本古代氏族人名辞典』吉川弘文館
塙保己一	1930	『群書類従・第五輯』続群書類従完成会
国史大系編集会	1972	「延喜式前編」『国史大系』吉川弘文堂

表 3　遺物観察表

地区	挿図番号	写真番号	器種	残存状態	口径	器高	時期	遺構名	層名	備考
A地区	7	9-1	土師器　鍋	把手	—	—	8c	ピット16		
	8-1	9-2	須恵器　坏	口縁部2/3	14.0	2.9	8c	ピット17		坏A
	8-2		土師器　皿	1/2	9.2	1.0	12～13c		中世包含層	
	8-3		白磁　碗	底部3/4	底 6.7	(2.6)	12～13c		下層包含層	
	8-4		須恵器　壺	口縁部1/10	(14.0)	(7.4)	8c		下層包含層	壺L
	8-5		須恵器　坏	底部完形	底 9.6	(4.4)	8c		下層包含層	坏B
	8-6	9-3	弥生土器	底部	底　6.0	2.7	弥生時代中期		黒褐層(上層)	
	8-7	9-4	縄文土器	底部	底　12.0	2.8	縄文時代？		黒褐層(上部の茶褐色層)	
	8-8	9-5	縄文土器	体部破片	—	—	縄文時代		黒褐層(上層)	
B地区	13-1	10-2	土師器　皿	1/2	(10.0)	1.8	10c後半		上層包含層	ての字状口縁
	13-2		瓦器　埦	口縁部1/10	14.7	(2.8)	12c初		最下層包含層	楠葉型
	13-3	10-4	土師器　壺	口縁部、体部2/5	12.0	(10.0)	古墳時代？		A地点(包含層)	
	13-4	10-3	須恵器	底部1/5	底 17.0	(5.3)	8c		下層包含層	
	13-5	10-1	埴輪片	一部	(8.0×5.4)		古墳時代？		下層包含層	
	13-6	10-6	鉄滓	一部	(6.0×5.0)		8c？		上層包含層	
	14-1	9-6	土馬	頭部	(8.2×4.4)		平安時代？		包含層	
	15-1		土師器　甕	口縁部1/5	(25.0)	(3.8)	12c？	ピット101		
	15-2	10-8	土師器　甕	1/2	19.2	13.6	12c？	ピット101		
	15-3	10-7	瓦器　埦	1/10	(15.0)	(4.0)	12c	ピット101		楠葉型
	15-4	10-5	須恵器　鉢	底部2/5	底(11.0)	(7.5)	11c後半～末	ピット101		東播系須恵器
C地区	23-1	11-1	須恵器　坏蓋	口縁部1/10	16.4	2.7	8c		盛土・包含層	
	23-2		須恵器　坏蓋	1/4	16.5	1.8	8c		盛土・包含層	
	23-3		須恵器　坏蓋	1/8	(15.0)	(1.7)	8c		盛土・包含層	
	23-4	11-6	須恵器　坏蓋	2/5	(17.4)	2.9	8c		盛土・包含層	
	23-5	11-3	須恵器　坏	体部1/3,口縁部1/10	(16.0)	4.4	8c		盛土・包含層	坏B
	23-6		須恵器　坏	口縁部1/2	17.3	4.9	8c		盛土・包含層	坏B
	23-7		須恵器　坏	1/6	(12.6)	3.5	8c		盛土・包含層	坏A
	23-8		須恵器　坏	1/8	(11.6)	(3.3)	8c		盛土・包含層	坏A
	23-9		須恵器　坏	1/16	(11.6)	(3.6)	8c		盛土・包含層	坏A
	23-10		須恵器　坏	口縁部1/2	(13.8)	3.5	8c		包含層	坏A
	23-11		須恵器　坏	1/8	(11.0)	3.7	8c		盛土・包含層	坏A
	23-12		須恵器　坏	1/4	(11.4)	(4.9)	8c		盛土・包含層	坏A
	23-13		須恵器　坏	1/2	12.8	3.4	8c		盛土・包含層	坏A
	23-14	11-2	須恵器　坏	1/2	(12.0)	3.5	8c		盛土・包含層	坏A
	23-15		須恵器　坏	1/4	(12.4)	3.9	8c		盛土・包含層	坏A
	23-16		須恵器　坏	3/5	12.0	3.2	8c		盛土・包含層	坏A
	23-17		須恵器　坏	4/5	12.4	3.8	8c		盛土・包含層	坏A
	23-18		須恵器　坏	底部2/5,口縁部1/10	(12.0)	3.4	8c		盛土・包含層	坏A
	23-19		須恵器　坏	体部1/2,口縁部1/6	(11.4)	3.0	8c		盛土・包含層	坏A
	23-20	11-7	須恵器　壺	体部2/5	底 (8.0)	(7.4)	8c		盛土・包含層	
	23-21		須恵器　壺	底部	底 (12.0)	(2.3)	8c		盛土・包含層	
	23-22		須恵器　高坏	脚部	底 8.0	(4.3)	8c		盛土・包含層	
	23-23		須恵器　壺蓋	口縁部1/4	(12.5)	(1.4)	8c		盛土・包含層	壺A蓋
	23-24		土師器　甕	口縁部1/10	(22.0)	(3.2)	8c		盛土・包含層	
	23-25		須恵器　甑	口縁部1/6	(27.0)	(9.3)	8c		盛土・包含層	
	23-26	11-4	須恵器　円面硯	1/10以下	最 (21.0)	(5.5)	8c		精査(包含層)	
	23-27	11-5	須恵器　円面硯	上部1/3	最 (10.7)	(2.5)	8c		盛土・包含層	
	23-28		土師器　甕	口縁部1/8	25.0	4.2	8c		盛土・包含層	
	23-29		土師器　甕	口縁部1/3	(16.2)	(9.0)	8c		包含層	
	23-30	11-8	土師器　坏	1/3	(11.0)	2.6	8c		盛土・包含層	
	23-31	11-9	土師器　坏	2/5	(16.0)	(4.6)	8c		盛土・包含層	
	24-1		瓦器　埦	1/8	(9.0)	(2.4)	13c？		盛土・包含層	
	24-2	12-6	黒色土器　埦	底部1/4	(6.0)	(2.0)	9～10c		精査(包含層)	A類埦
	24-3	12-1	須恵器　甕	口縁部1/8	(26.0)	(6.9)	8～9c		包含層	
	24-4	12-7	須恵器　壺	底部1/4	底 (3.4)	(5.5)	9c		盛土・包含層	壺M
	25-1		須恵器　坏蓋	1/8	(14.0)	3.9	8c初	落込み46		かえり
	25-2		須恵器　坏蓋	1/4	(13.2)	(2.5)	8c初	落込み46・ピット427	盛土・包含層	
	25-3		須恵器　坏蓋	1/4	14.4	(1.0)	8c	落込み46		
	25-4		須恵器　坏蓋	1/8	(16.5)	(1.2)	8c	落込み46		
	25-5		須恵器　坏蓋	1/3	(16.8)	(1.7)	8c	落込み46	盛土・包含層	
	25-6		須恵器　坏蓋	1/3	16.2	2.6	8c	落込み46		
	25-7	12-3	須恵器　坏蓋	1/3	(17.0)	2.4	8c	落込み46		
	25-8		須恵器　坏蓋	1/3	(16.3)	(1.3)	8c	落込み46・ピット427		

地区	挿図番号	写真番号	器種	残存状態	口径	器高	時期	遺構名	層名	備考
	25-9	12-4	須恵器　坏蓋	1/2	17.6	2.5	8c	落込み46	盛土・包含層	
	25-10		須恵器　坏	1/4	(13.0)	4.9	8c	落込み46	盛土・包含層	坏B
	25-11		須恵器　坏	1/8	(14.0)	4.1	8c	落込み46		坏B
	25-12		須恵器　坏	1/8	(14.8)	3.6	8c	落込み46		坏B
	25-13		須恵器　坏	1/3	15.3	3.9	8c	落込み46		坏B
	25-14		須恵器　坏	1/3	14.6	4.3	8c	落込み46		坏B
	25-15		須恵器　坏	1/6	(17.9)	(3.3)	8c	落込み46		坏B?
	25-16		須恵器　坏	底部1/3口縁部片	(17.0)	3.9	8c	落込み46		坏B
	25-17		須恵器　坏	底部1/4以下	(17.0)	4.2	8c	落込み46		坏B
	25-18	12-5	須恵器　坏	1/2	(16.0)	3.9	8c	落込み46		坏B
	25-19		須恵器　坏	底部3/4口縁部一部	(15.6)	3.9	8c	落込み46	盛土・包含層	坏B
	25-20		須恵器　坏	口縁部1/5	(12.5)	3.2	8c	落込み46		坏A
	25-21		須恵器　坏	1/3	12.0	3.5	8c	落込み46		坏A
	25-22		須恵器　坏	1/4	(12.0)	(3.4)	8c	落込み46	盛土・包含層	坏A
	25-23		須恵器　坏	1/8	(12.5)	3.1	8c	落込み46		坏A
	25-24		須恵器　坏	1/4	(13.0)	3.1	8c	落込み46		坏A
	25-25	12-8	須恵器　坏	1/2	12.8	3.3	8c	落込み46		坏A
	25-26		須恵器　坏	1/8	(12.0)	3.6	8c	落込み46		坏A
	25-27		須恵器　坏	1/3	(12.5)	3.5	8c	落込み46		坏A
	25-28		須恵器　坏	1/4	10.8	4.0	8c	落込み46		坏A
	25-29		須恵器　坏	1/4	12.0	4.1	8c	落込み46		坏A
	26-1		須恵器　壺蓋	1/2	(11.0)	3.6	8c	落込み46		壺A蓋
	26-2		須恵器　壺蓋	1/2	11.0	24.0	8c	落込み46		壺A蓋
	26-3	13-1	須恵器　壺	1/4	(9.0)	6.4	8c	落込み46		壺A
	26-4	13-7	須恵器　壺	1/8	(11.6)	(4.0)	8c	落込み46		壺A
	26-5		須恵器　皿	1/4	(18.0)	(2.9)	8c	落込み46		皿C
	26-6		須恵器　埦	口縁部1/6	(16.2)	(5.2)	8c	落込み46・ピット53		
	26-7		須恵器　甕	頸部と口縁一部	(8.0)	(8.8)	8c	落込み46	盛土・包含層	
	26-8		須恵器　壺	口縁部1/6	(12.0)	(6.0)	8c	落込み46		
	26-9	13-6	須恵器　蓋？	肩部1/4	最 17.9	(2.5)	8c	落込み46		
	26-10	13-9	須恵器　こね鉢	底部	底部最 9.3	(3.4)	8c	落込み46		
	26-11	13-2	須恵器　壺	肩部1/8	最 19.0	(10.0)	8c	落込み46		壺A
	26-12	13-8	須恵器　鉢	1/4	(17.0)	10.2	8c	落込み46		鉢B
C	26-13		土師器　坏	1/3	(12.0)	2.8	8c	落込み46		坏A
地	26-14	12-10	土師器　坏	1/4	(17.4)	(3.6)	8c	落込み46		坏A
区	26-15	12-9	土師器　皿	1/3	(21.4)	(2.1)	8c	落込み46		
	26-16		土師器　甕	1/4	(15.0)	(8.4)	8c	落込み46	盛土・包含層	甕A
	26-17		土師器　甕	口縁部1/4	(14.0)	(5.3)	8c	落込み46		甕A
	26-18		土師器　甕	1/4	(13.0)	(9.4)	8c	落込み46		甕A
	26-19		土師器　甕	口縁部1/3	(21.0)	(5.0)	8c	落込み46		甕A
	26-20		土師器　甕	口縁部1/10	(21.0)	(5.5)	8c	落込み46		甕A
	26-21		土師器　甕	口縁部1/2	(22.0)	(7.3)	8c	落込み46		甕A
	27-1	13-3	須恵器　坏蓋	1/4	(16.4)	(1.7)	8c	建物31柱穴31		
	27-2	13-5	須恵器　坏	1/3	(16.0)	3.9	8c	建物31柱穴215		坏B
	27-3		須恵器　坏	1/8	(12.0)	(3.6)	8c	建物31柱穴31		坏A
	27-4		土師器　甕	1/4	24.6	(4.2)	8c	建物31柱穴32		甕A
	27-5	13-4	須恵器　坏蓋	1/3	(16.4)	3.0	8c	ピット7		
	27-6		須恵器　坏	口縁部1/4	(16.0)	3.7	8c	溝58		坏B
	27-7		須恵器　壺	底部1/4	底 (7.0)	(2.5)	8c	土坑209		
	27-8		須恵器　壺	口縁部1/3	(6.1)	(3.0)	8c	溝58		壺A
	27-9		土師器　坏	口縁部1/8	(18.2)	4.9	8c	建物54柱穴54		甕A
	27-10	13-10	土師器　坏	1/5	(18.0)	(2.5)	8c	ピット217		
	27-11	12-2	土師器　甕	口縁部1/8	(24.0)	(11.6)	8c	ピット7		甕A
	28-1		土師器　皿	1/5	(8.0)	1.7	11～12c	土坑41		
	28-2		土師器　皿	3/4	(9.0)	1.7	11～12c	ピット8・土坑41		
	28-3		土師器　皿	1/3	(9.2)	(1.6)	11～12c	土坑41		
	28-4		土師器　皿	完形	9.0	2.2	11～12c	土坑41		
	28-5	14-2	土師器　皿	1/3	(10.0)	2.3	11～12c	土坑41		回転台土師器
	28-6	14-4	土師器　皿	3/5	9.4	1.5	11c後	土坑41		ての字状口縁
	28-7	14-5	土師器　皿	1/2	10.2	1.6	11c後	土坑41		ての字状口縁
	28-8		土師器　皿	完形	15.0	2.8	11～12c	土坑41		
	28-9	14-6	土師器　皿	3/4	15.8	3.4	11～12c	土坑41		
	28-10	14-1	瓦器　埦	完形	14.5	5.8	11c後～12c初	土坑41		楠葉型
	28-11	14-3	瓦器　埦	完形	15.4	5.7	11c後～12c初	土坑41		和泉型
	29-1		土師器　甕	口縁部1/2	(21.0)	(12.0)	12c中頃	建物18柱穴223		
	29-2	15-1	瓦器　埦	底部1/2	底 (6.0)	(2.1)	12c中頃	建物18柱穴201		
	29-3	15-2	瓦器　埦	1/4	(14.0)	5.4	12c	建物18柱穴18		和泉型
	29-4	15-3	土師器　皿	脚部	底 8.0	(3.4)	12c	建物18柱穴18		台付皿
	29-5	15-6	土師器　甕	1/3	(21.0)	(11.6)	12c	建物18柱穴226		

地区	挿図番号	写真番号	器種	残存状態	口径	器高	時期	遺構名	層名	備考
C地区	29-6	15-7	土師器 甕	1/3	(29.0)	(23.0)	11～12c	建物18柱穴226		
	30-1		土師器 皿	1/2	9.5	2.0	11～12c	ピット50		
	30-2		土師器 皿	1/4	9.4	1.8	11～12c	ピット6	直上	
	30-3	15-8	土師器 皿	ほぼ完形	9.4	1.7	11～12c	ピット6		
	30-4	16-9	土師器 皿	完形	10.0	3.6	11～12c	ピット55		
	30-5		土師器 皿	1/3	(9.0)	1.9	12c後半～13c	集石遺構202		
	30-6		土師器 皿	1/4	(10.0)	1.4	12c後半～13c	集石遺構202		
	30-7		瓦器 埦	底部	底 5.0	1.3	12c後半～13c	集石遺構202		
	30-8	16-5	瓦器 皿	口縁部1/4	(9.7)	2.0	12c前	ピット55		
	30-9	16-4	瓦器 埦	口縁部1/3	(14.9)	4.8	12c前	ピット55		
	30-10		白磁 碗	口縁部1/8	(14.2)	(5.0)	11～12c	ピット26		
	30-11		土師器 甕	口縁部1/8	23.0	(3.0)	12c？	ピット8		
	30-12	16-10	白磁 皿	1/3	10.0	2.5	12～13c	ピット4		
D地区	35-1		須恵器 坏蓋	1/4	(15.0)	3.2	8c初		包含層	かえり
	35-2		須恵器 坏蓋	4/5	(13.0)	2.9	8c		下段包含層	
	35-3		須恵器 坏蓋	口縁部1/10	13.0	(1.4)	8c		包含層(一部盛土が混じる可能性)	
	35-4		須恵器 坏	4/5	11.6	3.6	8c		下段古代～中世包含層	坏A
	35-5		須恵器 坏	1/2	13.4	3.4	8c		下段包含層	坏A
	35-6		須恵器 坏	1/8	(14.0)	3.2	8c		包含層	坏B
	35-7		須恵器 坏	1/8	(14.8)	3.4	8c		包含層	坏B
	35-8	16-2	須恵器 坏	口縁部1/3欠	16.6	4.5	8c		包含層	坏B
	35-9	16-5	須恵器 円面硯	1/6	底 (21.0)	(4.1)	8c		盛土・包含層	
	35-10		須恵器 甕	口縁部1/8	(21.0)	(4.5)	8c		包含層(一部盛土が混じる可能性)	
	35-11	16-4	須恵器 坏	2/3	12.0	4.8	8c		暗褐色包含層	坏A
	35-12		須恵器 坏	底部1/3	(10.0)	(1.7)	8c		包含層	坏A
	35-13	16-3	須恵器 坏	1/2	11.0	4.0	8c		包含層	坏B
	35-14	16-1	須恵器 坏蓋	1/2	9.2	2.8	8c		包含層	
	35-15	16-7	須恵器 壺	底部、体部一部	(8.0)	(9.0)	8c		暗褐色包含層	
	35-16	16-9	土師器 坏	2/3	(25.0)	(3.2)	8c		包含層	
	35-17	16-8	土師器 坏	1/4	(15.0)	3.1	8c		包含層	
	35-18	16-10	土師器 壺	頸部のみ	—	(8.0)	平安時代？		盛土・包含層	
	36-1		瓦器 埦	口縁部1/3	13.5	(3.2)	13c		包含層(井戸230直上)	和泉型
	36-2		瓦器 埦	口縁部1/3	14.0	3.4	13c		包含層(井戸230直上)	和泉型
	36-3	17-1	瓦器 埦	1/3	(15.2)	4.2	13c		包含層(井戸230直上)	和泉型
	36-4		瓦器 埦	1/4	(13.5)	3.3	13c		包含層(井戸230直上)	和泉型
	36-5		瓦器 埦	口縁部1/4	14.0	3.2	13c		包含層(井戸230直上)	和泉型
	36-6		瓦器 埦	口縁部1/3	13.5	3.8	13c		包含層(井戸230直上)	和泉型
	36-7		瓦器 埦	1/3	(9.3)	2.7	13c		包含層(井戸230直上)	和泉型・小型
	36-8	16-6	土師器 皿	1/2	8.4	1.6	12～13c		包含層(井戸230直上)	
	36-9		須恵器 坏	1/2	16.4	4.5	8c		包含層(井戸230直上)	坏B
	36-10	16-11	瓦質 羽釜	口縁部1/6	(25.0)	(6.1)	13c		包含層(井戸230直上)	
	37-1		須恵器 壺	口縁部1/2以下	(11.4)	(4.0)	8c	井戸230		壺L
	37-2		須恵器 壺	頸部	—	(8.8)	8c	井戸230		壺L
	37-3		須恵器 壺	口縁部・体部下半欠	最 17.6	(11.0)	8c	井戸230		壺L
	37-4		須恵器 坏	口縁部1/3	(16.1)	(6.2)	8c	井戸230	青灰色砂	
	37-5		須恵器 坏	1/3	(15.4)	3.8	8c	井戸230		坏B
	37-6	17-2	須恵器 埦	口縁部1/3欠	13.5	6.3	8c	井戸230	盛土	
	37-7	17-4	須恵器 こね鉢	底部	底 6.8	(3.3)	8c	井戸230		
	37-8	17-5	土師器 甕	口縁部1/6	(10.6)	(5.8)	8c	井戸230		甕A
	37-9	17-3	土師器 甕	頸部と体部1/3	最 17.2	(9.6)	8c	井戸230		甕A
	37-10	17-6	土師器 皿	3/4残存	22.1	2.4	8c	井戸230		
	37-11		土師器 坏	ほぼ完形	15.0	3.1	8c	井戸230		
	37-12		土師器 坏	口縁部1/6	(16.9)	3.0	8c	井戸230		
	38-1	18-1	鉄滓		12.2	7.8	8c	井戸230		
	38-2	18-2	羽口	1/3	17.9	6.0(先端)	8c	井戸230		
	39-1		須恵器 坏蓋	口縁部1/3	15.3	2.0	8c	ピット152		
	39-2		須恵器 坏蓋	口縁部1/4	(15.4)	3.6	8c	ピット258		坏B
	39-3		須恵器 坏	底部1/6	底 (12.5)	(2.6)	8c	土坑404		坏B
	39-4		須恵器 坏	口縁部1/3	(11.2)	(3.5)	8c	ピット27		坏A
	39-5	18-4	土師器 羽釜	口縁部1/8	(20.0)	(5.0)	8c	ピット80		
	39-6		土師器 皿	口縁部1/4	(15.7)	2.0	11c後	ピット273		ての字状口縁
	39-7	18-5	黒色土器 埦	1/2	(14.2)	5.5	10c後	ピット115		A類埦
E地区	57-1		須恵器 坏蓋	1/8	(11.0)	(1.6)	8c初		盛土・旧耕作土	かえり
	57-2		須恵器 坏蓋	口縁部1/6	14.0	(1.0)	8c初		盛土・旧耕作土	かえり
	57-3		須恵器 坏蓋	1/6	(17.0)	1.6	8c初		包含層	かえり
	57-4		須恵器 坏蓋	口縁部1/16	16.6	(1.7)	8c		盛土・旧耕作土	
	57-5		須恵器 坏	1/3	(15.4)	3.0	8c		盛土・旧耕作土	坏A
	57-6		須恵器 坏	1/6	(11.6)	2.7	8c		盛土・包含層	坏A
	57-7	19-3	須恵器 坏	2/5	11.5	3.7	8c		盛土・包含層	坏A

地区	挿図番号	写真番号	器種	残存状態	口径	器高	時期	遺構名	層名	備考
E地区	57-8	19-1	須恵器 坏	1/6	11.5	3.5	8c		盛土・包含層	坏A
	57-9		須恵器 坏	1/3	(13.0)	3.0	8c		盛土・旧耕作土	坏A
	57-10		須恵器 坏	1/3	底 10.8	(12.5)	8c		盛土	坏A
	57-11		須恵器 坏	1/8	(13.8)	3.0	8c		盛土・旧耕作土	坏A
	57-12		須恵器 坏	1/3	(14.5)	3.7	8c		盛土・包含層	坏B
	57-13		須恵器 坏	1/8	14.0	3.8	8c		盛土・包含層	坏B
	57-14		須恵器 坏	1/8	(14.0)	3.9	8c		盛土・包含層	坏B
	57-15	19-2	須恵器 坏	1/8	(12.6)	4.3	8c		盛土・旧耕作土	坏B
	57-16		須恵器 坏	底部完形	底 8.0	(1.5)	8c		盛土・旧耕作土	坏B
	57-17	19-5	須恵器 壺蓋	3/8	(15.4)	(6.2)	8c		盛土・旧耕作土	壺A蓋
	57-18		須恵器 壺蓋	口縁部1/6	(15.0)	(6.8)	8c		盛土・旧耕作土	壺A蓋
	57-19		須恵器 壺蓋	肩部1/8	(18.8)	(5.0)	8c		盛土・包含層	壺A蓋
	57-20	19-6	須恵器 壺	底部片	底 (11.1)	(5.6)	8c		地山直上(包含層)	坏B?
	57-21	19-10	須恵器 円面硯	1/4	最 (16.2)	(2.4)	8c		盛土・旧耕作土	
	57-22	19-11	須恵器 円面硯	脚部片	—	(5.8)	8c		盛土・包含層	
	57-23	19-9	須恵器 平瓶	口縁部2/3	2.4	(3.7)	8c		盛土・旧耕作土	小型・水滴？
	57-24		須恵器 坏	1/10	(17.0)	(5.7)	8c		盛土	坏B
	57-25	19-7	須恵器 甕	1/15	(23.0)	(5.8)	8c		盛土・旧耕作土	
	57-26		須恵器 鉢	口縁部片	(22.4)	(8.8)	8c		盛土・旧耕作土	
	57-27		土師器 甕	口縁部片	19.7	(5.2)	8c		盛土・旧耕作土	
	57-28	19-8	土師器 皿	1/3	(23.4)	(2.7)	8c		包含層	
	57-29	19-4	土師器 羽釜	1/8	(25.0)	(6.4)	8c		盛土・旧耕作土	
	58-1	20-1	土師器 皿	2/3	7.8	1.5	12～13c		盛土・包含層	
	58-2		土師器 皿	完形	8.0	1.3	13c		盛土	
	58-3	20-2	土師器 皿	ほぼ完形	8.5	2.0	13c		盛土・包含層	
	58-4		瓦器 埦	1/4	12.0	3.2	13c		撹乱	
	58-5	20-7	白磁 碗	口縁部1/6	(18.0)	(4.7)	13c		盛土・旧耕作土	
	58-6		須恵器 甕	口縁部1/10	(25.0)	(4.0)	8c		盛土・旧耕作土	
	58-7	20-8	須恵器 片口鉢	口縁部1/6	26.0	(7.3)	12c		撹乱	東播系須恵器
	59-1		瓦器 埦	1/4	(12.4)	(3.5)	13c前半		中世包含層	
	59-2		瓦器 埦	2/5	14.5	(4.2)	13前半		中世包含層	
	59-3	20-9	黒色土器 埦	1/3	(15.4)	5.3	10c後～11c		包含層	B類埦
	59-4	20-6	青磁 碗	底部2/5	底 (6.8)	(3.4)	13c		中世包含層	
	59-5		土師器 皿	口縁部2/5	(8.0)	(1.8)	12～13c		中世包含層	
	59-6	20-4	土師器 皿	1/3	(8.0)	(1.8)	12～13c		中世包含層	
	59-7		土師器 皿	1/4	(9.7)	1.9	12～13c		包含層	
	59-8		土師器 皿	1/3	(7.8)	(1.4)	14c		中世包含層	
	59-9		土師器 皿	1/4	(8.6)	1.8	14c		包含層	
	59-10	20-5	瓦器 皿	1/4	(9.5)	1.4	12～13c		中世包含層	
	59-11	20-10	瓦器 三足釜	2/5	(14.0)	(14.6)	13c		中世包含層	
	59-12	20-11	瓦器 三足釜	脚部	—	(21.4)	13c		中世包含層	
	59-13	20-12	瓦器 三足釜	脚部	—	(19.7)	13c		中世包含層	
	60-1	21-1	須恵器 坏蓋	口縁部1/2	17.2	2.9	8c	土坑1		ひずみ有り
	60-2		須恵器 坏蓋	1/2	(16.0)	1.8	8c	土坑1	埋土内・アゼ部分	
	60-3		須恵器 坏蓋	口縁部1/3	16.0	1.9	8c	土坑1	埋土内	
	60-4		須恵器 坏蓋	1/2	(16.4)	(2.0)	8c	土坑1		
	60-5		須恵器 坏蓋	1/10	(20.2)	(1.8)	8c	土坑1	埋土内	
	60-6	21-7	須恵器 蓋	1/5	(22.2)	(1.5)	8c	土坑1		
	60-7		須恵器 坏	4/5	12.6	3.6	8c	土坑1		坏A
	60-8	21-2	須恵器 坏	口縁部1/2	14.0	(3.8)	8c	土坑1		坏A
	60-9		須恵器 坏	口縁部1/3	(12.7)	(3.8)	8c	土坑1		坏A
	60-10		須恵器 坏	口縁部1/6	(13.4)	(4.6)	8c	土坑1		坏B
	60-11		須恵器 坏	2/3	(13.4)	4.4	8c	土坑1		坏B
	60-12		須恵器 坏	ほぼ完形	15.0	4.1	8c	土坑1	アゼ部分(土器集中部)	坏B
	60-13		須恵器 坏	ほぼ完形	(15.5)	4.5	8c	土坑1	アゼ部分	坏B
	60-14		須恵器 坏	底部1/2	底 (11.0)	(2.0)	8c	土坑1		坏B
	60-15		須恵器 坏	底部1/2	底 8.0	(2.5)	8c	土坑1	埋土内	坏B
	60-16	21-8	須恵器 壺	口縁部1/5	(14.3)	(13.9)	8c	土坑1		
	60-17		須恵器 鉢	口縁部片	(25.8)	10.1	8c	土坑1		
	60-18		須恵器 甕	口頸部、体部1/4	(23.3)	(19.6)	8c	土坑1	アゼ部分	把手付
	60-19		須恵器 甕	体部下半	—	18.4	8c	土坑1		把手付
	61-1	21-3	土師器 蓋	口縁部1/3	(17.2)	(4.6)	8c	土坑1		
	61-2	21-4	土師器 坏	1/2	(12.2)	2.5	8c	土坑1	埋土内	坏A
	61-3		土師器 坏	口縁部1/4	(15.0)	(3.6)	8c	土坑1	埋土内	
	61-4	21-5	土師器 坏	1/2	(16.0)	4.1	8c	土坑1		
	61-5	21-6	土師器 埦	口縁部1/6	(18.0)	(4.6)	8c	土坑1		
	61-6	21-9	土師器 埦	1/3	(12.0)	4.2	8c	土坑1	埋土内	
	61-7	21-10	土師器 甕	頸部1/4以下	(28.0)	(13.9)	8c	土坑1	埋土内	
	61-8		土師器 甕	口縁部1/10	(26.2)	(5.7)	8c	土坑1		

地区	挿図番号	写真番号	器種	残存状態	口径	器高	時期	遺構名	層名	備考
	61-9		須恵器　甕	口縁部1/6	(14.0)	(2.6)	8c	土坑1	アゼ部分	
	61-10	21-11	土師器　鉢	口縁部1/3	(21.0)	(9.3)	8c初	土坑1		
	61-11		土師器　甑	口縁部1/8	(18.0)	(8.2)	8c	土坑1		
	61-12		土師器　甑	口縁部1/4	(20.8)	(12.4)	8c	土坑1		
	62-1		土師器　皿	1/3	(19.2)	(3.4)	8c	井戸460		
	62-2	22-2	土師器　坏	口縁部1/4	(14.6)	(3.8)	8c	井戸460		坏A
	62-3		土師器　坏	1/4	(13.0)	(2.8)	8c	井戸460		坏A
	62-4	22-1	須恵器　坏	1/4	(12.0)	3.3	8c	井戸460直上	盛土	
	62-5	22-8	須恵器　壺	体部完形	底 4.8	(4.4)	8c	井戸460		水滴？
	62-6	22-9	須恵器　底部	底部1/2	底 (15.0)	(4.8)	8c	井戸460		
	63-1		須恵器　坏蓋	口縁部片	(12.6)	(1.6)	8c初	ピット146		かえり
	63-2	22-4	須恵器　坏	ほぼ完形	12.6	3.5	8c	ピット360		坏A
	63-3	22-5	須恵器　坏	1/2	(13.0)	3.5	8c	ピット406		坏A
	63-4	22-3	須恵器　坏		(13.6)	4.0	8c	溝420		坏A
	63-5	22-7	土師器　埦？	底部3/4	底 (5.0)	(2.1)	8～9c	井戸4木枠内		
	63-6		須恵器　坏	底部	底 (9.6)	(3.0)	8c	ピット164		坏B
	63-7	22-6	土師器　皿	1/5	(16.0)	2.4	8c	焼土坑527		
	63-8		土師器　甕	口縁部1/8	(34.0)	(9.2)	8c	溝420		甕A
	64-1	22-10	土師器　坏	1/10	(19.0)	(3.5)	9c中～後	ピット528		
	64-2	22-11	土師器　甕	体部2/3	最(25.6)	28.0	9c中～後	土坑525		
	65-1		瓦器　埦	1/4	(14.6)	4.1	12c後	ピット120		
	65-2		瓦器　埦	口縁部3/8	(14.6)	(4.0)	12c前	ピット267		
	65-3		瓦器　埦	口縁部1/4	(15.3)	(5.5)	12c前	ピット208		
	65-4	23-1	瓦器　埦	口縁部1/3	(15.8)	(5.6)	12c前	ピット208		
	65-5		瓦器　埦	1/3	(13.8)	(3.6)	12c後	井戸6		
	65-6		瓦器　埦	1/5	(16.2)	4.7	12c前	ピット803		
	65-7	23-2	瓦器　埦	1/2	(15.2)	5.8	12c前	ピット17		
	65-8	23-3	瓦器　埦	1/3	15.8	4.6	12c前	ピット264		
	65-9		瓦器　埦	1/4	(11.7)	(3.4)	13c	ピット224		
	65-10		瓦器　埦	1/5	(11.8)	(3.6)	13c	溝250		
	65-11		瓦器　皿	1/2	(9.0)	2.0	13c	ピット267		
	65-12		瓦器　埦	底部	底 4.5	(1.0)	12c	ピット826		
	65-13	26-1	石鍋	1/10	(20.6)	(6.6)	13c	ピット136		滑石製
E地区	65-14	23-9	瓦質　羽釜	口縁部片	(21.5)	(13.4)	13c	ピット385		
	65-15		須恵器　鉢	口縁部1/10	(30.0)	(8.0)	11～12c	ピット808		東播系須恵器
	65-16		須恵器　鉢	口縁部片	(26.0)	(5.6)	12c	溝250		東播系須恵器
	65-17	23-6	須恵器　鉢	底部と体部1/3	底 (10.8)	(12.5)	12c	土坑524		東播系須恵器
	65-18	23-5	青磁　碗	1/18	(15.6)	(3.8)	13c	ピット76		龍泉窯系
	65-19	23-4	青磁　碗	底部のみ	底 (6.0)	(2.5)	13c	ピット193		龍泉窯系
	65-20	23-7	土師器　皿	口縁部1/4	(7.0)	(1.6)	13c	ピット806		
	65-21		土師器　皿		(8.0)	(1.9)	13c	柱穴822		
	65-22		土師器　皿	1/3	(8.0)	1.3	13c	井戸6		
	65-23		土師器　皿	口縁部1/4	(9.0)	(1.4)	13c	ピット809		
	65-24	23-8	土師器　皿	口縁部1/4	(12.0)	1.8	13c	ピット613		
	65-25		土師器　皿	1/8	(13.4)	2.6	13c	ピット266		
	66-1	23-10	瓦質　羽釜	1/4	(21.6)	(11.0)	14c～	ピット301		
	66-2	23-11	瓦質　羽釜	口1/4	(18.0)	(7.1)	15c	ピット3		
	66-3		土師　小皿	ほぼ完形	8.0	1.7	14c～	ピット213		へそ皿
	66-4		土師　小皿	1/4	(9.0)	1.9	14c～	ピット167		へそ皿
	66-5		土師　小皿	1/6	(10.2)	(2.1)	15c	ピット3		へそ皿
	66-6		土師　小皿	1/2	(7.0)	1.9	14c～	ピット139		へそ皿
	66-7		土師　小皿	1/2	(9.0)	2.2	14c～	ピット139		へそ皿
	66-8		土師　小皿	1/4	(9.6)	2.9	14c～	ピット139		へそ皿
	66-9	23-14	土師　小皿	ほぼ完形	7.2	1.7	14c～	土坑191		へそ皿
	66-10	23-13	土師　小皿	2/3	(7.4)	2.0	14c～	土坑191		へそ皿
	66-11	23-12	土師　小皿	1/2	(9.4)	2.3	14c～	土坑191		へそ皿
	66-12		瓦質　羽釜	口1/10	(14.4)	(5.5)	15c	ピット3		
	66-13		瓦質　羽釜	1/4	(25.0)	(8.6)	15c	ピット22		
	67-1		瓦器　埦	1/8	(11.6)	(2.9)	13c後半	落込み2		
	67-2		白磁　碗	底部	底 7.0	(1.2)	12～13c	落込み2		
	67-3		瓦質　羽釜	1/8	19.0	(5.0)	13c	落込み2		
	67-4		須恵器　横瓶	口頸部1/4	(9.7)	(3.7)	8c	落込み2		
	67-5		須恵器　坏	口縁部1/8	(13.8)	(8.0)	8c	落込み2		坏B
	67-6		瓦質　羽釜	口縁部1/10	(29.0)	(8.1)	15c	落込み2		
	67-7		瓦質　羽釜	体部片	—	10.3	15c	落込み2		
	67-8		土師器　鍋	1/10	(31.0)	(8.3)	中世	落込み2		
	67-9		土師器　鍋	1/10	(33.0)	(7.3)	中世	落込み2		
	67-10		須恵器　鉢	1/8	(26.0)	(8.0)	11～12c	落込み2		東播系須恵器
	67-11		須恵器　鉢	口縁部片	(28.8)	(7.8)	12c	落込み2		東播系須恵器

地区	挿図番号	写真番号	器種	残存状態	口径	器高	時期	遺構名	層名	備考
F地区	73-1		磁器 染付け碗	1/2	(9.4)	5.6	18c前半		盛土	波佐見くらわんか
	73-2	24-1	磁器 染付け碗	口縁部1/4	(9.6)	(4.3)	18c後半		盛土・旧耕作土	波佐見くらわんか
	73-3		陶器 皿	1/3	(11.6)	3.3	18c中頃		盛土・旧耕作土	嬉野焼
	73-4	24-2	陶器 擂鉢	口縁部	(30.0)	(4.5)	17c前半		盛土	丹波焼
	73-5		瓦質 土管	口縁部	(14.0)	(9.8)	近世		盛土	
	73-6		黒色土器 埦	口縁部片	(14.2)	(5.8)	9～10c		盛土	A類埦
	73-7	24-3	須恵器 壺	底部完形	底 (6.4)	(4.0)	8c		盛土・旧耕作土	
	73-8		須恵器 坏	底部3/8	底 (8.0)	(1.8)	8c		盛土	
	73-9		須恵器 坏蓋	口縁部1/3	(13.8)	1.6	8c		盛土	
	73-10		須恵器 坏	底部片	(10.3)	4.5	8c		盛土	坏B
	73-11	24-4	製塩土器	口縁部1/8	(10.6)	(5.5)	8c		盛土・包含層	
	73-12		土師器 坏	口縁部1/12	(14.0)	(3.5)	8c		盛土・包含層	
	74-1		白磁 碗	底部1/3	底 7.6	(2.5)	11～12c		上層包含層	坏A
	74-2	24-7	緑釉陶器 埦	底部 1/5	底 (8.6)	(4.5)	10c後半？		上層包含層	
	74-3		土師器 坏	口縁部1/12	(14.0)	(3.1)	8c		上層包含層	
	74-4	24-8	須恵器 坏	口縁部1/3	14.0	4.0	8c	土坑83上面		坏B
	74-5		須恵器 坏	口縁部1/8	7.2	4.6	8c	土坑83上面		坏B
	74-6		須恵器 坏	口縁部片・底部2/3	(18.2)	(5.1)	8c		下層包含層	坏B
	74-7	24-6	須恵器 蓋？	口縁部片	(19.4)	(7.0)	8c？		上層包含層	
	74-8		土師器 羽釜	口縁部1/20	(22.2)	(3.7)	8c		上層包含層	
	74-9		土師器 羽釜	口縁部1/10	(24.0)	(4.7)	10～11c		包含層	
	74-10		土師器 鉢	1/16	(26.0)	(4.0)	12～13c		包含層	
	74-11		須恵器 壺	口縁部1/6	(13.2)	(7.0)	8c		下層包含層	
	74-12	24-5	須恵器 円面硯	肩部片	—	—	8c		上層包含層	
	75-1	24-9	黒色土器 埦	1/8	(14.3)	6.0	9～10c	ピット136・138		A類埦
	75-2		黒色土器 埦	1/6	(17.0)	5.9	9～10c	ピット136		A類埦
	75-3		須恵器 坏	口縁部2/3	11.2	4.0	8c	土坑189		坏G 焼成不良
	75-4		土師器 皿	口縁部1/3	(7.9)	(3.0)	8c	土坑189		
	75-5	24-10	須恵器 甕	底部1/2	底 16.0	(5.2)	8c？	柱穴116ピット118		

	挿図番号	写真番号	器種	残存状態	長さ(cm)	幅(cm)	時期	遺構名	層名	備考
A～F地区	76-1	25-4	石鏃		(2.5)	2.1			包含層(E地区)	二上山産サヌカイト
	76-2	25-3	石鏃		(2.5)	1.5			表採(B地区)	二上山産サヌカイト
	76-3	25-2	石鏃		(2.0)	1.6			包含層(D地区)	
	76-4	25-1	石鏃		1.9	1.2			包含層(E地区)	
	76-5	25-8	石匙		3.6	4.3			包含層(E地区)	
	76-6	25-7	石匙	一部欠損	4.0	4.7			表採(B地区)	金山産サヌカイト
	76-7	25-5	スクレイパー		7.9	4.2			盛土(D地区)	二上山産サヌカイト
	76-8	25-6	石錐	一部欠損	4.0	(1.9)		ピット38(D地区)		金山産サヌカイト?
	76-9	25-9	砥石	一部欠損	6.0	4.8			包含層(F地区)	
	76-10	25-11	砥石	一部欠損	(10.4)	4.8			包含層(D地区)	
	77-1	25-10	砥石	一部欠損	(8.1)	3.2			盛土・旧耕作土(F地区)	
	77-2	25-12	砥石	一部欠損	(5.4)	(2.8)			包含層(E地区)	
	77-3		砥石	一部欠損	(5.0)	(2.5)			包含層(E地区)	
	77-4	26-5	敲石		—	—			包含層(F地区)	
	77-5	18-3	石製品		—	—		溝223(D地区)		炉壁？
	77-6	26-2	石鍋 二次加工品		—	—	13c		包含層(E地区)	滑石製
	77-7	26-3	瓦 二次加工品		—	—	近世		包含層(E地区)	
	77-8	26-4	硯	破片	—	—		溝329(E地区)		
	78-1	27-5	鉄製鋤		(26.0)	(13.3)	12c後半	柱穴201(C地区)		
	78-2	27-4	鉄製鋤		(11.7)	—	13c	溝250(E地区)		
	78-3	27-3	鉄製鋤		(9.6)	(18.5)		ピット618(E地区)		
	79-1	27-1	刀子		(14.4)	(1.1)	10c後半	ピット41(F地区)		
	79-2	27-2	刀子		(4.2)	(0.8)			下層包含層(B地区)	
	79-3	26-8	鉄釘		(7.9)	0.9			包含層(D地区)	
	79-4		鉄釘		(3.1)	(0.4)	10c後半	ピット266(D地区)		
	79-5	26-9	鎹		(6.3)	(1.1)	10c後半	ピット266(D地区)		
	79-6	26-6	鉄鏃		(3.7)	(1.7)			上層包含層(B地区)	
	79-7	26-7	鉄鏃		(4.5)	(0.9)			上層包含層(B地区)	
	79-8	27-6	開元通寶		—	—	(初鋳)621年	ピット120(F地区)		唐銭
	79-9	27-7	元豊通寶		—	—	(初鋳)1078年	ピット381(E地区)		北宋銭

(　)は復元口径、及び残存高。底径と最大径についてはそれぞれ「底」「最」と表記した。

付章　自然科学的分析

第１節　宿久庄西遺跡の珪藻化石群集

藤根　久(株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

珪藻は、10～500μｍほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている(小杉、1988；安藤、1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種(陸生珪藻)も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、宿久庄西遺跡Ａ地区内の３地点のトレンチ断面(Ａ～Ｃ地点)より採取された試料のうち、Ｂ・Ｃ地点より採取された試料について、土壌堆積物中に含まれる珪藻化石群集を調べ、堆積物の堆積環境について検討した。

2. 試料の処理方法

試料は、Ａ地区の北側トレンチ南壁(Ｂ地点)と南側トレンチ南壁(Ｃ地点)より採取された９試料である。採取層位・試料の概要については図83および表４に示した。

表４　採取試料概要

資料名	採取層位	土色・土質
B1・C1・C2	中世包含層	オリーブ灰色　シルト～細砂(粘質強い)
B2・B3・C3	古代～平安包含層	灰～褐灰色　シルト～細砂(粘質でマンガン斑が多い)
B4・B5・C4	黒褐色層(古代以前包含層)	黒褐～褐灰色　粘土～細砂(礫を含む)

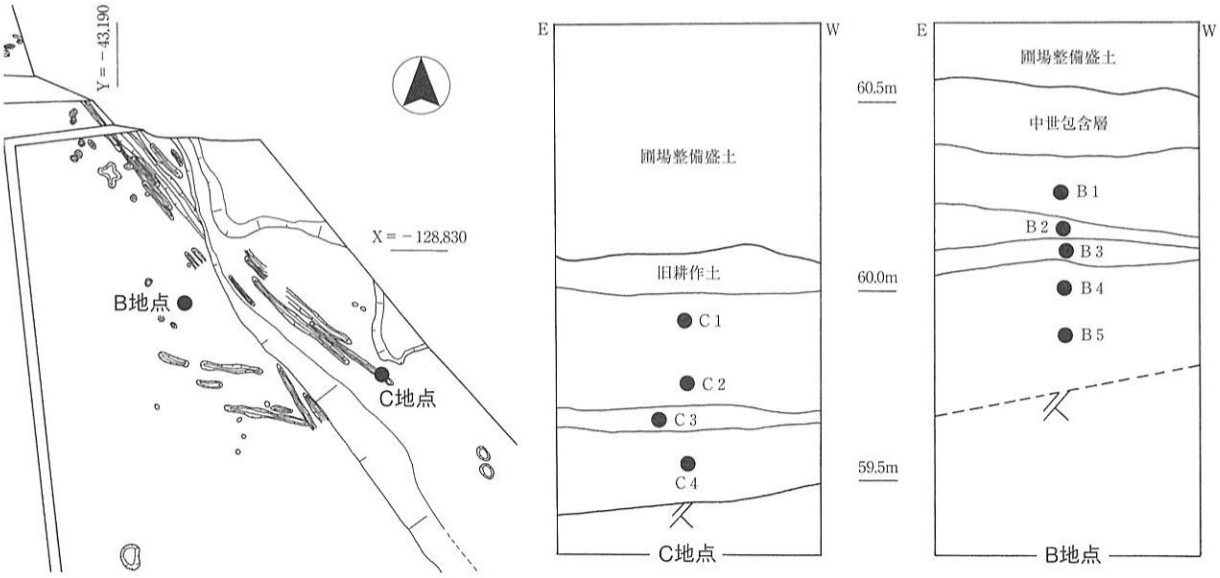


図83　Ａ地区　試料採取地点図・断面図

試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

(1) 湿潤重量約１ｇ程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

(2) 反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。

(3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後はマウントメディアで封入しプレパラートを作成した。

作成したプレパラートは顕微鏡下1000倍で観察した。なお、珪藻化石が少なく、プレパラート全面について精査した。

3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉(1988)および安藤(1990)が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水～汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。以下に、小杉(1988)が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤(1990)が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群(Ａ)]：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群(Ｂ)]：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群(Ｃ1)]：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草(アマモなど)に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群(Ｄ1)]：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群(Ｅ1)]：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群(Ｃ2)]：塩分濃度が４～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群(Ｄ2)]：塩分濃度が５～26パーミルの水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着

表５　産出珪藻化石一覧表

分類群	種群	B1	B2	B3	B4	B5	C1	C2	C3	C4
Cyclotella stylorum	B	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Caloneis lauta	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	?	-	-	-	-	-	6	-	-	-
Gomphonema sphaerophorum	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Navicula cuspidata	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia borealis	Q	-	-	-	-	-	1	-	-	-
P. spp.	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Unknown	?	-	1	-	-	-	2	-	-	-
内湾 (B)		-	-	-	-	-	1	-	-	-
沼沢湿地付着生 (O)		-	-	-	-	-	1	-	-	-
陸域 (Q)		-	-	-	-	-	1	-	-	-
広布 (W)		-	1	-	-	-	2	-	-	-
淡水不定・不明種 (?)		-	1	-	-	-	9	-	-	-
珪藻殻数		0	2	0	0	0	14	0	0	0

生活する種群である。

［汽水泥質干潟指標種群（E2）］：塩分濃度が２～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

［上流性河川指標種群（J）］：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらにはAchnanthes属が多く含まれるが、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群（K）］：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（L）］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。

［湖沼浮遊生指標種群（M）］：水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N）］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地におれる付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

［沼沢湿地付着生指標種群（O）］：水深１m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P）］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q）］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

4．珪藻化石の特徴とその堆積環境

９試料のうち珪藻化石が検出された試料は、Ｂ２とＣ１のみであるが、検出された珪藻殻数は非常に少ない。これら試料から検出された珪藻化石は、海水種が１分類群１属１種、淡水種が７分類群６属５種であった（表５）。なお、試料Ｃ１とＣ２では、海綿動物の骨格の一部である骨針化石が多く含まれていた。

試料Ｂ２では、淡水種で広布種のCaloneis lautaと不明種の破片のみであった。

試料Ｃ１では、沼沢湿地付着生指標種群Stauroneis phoenicenteron、陸域指標種群Pinnularia borealisが検出され、他は淡水種広布種であった。なお、下位層からの誘導化石と思われる内湾指標種群Cyclotella stylorumも検出された。

検討した試料は、比較的粘質土であり、堆積時における珪藻化石の流出の可能性が低いことから、当時珪藻が生育できる環境でなかったと考えられ、乾いた環境であったものと考える。

ただし、試料Ｃ１では少ないものの沼沢湿地付着生指標種群の珪藻化石などが検出されていることから、沼沢地のような水域が成立していたものと考える。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.

第２節　宿久庄西遺跡の花粉化石

鈴木　茂(株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

本節では、宿久庄西遺跡Ｂ・Ｃ地点より採取された土壌試料について行った花粉分析の結果・考察を示し、当遺跡における栽培作物の推定と古植生の検討および、珪藻分析から推察される土層の性格について検討した。

2. 試料と分析方法

分析は、前節「宿久庄西遺跡の珪藻化石群集」において対象とした、Ａ地区Ｂ地点の５試料およびＣ地点の４試料において行った。

計９点の試料について、以下のような手順にしたがい花粉分析を行った。

試料(湿重約４～６ｇ)を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜ 目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉26、草本花粉18、形態分類を含むシダ植物胞子３の総計47である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表６に、それらの分布を図84(Ｂ地点)に示したが、Ｃ地点については花粉化石の検出数が少なく分布図としては示せなかった。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本を作成し、各々にＰＬＣ．ＳＳ番号を付して形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、多くの試料において花粉化石の検出数は少なく保存状態も悪く、結果として不明が多くなってしまった。以下に各地点の結果を示す。

Ｂ地点：樹木花粉の占める割合が比較的高く、特に下位の２試料(Ｂ4, Ｂ５)は80％前後を占めている。この下位２試料ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属－マテバシイ属(以後シイ類と略す)が優占しており、他はコナラ属コナラ亜属やトチノキ属，テイカカズラ属などが若干検出されているのみである。

上位３試料(Ｂ１～Ｂ３)においては下位で優占していたアカガシ亜属とシイ類は半減あるいはそれ以上に減少しているものの全体としては依然として目だった出現率を示している。反対にコナラ亜属は上部に向かい増加しており、最上部では最も多く得られている。またコウヤマキ属も上部３試料では増加しており出現率は５％弱を示している。この上部３試料のみで出現する分類群が特に針葉樹で多く、マツ属複維管束亜属(アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類)やスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科(以後ヒノキ類と略す)が最上部では１％を越えている。草本類ではイネ科の増加が目立っており、木本同様これら３試料のみ出現する分類群も多いのが特徴的である。そのうちカヤツリグサ科とタ

表6　産出花粉化石一覧表

和名	学名	B1	B2	B3	B4	B5	C1	C2	C3	C4
樹木										
マキ属	*Podocarpus*	1	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	1	-	1	-	-	-	-	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	1	1	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	3	2	1	-	-	1	-	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	1	2	-	-	-	-	-	-	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	5	8	6	1	1	-	-	2	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	2	4	-	-	-	-	-	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	4	1	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	-	1	-	-	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	2	1	2	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	-	3	-	2	1	3	-	-	-
ブナ	*Fagus crenata* Blume	-	1	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	15	19	10	6	2	3	-	1	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	9	28	23	54	84	4	-	1	-
クリ属	*Castanea*	-	-	-	-	2	-	-	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	10	31	18	55	56	1	-	-	1
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カエデ属	*Acer*	1	2	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	5	1	-	-	1	-
ウコギ科	Araliaceae	-	2	-	-	2	-	-	-	-
ティカカズラ属	*Trachelospermum*	-	-	-	3	1	-	-	-	-
草本										
サジオモダカ属	*Alisma*	2	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	22	12	15	2	-	9	-	8	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	4	14	7	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	-	1	-	-	1	-	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	1	1	1	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	1	-	-	-	1	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	3	1	1	-	1	-	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	2	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	2	2	1	1	1	5	-	-	-
バラ科	Rosaceae	-	-	-	1	1	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	2	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	1	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	1	-	1	-	-	-	-	-	-
ベニバナ属近似種	cf. *Carthamus*	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	4	4	4	1	1	-	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	4	2	-	-	-	-	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	10	12	-	-	1	-	1	1
シダ植物										
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	2	2	1	-	1	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	12	21	18	21	10	10	2	3	2
三条型胞子	Trilete spore	2	9	5	17	7	1	2	1	1
樹木花粉	Arboreal pollen	54	108	63	127	151	12	0	5	2
草本花粉	Nonarboreal pollen	42	55	47	8	3	18	0	9	1
シダ植物胞子	Spores	14	32	25	39	17	12	4	4	3
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	110	195	135	174	171	42	4	18	6
不明花粉	Unknown pollen	23	73	41	131	142	6	0	2	2

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

ンポポ亜科が５％前後と比較的多く得られており、ソバ属も低率ながら連続して得られている。また水生植物(抽水植物)のサジオモダカ属やミズアオイ属も検出されている。

Ｃ地点：各試料とも花粉化石の検出数は非常に少なく、その中ではＣ１試料で樹木のハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、草本のイネ科、アブラナ科が目立って得られている。

4. 栽培作物について

上記した様にＢ地点の上位３試料においてイネ科花粉がやや目立って検出されている。このイネ科花粉はその形態から多くがイネを含むイネ属と判断される。また抽水植物のサジオモダカ属やミズアオイ属も若干検出されている。このサジオモダカ属やミズアオイ属はサジオモダカやコナギといったいわゆ

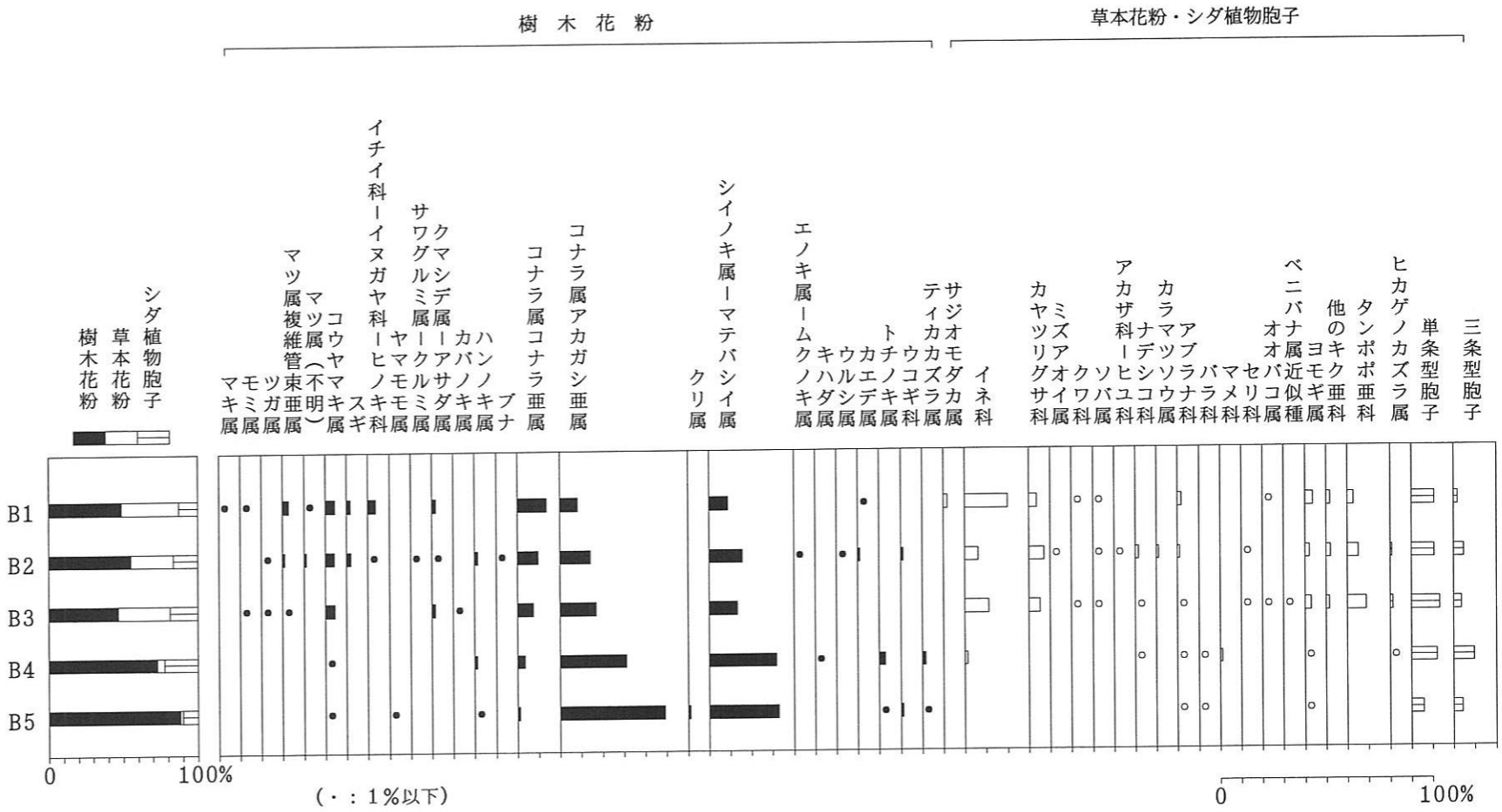


図84　B地点の花粉化石分布図
（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

る水田雑草を含む分類群である。こうしたことから上位３試料層準においては水田稲作が営まれていた可能性が考えられ、予察的にＢ１・Ｂ３・Ｂ５・Ｃ１・Ｃ４の５試料について植物珪酸体分析を試みた。その結果、Ｂ１・Ｂ３・Ｃ１の３試料においてイネの機動細胞珪酸体が若干観察され、Ｃ１ではイネの穎(いわゆる籾殻)に形成される珪酸体の破片も認められた。よって、Ｂ２試料層準については不明であるが、Ｂ１・Ｂ３層準では水田稲作が行われていたことが考えられる。また、珪藻分析から沼沢湿地環境が推定されているＣ１層準についても同様である。しかしながら多くの花粉化石はかなり傷んでおり、消失しているものもかなり有るように思われることから、この水田稲作については遺構の状態や検出遺物など多方面からの検証作業が必要であろう。なお、Ｂ１・Ｂ３の２試料においては珪藻化石がほとんど得られていないことから、水田稲作が行われていたとするとかなり乾いた環境での耕作と推察される。

またＢ地点の上位３試料からはソバ属も検出されている。このソバ属はいわゆるソバと考えられ、ソバの栽培も考えられる。上記した様にこれらの層準では水田稲作が営まれていた可能性があることから、ソバは稲作地の周囲や近辺で栽培されていたのではないかと推察される。

その他、Ｃ１試料においては少ない中、アブラナ科がやや目立って検出されている。このアブラナ科には栽培種としてはアブラナやカブ、その他野菜類が多くあり、いずれかである可能性もあるが花粉形態からはそれらの分類は難しく今後の課題としたい。

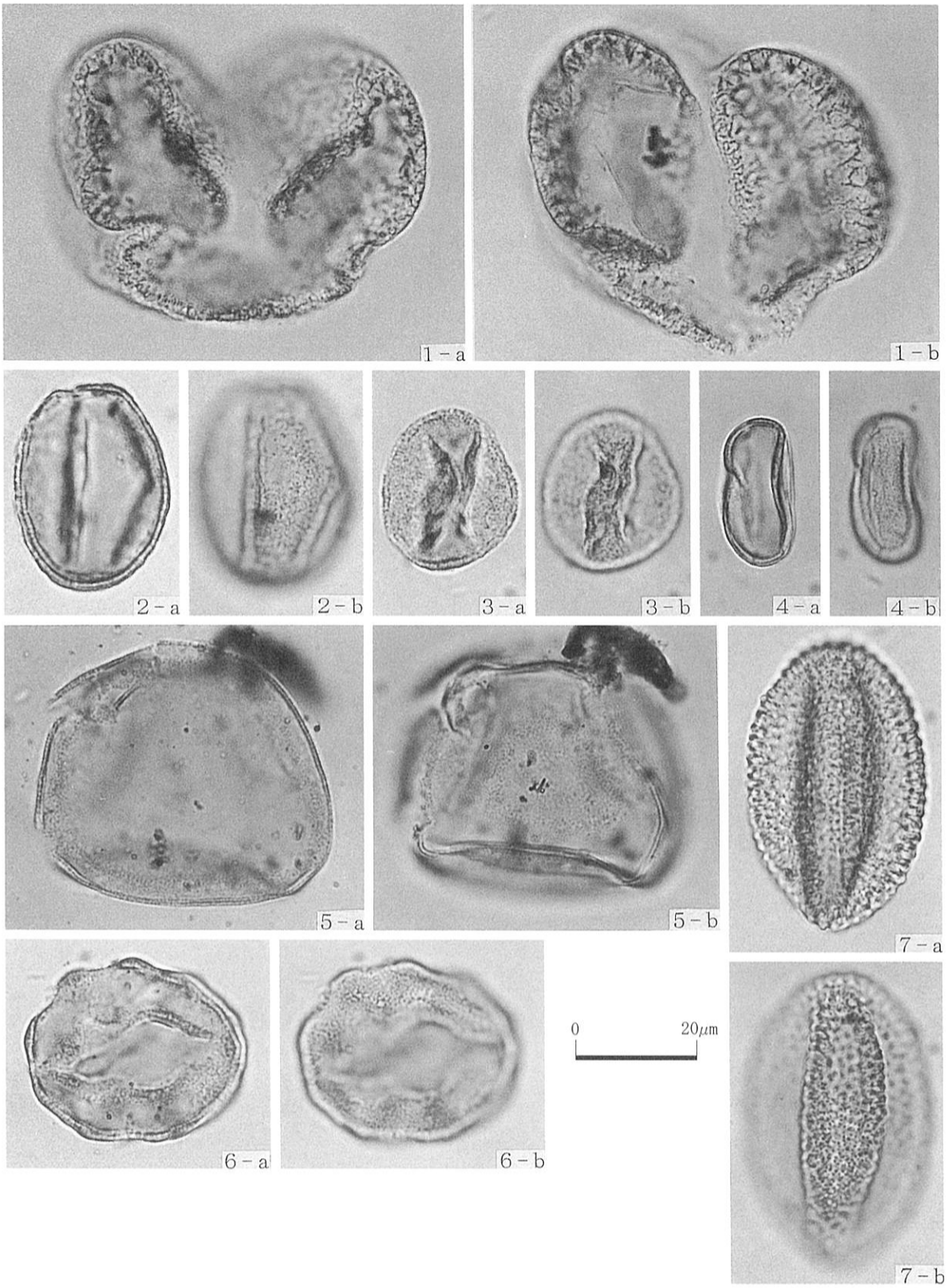
5. 遺跡周辺の古植生

Ｂ地点の下部試料においては樹木のアカガシ亜属とシイ類が優占しており、これらを主体とした照葉樹林が遺跡周辺に成立していたと考えられる。予察的に行った植物珪酸体分析ではネザサ節型が最も多く、クマザサ属型も比較的多く観察され、ヨシ属も認められる。また珪藻分析からは乾いた環境が推定されていることから、Ｂ地点の下部層は比較的乾燥した森林土壌的要素が高いと推察される。この森林内ではクマザサ属型のササ類(ミヤコネザサやスズダケなど)がみられ、林縁部にはネザサ節型のササ類(ミヤコネザサなど) が群落を形成し、地下水位の高いところにはヨシ属(ヨシ・ツルヨシなど)が一部生育していたのであろう。その後、水田稲作が営まれるようになったと推察され、遺跡周辺では古代人の活動が活発となり、有用材として使われるなどして照葉樹林はその分布を急速に縮小した。代わって二次林要素としてニヨウマツ類やスギ・コナラ亜属などが一部増加した。

このように、Ｂ地点の下部層(Ｂ４・Ｂ５)は比較的乾燥した森林土壌的性格が強いと考えられ、上部層(Ｂ１～Ｂ３)は耕作土(水田？)的性格が高いと推察され、やはり珪藻化石がほとんど得られていないことからかなり乾燥していたと考えられる。

一方、Ｃ地点においては最上部のＣ１層準では水田的性格が高いと推察されるが、他の下位層については珪藻および花粉化石とも少なく、土層の性格については言及できないと考える。

なお一般に花粉は丈夫な外膜を有しており、川や湿地などの水域に落下した花粉粒は良好な状態で保存される。しかしながら陸域に落下した花粉粒は紫外線の酸化作用や土壌バクテリアの食害を受けたりして容易に分解・消失してしまう。今回の試料は珪藻分析から乾燥した環境が推察されており、上記のことから花粉化石の保存状態も悪く不明が多くなってしまった。また消失してしまった花粉も多いのではないかと予想され、好条件下試料での花粉組成をみてみたいものである。

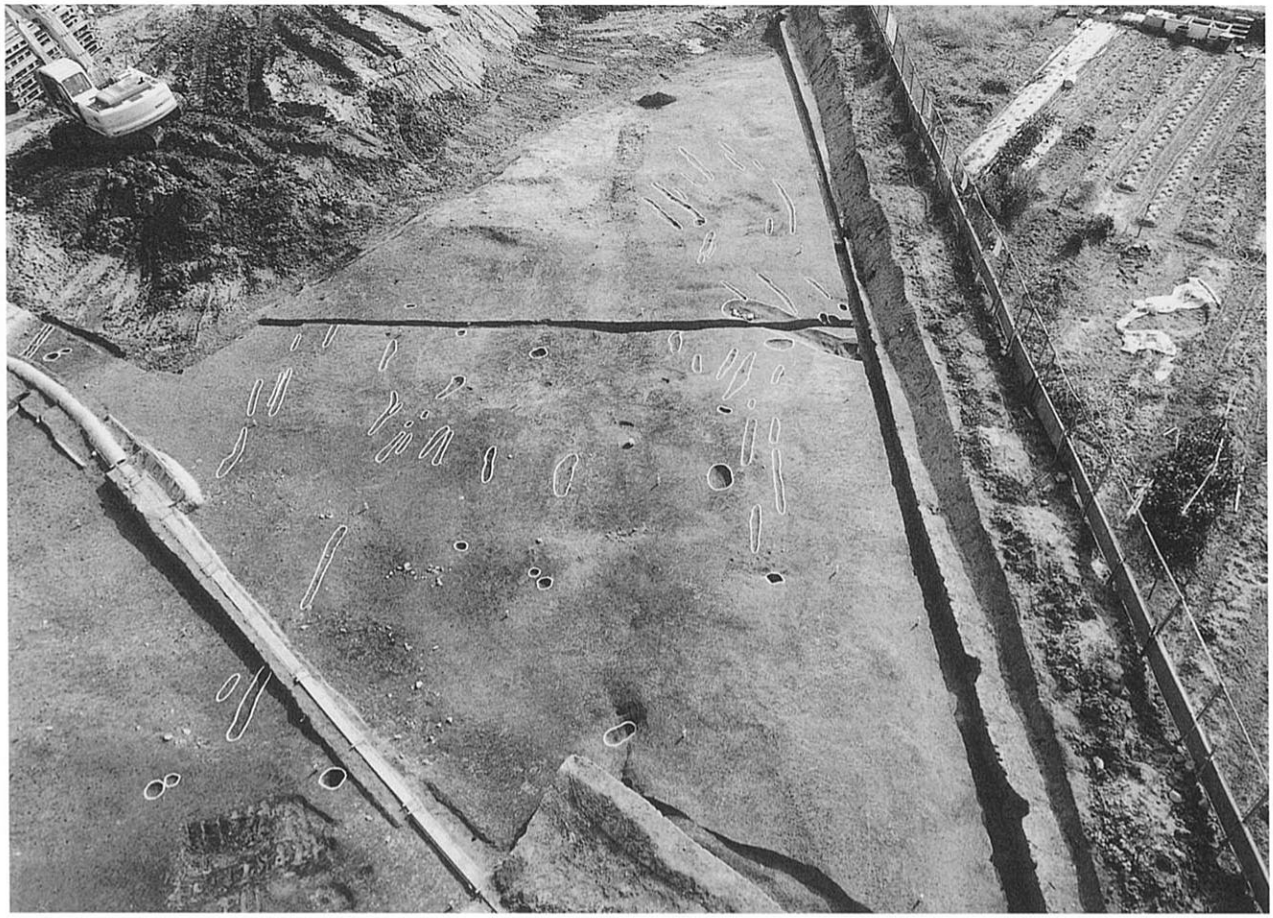


1：マツ属複維管束亜属　ＰＬＣ．ＳＳ　3051
2：コナラ属コナラ亜属　ＰＬＣ．ＳＳ　3052
3：コナラ属アカガシ亜属　ＰＬＣ．ＳＳ　3048
4：シイノキ属－アテバシイ属　ＰＬＣ．ＳＳ　3046
5：イネ科　ＰＬＣ．ＳＳ　3047
6：サジオモダカ属　ＰＬＣ．ＳＳ　3049
7：ソバ属　ＰＬＣ．ＳＳ　3050

写真67　宿久庄西遺跡Ｂ１試料の花粉化石

図　　版

図版1　A地区全景



西半部（北から）：中近世の耕作痕跡が多数確認される。

南東部（北から）：北東方向へ傾斜する地形にあわせて、中世以降の耕作地段差が見える。

図版2　B地区全景

北西部(南から)：削平され遺構が検出されない。木根痕跡が黒褐色に変色して見える。

南東部(南から)：削平されずに残った低地部では、平安時代のピット群が見られる。

図版3　C地区全景

西半部（南から）：南北に伸びる溝101とそれに平行する建物31。

東半部（南から）：左上の建物18周辺には平安時代頃の遺構が集中する。

図版4　D地区全景

西半部（南から）：建物130と奈良時代を中心としたピット群。

北西部（東から）：中世の溝223付近。同様な溝や耕作痕跡がいくつか見られる。

図版5　E地区全景（1）

南東部（南から）：ピット群。奈良～鎌倉時代にかけての遺構が重なって検出される。

南西部（東から）：圃場整備で造成された段差の際には遺構が残る。

図版6　E地区全景（2）

北東部（南から）：削平が著しく遺構が検出されない。掘方の深い建物柱穴や溝は残存する。

南西部（北東から）：建物426北側は、近代の暗渠で切られる。

図版7　E地区全景（3）

南東端部（北西から）：ピット群の続き。東端は圃場整備以前の耕作地段差により切られる。

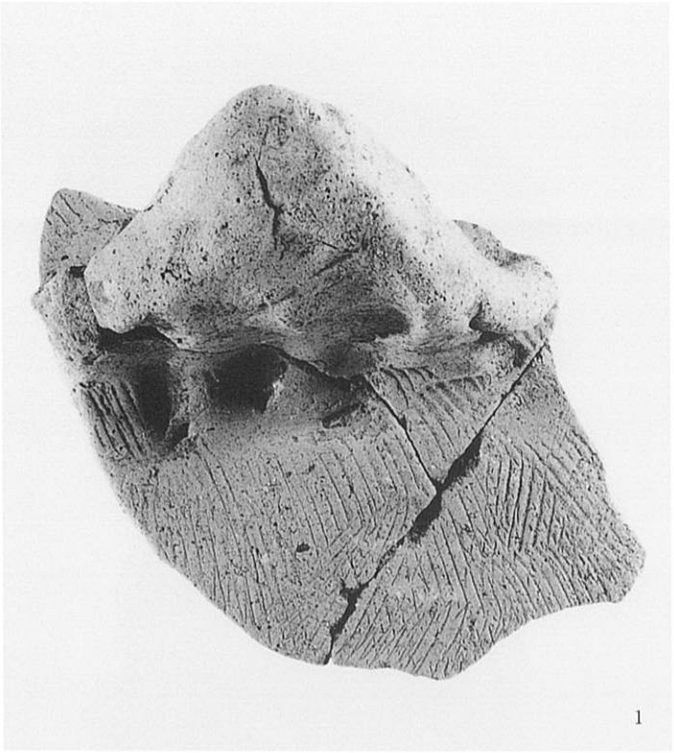
北西端部（西から）：建物271西側の柱穴列。切り合いが多い。

図版8　F地区全景

西半部(南東から)：左上の低地部で建物34と平安時代のピット群が検出された。

南東部(北から)：建物90・100の東側は削平を受け遺構面が残存しない。

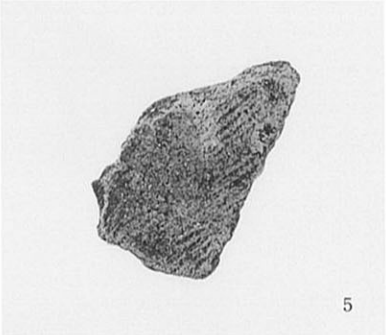
図版9　A地区出土遺物・B地区出土土馬


1

2

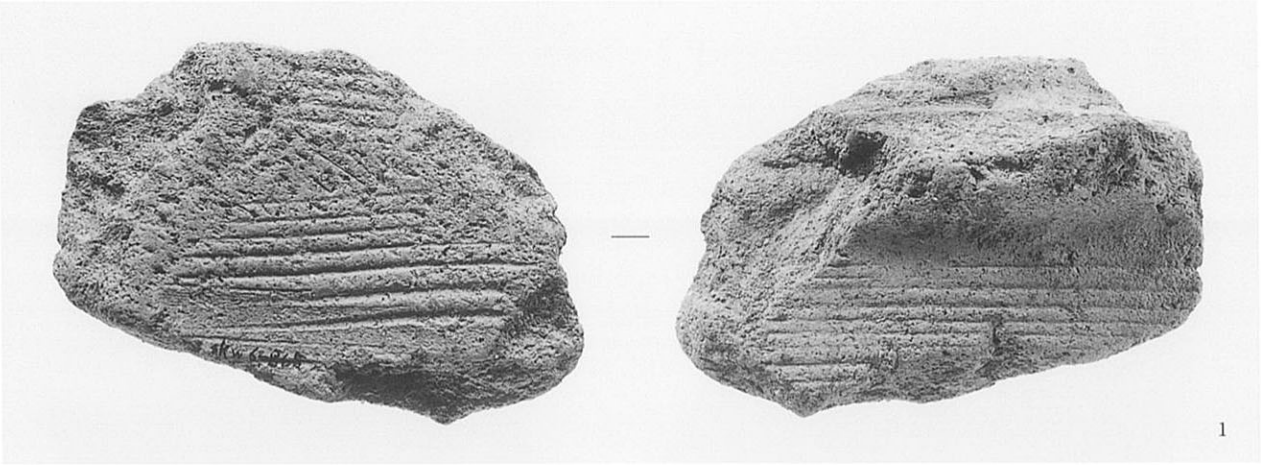
3

4

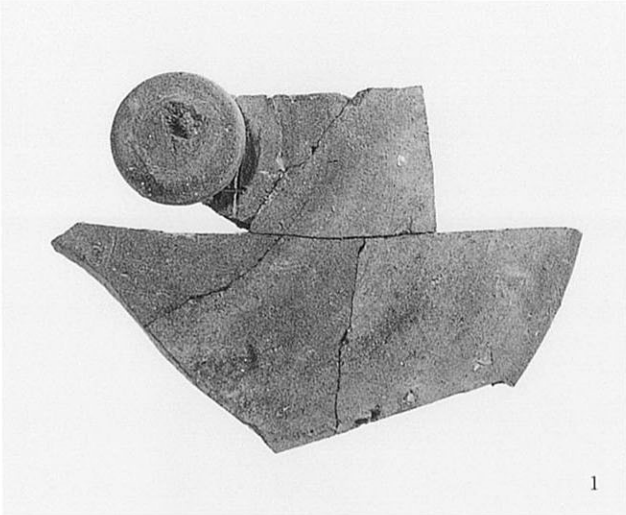

5

6

図版10　B地区出土遺物



図版11　C地区盛土・包含層出土遺物

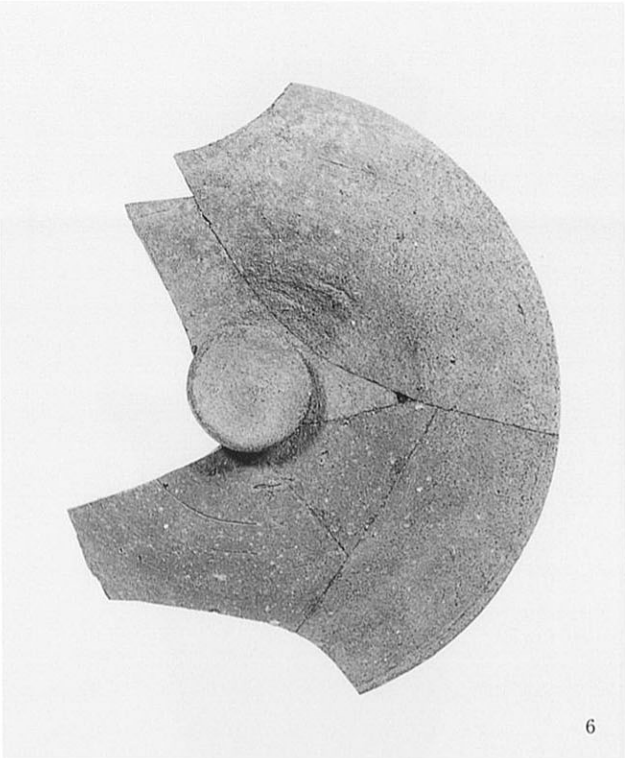

1

2

3

4

5


6

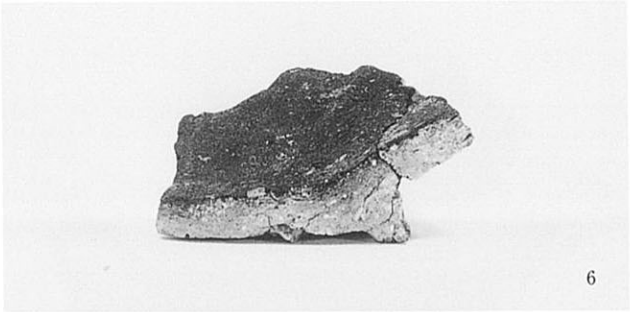
7

8

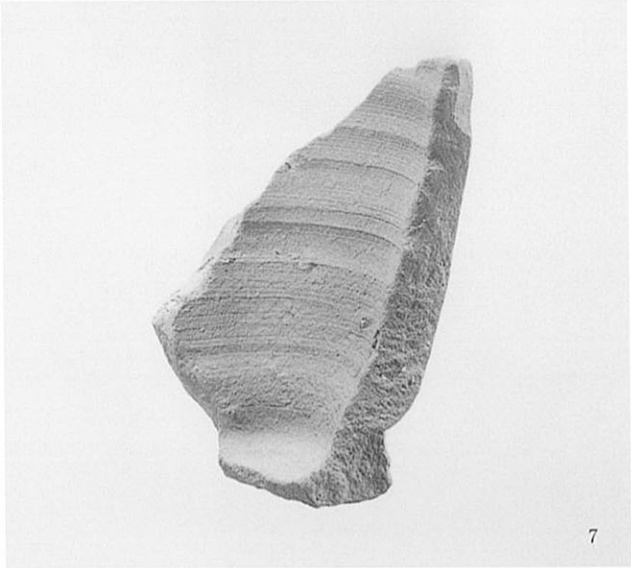
9

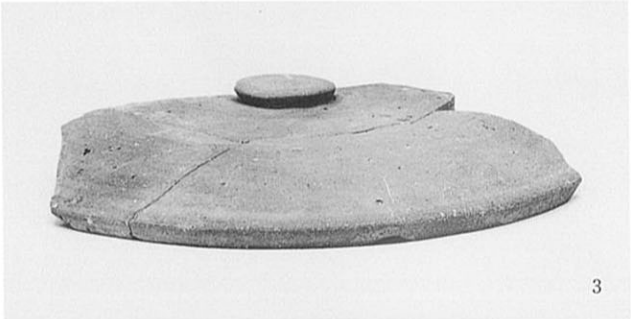
図版12　C地区盛土・包含層・遺構出土遺物

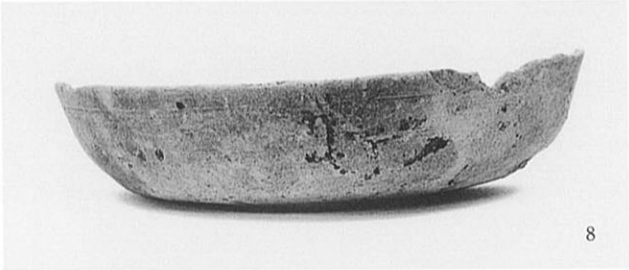
1


6

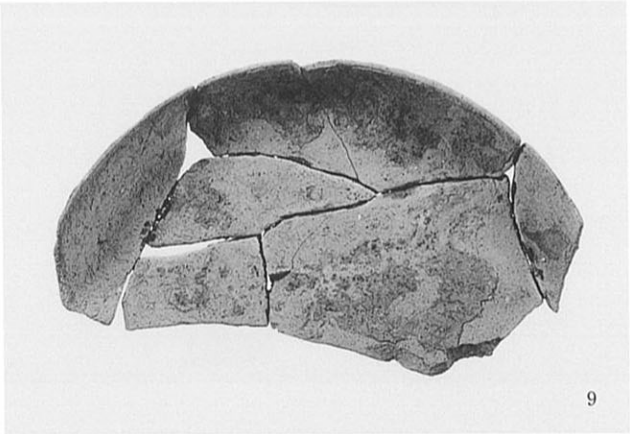
2

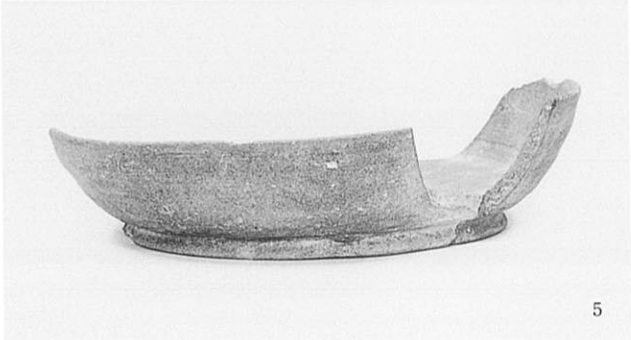

7


3


8

4


9

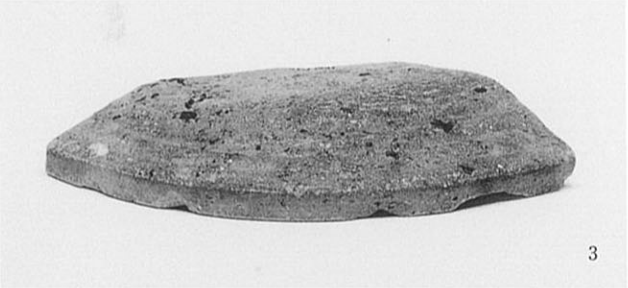

5

10

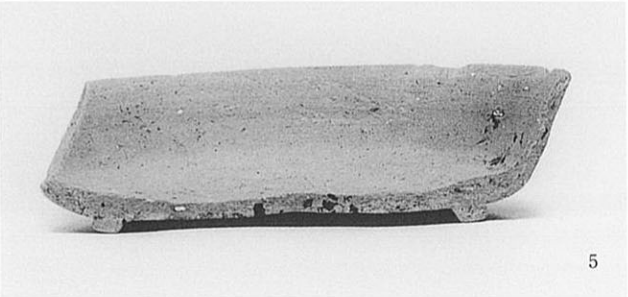
図版13　C地区落ち込み46・遺構出土遺物

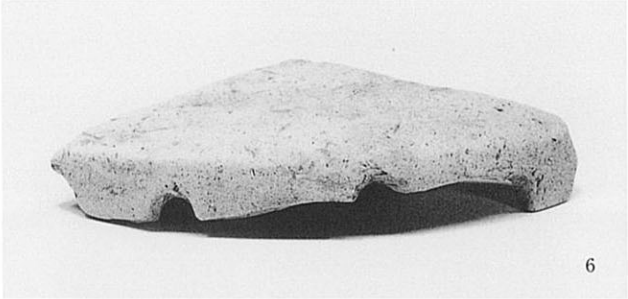
1

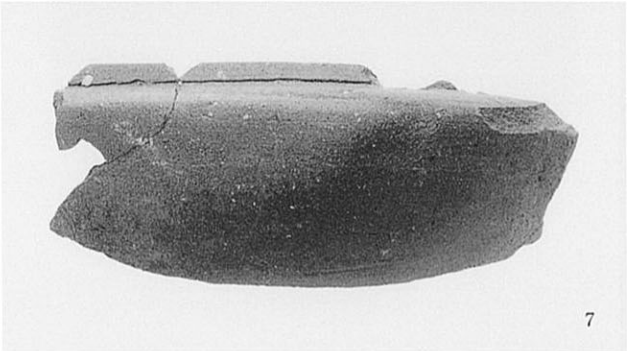
2


3

4


5


6


7

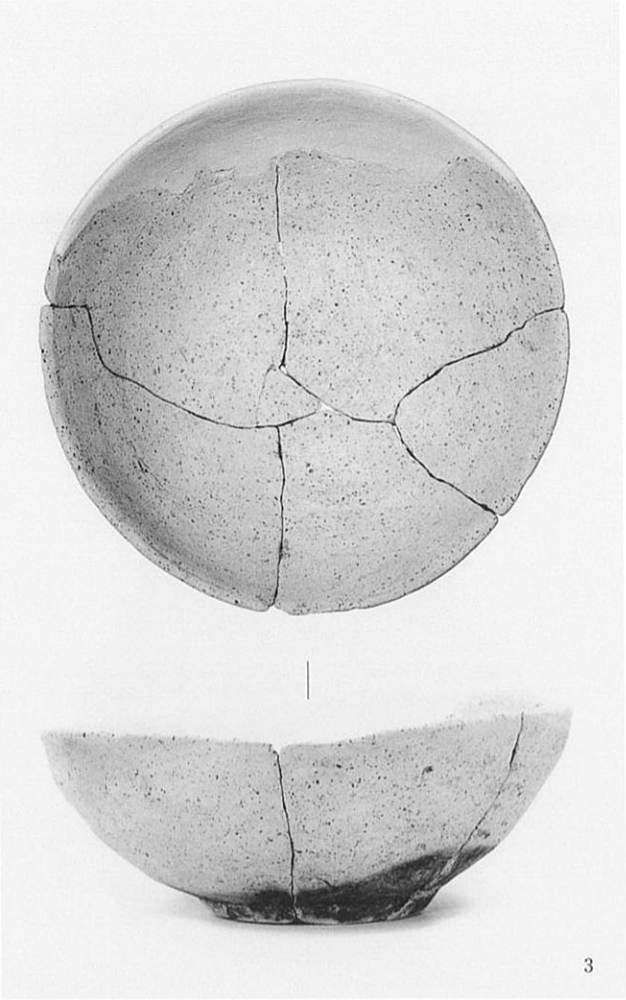
8

9

10

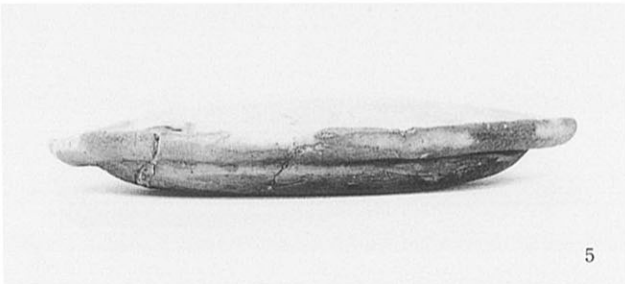
図版14　C地区土坑41出土遺物

1


3

2

4


5

6

図版15　C地区遺構出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

図版16　D地区盛土・包含層出土遺物

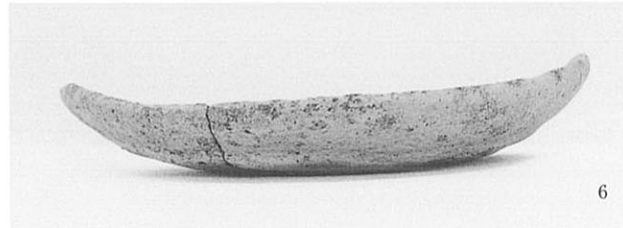
1

2

3

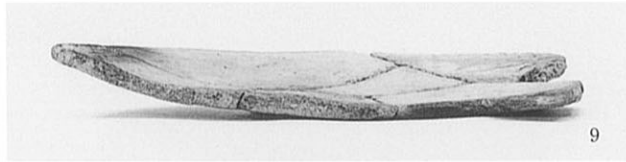
4

5


6

7

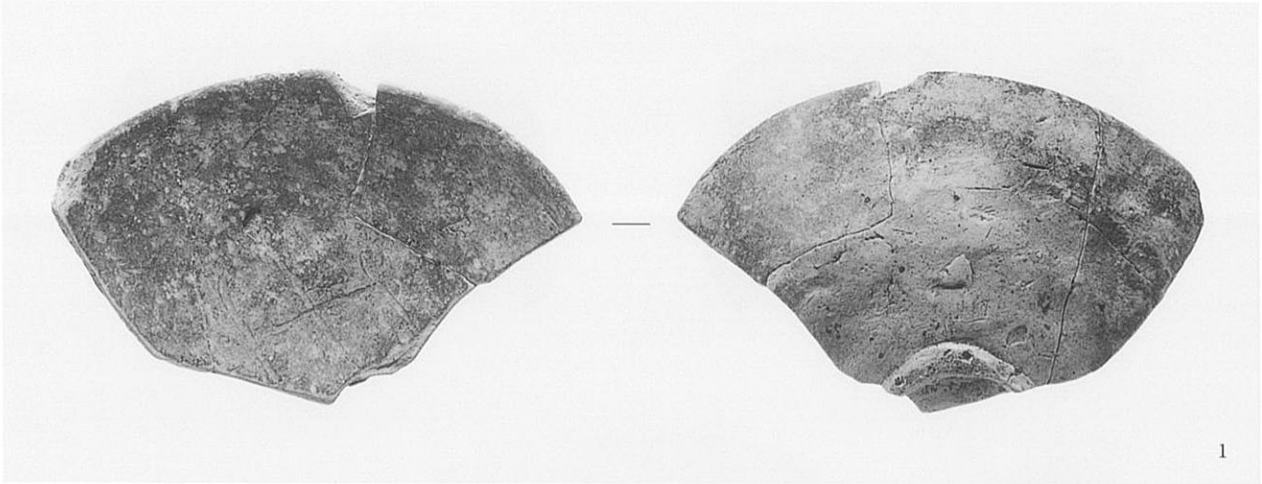
8


9

10

11

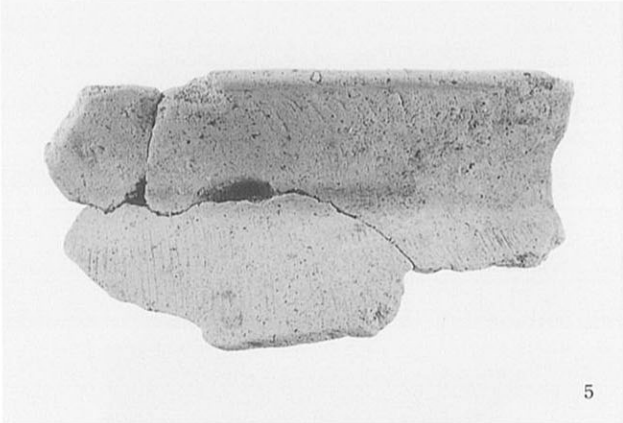
図版17　D地区井戸230出土遺物（1）

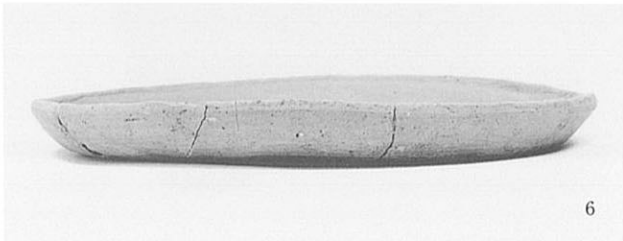

1

2

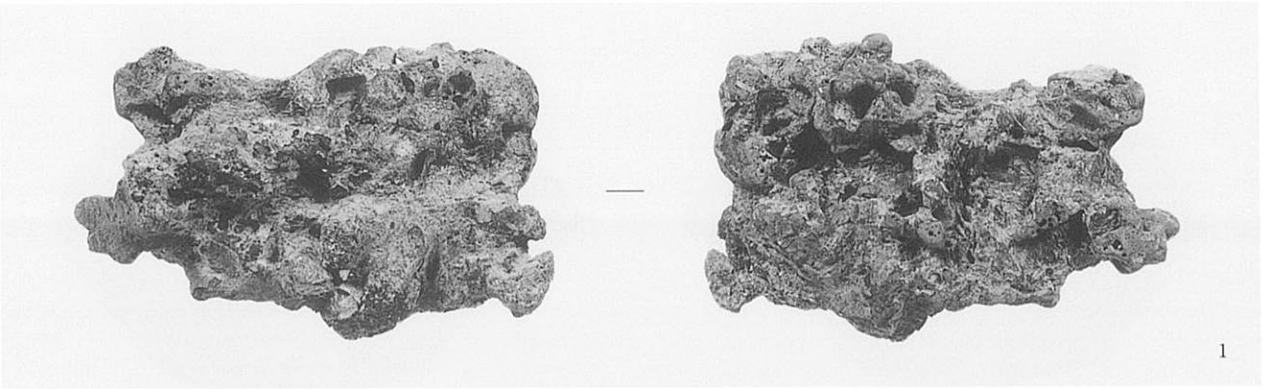
4

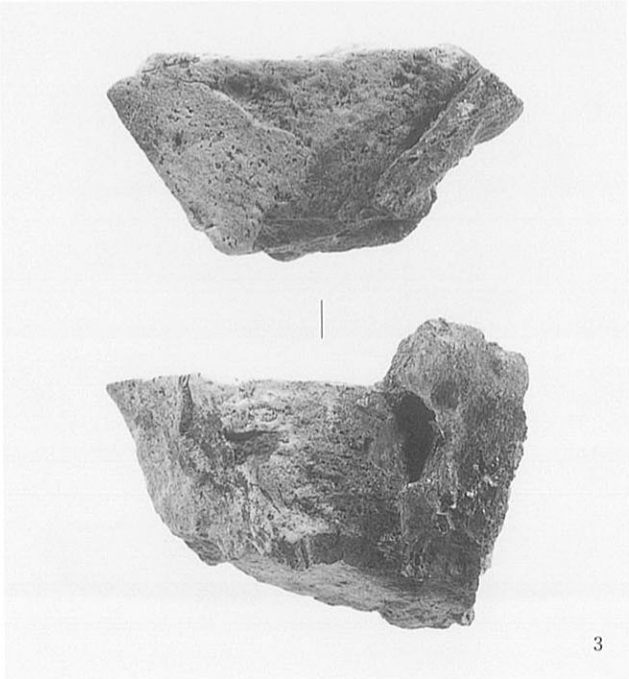
3

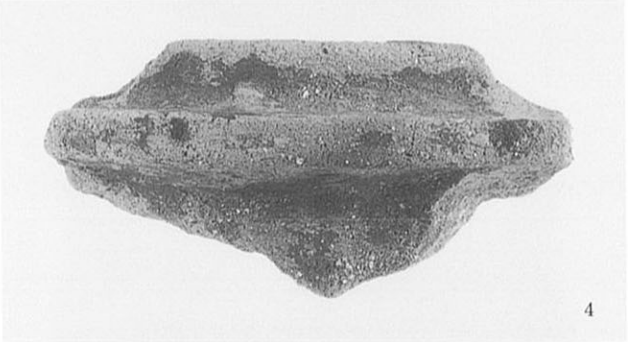

5


6

図版18　D地区井戸230出土遺物（2）



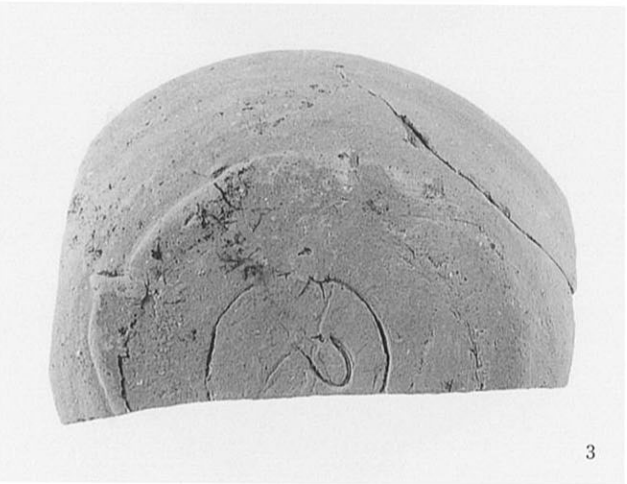


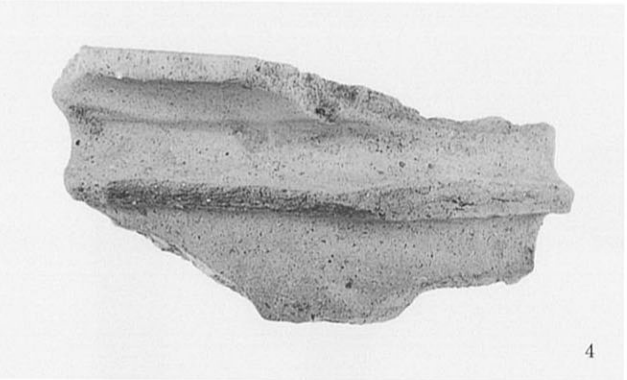


図版19　E地区盛土・包含層出土遺物（1）

1

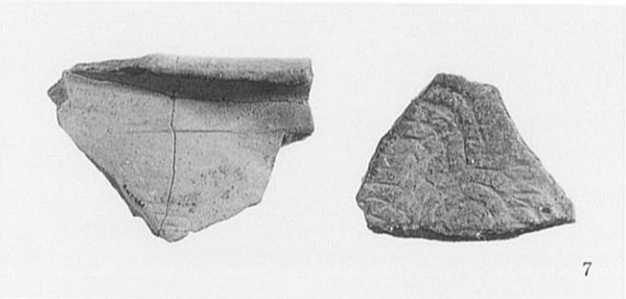
2

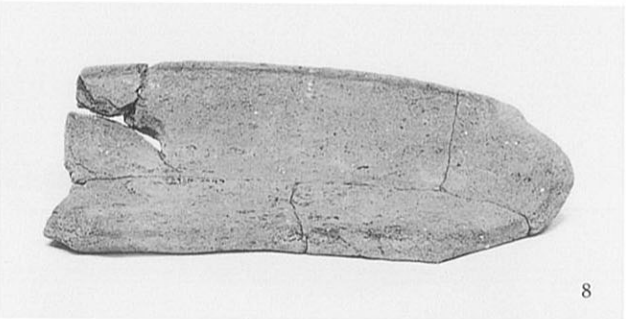

3

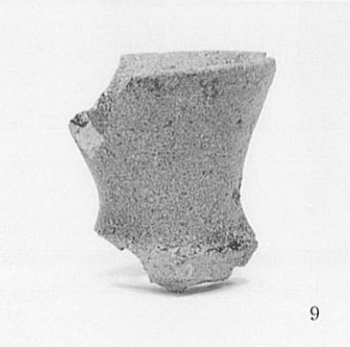

4

5

6


7

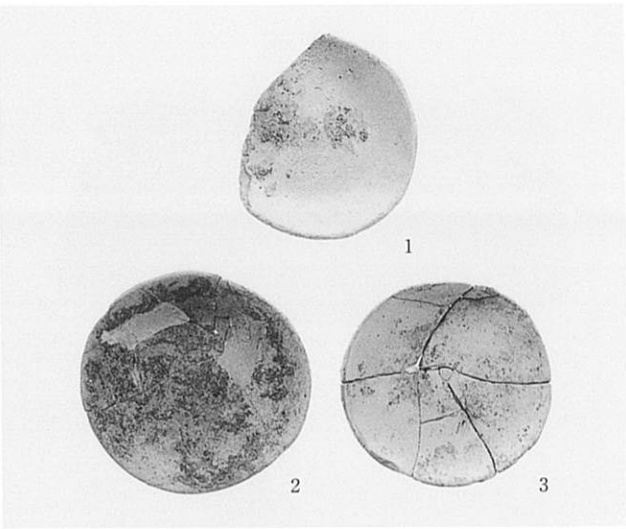

8

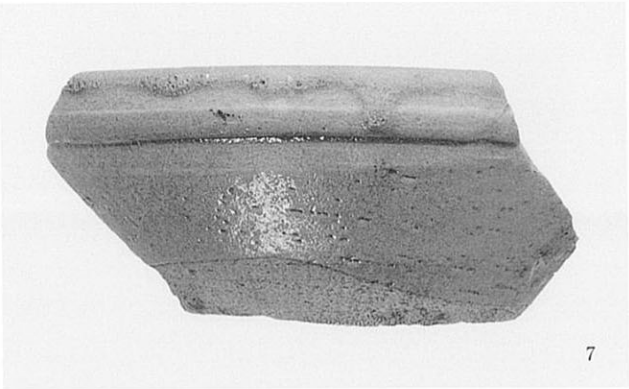

9

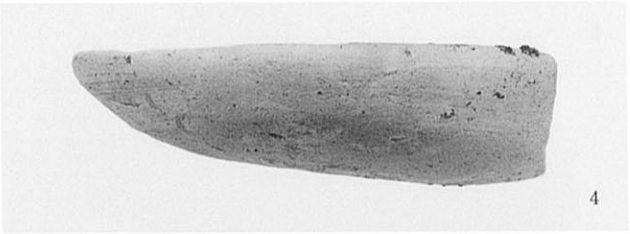
10

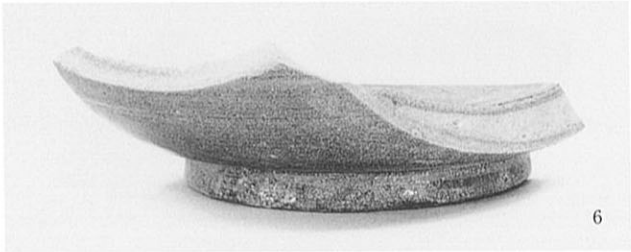
11

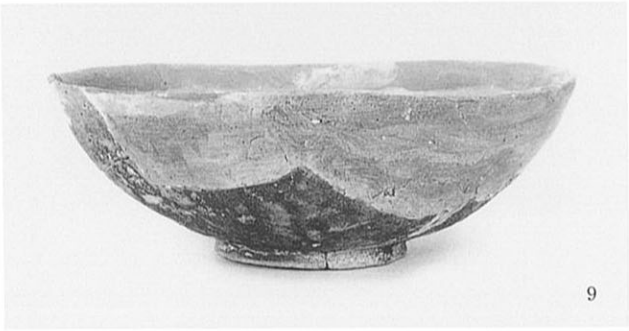
図版20　E地区盛土・包含層出土遺物（2）







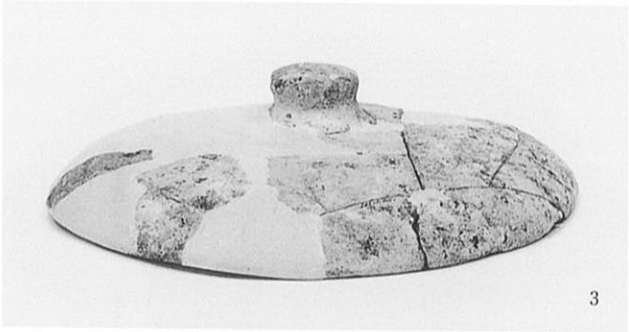


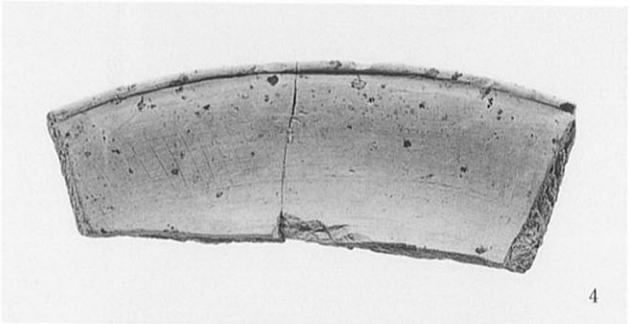


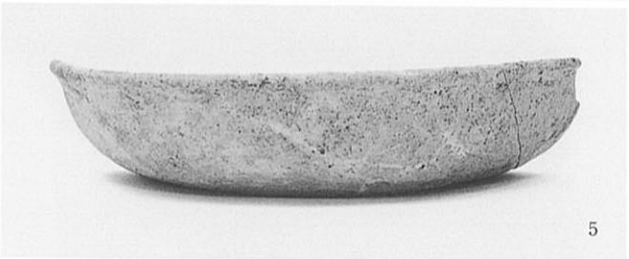
図版21　E地区土坑1出土遺物

1

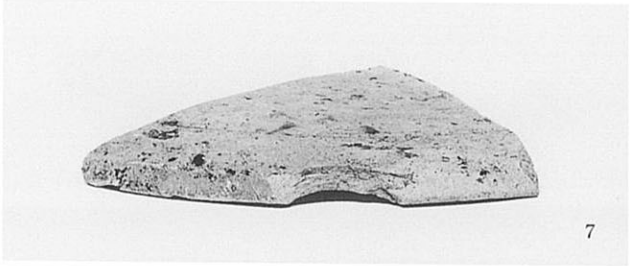
2

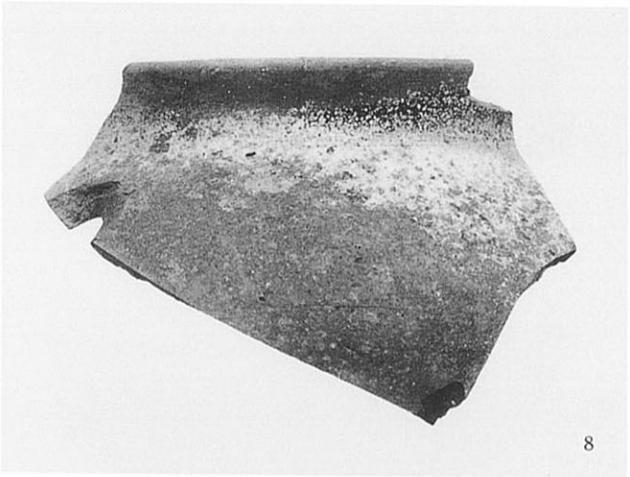

3


4


5

6


7


8

9

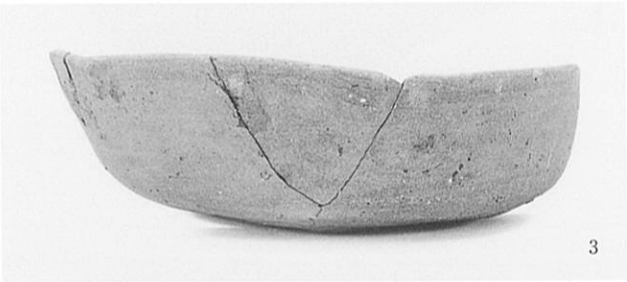
10

11

図版22　E地区遺構出土遺物（1）

1

2


3

4

5

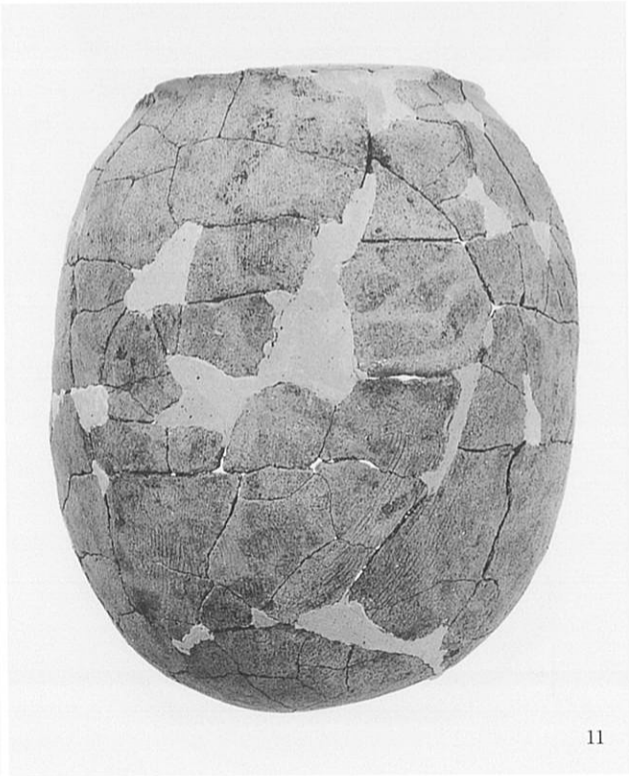
6

7

8

9

10

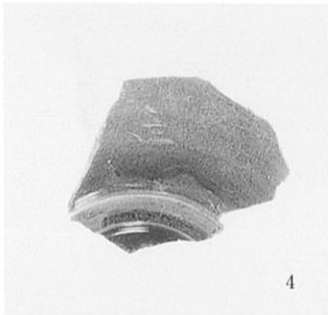

11

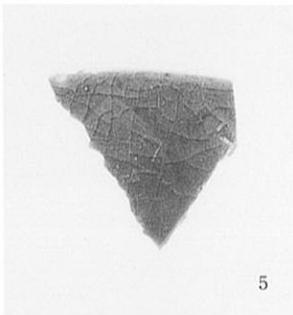
図版23　E地区遺構出土遺物（2）

1

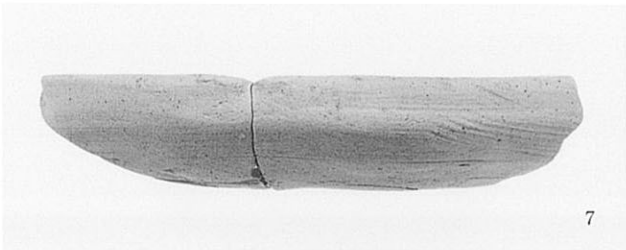
2

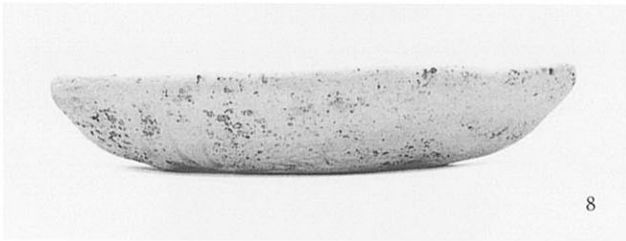
3


4


5

6

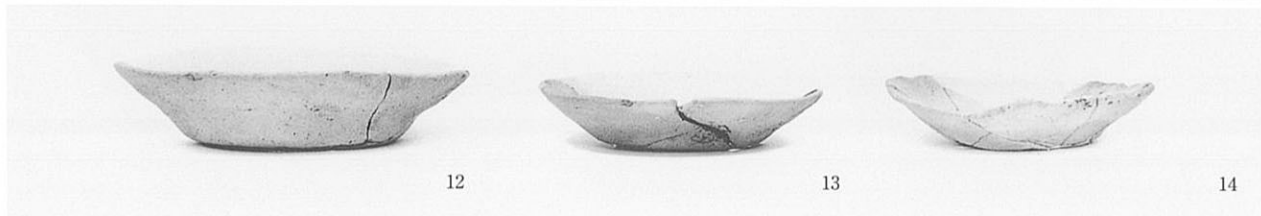

7


8

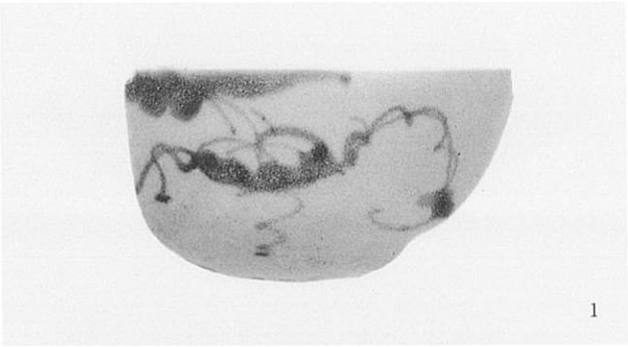
9

10

11


12　13　14

図版24　F地区出土遺物


1

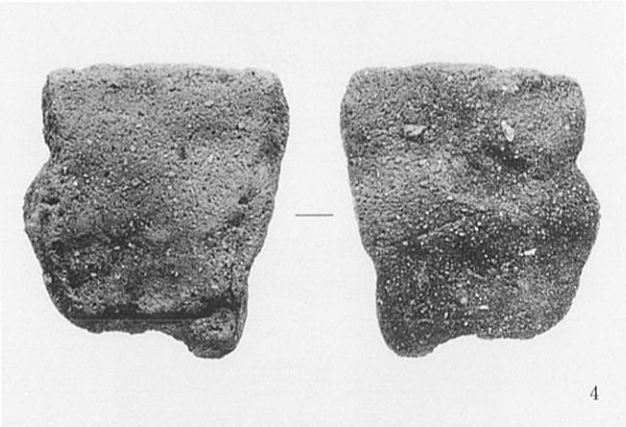
6

7

2

8

3

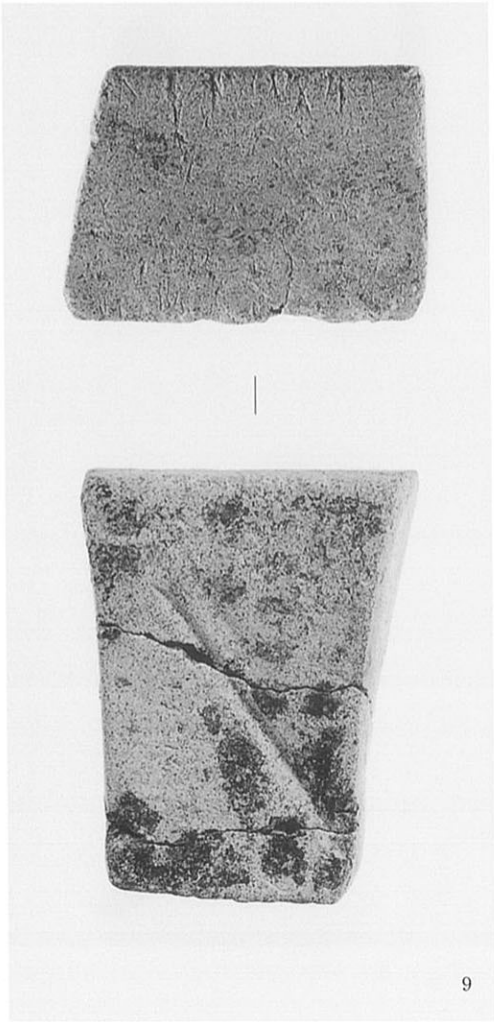

4

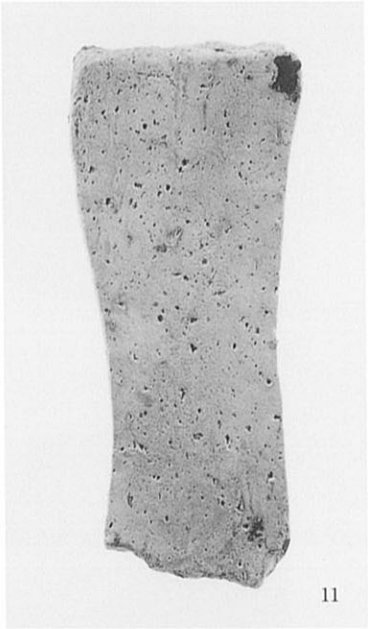
9

5

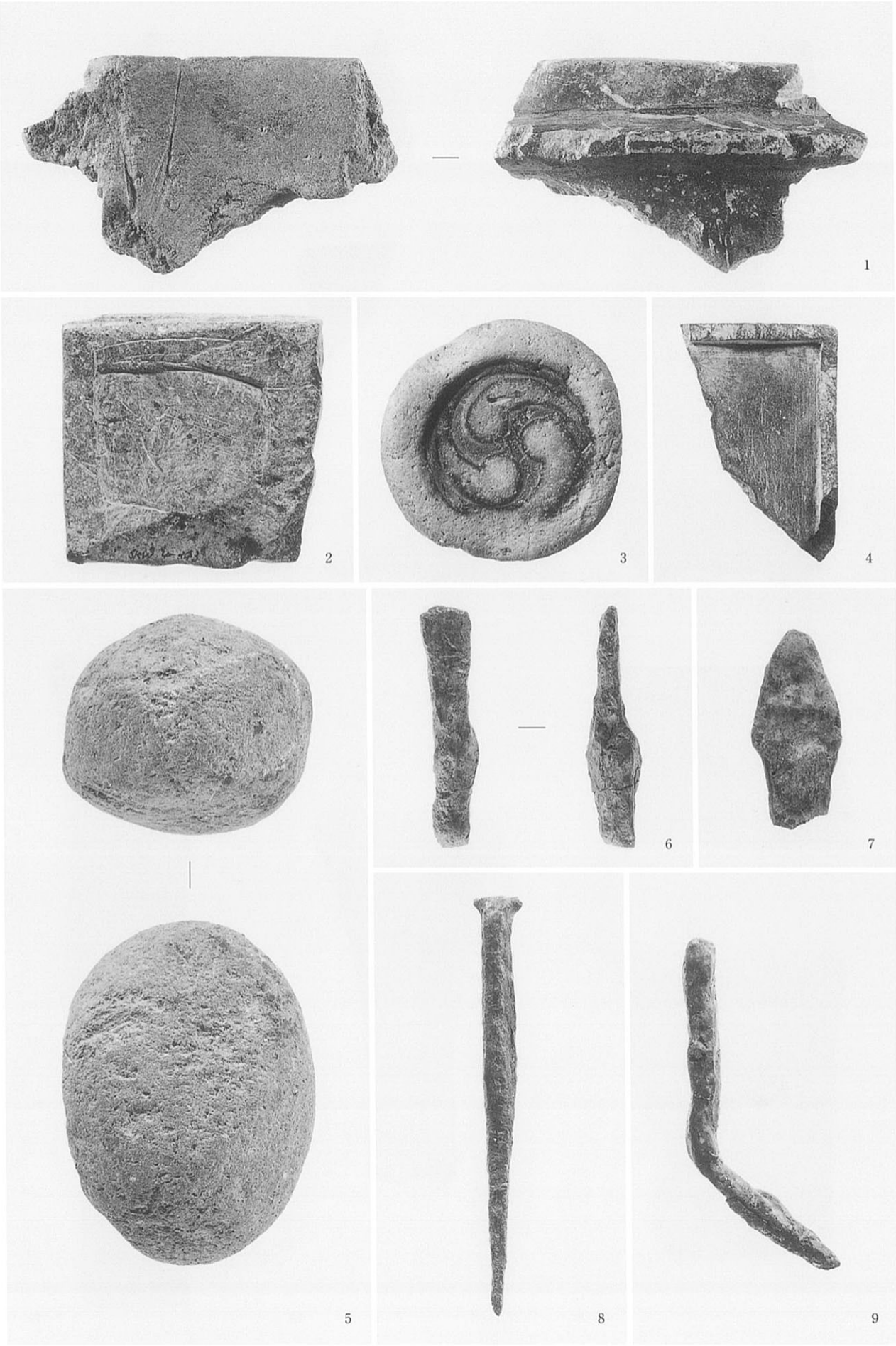
10

図版25　A～F地区出土石器・砥石

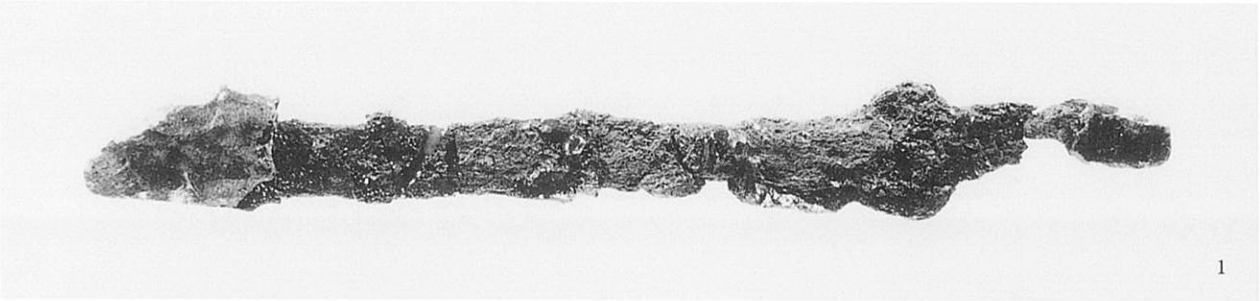


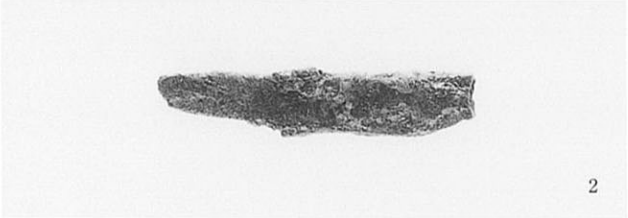


図版26　A～F地区出土石製品・その他の遺物

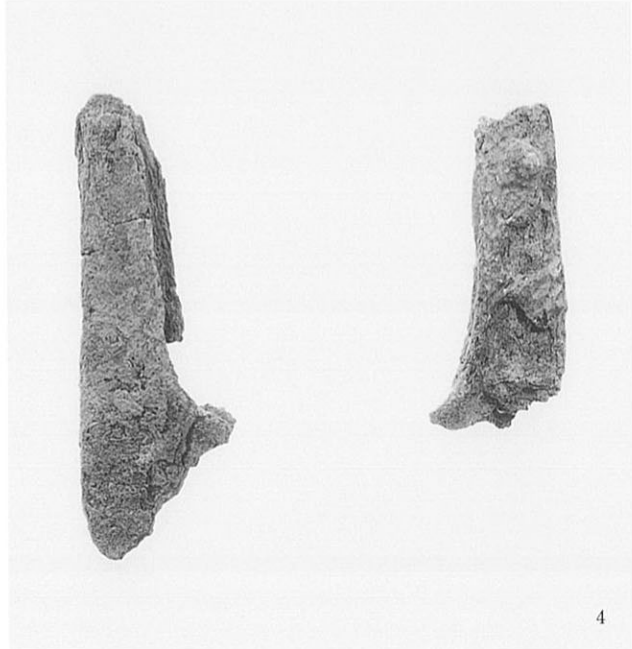


図版27　A～F地区出土鉄製品


1


2

3


4

5

6

7

報告書抄録

ふりがな	すくのしょうにしいせき
書名	宿久庄西遺跡
副書名	都市計画道路事業茨木箕面丘陵線に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第80集
編著者名	森屋美佐子・中尾智行・小野亜由美
編集機関	(財)大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105　大阪府堺市竹城台3丁21番4号　TEL 072(299)8791／FAX 072(299)8905
発行年月日	西暦2002年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すくのしょうにしいせき 宿久庄西遺跡	おおさかふいばらきしすくのしょう 大阪府茨木市宿久庄 ごちょうめちない 5丁目地内	27211	81	34度 50分 09秒	135度 31分 44秒	2000.6.1 ～ 2002.9.30	12,900㎡	都市計画道路事業茨木箕面丘陵線に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査
				X	Y			
				−128,810 ～ −129,170	−43,020 ～ −43,220			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宿久庄西遺跡	集落	奈良～鎌倉時代	掘立柱建物・土坑・溝・井戸	須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・土馬・羽口	北接する庄田遺跡と同様の奈良時代建物群を検出

(財) 大阪府文化財センター　調査報告書　第80集

宿久庄西遺跡

－都市計画道路事業茨木箕面丘陵線に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査－

発行年月日　2002年9月30日

編集・発行　財団法人　大阪府文化財センター

〒590-0105　大阪府堺市竹城台3丁21番4号

TEL 072(299)8791　FAX 072(299)8905

印刷・製本　株式会社　中島弘文堂印刷所